彼女は人を喰らう

榊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼女は人を喰らう

【Ｎコード】
Ｎ８１６０Ｗ

【作者名】
榊

【あらすじ】
追放世界で育った一人の異能は、退屈な世界から脱出する事を選んだ。数多に広がる世界線の中、彼女は何を目指すのであろうか・・・。
黒の古書の意味とは・・・？
物語は残酷にも一人の少女を舞台へと送り出す。

注意、オリジナル要素の高いモノと成っています。お嫌いな方はご注意を。

1話・脱出と出会い（前書き）

主人公の説明は追々書きます。

1話・脱出と出会い

――彼女は、退屈を嫌う――

閉鎖された世界、神々はそこをこう呼んだ。【追放世界】と、そこには魔法も異能も神の奇跡も存在せず、人がただ死に向かって生きている。その世界には、既に何もなかった、絶望する事も諦め、明日をどうやって生きるかだけを考えて働くだけの死んでしまった世界。故に人は神を忘れ、神は人を忘れた。

しかしそこに産み落とされた一人の異能が居た、誰も知らない彼女と彼女の屋敷、彼女はニヤリと笑うと手に持っていた黒い表紙の古書を大事そうに鞄につめた。肩の辺りで切り揃えた後ろ髪にパッツンとこちらも切り揃えている前髪、揉み上げの部分の髪の毛だけは異様に長く伸ばされており、その髪の毛は胸の下辺りまで伸びていた。

「準備できたのかい？」

身長も小さな少女は、静かな声を発した。その問いに答えるのは屋敷に仕える者、その者は顔に布を巻き、白い着物を着ている。この屋敷では彼女は神様扱いなのだ。

神を穢さず、神に穢されず。と言う訳だ。

「はい、牡丹（ぼたん）様。牡丹様に教えていただいた通りに作らせていただきました」

「ありがとうね、僕も準備はできているよ」

彼女が着る着物には梅の花が書かれていた。着物を彼女は脱ぐ、そ

の下から現れたのはボーイッシュな洋服であった。しかし肌を見せたくないと言うように長袖長ズボンである。

「この格好も、どうも落ち着かないね。やはり僕は着物の方が良いのだけれど」

「こちらでございます」

彼女は諦めきれず羽織をその上に羽織った、灰色の大きな着物だ。彼女はニッと笑い案内されるがままに歩いて行くそして彼女が到着すると多くの者が頭を下げた。その光景に少し顔をしかめながら彼女はその中心にある何かを見つめる。鏡のようだが、その鏡には大量のお札が貼られている。

「では、僕は今日を持ってこの世界から脱走する。皆元気でね」

後悔はない、あるのは此処にある本を後数冊持って行きたかったと言う思いだけであろうか。彼女が鏡に触れると、まるで水面に波紋が広がるように脈打った、その中に彼女は少しずつ消えて行く。バサバサと、羽織った灰色の着物が風に靡いた。世界が初めての感触に驚いているのであろうか、彼女は楽しそうに笑うと一気に鏡の中にその身を投じた。

―――――――

「・・・さて、いきなり荒野に出るとは、僕も予想外であったね」

彼女が出た所は荒野であった一面砂地である。何処を見ても、何時

までも同じような時間が過ぎて行く、コレでは勢い良く出て来たのに失速してしまうではないか。彼女は鞄から黒の古書を取り出して、1つの文章に病的に白い指を這わせた。

【――男は、龍を殺し、屍を使役した、ソレは、魔女狩りの頃のお話である――】

「龍?そんな物に僕が出合ったら死んでしまうじゃないか」

そこら辺の主人公よろしく、特殊な能力は・・・一応あるが、驚異的な再生能力も、剣が達人級でも無く、銃も持っていない。腹を裂かれれば容易く死ぬ至って普通の人間だ。明確に言うと半人だが、そんな事はどうでも良い。今の私はただの人に近いモノなのだから。

「・・・お前、こんな所で何をしているのだ?」

急に話しかけられる。振り向くとそこには見覚えの無い金髪の少女が立っていた。自分と同じ位の身長であろうかその少女はボロボロのローブに身を包み、その近くには人形のようなモノがケケケッと笑っている。何処からどう見ても異能者か魔法使いです、本当にありがとうございました。

「お前だ、耳が聞こえないと言う事も無いだろう?」

「あぁ、僕?僕はただの孤児(みなしご)さ」

「・・・ソレにしては、良い物を着ているようだが」

「うん?まぁそんな事どうでも良いじゃないか、それよりも質問しても良いかな?」

「何だ」

「君は、魔法使いかい？それとも、吸血鬼かい？」

少しの沈黙が流れる、目の前の金髪少女はその手に魔力を溜めたようだ。私の腹の中で何かが蠢く。落ち付け、彼女は今のところ無害だ、そう自分に言い聞かせた。

「もし・・・そうだと言ったら？」

「僕を拾ってみないかい？」

「・・・・は？」

少女は、気の抜ける様な声を放った。一方牡丹の方はニコニコと笑っている。金髪の少女は完全にやる気がうせたと言うような顔に成っていた。牡丹は満足そうに笑っている。

「私が怖くないのか？」

「僕は君よりももっと怖い物を見た事があるよ」

「ほう・・・それは？」

「それは内緒かな、君には教えられないよ」

牡丹はニヤリと笑った。年相応の笑顔ではなく、世界の裏に関わった者の笑みであった。話しかけた吸血鬼としては何だこいつ状態であろう。そんな事お構いなしに牡丹は交渉を続ける。

どうせ魔法使いでも吸血鬼でも１０００年単位で生きるのだ、孤独な旅は嫌だろう?と、まるで悪魔の様な囁き、悩み始めた吸血鬼に彼女は飴玉を差し出した、言う所の買収である。

「君にとって僕と言う存在は何時か、有利な物に成ると思うよ?」

「・・・しかし、所詮は人間だろう?寿命は知れている」

悲しそうな目をする彼女、それを牡丹はケラケラと笑った。まるで自分には縁の無い話の様に。

「僕はね、鬼子、異端産まれなんだ。確かに腹を裂かれてしまえば簡単に死ぬが、寿命は無駄に長いよ」

「・・・お前、半妖なのか?」

「詳しく言うと微妙に違うけれどね」

怪しむ様な顔をする金髪の少女に彼女はケラケラと笑い掛け続けている。そんな彼女を見て遂に金髪の少女が折れた様であった。ため息を吐くと好きにしろと言い、彼女の横に並ぶ、つまり、一緒に行こうと言うお誘いである。

牡丹はニヤニヤと笑いを浮かべると。

「ツンデレめ」

と、彼女に告げた、しかしこの時代、まだそんな言葉が存在する筈も無く、金髪の少女は頭を捻る。ツンデレと言う言葉はまだこの時代には無い筈の言葉であるし、金髪の彼女には理解が出来なかった。

「そう言えばお互い自己紹介がまだだったね、僕は一目橋・牡丹。牡丹が名前だよ」

「ボタン？変わった名前だな。私はエヴァンヴェリン・A・K・マグダウェルだ。好きに呼ぶが良い」

「極度のツンデレ」

「ツンデレとは何だ・・・何故かこう・・・馬鹿にされている気が・・・」

はは、嫌だなぁ（棒読み）と、彼女は光の無い目で笑った。その様子が今の状況ではとてもシュールに見える。何せ此処に立っているのは吸血鬼と半妖だ、本来出合えば血の気の多い種族同士潰し合うのだが、彼女達は何かが違うらしい。

一言で言ってしまうのなら誇りの有無であろうか、彼女達はしっかりとした誇りが有るし、目標もある。そんなに野蛮ではなかった事が救いだ。

「そっちのお人形は？」

「コイツはチャチャゼロ、私の従者だ」

「ケケケッヨロシク頼ムゼ」

「所で、吸血鬼が日光に当っていますが、いつ灰に成るの？僕は少し楽しみだよ」

「え！？心配ではなく楽しみなのか！！？」

牡丹の言葉に自分の身体を抱きしめるエヴァ、少し震えているようにも見える。牡丹はそれを笑いながら黒の古書をこりだした。細かい文字が余す所なく書かれているどう見ても童子向けではない本、その本をパラパラと捲る。ページ数１０１２ページ、【一人の養子】と言う項目に指を這わせると、彼女の口元には自然に笑みがこぼれる。

少し、少し違うが、この世界線でも私は【異物】として扱われている。そう、全ては定められている事、私が体現しようとしている事。

「・・・？来ないのか、ボタン」

「あぁ、行きますよ。２人と１個の旅も楽しそうですし」

「・・・一個テ俺カ？」

こうして、確かに物語はひっそりと別の世界線でなぞられた。【異物】は、笑いながら少女の後を付いて行く・・・・。

1話・脱出と出会い（後書き）

駄文で申し訳ない。

登場人物簡単説明

名前・一目橋　牡丹
読み・ひとつめばし　ぼたん

性別・女

外見・少女、髪の毛は基本おかっぱで前髪もパッツン。しかし揉み上げ部分の髪の毛だけ長く伸ばされており、胸の辺りまである。黒髪黒目で肌の色は白い。

一人称・僕、猫を冠っている時は私

種族・半妖に近い何か

プロフィール
この世界に最強なんて存在しないと思うよ。あと、僕のキャラクター的にB，A，Dの彼女とキャラクターが似ていると思う人も居ると思うけど、性格モデルが彼女だから・・・と、言うしかない。

以下ネタばれ？

―――――――――――

ネタばれ←
鬼孕みと言われる異能力者、だが寿命以外は普通の人間と変わらず。腹を裂かれれば死ぬ。腹には何かの術式が有るが、彼女がその気に

成らなければ目視出来ない。
基本、魔法は使えない・・・らしい。

登場人物簡単説明（後書き）

こんな残念な子ですが、よろしくお願いします。

2話・転生者のお話（前書き）

こう・・・ヌルヌルと

2話・転生者のお話

――彼女に、肉体労働は向かない――

金髪の吸血鬼、エヴァと旅を続けて早1ヶ月が過ぎた、その1カ月は運が良かったのか襲われる事も無く、街の人が私の恰好を見て少し珍しそうな顔をするだけである。何せ追放世界から持って来た着物を羽織っているのだ。今の時代にこんな物を着ている者は居ないだろうし、着物と言うモノを知らない筈なのでしょうがない。

「エヴァ、僕はもう駄目かもしれない」

「なっ何がだ!?何処か具合でも悪いのか!!?」

「先生、本が、少なくとも10冊くらい本を食べたいです」

「よし!本だな!?・・・て、馬鹿!!食べるのか!?その前に食えるのか!!?」

「ふふ・・・僕はね・・・本こそが本当の栄養源なのさ」

ベッドの上でグダァ、と横に成っている白い肌の少女、その髪の毛は依然と変わらずの黒髪おかっぱで揉み上げだけ長い。退屈と言わんばかりに彼女自身の鞄を漁るが、その中に今の退屈をしのげる物も無く、落胆のため息を落とした。

「残酷な運命の神は僕を殺す気かな・・・」

「いっ生きろ!本なんか喰っても美味くないぞ!!」

「・・・はっ本の味も解らぬ弱者め！」

「味！？」

理解の内を超えていた。軽く禁断症状に陥っている牡丹だが、何故黒の古書を読もうとしないのか、それを不思議に思うエヴァであるが彼女なりの理由が有るのであろうと考えると、何か自分が持っていたか探す。

すると、エヴァのバックの中から一冊の赤い表紙の本が出て来た。エヴァはその本を一体何処で買ったのか、あるいは拾ったのか覚えていない。最近は教会の連中も追いかけて来ないし、奪ったと言う線も無かった。

その本をチラつかせると、ピクピク反応する牡丹。

ススス・・・
ピク
ススス・・・
ピクピク

少し、面白かった。

「ほら、何かあったぞ」

「ッ！！」

まるで飢えた猛獣のようにその本を奪い取り読み始めた。アレで食べているのであろうか・・・。

「・・・魔導書じゃないか、コレ」

「早！！」

「は、たった１０００ページ、僕の前では２ページ分に過ぎないよ！」

手元でその分厚い魔導書を遊びながら彼女はそれの表紙を眺めた、そして苦い顔を浮かべる。これも運命をなぞる者の宿命だろうかという具合に彼女はそれを忌々しそうに見る。

【死者操術と死者甦生】、つまりは死者を操る方法が書かれている物であった。しかし、彼女にはそんな派手な魔法は使えない。彼女には魔力など微塵も無いに等しいのだ。

「忌々しい運命とは・・・良く言った物だね」

「？」

「ああ、気にしないで良いよ。僕は独り言が激しいから」

「あ、確かに」

１か月の旅で彼女は確かに独り言が多かった。龍種を見てコレが龍かぁ、これに乗ったのかな？などと言ってみたり、魔法を初めて見て僕も使えるかなぁ、等と、色々ブツブツ言う事が有る。

安宿の外が騒がしくなった、何かの祭りでも始まったのかと思った牡丹であったが、彼女の首元をエヴァが掴み部屋の奥へと引っ込める。

「・・・魔力の感触が有る。コレは・・・間違いなく魔法使いだ。お前は非戦闘員だろう？クローゼットの中にでも隠れていろ」

「あぁ・・・そうしたかったんだけれどねぇ・・・」

何かおかしな声を返して来る牡丹にエヴァは振り向く、そこにはギラリと光る紅い瞳が有った、彼女の普段の眼の色は黒だった筈だ。しかし、今は獣を思わせるほど鋭く、恐ろしい殺気を放っている。

「エヴァ、世界には変わった魔法使いが居るんだよ。他の世界から産まれ変わったりした者がね」

彼女は自分の腹を押さえながらニタリと笑った。何故腹を押さえているのか、エヴァには解らない。彼女は羽織っている着物はそのままに、中に来ている服の腹部を少し持ち上げた、そこには何かの魔術式の様な文様が浮かび上がっている。白い彼女の肌に、黒々と。それはやがて紅い光りを放ち始めた。

「エヴァに教えておかなければならない」

「な、何だ?」

「僕はね、世界で1人だけしか覚醒しない異能を持っているんだ。【鬼孕み】と言ってね、自分の肉体に鬼を降ろして、一時的にその鬼を具現化できる」

彼女の術式から、黒い煙の様な物がスルスルと伸び出した。そしてソレは小さな人型を作って行く。エヴァや牡丹よりも少し小さいその人型は、形を得るとニヤリと恐ろしい笑みを浮かべた。

≪お・・・ねぇ・・・ちゃ・・・≫

「おはよう、ご飯だよ。【柘榴(ざくろ)】」

黒い髪に金色の瞳、まるで獣のように鋭い瞳孔。何も着ていないその幼女に彼女は自分が来ている灰色の羽織を着させた。ニコニコと笑い続ける柘榴を見て、エヴァは混乱している。

コイツは何処から出て来たのだ、何故牡丹の眼の色が変わったのか。理解できなかった、理解してしまったら、自分はどうなってしまうのか解らなかった。外から近づいて来る魔法使いの気配、それに反応するように柘榴はドアに近づいた。

≪お・・姉・・・ちゃ、食べて・・・良い?≫

「えぇ、最近空腹だろう?それは不味いかもしれないけど、腹は膨れるだろう」

≪わーい!≫

「ばぼぼッ牡丹!!こいつは何なんだ!?少し前にお前の言っていた鬼か!!?」

「え?う~ん・・・うん、鬼だよ」

そんなに驚かなくても、エヴァだって吸血鬼、鬼じゃないかと言いながら彼女はケタケタと笑ったが、ソレは問題ではない。ノーモーションで上位級の鬼を召喚したのだ、しかも彼女には魔力が無い筈・・・。

「エヴァ、言っただろう?僕は【鬼孕み】、この世に1人しか産まれない。上から数えた方が早い程度の異能力者なんだよ」

だが、代償もある。鬼を召喚する事で、鬼の感じる痛覚などが身体にリンクしてしまうのだ、柘榴が切られると痛いし、彼女が死んでしまえば牡丹も死ぬ、それが対価であり代償だ。鬼の追う苦痛は、全てじぶんにフィールドバックする。

扉が開きかかった瞬間に、柘榴は大きな口を開けた、可愛いながらも一生懸命に口を開く姿は可愛いが、そこからが恐ろしかった。彼女が口を閉じた瞬間に扉ごと齧られた様な痕跡を残して消えてしまったのだ。エヴァは冷や汗が止まらなかった。最近読んだ魔導書やそう言った書物にも書かれていないほどの力、空間ごと、彼女は歪めて喰ってしまった。

壁も、床も、齧られた跡しかない。あるのはドアの向こうに居た筈の魔法使いの足だけが転がっているだけであった。

「な・・・っな・・・っ！？」

「ありがとう柘榴」

≪う・・・ん！≫

柘榴と呼ばれる黒く長すぎる髪を持つ幼女は彼女の言葉を聞くと姿を煙のように消してしまった。エヴァは開いた口が塞がらない、ソレはその筈だ、目の前で普通では有り得ない事が平然と起きたのだから。

「ぼ、牡丹！何故お前この事を隠していた！！」

「聞かれなかっただろう、それに君は僕にこう言った事を聞く気はなかった筈だ。お互い、迫害される種族と考えていたからね」

吸血鬼や妖怪、化物の類はその容姿がどれ程美しくとも所詮はケモノと考えられているのだ、その為にお互いの過去の話しは話したがらないし、同情も求めない。それは、生きる為の暗黙の掟であった。

「あ、あの男は！？」

「彼は転生者と言う者でね、一人で世界を改竄するほどの力を持っている筈だよ。だから僕は柘榴に食べさせたんだ」

「その・・・テンセイシャとは、そんなに危険なモノなのか？」

「そうだよ、中には神を殺そうとしている者、復讐者、快楽犯、色々いるね」

「お、まえも、そうなのか？」

その言葉に牡丹は顔をしかめる、目の色が黒に戻った彼女であるが、その彼女は何時もの優しい笑みではなく、無表情に成っていた。まるで心外の事を言われたと言う様な雰囲気を出している。

「僕は違う、僕は異端者（イレギュラー）だよ、あんなモノと一緒にしないで欲しいね」

別に世界を変えたい訳でも、自分だけのハーレムを作りたい訳ではない。自分はしっかりとした目標が有ってこの世界に来たのだ、異端として迎えられたおかげで大きな代償は払わずに済んだ事が幸いだ。

普通、神の力以外で世界を渡ると身体に異常をきたす事が有る。例えば片手が足に成っていたり。

「牡丹は、牡丹なんだなよな？」

「当たり前の事を聞かないでよ。僕みたいなのが世界に2人も居たら最悪だろう？」

嗚呼、疲れた。と彼女は再びベッドの上に横に成った。そして彼女は鞄の中から黒い表紙の古書を取り出すと分厚いそのページを捲る。その中には【襲撃】と言う項目が有った。

「・・・その本は何か意味が有るのか？」

「これかい？・・・内緒だよ、コレだけは教えられない」

「やっぱりか・・・」

エヴァの落胆を見て、少し可哀そうに思えた牡丹はその本のページを適当に捲ってその一節だけを読み上げた。

「【歴史は、ある者達によって、改竄されているのか、それとも、私達が創り出しているのか】」

「・・・？何だ、その一節は・・・。何か意味が有りそうだな・・・」

「それは、内緒だよ。でも、エヴァなら此処まで辿り着けるかもしれない。・・・いや、辿り着いてしまうかもしれない」

悲しそうな彼女の瞳、それは何かを知っている、いや、知ってしまったと言う様な顔であった。分厚いその本を閉じで彼女は鞄の中に

そっとしまい込んだ。黒の古書が入っているとは思えないその鞄、何かの術式が刻まれているのであろうか、しかし見た目は地味なこげ茶色のバックである。

少しの水の入ったグラスを手元に寄せて彼女はそれを一気に飲み込んだ、鬼をこの世に留めるのも楽ではないと言う事だ。完全に彼女は消耗していた。残されていた転生者の足は砂のように成り、消えて行く。残った壊れた部屋の修理は、エヴァが魔法で何とかしたが、先ほどの音などで何故誰も来なかったのであろうか。

「なぁ、何故人が来ないんだ。あれほど大きな音がしたのに」

「あ～・・・ソレは多分人払いの結界だね。他人の周囲を反らせるんだよ、ま、僕には知識しかないのだけれどね」

――そう、今は、ね――

「？何か言ったか」

「エヴァ、痴呆症には早いと思うけど？」

「ボケてない！！ボケてないもん！！」

だが、疲れた彼女には丁度良かった。これでゆっくり寝られるし邪魔は入らない。ベッドの上で夢の中への船を漕ぎ始めていた。

2話・転生者のお話（後書き）

お目汚し失礼しました

3話・お城のお話（前書き）

あ、私前も言いましたが、原作知識はありません。オリジナルな展開が多いと思われます。

3話・お城のお話

――彼女は面倒臭い事を嫌う――

彼女達が何時も何処かの宿に泊まったりしている訳が無く、野宿も良く行っていた。雨が降らない限りはエヴァの魔法で火等は何とかなるし、食糧は干し肉や捕まえた獲物等を捌いて食料に出来る。水には少し困ったが、考えてみればエヴァの得意な魔法は氷属性だ、氷を溶かせば水に成るのは当たり前の事で、これも何とか出来た。

「・・・アッチへウロウロ、こっちへウロウロ。目標の無い旅に憧れている人を僕は尊敬できそうにないよ」

「いきなり何を言うかと思えば・・・仕方ないだろう?特定の場所に留まっていると教会に嗅ぎつけられるからな」

「教会・・・ね。(今の時代の教会には魔法使いや奇跡を使える異能者が居るのかな・・・?)」

追放世界での教会にそんな者は居なかったが、こちらの世界には自分以外にも異能が居る筈だ。世界線が違うとは言えども此処は【あのヒト】が覚醒した地とも言える場所だ。自分程度が何処まで通用するか・・・。

最初は教会を襲撃してしまえば良いのでは?とか考えていたが、ソレは不可能だ。柘榴はそこまで力を発揮できないし、牡丹は基本的に寿命以外は普通の人間、主な戦力に成るのはエヴァだけであった。

「そう言えば、聞いたかいエヴァ」

「・・・何だ?」

「此処からさらに西に進んだ場所に古城が有るらしい。少し前の戦争で大破している物の、まだ住めると聞いたよ」

「その話は私も知っているが・・・教会にすぐ目をつけられるだろう」

「そうとも限らないよ?」

焚き火に薪を放り投げながら彼女はエヴァの方を向き直る。

「その城には、幽霊の兵士が出るそうだ、だから誰も近づかない。不気味だと言ってね」

牡丹はまとめた情報を書いた紙を取り出した。城の場所から何から全てが書いてあるが、見取り図もある。一体彼女の情報網は何処まで広いのであろうか。エヴァはその資料を見ると、「ふ・・・む」と声を上げる。

「確かに、コレは使えるが・・・その幽霊と言うのが気に成るな」

「なに?君、もしかして幽霊が怖いの?」

「ななっなにを言っている!?私がゆゆゆっ幽霊を恐れる筈が無いだろう!!?」

声は完全に震えていた。冷や汗や心音から推測するに完全に恐れている。

どう考えてもエヴァの従者であるチャチャゼロの方がホラーなのだ

が、最近魔力供給を切って鞄の中にしまっている理由が解った気がした。考えるに夜中、トイレにでも行く途中に見てしまったのであろう。

「ま、行ってみないと何も解らないね。僕の情報網もそんなに広い訳じゃない」

「（十分だと思うが・・・）」

二人は夜の明けない内に行動を開始した。この時間なら普通の人間はまだ夢の中で教会の人間もこんな時間には動いていないのだ。教会の連中がどこぞの王立国境騎士団のように吸血鬼のゴミ処理屋を使役していれば解らないが、そんな事も無いであろう、人外を完全に否定している事だし。

「距離にして、1日半ってところかな。ま、飛んで行ければもっと早いのだろうけど」

「・・・私に一人で先に行けと言うのか？」

「おや、理解が早くて助かるよ。僕が行った時に盗賊でも居たら、僕のお腹から何かが出されてしまうかもしれないしね」

そんなに簡単に死にたくはない。こんな身体でも産んでくれた親にまだ何も恩を返せていないのだ。せめて何らかの形で恩を返してからでないと死にきれないし、そんなに簡単に死ぬ予定も無かった。故に、露払いをお願いしたと言う訳だ。普通の人間程度、柘榴が何とかしてくれるだろうが、彼女に普通の人間を食べさせても意味が無い。せめて魔法使いとかなら食べさせても良いか・・・。

「大丈夫だ、私がお前を何があろうとも守ってやる」

「足が震えていなければ良い言葉だったね」

どうにも、締まらなかった。

結局、子供の足では2日掛ってしまうと考えた牡丹は近くを通りかかった馬車を操る男性に交渉、金貨3枚で交渉は成立した。大金だが牡丹にとってはこんなモノ微々たる出費である。エヴァは殺した教会の兵士達から物を奪う事はない、しかし牡丹は生活の為としっかりと頂戴して来ているのだ。生きる為には食事も水も必要なので仕方の無い事。

「お嬢ちゃん達は何処かの商家の娘さんかい？」

「えぇ、同じようなモノですわ」

完全に猫を冠っている牡丹、何時もの言葉使いではなく、それらしい喋り方であった。エヴァも一瞬ギョッとした様な顔をしたが、自分達がバケモノと言う事を悟られないようにしているのだとすぐに考えられた。

揺れる馬車、一人の男性と2人の少女を乗せて廃城の近くまで乗せて行く。

「気分は、ドナドナ・・・ですね」

「？」

「あぁ、エヴァ。そろそろ降りるよ」

口調がコロコロ変わる牡丹であった。

馬車の男性に金貨3枚を渡し、周囲を見渡す。確かに廃城のようだ。城下にも何処にもヒトの気配がない、人どころか鳥さえも空を飛んでいないではないか。コレは異常にして異質、そう考えた牡丹は鞄の中から商人から買っておいた鞭を取り出した。

「エヴァ、僕は戦力には成らないからね」

「ふん、承知している」

「ケケケ、匂うぜ。コレは化物の匂いだ」

妙に発音が良くなったチャチャゼロが鞄の中から這い出して来た。

「!?お、お前!何でそんなに発音が良いんだ!!?」

「!牡丹様、ごめんなさい・・・ごめんなさいごめんなさい・・・」

「何が有った!しっかりしろ!!チャチャゼロォォオオ!!」

チャチャゼロは、牡丹に何かされたようだ。片言は治っているが完全に牡丹を恐れている。牡丹は「あ、ちょっとやり過ぎた?」と意味ありげな事をぽつりと零す。

2人と1体が城の中に進んで行くと、そこには大きな肖像画が有った。美しい女性の絵のようだが、既に朽ち始めていて顔などの形は崩れて来ている。その他には時に目立つ物はなく、何かがうめく声も何も聞こえない。

「・・・不気味な程に静かだね」

「・・・」

「御主人、そんなに震えるなよ・・・」

いかにも、と言った雰囲気にエヴァの足は産まれたての仔馬の様に震えていた。何故か牡丹はワクワクしながら進んでいるようにも見える。彼女の手に持つ鞭が壁をピシッと音を立てて打つと、その壁は脆かったのか少し削れた。

築ウン１００年の城らしい、しかし此処は良く戦火に巻き込まれ遂には廃城と言う訳だ。故に１００年でも脆くなってしまったらしい。

「・・・ッ」

エヴァが反応した。彼女の視線の先に居るのは白いドレスを赤く染めてただ立つ女性、その髪の色は薄い金髪で手にはナイフを持っていた。エヴァがソレに声を掛けようと口を開けた瞬間、それは霧のように霧散して消えてしまった。

「なっ!?」

「?エヴァ、どうしたの。そんな壁の方を見て」

「壁だと!?此処には確かに女が立っていて通路が・・・」

無かった。そこには古い壁が有るだけ、あるのは少しの血痕の跡と倒れた蝋燭立だけ、女性が一人立てる程のスキマも無い。エヴァは身体を震わせて牡丹の着物の袖をギュッとつかんだ。牡丹は不思議そうに頭を傾げた、確かに壁だが・・・何かが違う事に気が付いたのだ。同じ位の身長のエヴァの頭をよしよしと撫でながら空いている片手で壁を探る。

カコンッと、石のブロックが１つ、押し込まれた。

「・・・エヴァ、ビンゴだよ」

「な・・・何がだ？」

「君の見たのは、コレかもしれないね」

開いた壁の先には1つの部屋、その部屋の中に居たのは薄汚れた白いドレスを茶色に変色させた一人の少女の首つり死体であった。既にかなりの時間がたっており、死体はミイラの様に成っている。髪の毛も残っているがその顔は苦痛に歪んでいた。これは女性的には見られたくない姿であろう。

「足元に椅子等の物はない・・・考えるに、この子は此処に吊るされたんだねぇ」

死体の足元に落ちているナイフ、恐らくこの城の姫様だろう、家紋が入っていた。戦に敗れ、この隠し部屋も見つかってしまった。此処に身を隠していた少女は見つかり、面白半分に痛めつけられた後に首を吊らされたのだろう、死体にはまだ抵抗の跡が有った。

「・・・」

「エヴァは、こう言うモノを見るのは初めて？」

「当たり前だろう！！私は女子供は殺さない！！」

「僕は見た事が有るよ。それも複数回ね」

鞭を鞄へと入れて、中からナイフを取り出すと死体の首を吊ってい

たロープを切った。死体はゴトッと音を立てて落下し、久しぶりの床に叩きつけられる。

「もう少し優しく降ろす事は出来なかったのか」

「死体は、どうあがいても死体だよ」

冷たい言葉だけが、エヴァの耳には帰って来た。彼女には何か恨みが有るのだろうか・・・。

「お嬢さん、悪いけどこの城、僕達が貰うよ。君はしっかり埋葬してあげるからさ。【もう化けて出てきたりしないでよね】」

≪・・・あはっ≫

甲高い子供独特の笑い声が部屋に響く、死体ではない。死体は声を発していない。しかし、その声は部屋の中に木霊していた。牡丹が彼女の死体を何とか抱き上げる。カラカラに干からびた死体だ、彼女でも持てるだろう。しかし、やはりと言うべきかフラフラとしている。それを見かねたエヴァが「私が持つ」と言い、彼女の手から死者を受け取った。

≪・・・ありがとう≫

「どういたしまして、迷わずあの世に行きなよ?」

部屋に木霊した最後の言葉は、可愛らしい少女の感謝の言葉であった。

死体は城下の外れにあった王家の墓に埋葬された、少し荒れていたが彼女の死体を持って行くとそこの重そうな石の扉は勝手に開き、

墓の中への階段を現した。幽霊嫌いのエヴァにとっては、震えあがるほどに怖かったらしく運び終わった後に牡丹に抱きついていた。

因みに、獣の匂いを放っていたのは地下にあった檻の中にあった多くの死者の匂いだったらしい。別に魂が残っていたと言う訳でも無く、石造りの地下牢だったのでエヴァの魔法で壮大に火葬した。骨も残らなかったのは予想外であった。

3話・お城のお話（後書き）

お目汚し失礼しました

4話・茶々姉達のお話（前書き）

時間が飛びます

4話・茶々姉達のお話

――彼女は、甘味が好物――

古城を拠点としてから数日がたった。ボロボロであった城の内部を元に戻すためにはかなりの労働を強いられたが、今では完全に修復が完了し、元来の姿を取り戻している。しかしやはりと言うべきか城下はまだ何も片付けていない状態なので見晴らし台などからは滅びた文明の痕跡を見る事が出来た。
不気味な噂は広まり、此処は住みやすい所と成っている。

「――でも、広すぎてどうしようもない」

掃除から洗濯、エヴァだけでは何もできなかったのだ。今までどうやって生活して来たのかが不思議だが、そんな事どうでも良い、このままでは自分が辛いと考えた牡丹であったが、良く考えてみればチャチャゼロの様な存在を量産すれば良いのではないか。彼女はすぐに行動を開始した、城中の鎧を集めて組み立て、それをエヴァに見せつけた。

「・・・何をする気だ?」

「これをチャチャゼロの様に動かせばかなり僕が楽なんだけれど」

「城の警備や家事の話しか・・・確かにお前には苦労を掛けてしまっているし、私としても助けたいが・・・鎧が家事をしているのはシュールすぎないか?」

「何なら僕が火防女役をやろうか?何処かの神殿かダンジョンから

死んだ兵士の魂を使役して・・・」

「出来ないだろうが！！と言うよりそんな事しないでください！！お願いします」

幽霊が怖い事を完全に認めているエヴァであった。仕方ないので二人で人形を作る事に成った。依頼すると言えば簡単だがこの時代である、人形一体と言ってもかなりの値段に成ってしまう。運よく此処は古城、古い人形のパーツは山のようにあった。壊れてはいるが魔法を使えば何とかなる状態の物が多く、寝ずの3日で作業は終了した。

「し・・・死ねる・・・これは・・・」

「あ、ぁ・・・私達が馬鹿だった・・・しっかり寝れば良かった・・・」

「おっおい！しっかりしろ御主人！牡丹！」

チャチャゼロの声がするが、もう二人とも動く様な気力が残っていない。牡丹は何とか自分の鞄の下まで這って行き、その中から黒の古書を取り出した。捲るページは１２８ページ、少し前の、既に読み終わったページだが今の状態では関係無かった。少しでも今の体力を回復する為に彼女はこの行動を選択したと言う訳だ。

「書庫に行けないのが・・・辛い」

「血が・・・血が飲みたい・・・」

両者まるでグールの様であった。二人が立てるようになるまでに有

した時間は何と2時間。その後3日分の睡眠をとる為にたっぷり寝て、それからの作業と成った。人形を動かすのは簡単な事らしい、その辺に居る簡単な精霊を捕まえて人形にぶち込むらしい。言い方はアレだがそれでもかなり高度な技なのでは？と思った牡丹は間違っていない筈。

「う、動いたな？」

「う、動いたね」

その数、１０００以上。メイド服を着た人形達はチャッチャと動きだした、彼女達はエヴァの命令も良く聞くし、牡丹の言葉も良く聞いた。全員顔や髪型が同じに見えるが・・・気にしてはいけないのであろう。

城に活気が戻ったように生き物の気配が増えた、喜ばしい事だが・・・此処で問題が発生した。彼女達は何故か妙に2人にスキンシップ（肉体的なモノ）を良く求めるのだ。

「僕の様な貧しい胸を触っても面白くないと思うけど」

「ちょっやめろ！！命令を聞け！！」

冷めている牡丹と、恥ずかしがっているエヴァ。牡丹は閉鎖世界で神として崇められていたのだ、その為に風呂などは侍女や巫女が彼女の身体を洗っていたのだ。もう馴れている。

「で、この城を拠点としている訳だけれど、今後の予定は？」

「この城の地下の研究室の様な場所に驚くほどの魔導書が有った。まずはそれを理解したい。私は数日地下に潜るぞ」

「僕が暇じゃないか、暇すぎて柘榴と天下一武術会ごっこをしてしまうかもしれないよ？」

「良く解らないが駄目だ！！お前一人の力はそうでもないが柘榴が入ると完全に危ない！！せっかく直した城を壊さないでくれ！！」

必死のエヴァに牡丹はニヤッと笑みを浮かべた。

「じゃあ、一緒に研究しようよ。僕も知識だけなら有るからさ」

確かに彼女の頭の中にある知識は恐ろしいモノが有る。ただし理解はしていないので漠然と覚えているだけ、それでもエヴァの研究には役に立つであろう。知識は武器に成ると言ったのは誰であったか。活動を開始したのは次の日からであった、確かに牢屋の上の階層は大きな研究室に成っていた。大量の魔導書が牡丹の知識欲を刺激する。手に取った本のタイトルは【今日から始める大魔法】、完全に読者を馬鹿にした表紙で、すぐさま破り捨てたくなった。

「【今日から君もクトゥルフの虜】・・・何処に捨てようかな」

「な、何故捨てる！！？」

「だって、読んだだけでＳＡＮ値が下がりそうじゃないか！」

此処の昔の城主はそう言ったモノを信仰していたのであろうか。胡散臭いモノが多かった、エヴァは何故か役にも立たなそうな魔導書しか持ってこないのでそれを見かねた牡丹がまともな魔導書を集めてエヴァに渡す、エヴァの尊敬の眼差しを浴びながら少し擽ったそうに本を選ぶ彼女、その本の中にまた変な物を見つけた。

【エイボンの書】

瞬間で、その本は待機していたメイド人形に渡され、木端微塵にされた。メイド人形の癖にその腕の中には仕込みナイフが有ると言うこだわりの改造、それを全ての人形に施したので3日も掛ったのだが・・・。

「あぁー!!何をする!」

「えぇい!此処には普通の魔導書は少ないのか!!僕はそんな狂気の書物求めて無いの!!」

「せっかくの資料が・・・」

「あんなモノ読んだらその内、イアイア!とか言っちゃうよ!!」

どこぞの這い寄るニャ○子さんが来る前に何とかしてこの書庫の中から邪神系の本は捨ててしまわないと。そう考えた牡丹はとりあえずメイド達にそう言った関係の本は裏の焼却炉でまとめて燃やすようにと指示を出した。後ろでエヴァが泣いているが、この際気にしないでおこう。

――エヴァが作業を開始してから4カ月目、食事はメイドに任せてある。すると何処からかウサギ等を捕まえて来てそれを捌くようになっていた。何の肉か最初は解らなかったが、知ってしまえばどうという事は無い。人間の肉ではなく幸いだ。

作業の方はそれなりに進んでいる。無駄に長い寿命だ、有意義に過ごしたい所。噂の流れるのは早い事で城が再建されたと聞いた行商人が何かを売りに来る事が有る。城下はまだあのままだが、商人と

は逞しい物である。

「牡丹様、何故私の髪を梳かしているのでしょうか」

「何故って、触り心地が良いから」

人形メイドの中に少し違うタイプの人形が居た。彼女は牡丹のお気に入りだ、名前はまだ付けていないがその内に付ける気のようだ。しかし実はこの牡丹、ネーミングセンスが微妙なのでどう言う名前に成るのかはさっぱり解らない。

彼女を解放してから牡丹は、前に行商人から買った【美味しいパンの焼き方】と言う主婦じみた書物を手に取った、彼女は和食なら無敵なのだが洋食はまったく駄目なのだ。

「・・・牡丹様、家事なら私達にお任せ下さい・・・。もうあの悲劇を繰り返させはしません!!」

「ふふ・・・、人は繰り返すモノだよ」

以前彼女が焼いたパンは・・・もう、何とも言えない様な出来であった、エヴァはその日の記憶が無いと言っている。今頃その暗黒物質はこの世界の何処かで崇められているだろう。何があったかは言うまい。

「それにしても、良く本を買うお金が有りましたね。高価なのに」

「え?前に大量の古書を処分したじゃないか」

「・・・まさか、あれ全部売ったのですか!?」

「え?僕に関係の無い人が何処で邪神崇拝していようが関係ないからね」

狂気の神話シリーズは全て行商人に格安で売った。その為に以前にもまして手持ちの金が増え、今では本の1冊や2冊、５０冊や１００冊位は簡単に手に入る。まあ、そう言っても興味の無い本は彼女でも買わないので金はたまる一方だ。

「おい牡丹、少し手伝ってくれ」

「?僕に何か手伝えることがあるのかい、僕、魔法は使えないと言ったろう」

「正確に術式を覚えているだろう?それを書いてくれないか?」

「術式?何でまたそんな物を」

「この城を移動させるんだ、この場所のままでは問題が生じたからな」

「・・・?解ったよ、君の決定ならしょうがない」

読もうとしていた料理本を閉じて、彼女はエヴァの魔法研究室へと入って行った。

4話・茶々姉達のお話（後書き）

成長の見られない駄文が私の特徴

6話・引っ越した後のお話（前書き）

数百年をリアルに書く予定は無いです

6話・引っ越した後のお話

――彼女は現実を気にしない――

さて、城を移動させるのは簡単な事であったが、移動させた場所は何を思ったか無人島であった。確かに教会の連中も来ないし、他に邪魔に成る様な者も居ない、その無人島に城ごと引っ越して早い事半年に成るが、エヴァへの挑戦者以外は特に来なくなった。そして大胆に城も改造したので今ではかなりの物に成っている。エヴァは最近、どうも自分の背恰好を気にしたのか幻術を使って自分を大人の女性に見せている、確かに身長も高く、胸などの女性を象徴する部分は目立っていたが、はっきり言って中身が子供のままなので残念な結果に終わっている。

「ねぇ、エヴァ」

「私の事はキティで良いと言っただろう?・・・で、何の用だ」

「その格好のまま指に付いたジャムを舐めるのは止めた方が良いんじゃないかな」

はっきり言って、どちらが年上だか解らなくなってきた。そして牡丹お気に入りのメイド人形、名前をテルと言うが、彼女は基本的に家事を任せられている。今日の朝食の食パンも彼女の焼いた物だ。

「それにしても、毎日のように同じ光景を見て、同じ事をして、そろそろ僕は飽きて来たよ」

「な、私と一緒に居る事に飽きたと言うのか!?」

「そんな事は一言も口にしていないけどね・・・。それに、その言葉は色々と誤解を招くよ」

紅茶を口に含みながら彼女は深く椅子に腰かけた。彼女もこの半年何もせずに過ごしてきた訳ではない。柘榴をもっと長い時間この現世に留めておける様に精神統一などを行ったのだが・・・結果、効果は期待できなかった。

エヴァはジッと牡丹を見て来る、恐らく彼女の中では牡丹は既に家族同然なのであろう。先ほどの言葉に少しでも違う日にしようと考えているようだ。

「そ、そうだ！久々に街へと行って本でも買おう！！」

「あのね、キティ。僕は君達の様に空を飛べないんだよ？船でも３日は陸まで掛るだろう？」

「じゃ、じゃあ私と修行しようか！最近、氷属性の魔法の最上級を練習しているんだ！！」

「う～ん・・・僕はどう足掻いても魔法は使えないしなぁ」

何か、嫌な視線を感じて本から目を放し前を見るとそこには目に涙を溜めてこちらを凝視しているエヴァの顔が有った。まるで捨てないでと言う様なその顔、どうすればいいのか・・・。

「じゃ、じゃぁ牡丹は何がしたいのだ！私が願いを叶えてやろう！！」

「キ、キティ、ソレは何処の悪魔の殺し文句だい・・・？」

何故か必死のエヴァに少し引きながら牡丹は本を閉じた。
美しい女性が必死に成って自分の言葉を待っている様は、同じ女性としても嬉しいモノが有るが、もしかしたら彼女は百合の気が有るのであろうか。そう考えると少し背筋が冷えた。どうか家族愛でありますように！と強く願い、エヴァを満足させる事が出来る様な回答を探す。

確かにショッピングは魅力的だ、死体から頂いた金貨ももう大量に余っているし、そろそろ新しい着物を造った方が良いだろう。古くなった灰色の羽織を見ながらそう感じる。
しかし、距離が距離だ、以前の場所では戦争が起きていて城を元の場所には戻せないし・・・。

「じゃあ、一緒に海水浴でもする？」

「私は吸血鬼なのだが・・・」

「あ、そうか。吸血鬼に海は駄目か」

真祖にもなると克服は可能だ、しかし克服するまでにかなりの時間が掛る。最初から完全チートの存在など存在する筈が無い、黒の古書にもそう書かれていた。あの本に書いてあるのなら本当の事だろう。そう思うのは僕だけだろうか。
しかし、遊ぶ物が無い孤島、それに2人とも他人と遊ぶという経験は無に等しい、方やお嬢様の様に育てられた箱入り娘の吸血鬼に方や本の虫として育って来た異能。遊び？何それの世界である。

「！そうだ、良い事を思いついたぞ！！」

「何だい？」

「人間狩りに行こ」「誇り高い吸血鬼じゃなかったのか？君は」

「・・・う～」

さて、本当に詰まって来た。エヴァの事だから興味が無くなれば元に戻ると思ったのだが、そんな事も無かった。先ほどから「さぁ、お前の願いを言うが良い！」的なオーラを出してこちらを見て来ている。本当に彼女は何処の悪魔だろうか・・・。こんな所を挑戦者に見せる訳にはいかないだろう、変な噂が流れる・・・。いや、もう流れているか。

「お前の持っている黒の古書にはそう言った事は書いていないのか？」

「君は僕のこの本を何だと思っているのさ」

「とても便利なモノ？」

「うん、大胆に違うよ」

まあ、近いのかもしれないけれど。
しかし、本当にどうしたモノか・・・。

「そんなにも御暇でしたら、周囲の動物狩りに行くとよろしいのではないでしょうか？」

意外な所から助け船は出航した。そう言えば確かに動物ハンティングは古来から人間が娯楽として楽しんできた物だ。まあ、人間（笑）

なのだが、楽しめるだろう。
エヴァは初めての単語に頭を捻っているが、簡単に教えると納得したのかすぐに動きやすいドレスに着替えて来た。ドレスはどれも動きにくいと思うのだが彼女の趣味なので黙っておこう。牡丹は何時もの恰好だ、羽織の下はボーイッシュでは有るが動いやすい服なのでこのまま行く事にする。

「で、何を狩るんだ!?」

「げ、元気だねキティ」

「当たり前だろう!お前は何時も室内に居るからな!!」

「・・・うん、何かごめん」

因みに、この二人に狙われる可哀そうな犠牲は兎である。
森の中を馴れたように駆けるエヴァと、その後ろをゆっくり付いて行く牡丹、そして、牡丹の後ろに付いて行く大きな影。牡丹は全く気が付かずにそのまま進んで行くが、先に進んでいたエヴァの方がその大きな影に気が付いた。

「おっおい!牡丹!!後ろ!!」

「何だよ、大きな声は・・・あ?」

毛むくじゃらのその身体、手には鋭い爪。体長は2メートル以上の巨体。間違えなくクマであった。見た感じ5メートル位だろうか、軽く現実逃避した牡丹は「さて、帰って本でも読もうかな」等と言い始めている。

「避けろ!!牡丹!!」

「え?今日のご飯かい?それならテルが今日は上質の卵が獲れたって」

「何の話だ!!」

彼女の幼い身体に振り下ろされる猛獣の一撃、しかしその一撃は彼女の体に届く事許されなかった。クマの腕はもう少しの所で綺麗に無くなっていたのだ、それも肩から。

≪キャハッ≫

彼女の背中には黒い靄が集まり、そこから子供の腕が出て来ている。そして周囲に響いた声、間違いない、牡丹の妹の様な存在の鬼、柘榴の声であった。柘榴はその靄から這い出るとクマと対峙した、見た目的には熊に襲われる幼女であるが、ソレは逆、熊を追い詰める幼女が正しい。

響く熊の断末魔に子供の笑い声、エヴァの顔からは少し血の気が引いていた。

「・・・牡丹、止めなくて良いのか?」

「今日は熊鍋も追加だね・・・まあ、原型は残っていないそうだけれど」

≪お・・・ねぇ・・ちゃ・・・コレ・・たの・・・しい!≫

ご機嫌な柘榴に2人で苦笑いを零す、怖すぎる用心棒である。

その日の夕食には予想道理に熊鍋が出されたが、それを食べたのは牡丹だけであった。

6話・引っ越した後のお話（後書き）

その内、柘榴もちゃんと喋れるようにしよう・・・そうしよう

6話・ペットが出来るお話（前書き）

新キャラです。また空気が増えるのか・・・

6話・ペットが出来るお話

――彼女の友好関係は異常――

牡丹と暮らし始めて少したった頃、エヴァが夜中にトイレに行く為に起き上った。見た目的には女性体であるが、中身がエヴァのままなので少し行動が幼いのは言うまでも無い。一応彼女の部屋はトイレに近い所に有るのだが、夜は殆んどの明かりを消しているので真っ暗に近い、その中を彼女が進んで行く。

そして、無事に事を済ませて自分の部屋に帰る途中、彼女は見てしまった。長く伸びた髪、不健康に青白い肌、肋骨が浮き出るほどに痩せた全裸の少女が四つん這いで、羞恥の欠片も無い様に【天井を】這っていたのだ。

「牡丹――――!!」

彼女が同居人である牡丹の部屋に掛け込んだその秒数、国体選手も驚きの速さであった。もちろん深夜である為に普通の人間と基本変わらない牡丹は布団の中で寝ているのであるが、もちろんの事叩きお起こされる。

「何だい・・・僕は柘榴と遊んでいたから疲れているのに・・・」

彼女は修行も兼ねて柘榴を良くこちらに呼び出している。良い鍛錬には成るが一日の元気を吸い取られているので物凄く疲れるのだ。

エヴァは涙目で牡丹の胸倉をつかみガクガクと揺さぶる。

「ちょっ止めて・・・吐く・・・前代未聞の事に成る・・・ッ」

「変な者が!!変な者が!!変態が居たんだ!!!」

「そ、それを僕にどうしろと?」

確かに牡丹に行ってもどうしようも無い事である。彼女は柘榴を召喚する以外では普通の人間なのだ、力や魔力、身体の防御などは絶対的なまでにエヴァの方が強いであろう。しかし、この吸血鬼、良い具合にヘタレである。どこぞの吸血姉妹の姉の方に近い性格かもしれない。ただし、幻術で女性体に成っているのがまたシュールだが。

「いかがなさいました?御主人様、牡丹様」

「あ、テル。キティが廊下で変な物を見たと言うんだけれど、君は見たかい?」

「?天井を這う少女以外には見ていませんが・・・」

「「それだよボケメイド」」

黒の古書のページを捲るが、そんな項目は無い。基本はこれに書いてあるのだが、今回の事は異例の事らしい。しかしメイド達は動揺している様子も無いので恐らく向こうからはこちらに手を出してこないだろう。

だが、夜中に天井を見上げたらそんな物が居たら恐ろしい事は確かだ、前の熊の時の様に柘榴がその少女?をバラバラにしてしまっても目覚めが悪いだろう。何とかして解決しなければ・・・。

ペタペタペタペタペタ

「・・・」

ペタペタペタペタペタ

「・・・」

柔らかい肉が、固い石等に触れる音がする、此処は城だ。部屋の中は基本石造りでそこにカーペット等が敷かれている。牡丹は天井が石造りの部屋に寝ている。つまりは・・・

「（此処に居る？）」

「（その様ですね）」

「（お、おい！どうするんだ！？）」

チラッと天井を見上げると、そこには確かにそれが居た。黒と灰色の混じったような不思議な長い髪の毛を持つそれはペタペタと天井を這っている。赤色の瞳が嫌にぎらついて見えた。

その瞬間に、牡丹は昔読んだ妖怪辞典の本の内容を思い出す。女性の身体で天井を這える、そして赤い瞳、もしかするとアレかも知れない。牡丹の呑み終わっている紅茶セットの隣に置いてある角砂糖を1つ摘み、それをその少女に向かって投げてみる。

「っ！」

それは、砂糖を髪の毛で掴んだ。そう、髪の毛で。

「やあ、君、もしかしてもしかすると女郎蜘蛛かい？」

東側に多い蜘蛛の妖怪、地方によっては大妖怪の分類にも入るソレは牡丹を静かに見下ろしていた。牡丹が砂糖を自分の口へ入れると彼女もそれを真似して口の中へ入れる。その瞬間、幸せそうな顔をした。

――女郎蜘蛛、ソレは人間に糸を巻き付けてまるで蜘蛛が食事をするように人間を喰ってしまう妖怪。子を多く産む種族も居れば、人間に化けて男に近づき捕食する者も居る――

その蜘蛛の少女はスルスルと降りて来る（手から蜘蛛の糸が伸びるようだ）と、四つん這いのまま牡丹の前に進み、彼女の顔をジッと見る。エヴァは顔が青ざめていた。

少女は柘榴と同じ位の大きさだろうか、少女と言うよりは幼女と言うべきかもしれない。何かを期待するような目で牡丹を見上げている。

「もっと欲しいのかい？」

「！（コクコク）」

激しく首を上下させた、まるで犬の様だなと思いながらも今度は砂糖ではなくテルが昼の内に焼いたクッキーを出す、最初は戸惑った様子であったが、蜘蛛は恐る恐るそれを口にした、どうやら御気に召したらしい。子供の様な笑顔でクッキーを食べている。ただし、四つん這いで。

「何か、こう・・相手を服従させたいって言う欲が満たされていくね」

「お、おい牡丹、大丈夫なのか？」

エヴァの震える声、牡丹はその声に振り向きニッコリと笑った。

「キティ、僕この子を飼うよ」

「はぁ!?」

「僕、犬の様に良く言う事を聞いてくれる使い魔的な存在が欲しかったんだ」

「テルが居るだろう!!」

「私は牡丹様専属の【メイド】ですので・・・犬とは言えませんね」

人間を飼っておる。どこぞの悪役の様な言葉だが、蜘蛛の少女はどうやら不服はないらしい。今まで何にも食べる物が無かった所に、自分に食べモノを与えてくれる救世主の様な存在が現れたのだ、もう彼女は牡丹を主と認めているようだった。腹を見せて服従を現す恰好を取っている。幼い身体ながらも発育した胸が揺れた、色々と丸見えである。

「テル、僕が教えた通りに着物、作れるかな?」

「解りました、明日までには完成させておきます」

「ほ、本気で飼うつもりか?」

「名前何にしようかな?和名が良いかな・・・椿?ありきたりだし・・・」

「アラクネ」

「キティ、それじゃあ西洋名じゃないか」

彼女は甘えるように牡丹の指を舐めている、それに少しの嫉妬？を覚えたのかエヴァが牡丹のもう片手を抱いた。両手に花と言うが、コレは喜んでいいのであろうか。そう考える牡丹。

「甘楽（つづら）にしよう、君の名前」

物凄い適当に言い放った彼女であるが・・・甘楽と名付けられた彼女はその言葉が自分の名前と認識すると嬉しそうに抱きついて来た。エヴァは少し頬を膨らませながら甘楽を見ている。

「さ、これで解決だね。甘楽、僕の見ない所でキティを齧っちゃ駄目だよ？」

「・・・（？）」

「か、齧るのか・・・」

因みに、彼女は牡丹の調教の結果、３日後には立派に服を着て人間と同じように歩く姿が目撃されている。ただし、牡丹を見ると仰向けに成り自分の一番弱い場所である腹を見せるのは変わらなかったと言う。知識は有るが人語は話せないようだ、何故か柘榴とは中が良いようだが、彼女達が遊ぶと森が１つ消えると言う。

6話・ペットが出来るお話（後書き）

感想、出来るだけ返信します。

7話・魔導具のお話（前書き）

と、書いてマジックアイテムと呼んでください

7話・魔導具のお話

――彼女の師は1人である――

孤島の外は今や戦乱の世であるらしい、聞いた話だと色々な所で戦いが頻繁に発生し、剣や弓などの武器に加えて新しい武器も発明されているようだ。あまりにも長い間関係ないと言わんばかりに此処で生活して来たので完全に忘れていた。もう何年外では時間がたったのであろう。肉体的には全く成長していない少女が雪の降る外を見ながら黒の古書を置いた。

髪の毛なども全く変わっていない、イメージは変えないらしい。彼女と共に住んでいるこの城の一応、主君であるエヴァも幻術を使って成人女性に自分を見せているモノの、中身は全く変わらなかった。膝掛けを外し、靴をはく。部屋の外は予想以上に寒かった。この孤島は寒い位置に有るらしく冬が長い、テルに頼んで簡単な暖炉も造ったのであるが、それは部屋の中だけの話で城の中全てに設置する事は出来なかった。

彼女、数日前まで死ぬか生きるか程の熱を出していたのだ、風邪もこの時代では死に至る病である。小さなメモ帳を持った黒と灰色の髪を持つ少女がササッと紙に文字を書き込んで見せて来た。

【何か必要な物が？】

「あぁ、温かい飲み物が欲しくてね」

【それなら、私にお任せ下さい】

甘楽はスッと消える様に行動した、彼女はこの城の中に自分の巣を作ってあるらしく、そこから厨房等に直行可能なのだ、以前エヴァ

の部屋に忍び込んだらしい、二人とも無駄に仲が悪くエヴァの部屋には入らないよう指示を出している程だ。放っておくとエヴァの部屋は蜘蛛の巣だらけに成るだろう、恐ろしい話だ。
椅子に座りながら雪の積もった外に目を向けた、湖には氷が張っているようだ。エヴァがその内釣りに行こうと言って来る気がしてならない。彼女の中身は殆んど１０代前後から変わっていないのだ、少し前にも雪合戦をやろうと誘われた、妙に子供っぽい・・・。

【紅茶でよろしかったでしょうか？】

「紅茶は僕のお気に入りさ、ありがとう」

器用に指から糸を出して中へぶら下がりながら降りて来る彼女。その手には御盆と紅茶が乗っていた。温かそうに湯気が出ている。その紅茶の横には妙に懐かしく見る黒い塊、ソレは今ではかなり高価なモノの筈であった。甘い芳香が鼻孔を擽る。

「――チョコレートなんて、良く手に入ったね」

サササッと彼女の手がメモ帳に走る。

【少し前に島に漂着した商人を助けたではないですか。その時にレシピと材料を頂いたのです】

「・・・うん、味も悪くない。甘楽は才能が有るのかもね」

ペコリと頭を下げた女郎蜘蛛の甘楽、その光景は美しくもあり、奇妙でもあった。

――――――――――――――――

―――――――
――

近づいて来る白い足音、その手には【白の古書】、牡丹が持っているその本とは違い文字の様な者が見当たらない、それを持っている男も白く、整った顔立ちの青年であった。

「あぁ、何処に居るんだい私の愛おしい■■」

そう呟く男の声は何処か不気味な程冷めている。

―――――――――――――――
―――――
――

「・・・」

【どうしました?牡丹様】

紅茶を手に持ったままベッドの上に座り行動をぴったりと止めている牡丹に甘楽は不思議そうに頭を傾げた。牡丹はハッとしたように紅茶を啜り、「何でも無いよ」と彼女の頭を撫でた。

「そう言えば、少し前に切った僕の髪の毛はまだ残っているかい?」

【確かに有りますが・・・】

「悪いけど、それを持って来てくれないか?」

【承知いたしました】

何を思ったか彼女は少し前に切った自らの髪の毛を持って来るように命じた、彼女の手にはナイフと細長く加工された木が乗っていた。甘楽がその髪の毛を持って来た、その髪の毛を彼女は上手にススッと加工していく、そして少しの沈黙の後にソレは完成した。気の先には黒い彼女の髪の毛が付けられているそれ、そう、ソレは誰もが見覚えが有るモノだ。
筆、そう、日本でも良く使われる筆である。

「入るぞ牡丹・・・？なんだそれは、新しいマジックアイテムか？」

「そうだよ、僕の髪を使った筆さ。後は・・・」

彼女は、ナイフで自分の指の腹を少し気づ付ける、するとそこから少しの血が垂れ筆の木の部分にしみ込んだ。赤い彼女の血はジュルッとその木の中へと吸い込まれていく。

「なっ何をしているんだ！病み上がりだと言うのに！！」

【全くです！治療具を持ってまいります！！】

「・・・そんなに深くも切っていないのだけれど」

「【免疫が低くて風邪で死に掛けた者のセリフか！！】」

「・・・（ショボーン）」

そんなやり取りが有った後、彼女の指には消毒が施され包帯が巻かれた、そしてエヴァは彼女が持っていたその筆を不思議そうに見ている。確かに何処からどう見てもあまり変わりの無い筆だ。しかし、

何かがおかしい。

「その筆はね、僕専用のマジックアイテムなんだよ」

「ほう、どのような効果が有るのだ？」

「東の方の国ではね、画竜点睛と言う言葉が有るんだ。絵が飛び出してくると言う事だよ」

屏風に描いた虎が飛びだしてきたり、龍が空に飛んだりと、東に国ではそう言った話が多い、掛け軸の中に妖怪が住む事が有るほどの島なので不思議でも無いかもしれないが。

「僕の血は、それなりに希少価値の高い物でね。おかげで、それが作れたんだ」

因みに、対価は特にないが簡単に言うのなら墨だろうか。書く物によってソレは強さを変える、因みにコレは彼女自身の能力ではなく、彼女が加工した木の能力である。世界でも珍しい事だ、ただの物質が能力を持つなど、どこぞの教団が知ったら回収に来そうだ。イノセンス！とか言いながら。

「嫌ね、僕の良く当たる勘がコレを早めに作っておけってね」

「・・・お前の予感はたまに当るからな」

彼女が適当に明日は雨だと思うと、その次の日は確かに雨であった事が多いのだ。恐らく世界線を越えた時に少しだけ世界とリンクしているのだろう。すぐにこの繋がりも無くなるだろうが、ある内は使わせていただこう。

「僕の敵が、この世界に来たみたいだからね」

そう言った彼女の瞳は、退屈そうではなく目の前にある玩具で遊べる瞬間を待ち望んでいる子供の様であった。

7話・魔導具のお話（後書き）

狂気的な笑みを浮かべたのは何故か・・・

8話・龍のお話（前書き）

かなりの駄文なので、読むときには注意して下さい

8話・龍のお話

――彼女の数奇な運命――

「キティ、行くよ」

「・・・は？」

「は、じゃなくて。行くよ」

急に変な事を言いだす牡丹、彼女の恰好は完全に着物姿で、木モノの上に羽織を羽織っていると言う感じだ、彼女の横には甘楽が控えている。何時もの彼女だが、彼女の手には釣りの道具が有った、どうやら釣りに行くようだ。エヴァはそれを理解すると「私も行くのか？」と彼女に疑問をぶつける。

「当たり前じゃないか、僕一人では無理だからね」

そう言った彼女の従者、甘楽はこちらを少し睨んでいた。彼女はどうやらエヴァを警戒しているようだ。それにしても物々しいモノを持っている。少し前に彼女が造った魔導具（マジックアイテム）、恋呪の筆と言うモノを彼女は装備していた、そして彼女が持っている竹筒の中には墨が入っているのだろう。

「釣りに行くのに何故そんな重装備なんだ」

「最近、この孤島では雨が降らないじゃないか」

「？あぁ」

「そう言う事だよ」

全く解らなかった、彼女はすぐに行動開始する癖が有るらしく、常に準備万端である。甘楽は恐らく保険であろう、彼女の中の鬼と、彼女の持つ筆、コレだけでもかなりの戦力なのだから。

エヴァが準備して来ると、彼女は外で待っていた。彼女はエヴァを見ると早速と言うように歩きだした、エヴァはすぐに彼女の後を付いて行く。

「この辺で良いかな」

彼女達が辿り着いた場所は島の中心近くにある大きな湖であった。澄んだ上質な水は綺麗に太陽の光を反射している。そこに牡丹は餌を付けずに釣りを始めた、甘楽も器用に指から糸を垂らし釣りをしている。エヴァも2人と同じように釣りを始めた。

釣りとは、長い時間魚が来ずに待っている時間が有る、人は日が暮れる少し前までのんびりと釣り糸を垂らしていた。

「・・・此処は本当に魚が居るのか？」

「――そろそろ良いかな、時間も良い具合だし」

彼女は釣り道具をしまうと、筆を持ち、その筆の先を墨に浸した。そしてその筆を宙に走らせた瞬間にその筆の能力が発揮される。書かれたモノが宙に浮いている。彼女が書いた物は簡単な物だった、墨で書かれた釣り道具はズルルッと動きだし、彼女の手の中に具現した。

普通なら有り得ない光景なのだが、実はこの筆の木は神木と言われたモノの一部なのだ、これ位の能力は持っていても可笑しくないほ

ど古い物らしい。

「さて、そろそろその姿を現してほしいな」

彼女が投げ込んだソレはヒュゥンッと風を切る音と共に湖に投げ込まれた。糸さえも墨で描かれたソレは見事なまでに水の中に吸い込まれ、見えなくなる。

夕暮れの赤い光りが水面に反射した瞬間であった。彼女の釣竿がぐっと引っ張られる、もちろんそれを牡丹が引ける筈もなく、エヴァが彼女の変わりにその墨の釣竿を引いた。

人間を片手で簡単に引き避けるほどの力を持つ吸血鬼、その力を生かし一気にそれを釣りあげる。

――銀色に光輝くその鱗、立派な角、その巨大な巨体。それはまさしく幻獣のトップとも言われる物であった。

――――龍神――――

土地神の様にその土地に住まい、そこを治める種族だ。知能は人間よりもはるかに賢く、人間の言葉を解する者も多い、その力は強大でまさに天災とも言える程の災害をもたらす時が有る。

「ななな？何だこれは！？」

「この島の龍神だよ、最近雨が降らないのはコイツのせいさ」

≪・・・人間如きが、我を呼び出すとはどう言った事だ≫

「君が仕事をしないから僕が此処に来たのさ、さぁ、さっさとこの辺りの天気を元に戻しな」

≪・・・それは出来ぬ、我の知った事ではない≫

「・・・へぇ」

牡丹が嫌に不気味な笑みを浮かべた、最近水不足でエヴァの持っているワイン系の物しか呑んでいなかったようでかなり不機嫌なのだ。それに彼女が趣味で育てていた植物も全滅した。

「龍如きが、僕に意見するとは良い度胸だよ」

彼女は筆で空中に【龍】と漢字を書く、するとどうだろう、その漢字が変形しまるで生きている龍の様に成ったではないか。しかも龍神よりも2回りほど大きなモノだ。黒い墨の鱗が不気味に赤い夕暮れの光を反射する。

≪何と・・・異能であったか≫

竜神は口に火を溜めると墨の龍に向かいそれを吐きだした。豪炎が龍を焼くが墨の龍は全く変化を見せない、それ所か墨が剥がれて本当の黒い鱗が露出したではないか。

「ぼ、牡丹、アレは・・・」

「キティ、女性の髪は良く魔力を通すんだ、だから僕は自分の髪の毛をこの筆に使ったんだよ」

黒い龍は竜神に容赦なく噛みつく、波立つ湖、牡丹は静かにその光景を見ていた。

≪貴様！龍族としての誇りは無いのか！？≫

≪■■■■■！！！！！≫

叫びに成らない悲鳴が周囲に木霊する。龍の血が周囲に飛び散り赤に染めて行く。それでも黒い龍は行動を停止しようとしない。何故なら龍は知識等無い、墨で作られた存在だからだ。元が墨なので知識など保有する筈もなく、ただ攻撃を繰り返す。

≪ガ・・・ゴォ・・・・・≫

「君は僕達を追い出そうとしたようだけれど、僕はそんなに気が長くないんだ。我慢を知らない現代っ子とは良く言ったモノだよ」

≪やめ・・・まだ・・・死にたく無・・・≫

墨の龍が消えかかってきた、それと同時に竜神も虫の息に成って行く。

「牡丹、殺さなくても良いんじゃないか？」

「あのねキティ、コイツは僕達を追い出すだけじゃなく、転生者を創り出そうと力を溜めていたんだよ？許せる筈が無いじゃないか」

そうでなくても、最近は挑戦者に混じって転生者も来ていると言うのに、これ以上増やされるとこちらが殺される危険性が有る。少し前なんか城が半壊し柘榴が物凄い怒りながら転生者をミンチにしていた。今思い出しただけでも恐ろしい光景である。

【龍が居なくなってしまったら、この島の天気はどうなるのですか

？」

「元に戻るよ、しっかりとね」

元々は人々に信仰されて天候を操る竜神である、これが居なくなっても特に問題はないのだ。墨の龍が竜神を踏みつける、龍が吐きだした血がまるで新しい湖の様に溜まって行く。

「これで、黒の古書通りに竜と遭遇し、それを撃破した訳だ」

いつの間にか、かのじょの手の中には黒の古書が持たれていた。その古書に付着した龍の血が、一瞬で消えたように見えたエヴァであった。

8話・龍のお話（後書き）

何だか疲れた・・・

9話・失敗のお話（前書き）

数年、時代が飛びます。

9話・失敗のお話

――彼女は被害者にも成る――

目を覚ますと、そこは戦場のど真中であった。周囲では人が爆ぜたり、魔法などが直撃して頭だけが千切れたりしている。濃い血の匂い、久々に嗅いだ濃い死の匂いだ。腹の子が、柘榴が笑った気がした。

何故、此処に居るのであろう。昨日はエヴァの魔法実験に付き合って、それから・・・それから?記憶が無い、見事なまでにそこ先の記憶が消滅していた。幸いにも持ち物はすぐ近くにあり、その中に黒の古書が有ったので不便はしないであろう。筆もあるし墨もある。当分はこの戦いの中でも生き残れる。

「鬼神兵だ!!鬼神兵が来たぞ!!!!」

男が声を上げた。男の指をさす方を見てみるとそこには巨大な光の巨人、そして濃い魔法の力の形跡。此処は、この世界は――――

「魔法世界?何故に僕が此処に居るんだい・・・」

嫌に成った。筆を取り出して墨に付け、【龍】と文字を書く。それは再び姿を現した、黒々とした鱗を持つソレは大空に大きな翼を広げて強く大きく啼いた。大地を震わすその雄叫びに鬼神兵や周囲の人間達も怯えた顔に成る。

「アッアイツは・・・闇の福音と並ぶ賞金首の・・・!!」

「百合姫か!?」

「・・・何だろう、物凄い馬鹿にされている気分だし、痛々しい２つ名だね、それ」

龍の背中に乗っている彼女は自分の２つ名にため息を吐いた。墨の龍は鬼神兵に向かいその口から黒い業火を吐きだした。その豪炎は周囲の森を燃やし、兵士を１人残さず溶かして行く。その姿はまさに地獄の女神であった。元々色が白い彼女の肌がその業火に照らされ妖しいまでに妖艶であった。

「・・・僕はただ逃げようとしただけなのだけれど・・・操作が出来ないなぁ・・・この龍は・・・」

彼女の眼の前は焦土に成っていた。村に攻めて来ていた兵たちは既に溶け、戦艦も、何もかもが無くなり後に残ったのは彼女の後ろに居た村人達と、村だけである。戦争のさなかだと言うのに空には青空が広がって来ていた。

「お、俺達を守ってくれたのか・・・？」

「つっ強えぇ・・・」

彼女の周りには何時の間には人垣ができていた、彼女が龍から降りると彼女へ感謝の言葉を告げる者も多く、皆が頭を下げて来る。

「い、いや・・・僕は・・・」

「是非、この村にとどまって貰えないだろうか！？」

長老らしき老人が彼女に話しかけて来た、その目は真剣そのもので

彼女が何時も守りきれるとは限らないと言っても老婆は引こうとしない。最後に折れたのは牡丹であった。

「でもね、僕も危険な存在だと言う事を忘れないでね」

「解っておりますじゃ、牡丹殿」

牡丹には宿の一室が与えられ、食事等も提供されるようになった。

牡丹は先ほどの光景を思い出し、世界を渡る前の・・・そう、追放世界での事を思い出した。

――自分の周囲では、常に人が死んでいた。ソレは偽りの母であったり、偽りの父であったり、義理の姉妹であったり、兄弟であったり。または知り合いが、従者が、友が、親友が。次々と死んでいった。既に見慣れた光景であり、守る為に続けて来た事だ。故に既にそう言った事に対する抵抗はなくなっている。目の前で人が死に、人が殺される、そんな事は既に見飽きた――

「嗚呼、これも僕が産まれたモノから背負いだした試練か」

【本当の父親】の事は覚えている。忘れる筈も無い、生きている内にも一度逢うと決めたのだ。その為に世界を渡り、その為に物語をなぞっている。しかし、1つのトラブルが起きているが・・・

「父さん、僕は貴方の子として認めて貰えるかな・・・？」

寂しそうに天井に向かって彼女は呟いた。

数多の世界線を、数多の戦争を勝ち進み、進軍し、殺し、侵した彼女の父、その背中を追うにはあまりにも小さすぎた手、そして能力。愛されるが故に置いて行かれたという悲しみ。奪われた恐怖、それは彼女を悲しませるには十分だった。

≪お姉ちゃん・・・元気・・・だして・・・≫

具現していない筈の柘榴の声、柘榴もエヴァを過ごしていた数年の間にしっかりと喋れるようになったのだ。外見は全く成長していないが。牡丹を励まそうとしている柘榴の声、彼女は牡丹を疲れさせるのは良くないと出て来なかったのだ。

「・・・あぁ、そうだね。こんな所で落ち込んで居ても先には進めない」

彼女は窓の外を見てニッコリとほほ笑んだ。

―――――――――――――

「伝令!伝令!!普通世界と繋がっていたゲートが襲撃されました!!」

「何だと?!何処の軍だ!!」

「いえ!それが軍ではなく・・・」

何処かの国の指令室、そこには息を切らした兵士と指令者。ザワザワとざわめく周囲の兵士を一括し、彼は状況を聞きだした。

「や、闇の福音です!!」

「そんなっそんな馬鹿な!!アイツは普通世界の大罪人の筈だ!!

何故こちらに来られた!?被害は!」

「重傷者が５８名、軽傷者が１８４７名、死者が１６８名です!ゲートは破壊され既に使い物に成りません!!」

・
・
・

薄暗い森の中、そこには複数のメイド達が待機していた、彼女達の中心に居るのは４人の人物、人形メイドのテルと殺戮人形のチャチャヤゼロ、女郎蜘蛛の甘楽に悪の魔法使いエヴァンジェリンであった。彼女は奪った世界の地図を見ながら目的の人物が居そうな場所を探していた。

「・・・この帝国と言う所は避けなければな、私達でも軍を相手にするのは面倒だ」

「最初のゲートを襲撃したのは何処のどなたですか・・・」

【同感です】

甘楽の腕は3対に成っていた。妖怪化、そう呼ばれる彼女達妖怪独特の能力だ、彼女達は普段人の形をしているが能力を完全開放する事で妖怪としての姿に成る事が出来る。甘楽の場合下半身が蜘蛛に成り、腕が増え、目が8個に成るのであるが、今の彼女は能力を半分だけ解放しており、腕だけ増やしているようだ。

「何にしろ、早くしないと牡丹が危ない。戦争に巻き込まれる前に救出するんだ」

「はい、心得ております」

【・・・ここら辺の蜘蛛達は見ていないようです】

甘楽はそう伝えると腕を元の1対に戻し普通の人間の姿に成った。
エヴァはメイド達の移動する事を伝え、人形メイド達を散らせる事にした。そうする事で広範囲を探すようにしたのだ。
その中でもエヴァ、チャチャゼロ、テル、甘楽は共に行動する事なる。もしも甘楽が暴走した場合、止められるモノが居た方が良いからだ。
もし甘楽が牡丹の悪い噂を耳にしたのなら、次の日にはその街は生きる者が居ない蜘蛛の巣と成っているだろう。

「牡丹・・・待っていろよ、必ず私達が迎えに行ってやる・・・ッ!!」

魔法実験の失敗でこの世界に飛ばされてしまった牡丹を救う為に、エヴァ達は危険な魔法世界へと足を踏み出したのであった。

9話・失敗のお話（後書き）

「・・・あ、この魚美味しい」

「牡丹殿もそう思いますか？近くの川で釣り人が釣ってきたのですよ」

こちらは、以外と馴染んでいた。

１０話・勤めるお話（前書き）

黒の古書、ソレは一体・・・

１０話・勤めるお話

――彼女は理不尽な断罪を下す者――

空の色は赤く染まっていた、浮いた戦艦の群れの前には数千の墨の獣達。生気の無いその鋭い瞳で兵士達を踏み潰し死体の山を築きあげた。墨の中には鎧を着た兵士の姿や異形の姿までである。それが彼女の作り上げた兵士なのだ、彼女はこの数百年、エヴァとただ無駄に過ごしていた訳ではない、彼女の頭の中には様々な物語が記憶されているのだ、それを具現することくらい恋呪の筆が有れば簡単な事だ。
登場人物を描く時間は有った、後はそれを放出するだけ。

「戦艦、鬼神兵、その他魔法使いや騎士団、そんな物で僕を超えようなんて無理だよ。確かに魔法は使えないが、僕には筆が有る」

彼女が筆を振るうとそこから黒い線が宙に浮いた、ソレは次々と獣や人の形に成り敵軍へと突撃していく。村を守る為とは言え完全にやり過ぎだ。何時の間にか彼女の賞金はさらに増えてしまった。一個大隊や戦艦を落としているのだ、当たり前と言えば当たり前だろう。

「鬼だ・・・戦火の鬼が出たぞ！！」

「こっ殺せ！！我らに栄光あれ！！」

彼等は墨の軍に向かい突撃していく、しかしそれは無意味だ、何せ元々が墨の軍隊、故に魂など無く生きてもいない。ただ彼等は自らの存在が消えるまで主に従うのみである。

「全ては予定された事、僕がその事を忘れる筈がないだろう？」

戦列も組まない墨の兵団は次々と命を狩りとって行った。まるで死神、黒の軍団、古書に残された一節通りに物語は進行している。彼女はただ、その書に従うのみ。

ソレが愛なのだから、それがもう一度会う為の手段なのだから。

彼女は、他者から奪い、自らも捨てて行く。

「戦火の徒め！！覚悟ッ！！」

いつの間にか討ち漏らしたのであろう男が背中から剣を持って近づいて来た、大きなその剣を振り上げ血を浴びた茶色の髪の毛の亜人が、彼女の白い肌にその剣を振り下ろす。

しかし、悲しくもその剣は空を切った。彼女の手を引き避けさせたのは彼女と同じ黒い髪を持つ幼女、長い髪を乱してそのバケモノは笑っていた。

≪さよう・・・なら・・・！≫

アハハッと言う子供の声と共に男の視界は黒に染まった。

・　・　・

「凄まじいモノじゃな」

「えぇ、アレが戦火の徒、鬼とも呼ばれる賞金首です」

彼女の活躍を遠く離れた崖の上で見ている二人組が居た。褐色の肌に頭には角が生えている亜人、帝国の姫であるテオドラである。その横には彼女の護衛と思われる一人の女性騎士、燃え盛る煉獄と成ったその場所を静かに見下ろしている。

「・・・妾とあまり変わらぬではないか・・・」

「・・・戦争とは、そう言うモノにございます」

墨の兵たちが消えたその場所にはもう何も残っていなかった。さら地と化したその場所に立ちつくしのは一人の少女、黒い髪を持った黒い瞳の少女はその手に黒の古書を持っていた。

「――――で、君達さ。さっきから何を見ているんだい？」

「「ッ！？」」

振り向くとそこに居たのは先ほどまで遠くに居た筈の彼女であったその手には本が持たれている。残留魔力からすると市販されている転移魔符を使ったのであろう。アレなら魔力が無くても使用できるのだ。

少女は穏やかな顔で2人を見ていた。

「もしかして、さっきの軍隊の指揮官さん？」

「違う、私達は」

「通りすがりとは言えないよね？だってその服、どう見ても皇族のモノだ」

テオドラの服を指差す牡丹、片手が筆に伸びていた。顔は相変わらずの笑顔であるが警戒しているのであろう、ポーカーフェイスと言った所だ。

「・・・その通りじゃ、妾はヘラス帝国第三皇女テオドラ。お主は戦火の徒、ボタンで間違えないな？」

「丁寧にどうも、確かに僕は牡丹だ。君達の追っている牡丹かどうかは知らないけどね」

彼女は優しくも鋭い瞳を騎士へと向ける、騎士の手は剣の柄を強く握っていた。柘榴が笑う声が聞こえる、角を持つ亜人の騎士、その騎士はテオドラの号令を今か今かと待っているようであった、その瞳は血に飢えた獣と何も変わらない。

「やめるのじゃ、妾はそんなくだらない事をする為に来たのではない」

「・・・ハ」

周囲の殺気が消え、騎士も牡丹も得物から手を放した。テオドラは安心したような顔で彼女に話しかける。

「主の話しは良く聞いている。そこで相談なのじゃが・・・」

「大体読めたよ、僕を帝国の軍に入れるつもりだろう？」

「！その通りじゃ、来てくれるかのう・・・」

「・・・僕は今、有る村に御世話になっているんだ、その村を厳重

に守ると言うのなら」

彼女の姿が、一瞬【彼】と重なる。漆黒の髪に獣のように鋭い眼。その幻影がテオドラにも見えていた。それは一瞬であったが、確かに見えていた、それが何だったのかは解らないが、テオドラは彼女の条件を呑んだ。

彼女は村に帰るとその事を伝える、どうやら此処は帝国側の領地だったらしい。テオドラの権限でこの村には多くの兵隊と軍隊が配備され、牡丹はテオドラの騎士と成った。

「でもね、僕は騎士と言うより君の教育係の方が良いと思うんだ」

「？それは何故じゃ」

「僕は無敵の吸血鬼でも何でもない、頭を切られたりすれば普通の死んでしまう君達と同じだからね」

「大丈夫じゃ！妾が戦地へと出て行かない限りお主も妾と共に此処で生活して貰う！」

「・・・君、結構肝が据わっているね」

―――――――――――――――

―――――――

―――

その頃、牡丹とは違う戦場に４人の影が有った、彼女達は目標の人物を探して街を探したりしたのだが一向に情報が入らない。恐らく国が行っている情報操作のせいだろう、その事に苛立ち鬼神兵の部隊を蹴散らしたりしていた。耳に入って来るのは紅い翼と言う者達

の噂ばかり、もう嫌になって来ていた。

「何処に行ってもその男の名前、もう嫌に成ったぞ私は」

ローブを深く冠り姿を隠している女性体のエヴァが呟いた。同じくローブを着た3人が頷く。

「しかし・・・私たちの旅にとっては危険ですね。その翼は」

【障害は排除】

「オイオイ、そう言う訳にもいかねぇだろ？」

彼女達は街の中の人が少ない酒場の奥の席に座った。先ほどの戦場からあまり離れていないので人は少なかった。

「あー！はらへった！！久々に普通の飯が食えるぜ！！」

「もう少し静かにしたらどうですか・・・」

「じゃが、確かにまともな物を食うのは久々じゃのう・・・」

酒場に現れた3人の影、一人は成人の身長が高い剣を持った男性、一人は杖を持った赤髪の青年、もう一人は一見女性と間違えそうな性別不詳の子供であった。

１０話・勤めるお話（後書き）

「・・・一緒にお風呂入りたいのかい？」
「うっうむ！良いか！？」
「（・・・キティみたいだな・・・）」
「（同じ位の者と初めて風呂に浸かったのじゃ・・・！）」

11話・正義とは、と聞くお話（前書き）

今日も彼女の物語は静かに幕を上げる。

11話・正義とは、と聞くお話

――彼女の側には死神が控える――

崩れ落ちる塔、乱れる光弾、空を割るような悲鳴。テオドラと牡丹が帝国から少し離れた街まで来ていた時にソレは起こった。空に浮かぶ鉄の船、光弾をまき散らしながら人の命を奪っていく。倒れた少年、友と信じていた者に踏まれて血を流す。此処は戦場と化したのだ、逃げまどう人々、混ざり合う種族、降下して来た兵士、その鋼を幼い花売りの少女に振り下ろす。舞い散る赤、倒れる少女、慈悲など存在しなかった。此処が戦場、地獄の底。

「テオドラ様！こちらへ！！牡丹！貴女も来なさい！！」

「なっ何が起きているのじゃ！！？」

「攻撃です！この街は中立であった筈ですが・・・ッ！」

空から落ちて来る鉄の塊、それが外の世界の物で、しかも殺傷性の十分有るモノと気付けたものは何人だろうか、ソレは空中で眩い光りを放ち爆発した。爆風が周囲の木を、家を薙ぎ倒す。

「御無事ですか！！？」

「だ、大丈夫じゃ」

「・・・」

「牡丹？牡丹！！返事をしなさい！！」

プルプルと震える牡丹、その手には千切れてしまった本の一部、彼女が最近買った本であろう、分厚かった本は見る影もなくずたずたに成っていた。黒の古書ではないが彼女にとっては最悪の出来事だ。彼女は着物の中から一枚の紙を取り出した、ソレには既に文字が書かれていてその文字は彼女が撫でると変化を見せる。

【鬼神兵】

黒い鬼神兵が、それも普通の物より大きなモノが彼女達3人の前に立ちあがった。その鬼神兵は何処かの鎧武者の様に武装しており、その手には日本刀のような形をした武器を持っている。

「・・・だ・・・」

「？」

「まだ・・・読みかけだったのにッ！！」

彼女の声と同時にその鬼神兵はその剣を戦艦目指して振り下ろした、刹那、その戦艦は綺麗に2つに割れ大地へと落ちて行く。兵士は踏みつぶされ鬼神兵は黒の鬼神兵に切り倒される。酷い無双状態だ、牡丹は肩で息をしながらフラッとふらついた。最近彼女はこの術を使い過ぎている、その疲労が来たのであろうか。元々身体の強くない故に体力もそんなに無いのだ。

「・・・っ通信入りました！！・・・敵側に紅い翼と言う傭兵が付いているようです！！その人数・・・7人！！？」

「なんじゃと！？」

「・・・ケホッケホッ・・・どうしたんだい?そんなに深刻な顔で」

「紅い翼・・・最近噂の傭兵じゃ、面倒な程に強いと聞いておる」

すっきりしたような顔で彼女は情報を求める、と、彼女の召喚した墨の鬼神兵が何者かによって倒されたではないか。先ほどまでの無双は何だったのか、鬼神兵の居た場所の近くには数人の人影が有る。

「・・・テオドラを頼んだよ」

「承知だ」

「なっ何処に行く牡丹!!」

「何処って、敵の足止めに決まっているだろう?」

「駄目じゃ!!お主が勝てる相手ではない!!殺されてしまうぞ!!?」

「もし、僕が此処で死んだのならそれは運命だったんだよ」

牡丹は着物の上に羽織っていたローブのフードを深く冠った。顔が見えないようにしたのだ。もし姿がばれてしまえば敵は全力で殺しに来るだろう、戦火の徒とまで言われる者を生かしておくはずがない。しかしフードを冠っていれば体系は少女なのだ、少しは油断してくれる間も知れない。

彼女は覚悟を決める様に鞄の中の黒の古書を強く握りしめた。

――――――――――

―――
―

赤髪の青年が、壊された街の中心に立っていた。彼の前には無残にも殺された花売りの少女、彼の仲間もそれを唖然と見ているようであった。彼等は戦争とはこういうモノだとは思わなかったのか、震えるその手を隠しながら立ち尽くしていた。

「ハロー、君が襲撃犯側の主戦力かい？」

彼等の眼の前に現れた幼い少女の様なローブ姿の者。口元しか見えていない彼女はニッコリとほほ笑んだ。

「君が殺したのかい？その可哀そうな少女は」

「ち・・・違う！！」

「解らないよ、君の放つ魔法の巻き添えに成ったのか、それ以外か」

「俺は・・・殺していない・・・」

「それは有り得ないよ」

冷たい彼女の言葉が、彼に圧し掛かる。

「君が倒して来た兵士、それを君は殺してきたのだろう？君の手は私と同じく、血が滴っているよ」

彼女は、一人称を僕を私へと変えた。

「っ黙れ！！」

バチッと彼の手から電撃が流れた、それを合図にするように彼女は袖の中から数枚の紙を周囲にばら撒いた。

【虎】【狼】【熊】【重装備兵】【魔法使い】【奴隷】【剣闘士】

文字が、次々と変化し兵士が、獣が生まれて行く。

「馬鹿な・・牡丹と同じ技だと・・・・！？貴様、その筆何処で手に入れた！！？」

傭兵達の中にはエヴァまで居た。その他にもテルやチャチャゼロ、甘楽、揃いも揃って何をやっているのかと考えた牡丹だがソレに答えている暇も無い。流石最近噂の傭兵、次々と墨の兵士達が倒されていく。

「ッこれならどうだい？」

【鬼神兵】【古王】【龍】【英雄王】【銃槍兵】

目の前が歪んだ、無理な召喚だ、倒れないだけましだろう、柘榴の心配そうな声が聞こえる。だが、此処で引く訳にも行くまい、恩は返さねばならない。テオドラには少なくとも恩が有る、彼女のおかげで様々な本を読めたし、目的の情報も少しでは有るが入手できた。

「龍までッ！お前、まさか・・・牡丹か？」

「闇の福音！！何をしているのですか！攻撃の手を緩めないでください！！」

剣を持った男性の声がエヴァに飛んだ。

「・・・ま、不味いね。まさかこれ程までに強いとは」

龍でさえも、彼らの前では簡単に倒されてしまった。追い詰められた彼女、その後ろは朽ちた家の残骸とも言える壁である。彼女は筆に手を掛けようとするがその手は少年の魔法の矢で弾かれる。その矢が当った場所は肉が裂け、紅い血が流れ出す。魔法世界の医療術なら後も残らず治療できるであろうが、今の彼女にはかなり辛い物だった。

「・・・私を、殺すのかい？」

「ッ」

赤髪の青年は唇を噛む。

「戦争とはそう言うモノだよ、誰かが誰かを殺し、誰かがそれを憎み、また殺す。それの繰り返しさ」

霞んで行く視界、意識が少しずつ遠くなる。力を使い過ぎたか・・・。そう納得した牡丹は鞄だけは奪われないようにとそれを自分の身体で強く抱きしめた。こうすれば死んでも死後硬直で固く固定され、奪われないだろう。

まぁ、殺されればの話しだが。

遠くで、聞き覚えの無い声が聞こえた気がした。

11話・正義とは、と聞くお話（後書き）

「急いで軍を集めよ！！救出に向かうのじゃ！！」
「早急に準備しなさい！」
「快速戦艦じゃ！必要な物だけもて！！」
「行きますよ！！出撃！！！」

――――――――――――

暗い、暗い、暗い
《お姉ちゃ・・・ん。だい・・・じょうぶ？》
隣からは、柘榴の優しい声が聞こえた。

12話・翼との話（前書き）

会話メインです

12話・翼との話

――【黒の古書、ソレは彼女の存在自身かもしれない】――

テオドラガ駆けつけた時には既にそこには誰も居なかった、牡丹が居たと思われる場所には大量の血、そして牡丹の物と思われる紙が複数。多くの傷跡が残るその場所で彼女は涙を零した、もう少し、もう少し自分が早かったら、もう少し自分が強かったら、と。

――一方その頃、荒野では戦いに疲れた紅い翼（仮）が焚き火を囲んで休憩していた、彼らの今日の食事は野ネズミの肉入りスープである。彼らの側には倒れた顔色の悪いと思われる少女、フードには何かの術式が組み込まれているようで脱がす事が出来なかった。

「しかし、面倒な事に成りましたね」

「何がだ？詠春」

呆れた顔をしてゼクトが赤髪の青年、ナギへと質問の答えを返す。

「あのローブに縫い付けられている紋章はヘラス帝国の皇族を守る騎士や教育係に与えられるモノじゃ、そしてこの者の身なりから見ると騎士ではないだろう・・・つまり、ワシらは教育係と戦闘を行い、それを拉致して来た事に成るのじゃ」

「・・・マジかよ、良くわかんねーけど、ヤバい？」

「当たり前だろうが鳥頭、この者の正体が何にせよ、私達は帝国側に完全に目を付けられたぞ」

「ケケケッ御主人はソワソワしてるな」

「当たり前です、彼女が牡丹様である可能性は非常に高い」

【身長や体重も全く同じでしたしね】

スープに入っている玉ねぎを上手く避けて食べているエヴァに詠春の眼が光る、彼女の皿には普通より多くの玉ねぎが入っているようだ、食の戦いが此処には有った、一方ゼクトは倒れている少女の世話をしているのであるが、フードから見えている彼女の口元を見て顔を真っ赤にしていた。意外と初心である。

「・・・う・・・」

「「「「「「「「「!」」」」」」」」」

「兎・・・」

「・・・・何がだ」

「寝言の様じゃの・・・」

「食いたいのかな・・・兎」

「く・・・う・・・座薬・・・兎・・・」

理解できるモノではなかった。完全に変な言葉しか出て来ない、彼女の寝言は変人的でもあった。しかし深く冠ったフードのおかげで彼女の顔は口元しか見えず、どんな表情なのか全く解らない。

「ほれ、飯じゃぞ～、目を覚まさんか」

「そんなに簡単に起きる訳が」

「すぅ・・・す・・・誰だい、君」

チラッと覗いた黒い瞳がゼクトの顔を捕える、邪魔に思ったのかフードを普通に脱ぎ棄てた彼女は周囲を見渡すようにきょろきょろと見渡した。周囲は完全に荒野、荒れ放題である、文明の火等は今赤髪達が食事の為に囲んでいるソレしかない始末だ。
両手は縛られている、足は・・・駄目か、両方縛るとは何と言う用心深さ。

「ぼ・・・牡丹・・・牡丹！！」

「あ、やぁキティ。迎えが遅いよ」

「心配しましたよ牡丹様！」

「僕は疲れたよテル」

「ケケケッ御苦労さまってな」

「君、何時の間にか少し大きくなってない？成長した？人形なのに？」

【痩せました？】

「う～ん、実は最近少しね」

質問攻めであった。牡丹はニコニコと笑っているがその肌の色は不健康その物だった、元から白い肌は少し蒼くなっている。恐らくしっかりと栄養を摂取していなかったのだろう。帝国には多くの本が有る筈だ、食事も摂らずに本を読む彼女の姿は簡単に想像できた。エヴァが彼女のローブを少し持ち上げ、着物を少し脱がす、男性陣は慌てて目を閉じた。

「肋骨が浮き上がって来ているぞ!?何でこんな短期間に痩せたんだ!もっとしっかり栄養のあるモノを食べろ!!」

「そう言えば、最後に食べたご飯は3日前のキノコスープだけだったかな?確かにお腹が空いたね・・・」

普通の人の2倍の栄養を必要とする彼女の筈だが、どうなっているのであろう。柘榴にも彼女から栄養が提供されているので、牡丹へ行く筈の栄養は全て柘榴が吸収してしまっていたのであろう。着物を元に戻すとエヴァは彼女の手のローブを切った、それと同時に足のローブも切られる。そして目の前に差し出された野兎の肉入りスープ。詠春の力作だ。

「食えるか?」

「僕は介護が必要な老人ではないよ」

彼女が皿を掴もうとした途端、その手は空を切った。不思議そうな顔をする牡丹。

「お前、実はまだ目眩がしているだろう」

「良く解ったね、確かに元気ではないよ」

エヴァは自分のスプーンを使って彼女の口の中にそのスープを流し込む、程良く冷めたスープが彼女の喉を久しぶりに潤した。ゼクトはいまだに牡丹の顔をジー、と見ている。

「少年、僕を見ても面白くないよ。甘楽を見た方がずっと面白い」

「い、いや！そうでもないぞ！？」

「・・・小僧、牡丹は渡さんからな・・・」

その時のエヴァの声はまるで地を這う獣の様な恐ろしい声であった。牡丹は紅い翼のメンバーに簡単に自己紹介を終えて少し横に成った、手の傷は既に魔法か何かで癒えていたが、血液が足りない。幼い身故にアレ程度の出血でも危険だろう、程度と言っても結構出ていたが。

「さぁ、帰ろう牡丹。私達が此処に居る理由はもうないだろう？」

「・・・残念だけれどね、僕はまだ此処に居なければならないんだ」

「なっ何故だ！？お前をこれ以上危険な場所には置いておけない！！」

「・・・僕の敵がね、此処に居るんだよ」

一瞬であるが、彼女の瞳に狂気の色が映った。本の一瞬で有るが、彼女の瞳が血よりも美しく紅い瞳に見えた。

「安心しろよエヴァ、無敵な俺達と一緒に居れば大丈夫だろ！」

「・・・そう言う訳にも行かないよ、僕は帝国に協力している身だ」

ローブの紋章を彼に見せながら牡丹は儚く笑った。詠春は先ほど彼女がエヴァに脱がされた時から顔を赤くしている。もしかして、見たのであろうか、女性に見られるのは同性であるが故に馴れているが、男性に見られるのは好きではない。

「もう少し休んだら、僕は帝国側に引きかえすけど、エヴァはどうするんだい？僕としては一度廿楽やテルを城に置いて来て欲しいのだけれど」

「【なっ何故ですか！？】」

「君達は僕のメイドでペットだ、それに帰ったら城の中が埃だらけは嫌だろう？」

「う・・・確かにそうですね」

【牡丹様の御命であれば・・・従うのみです】

「良い子だね」

牡丹は彼女達の頭を撫でて、ほほ笑む。

「・・・解った、だが、私は帝国でも関係なくお前の所に行くからな」

「あぁ、そうしてくれるとありがたいね、さっさとこの戦いに終止符を打ちたいから」

そう言うと、牡丹は妖しく笑ったのであった。

12話・翼との話（後書き）

「妾が・・・妾のせいで・・・っ！」
「どうしたんだい？お菓子でも食べそこなったみたいな顔して」
「っ！」
「？」
「・・・（気絶）」
「えぇ！？何で！！？」

１３話・侵入のお話（前書き）

時間軸がめちゃくちゃ・・・

13話・侵入のお話

――彼女の世界は混沌よりも深い――

静かで不気味に暗い森、その中に立つ一人の影。漆黒の鎧を身に纏い目の前にある忘れ去られた墓標に祈りを捧げた、重厚な鎧のせいでその者の顔を見る事は出来ないが、鎧の形状から見て女性であろう、その腰には独特に大きな剣が装備されている。黒いマントを風に遊ばせ、その人物は静かに祈りを捧げ続けた。

――帝国、テオドラの私室。その一角には最近生き返ったなどと変な噂が流れている人物、牡丹が静かに本を読んでいた。その手にある物は【世界英雄記】、彼女の持つ筆でコレを書けば新たな戦力と成るであろう。

「・・・お主、睡眠はしっかりとれ」

「何を言っているんだい、僕は目を開けながら寝ることもできるよ」

「ソレは寝ているとは言えんよ・・・」

その分厚い本を閉じて彼女は少し伸びをした。最近は戦争の方もあまり目立った動きはなく、エヴァ達が離れた紅い翼はその活動を少し控えている。牡丹のあの言葉が効いたのであろう。

「皇女様、少しよろしいか？」

紅い髪で紅い髭を生やしたいかにも武人と言った雰囲気を漂わせる、まるで猛毒を持つサソリのようだ、血に飢えた獣の眼が牡丹を睨む、まるで面白くないと言うかの様に。

「テオドラに何の用かな?将軍殿」

「・・・お前には関係の無い話だ」

「僕は彼女の騎士であり教育係、関係は有ると思うけどね」

狂気の瞳と、野獣の瞳が交差する。方や最前線では非道とまで呼ばれるサソリのスコーピオン将軍、本名は明かさず偽名である事は確実であった。そして方や戦火の徒、多くの死を見て来た彼女の瞳は既に普通の人間のそれとは比べ物に成らないほどの観察眼が身についていた。

「殿下がお呼びです」

「む・・・?父上がか、しょうがない。どうせ牡丹を前線へと送りたいと言う話じゃろ・・・。適当に断って来る」

「僕も一緒に行った方が良いかな?」

「いや、大丈夫じゃ。では行って来る」

そう言うと彼女は将軍と共にその部屋を後にした。

――それから少しの時間が過ぎた、しかし中々帰って来ない。何かあったのかと思い牡丹が部屋のドアを開けるとそこには血まみれの兵士の屍が転がっていた。何時殺されたか、物音はしなかった、声も何も聞こえなかった筈だ。死体を観察して見ると背中に大きな切り傷が有る。まるで暗殺の様な殺し方だ。

「ッ君まで」

その死体の中には共にテオドラの騎士を務めて来た女性騎士の姿が有る、喉が切り裂かれていた。目を見開きその手は剣を強く握ったまま放そうとしていない。まるで相手を睨みつける様にして死んでいた。

「あぁ・・・、そう言う事か、嫌な時代だ。墓穴を掘ってもきりがない」

牡丹は急ぎ足で国王の下へと向かった、そこにはテオドラの父が座っている筈で有ったがそこに座っていたのは白い髪の毛の青年、魔法使いの様であった。周囲の従者は石化していてまるで石像だ、国王はその口から血を吐き倒れている。

「やあ、戦火の徒、元気かな?」

「君は・・・もしかすると噂の組織の人間かな?」

彼女の手が自然に筆に伸びる、気付かれないように静かに。

「君にも少しの間眠っていて貰うよ、今君に動かれるとこちらとしては不利に成るんだ」

彼の手には魔力が集い牡丹へと向けられる、放たれた光線は彼女の細い身体に向かって容赦なく突き進む、彼女は袖の中から数十枚の紙をばら撒いた。

【壁】

そう書かれた紙は形を変え高くそびえる防御陣が出来る。しかし白髪の青年はその程度では諦めなかった、恐るべき速さで彼女の後ろに現れたその影、その手には既に魔力が満ちている。コレでは柘榴

も間に合わない、そう考えた牡丹は目を強く瞑った、しかしその時重い剣の音が響く、白髪の青年は脇腹を押え、その手のスキマからは赤が覗く。
黒い鎧に身を包んだその騎士は、漆黒のマントをその鎧に付けて剣を構えている。

「君は・・・まさか彼が言っていた転生者・・・？」

「愚問、私を転生者等と、あんなモノと一緒にするな！」

鋭いその剣撃、黒の古書にさえ乗っていないその騎士の姿。青年の身をその剣が掠める度に赤が溢れだす。

「このままでは危険だね、いったん引かせて貰うよ」

「逃すか！」

黒の騎士が放った転移符、ソレは青年と騎士を別の場所へと転移させて言った。牡丹が呆然としていると彼女の後ろには一人の男の影が有った。その男は逆光で見えなかったがその口元は酷く醜く笑っている気がした。

「大人しくしていれば良かったモノを・・・」

首元に走る衝撃、痛みは無かったがそのまま意識は刈り取られ、彼女の視界は黒一色に染まっていた。

―――――――

「帝国が襲撃を受けたって!?そんな馬鹿な事が有るか!!」

ゼクトの大きな声が周囲を震わした、情報屋の言う事は正しかったようで魔法世界の情報誌などでは隠蔽されては居るが襲撃の真実を語っている。しかし、情報屋が言うには第三皇女が誘拐され、その騎士は全滅、国王も襲撃時に他界したとのこと。ゼクトやナギ、そして詠春の頭の中には病的に白い肌の儚い一人の少女が浮かぶ、お人好しの彼らだ、まずナギが確かめに行こうと言う。しかしそれを止めたのは最近仲間に加わったアルと言う中世的な魔法使いであった。変態ではあるが彼の言葉は正しい所が多い。

「貴方達は少し前に帝国側の関係者を拉致したでしょう、今行けば犯人扱いです」

「じゃが!」

「ソレについては俺達も協力しよう」

彼らの後ろに現れたのはガトウと言う男、彼は弟子を連れながら煙草を吸っていた。
どうやら彼の国の女王も攫われたと言うのだ、両者ともに戦争の終結を望んでいた者同士が誘拐されている。同一犯である可能性が大きい。情報屋の店の奥から出て来た筋肉男がゴキゴキと首を鳴らした。

「で、結局どうすんだよ。はっきりしねぇのは嫌いだぜ」

「・・・よし、その姫さん達とアイツを助けに行くぞ!!」

「ふふ、そう言うと思いましたよ」

「仕方の無い奴じゃのう・・・」

「じゃあ、俺は姫様達が居ると思われる場所を調べて来る」

そう言うとガトウと言う男は弟子のタカミチを彼等に任せて情報屋から出て行った。彼も戦争の終結を望んでいるのであろう。紅き翼が行動を開始しようとした時に、情報屋は嫌な笑みを浮かべながらこう言った。

「もし、御宅らがこの情報を買う気なら、良い事を教えてやるよ」

この情報屋、性格はアレだが仕事はしっかりしている。噂ではなく真実の情報を教えてくれるのだ。皆は顔を見合わせて、その情報を買う事にした。今の時代では情報がモノを言うのだ、あまりにも準備不足であると帰り打ちにあう。

「キシシッ毎度、じゃあ教えてやるよ。姫さんの他にもう一人黒髪の女が捕まっている。噂じゃ戦火の徒だとか言われていやがるが本当の事かはさっぱり判らねぇ、だが、そいつも助ける気なら急いだ方が良い」

「ッ何かあるのですか？」

詠春の顔が険しくなった。ロリコ・・・少女趣・・・紳士である彼的には放っておけないのであろう。

「闇の福音も動き出しているようだが・・・早く助けねぇと黒髪のお嬢ちゃんは死んじまう、抵抗出来ねぇ様に半殺しにされてるらし

いぜ」

――彼女は、元々身体が強くない。その内側に鬼を飼っていてもソレは変わらないだろう。鬼が出て来られないまでに痛めつけられたと言う事は、瀕死の状態かも知れない。幸い彼女の着ているローブは他者には脱がせられないように強い術式が使われているので純潔は奪われていないだろうが、危険な状態である。

「急ぐぞ！！」

「「「「「おう！！」」」」」

彼女達の冷たい身体を見ない為に、彼等は全力で捜索に入ったのであった。

13話・侵入のお話（後書き）

体が重い、殴られた部分が酷く痛む。茨のような拘束具が体に刺さり血が流れ出す。顔以外には既に多くの痣があった。昔から時間はかかるが傷跡は残った事が無いので、傷跡は消えるだろう。
あぁ、此処は寒いな・・・。彼女達は大丈夫であろうか・・・

薄暗い檻の中で、鎖の重い音がした。

１４話・救出のお話（前書き）

駄文の匂いがする。

１４話・救出のお話

――彼女は痛みに馴れている――

鎖が引っ張られる音、その音は２人の姫の耳に入っていた。新しく誰かが連れて来られたのだろうかと思い顔を上げると一人の少女が投げ込まれてきた、顔に付いた泥、痛々しい痣、口からは少しの血が流れた痕があった。不健康な程に白い肌は病的に青白くなってきていた。恐らく何かの病に侵されているのであろう。虫の息に近い彼女の着ているローブには帝国の紋章が縫い付けられていた。

「牡丹！！」

駆け寄るテオドラ、その様子を見ている一人の女性。心配そうな表情を浮かべていた、彼女を奥にあった光のたる場所へ運ぼうとしたテオドラ、彼女の身体が異常に冷たかった。

「いっ息は有るの・・・」

「だ、大丈夫なのか？そいつは」

「わ、解らぬ・・・」

荷物は持ったままだが、今の状態の彼女には使えないであろう。それに、目を開けない彼女はただ苦しそうに息を続けるだけだ。

「う・・・そこに・・・居るのは・・・てお・・・どら・・・かい？」

「！気が付いたか！・・・？何故目を開けぬ」

「血液不足でね・・・一時的に失明しているらしいんだ・・・」

テオドラが彼女に付けられていた茨の拘束具を外す、痛々しい傷跡が有るが付けているよりはマシであろう。しかし困った事に2人とも回復魔法が使えず、牡丹の出血を止める事は出来成った。太陽の光に当り、元の体温よりはまだ低いモノのそれなりに回復して来た牡丹、しかしまだ目は見えていない。一応食事は出されるようで粗末なスープが3人は支給された、一人の姫はそれに手をつけようとはしない、テオドラは自分も食べながら牡丹にもそれを食べさせている。痩せた身体が痛々しい。

「牡丹・・・だったか？妾の分も食べるか・・・？」

「嬉しい御言葉だけれど・・・そんなには食べれないかな・・・食道が細くなってしまっているらしい」

食事を終え、彼女達はふたたび沈黙した。お互い話し事も無かったし、気まずいのだ、互いに敵対する国の姫、何時かは殺し合うかもしれない立場上の者、互いの心境は把握している。

――そして、2日後に食事を終え、未だに完全回復していない筈の牡丹が声をあげる。

「・・・さて、そろそろ暴れるとするかい？」

目の見えない筈の牡丹が壁を使って無理やり立ち上がった。それを叱るテオドラの声を聞き流しながら彼女はローブの下に着た着物の袖へと手を伸ばす、そこからは紙に赤で書かれた文字が有った。

【英雄王】
ソレは、重々しい響きの言葉である。しかし、彼女は今の状態でコレを具現できるのであろうか。筆の能力とは言え彼女も少なからず力を消費している。

「な、何故赤で書かれているのじゃ？」

「牢獄の中に墨なんかないからね・・・僕の血さ」

グググッとそれは形を変えた。悪趣味な金の鎧を持つ一人の青年が姿を現す、完全に悪役と言う様に顔を歪め一つしかない扉を木端微塵に破壊する。その手に持った剣は異様な物であった。

「フハハハハッ我(オレ)をこの程度の檻で封じられると思うたか！」

「「・・・」」

「あぁ・・・気持ち悪・・・」

ソレは兵士達を次々になぎ倒し、道を進んで行く。ソレの後ろに付いて行く彼女達、テオドラともう一人の姫は牡丹に肩を貸している。牡丹はやはり無理な具現であったのかぐったりとうな垂れている。

「我の道は誰にも邪魔立て出来んのだ！！フハハハハハ！！」

そう言って無双しながら道を作っているが、彼の首は簡単に飛ばされた。それはそうだろう、牡丹の血で知識を得ただけのただの墨と同じである。本物と比べると驚くほどに弱体化している筈だ。しかも具現者の牡丹は体調が万全ではなく、瀕死である、此処まで来れただけでも奇跡的だろう。

「困りますな、こうも簡単に脱走されると」

ソレの首を刎ねたモノは静かにそう言った。紅い髪に同じく紅い顎鬚、帝国の紅いサソリの姿がそこには有ったのだ。

「お・・・お主が裏切っていたとは妾も思わんかったわ・・・」

テオドラの声が通路に響く。もう一人の姫もその眼光を鋭くした。牡丹は2人を庇うように何とか立ち上がり前に出る。

「やぁ、僕は君だと思ったよ。殺し方はね・・・」

「どうした戦火の徒、満身創痍じゃないか。そんなんで俺に勝てるのか？」

「ふん、餓鬼風情が。君より僕の方がずっと年上さ」

かすかに視力が戻ったのか、彼女はその瞳は開く。漆黒の瞳が紅の男を睨みつけた。両者は笑いながら己の得物を手にする、多くの血を吸って来た剣と、多くを描いて来た筆。一見牡丹の方が不利に見えるが、互角程度だ。牡丹は自分の身体に有る傷口に筆の先を当て、空中に紅い文字を描いた。

【虎】【狼】【鴉】

ソレはすぐに形を得て彼に襲いかかった、しかし彼はそれを簡単に一薙して消してしまう。流石は紅蠍と言われた男、馬鹿に出来ない戦闘能力だ。

「そんな攻撃では俺は倒せんぞ」

「・・・出番だよ、柘榴」

≪はぁ・・・い≫

闇の靄から現れるその黒い鬼、それを召喚すると同時に牡丹は崩れ落ちた。無理やり召喚したのであろう、柘榴は笑いながらサソリへと近づき、その剣を受けている。彼女の皮膚がそう簡単に切れる筈もなく、サソリの剣は彼女に簡単に止められてしまっている。

「スコ―ピオンも、鬼は倒せないか」

「そうでもない！」

彼が懐から取り出した物は何かの札であった、それが柘榴の身体に触れた瞬間に牡丹の身体に猛烈な痛みが走る。

「かっ・・あ・・・っ！？い、異能封じの符なんて・・・何でお前が・・・ッ」

「ふん、出何処を言う訳がないだろうが」

柘榴も弱体化し、震えながら消えて行ってしまった。異能封じ、それは確かに存在するモノだ、しかしそれが書かれているのは黒の古書ともう一つの書だけであった筈・・・。

「なる・・・ほど・・・！君の・・・後ろには・・・奴が居るのか・・・ッ！」

「・・・お別れだ、戦火の徒。悲運を怨んで死ぬんだな」

サソリの剣が彼女の身体へと振り下ろされた。
――その瞬間、サソリの剣は止められその身体には魔法の剣が突き刺さっている。

「君は・・・詠春・・・それにキティ・・・！」

「ガッ!?貴様等!!紅き翼!!」

サソリの呻き声、それと同時にエヴァの魔法の剣がさらに威力を増しサソリを内側から消滅させていく。断末魔すらも聞こえることなく、サソリは世界から蒸発した。

「牡丹!・・・何と言う痛々しい・・・こんな事をした奴らは何処だ!?私がイキテイルコトヲコウカイサセテヤル」

「怖いよ・・・キティ」

ソレに、もう死んでしまっているだろう。エヴァの手からは多くの血の匂いがした。しかし安心した為か睡魔が彼女を襲い、彼女の意識は此処で途絶えたのであった。

１４話・救出のお話（後書き）

「「・・・お前は牡丹とどう言った関係だ（じゃ）？」」

こちらでは、空気が重かった。

15話・協力のお話（前書き）

嗚呼、布団様。アナタの抱擁は恐ろしい、今日も何人がアナタの虜に成っているのか・・・。

15話・協力のお話

――【彼は多くを殺し、多くを愛した、では・・・彼女は?】――

黒い鎧の兵士が、若い女の首を引きずりながら森の中を歩く、人に忘れた祭壇には無数の首。絶望に満ちた首を杭に刺しまるで供物を捧げる様に【彼女】は祈った。赤黒く変色したその鉄の剣を地面に突き刺し、騎士が主に忠誠を誓うように膝を折った。古いその墓に刻まれた文字は読むことが出来ない程に風化している。

「・・・穢れた女の首で申し訳ありません・・・もう少しで、もう少しで手に入るのです・・・もうしばらく御耐え下さい・・・主様」

彼女は、そう言うとまるでその主を恐れる様に墓に向かって頭を下げた。

首は、年齢関係なく飾られている。まだ若い１０歳前後の少女の首、老いた老婆、成人の女性、様々だ。墓を中心として血が何かの術式を描くように溝が有り、その中に乾く事無く血が溜まっている。

「・・・死んで当然です、私は罪の無い人間は殺していない」

「・・・何故、御返事をくれないのですか。主様・・・」

一瞬ではあるが、鎧の奥から覗いたその瞳には悲しみが満ちていた。

――――――――

――――

――

「・・・黒の古書、第３８巻、１４８５ページ。６節目」

誰も居ない静かな城の空間で、彼女は静かにそう告げた。彼女の後ろには上にも横にも大きな巨大な本棚。その本棚は黒の書物で埋まっていた。その中の第１巻だけが抜けたその本棚の前で、口元しか見る事が出来ない女性が耳触りの良い声で本の一節を読み上げる。異様で異端の光景。

「隻腕の戦士と、魔眼の獣」

偽りの本棚、それが此処の名前だ。彼女の後ろにある黒の古書は全て写本である、本物は牡丹が持っているモノ一つで、此処にあるモノはただのダミーに過ぎない。
予言の力も、物語をなぞらせる力も持たぬ、黒の古書を真似ただけの本だけが静かに陳列されている。

「もう、そろそろかしら。私がこの役目を解かれるのも、彼女か彼か、どちらかが本当の此処の主に成るのも」

そう言うと、その女性はニッと笑いをもらす。まるでその時が楽しみの様に。

「待っているよ、私は君達のどちらが来るのか、楽しみにしている」

本棚の他に、何も無い空間で彼女は空と思われる白い空間を見つめた。

―――――――――――

―――

――

「ふん、何じゃ。紅き翼のアジトと聞いてついて来てみれば、ただの掘建て小屋ではないか！」

「逃亡者になに期待してんだよこのジャリはよぉ」

「何じゃと！？妾はヘラス帝国第3皇女、テオドラであるぞ！」

「はっははぁー！」

彼女の名乗りに膝を折ったのはタカミチだけであった。牡丹はロリコ・・・紳士である詠春に背負われて移動している。彼女の傷はゼクトやアルが治療の魔法を掛ける事で何とか落ち着いた、しかし抜けて落ちた血までは再生できずに貧血の状態で青い。彼女を心配するように囚われていたもう一人の姫、アリカ姫も彼女の事をチラチラと見ていた。

「だ、大丈夫ですか？」

「・・・ん、大丈夫だよ。誰かに背負われるなんて初めてだけれど・・・案外気持ちの良いモノだね・・・眠くなるよ」

「おい変態、私と交代しろ。これ以上お前に牡丹を任せたくない」

「大丈夫ですよ、私が責任を持って小屋の中のベッドまで運びますから」

爽やかな笑顔、その隣でアルも嫌に爽やかな笑みを浮かべている。エヴァはその二人をギロリと強く睨むが紳士の前では効果が無い様だ、ほくほくした顔の詠春と、記録魔法で牡丹が睡魔に襲われてい

るその顔を撮影しているアル。彼等にはこの後すぐにエヴァの鉄拳制裁が下るであろう。

「・・・そろそろ、君達にも話しておかなければならないか」

小屋に降ろされると、牡丹は全員の前で大切な話を口に出し始める。彼女なりに彼等、彼女らの事を信用したのであろう。彼女はベッドに座りながらその白い手に黒の古書を取り出した。

表紙さえもまるで漆黒の様に黒い黒の古書。それを直視すると背筋が凍るような寒気を覚えた。

「ガトウも言っていた通り、黒幕は存在する。そして、その組織には厄介な男が一人居るんだよ」

「厄介な？そんなもん俺の格闘技で一瞬だぜ、一瞬」

「そう言う訳にもいかないんだ。何せ彼が持っている書物は僕が所有する筈であったこの黒の古書の対のモノ」

彼女が黒の古書の最初のページを開くと、そこには神々しいまでの神々の戦いの事が書かれていた。その一節に在るのは2つ対に成る書物、片方は世界の真実を、片方は神の威光を示すモノらしい。

「黒の古書は、真実を暗号化して教えてくれる」

「白の古書は、あらゆる試練を乗り越えるためのモノ」

「つまり・・・どう言う事じゃ」

アリカ姫が、混乱したように頭を傾げながら聞いて来た。妙に可愛

く見えてしまったが気にしないでおこう。

「白の書物はそこら辺の大魔法使いでも大賢者でも、喉から手が出るほどに貴重なモノでね。【神話を再現できるらしい】」

神話の中では有り得ないほどの破壊力を持った魔神や、山をも簡単に砕く神が登場するように、それを再現できるのだ。しかし残念な事に牡丹はそれを読んだ事はない。契約してしまえば白の古書はその力を彼に貸すだろう。面倒な話し、不老不死すらも再現できる古書だ、アレが今こちらにあったらどんなに楽な事か。

「彼は僕が何とか出来る、でも、彼に接近できないんだよ。恐らく悪魔とかいろいろ召喚しているだろうしね」

「それは・・・本当かの？」

ゼクトが顔を青くしながら彼女に本当かどうか尋ねる、牡丹は証拠を見せる様に黒の古書の一節を指差しそれを読ませる。読み終えた瞬間にゼクトの顔は絶望に染まった。

「こんな事をされれば、この世界はどうなるのじゃ！？」

「世界の上書きは、最高神の位でないとその使用が許されない業だよ。コレを彼が本気で執行したら・・・世界は二度と光を見る事の無い０も１も無い世界をさ迷うだろうね。永遠に」

ソレは、不規則な世界。あると言えばあるし、無いと言えば無い。無限でもあり有限でもある、限界が有れば限界は無い。そう言った摩訶不思議と言える変態世界だ。人間が生きるには必要な条件を何も満たしておらず、しかし死ぬことも生きる事も出来なくなるであ

ろう。

「そこで、少しで良い。僕に協力して貰えないかな?」

彼女は、ニィッとまるで悪役の様に笑みを浮かべる。悪戯を考えた子供の様な笑みだ。

「おう、言ってみな!」

赤髪の青年が元気よく答える、恐らく先ほどまでの会話、理解していないのであろう。

「彼らの支部を全て潰すだけ。後は悪魔を倒して彼に近づければ・・・僕の勝ち。でも、途中で僕が死んだら彼の勝ち、簡単だろう?」

「・・・主は、自分の命を随分と簡単に言うのじゃな・・・」

「仕方ないよ、ソレは。僕はそう言う教育を受けて来た」

暗過ぎる彼女の過去は、既に闇ではなく暗黒なのであろう。どんなに暗い闇でも彼女は一人で生きて来た。途中には信じる者もいたと思うが、目の前で殺されたり殺したりしたのだ、心が壊れてもおかしくない。その教育を施した者達は、残酷にも彼女を神と崇めていた信者達であったのであろう。

人は、神を造りたがる。その神が自分達の言いなりになれば、世界なんて簡単なモノだ。それに気が付いた牡丹はすぐにその者達を欺き、追放世界から逃げ出したのである。彼らの話しは、また今度にしよう。

「お嬢ちゃんも俺の聞く話だと恐ろしく強いらしいじゃねぇか、違

うのか？」

「僕一人の力なんて微々たるものさ。柘榴やエヴァが居たから僕は生き残れた、ただそれだけ」

そうでなければ、追放世界で飢え死んでいるだろう。

「・・・牡丹、無理をしていないだろうな？」

エヴァが彼女を心配する。家族同然なのだ、当然のことであろう。牡丹はエヴァの差し出した手を優しく握り、ほほ笑んだ。

「僕は、君達を巻き込んでいる、それでも僕に手を貸してくれるかい・・・？」

「何を言う・・・当たり前じゃ！お主は妾の教育係であり騎士じゃからな！！」

「紅き翼が断る理由は無いぜ！」

「家族、だろう？牡丹」

「妾も、国を使ってでも協力しよう、お主は放っておけぬ」

「・・・ありがとう」

少しの音にさえも掻き消されそうな彼女の声が、静かに彼女の口から紡がれる。彼女の瞳には、うっすらと涙が溜まっていた。

15話・協力のお話（後書き）

久々に触れた人の温もりは、とても温かった。

１６話・拠点攻略？のお話（前書き）

こんがりした何か、その何かがとても気に成る私。

16話・拠点攻略？のお話

――【化物とは、何を基準にそう呼ばれるのであろう】――

何とか失った分の血液を取り戻した牡丹は紅き翼と協力する事になった。帝国は何もなかったように機能している、恐らく、テオドラの父である国王に変わり何者かが化けているのであろう。テオドラもその事を把握した。テオドラもその日は涙を流したが、仇を取ると言って余計に張り切ってしまった。しかし、コレで帝国側の協力は得る事が出来ないだろう。テオドラでも恐らく父殺しと言う事に成っている。

さて、状況的には絶望一色、しかしこちらには上等な手駒が揃っている。そう考えた牡丹はニヤリと笑みを零す。

「そうして、計画は第二段階へと進み始める」

彼女がチェスの駒を置いた場所は、今では使われていない筈の魔法研究施設だ。既に魔獣の巣に成っていると考えられており、一般人の出入りはもちろん政府もその建物には手を出そうとしない。何を研究していたのか多くの人間や亜人の骨が有るのだ。無残にこびり付いた血痕が生々しさを語る。

ガトウが調べた結果、死者が歩きまわっていると言う報告まであると言う、最悪の事態も考えられる。そこに彼の仕掛けた罠が有るのか、それとも研究の産物が残っているのかは不明だ。

「行こうか、紅き翼。今回は僕も行かねばならない」

大きなソファにエヴァ、テオドラに挟まれるように座っていた牡丹が机の上に置かれた地図を見てそう言う、その地図には既に多くの

バツ印が有った、撃破した場所にはバツ印を書いているのだ。

「駄目じゃ、お主は妾達の側から離れてはならぬ」

「そうだ、お前は私達の居ない場所で無理をする」

エヴァとテオドラは猛反対だ。彼女達からするとただ心配しているのだが、彼女達は気が付いていないのか、それが溺愛の領域に入りつつある事を。

牡丹はその二人を止める手を退けてラカンの側に立った。実はこの二人、良く共にある。それにラカンはナギと対等に戦える生きた化物だ。エヴァ達からもそれなりの信頼を得ていた。因みに、アルと詠春は警戒されている。

「ラカンと行けば、異論はないだろう？」

「お、牡丹、また俺の肩に乗る気かよ」

「駄目かい？君は大きいから景色が良いんだよ」

「牡丹、私なら何時でも良いですよ？」

「詠春は・・・うん、何か怖いから・・・」

「私でよろしければ」「君は信用しない、絶対にだ」

「わっワシも居るぞ！」

「ゼクト・・・君は僕と同じ位だろう？一緒に歩くにしても、君達の足手まといになってしまうじゃないか」

元から運動能力など皆無に近い彼女、水泳でも何とか泳げる程度だ。ラカンの大きな肩に乗りながら彼女は静かにほほ笑んだ。最近彼女の幼い動作が増えて来ている気がする、そう感じるエヴァは悔しくもあった。嫉妬に近い感情だ、家族としては、悔しいのであろう。自分の知らない彼女を簡単に見つける彼らが。

「牡丹さん！帰り道でまたぼくに気と魔力のコントロール方法を教えて下さい！」

「タカミチ少年、確かに知識だけは有るが・・・魔力のコントロールはゼクトに教えて貰いな？」

気は、何とかなるだろう。自身は出来ないがそれでも知識だけは有る。

「じゃあ、行って来るよ」

「早く帰ってこいよ」

「すぐに帰って来るのじゃぞ」

彼女達に手を振りながら、彼女と紅き翼のメンバーはチェスの駒が置かれていた森の真ん中を目指す。そこには確かにその施設が有るだろう。何が出てこようとも、此処を落とさなければならない。敵は、少ない方が良いだろう。

「おう、俺の頭の後ろで何本読んでやがる」

「ん？今から行く所には動く死体が居るかもしれないのだろう？」

「そうらしいですね。本当ですか?ガトウ」

「報告にはそう書かれていた。だが・・・俺を本当かどうかは・・・」

「何だ、そんなもんぶっ飛ばせば良いだけだろ?」

「流石、紅き翼のリーダー、常識に囚われては・・・ハッ」

「な、何だ。その笑い方・・・馬鹿にされたきがする・・・」

牡丹が読んでいる書物は、彼女がエヴァと出会ってまであまり時間が過ぎていない頃にエヴァから渡された物だ。ソレは死者甦生術とも言えるネクロマンシーの研究書である。教会の兵士からはぎ取ったらしいが、一体何故こんなモノを持っていたのであろう。

それは良いとして、死体を死体に還す方法を調べてみる。ゴーレムなら簡単だったのだが、術者が居ない場合の対処方法などやはり載ってはいなかった。

旅路は、そんなに掛らなかった。片道1日半と言った所か、拠点からはかなり離れているがこのチート傭兵達に常識を求めてはいけない。

「アレですか、気味が悪いですね・・・」

「ソレはそうだろう、公式では5年以上誰も入っていない筈の施設だ。閉鎖されたのは10年近く前だしな」

「本当に此処で間違えないのかよ」

「僕が間違えるとでも？書は全ての真理を見透かす物だよ。黒の古書はね」

鼻を突く腐敗臭、確かに死体が有るらしい。死体の匂いは他の動物も引き寄せると言う、そのおかげで施設の中は動物や魔獣の死体で溢れているのであろう。想像しただけで気持ち悪い、それに、公式には誰も入っていなくとも、トレジャーハンター等が入っている可能性もある。その場合、新しい人間や亜人の死体もある可能性が有る。

本当に、空気の悪い所である。

「・・・コレは、凄まじいね」

「気持ち悪いなぁ・・・俺、入りたくねぇ・・・」

「我儘言わないでくださいナギ、私も入りたくない・・・」

「じゃが、誰かがやらねばならぬのじゃ・・・気持ち悪い」

「オイオイ、大丈夫かよお前ら。ちょっと新鮮な空気吸って来る」

「ははっ、情けないですね。皆さん、トイレは何処でしょう？」

状況は、最悪であった。ゼクトの魔法で施設の中の空気を何とかして、中へと進む。本当に魔法とは、便利なモノだ。良くそう思うが魔法が使えないのでどうしようもない。そして、魔力を封じ込めた転移符等は物凄く高い。魔法が使えない者にとってこの世界は不便であろう。何をするにも基本魔法が必要なのだから。

「わぉ、本当に動いているよ。死体が」

「じゃが、弱いのぅ・・・」

「仕方ないよ、知性も無いし肉体も既に腐敗してミイラの様。これで強かったら僕は死ぬ」

「安心しろよ嬢ちゃん、俺様が守ってやるぜ！！」

「・・・ラカン、その言葉は愛する女性に言うモノだよ」

「何かカッコ良くねぇか？このセリフ」

「ソレは壮大な死亡フラグって言うモノだよ、僕が思うに。僕を道連れにしないでね」

迫り狂うゾンビやミイラを粉砕しながら奥へと進む、そこの光景は無残な物であった。ベッドに寝ている真新しい死体が何かに喰われた跡が有る。

「・・・まさかのボスフラグと言うモノかの？」

「違うね、コレはアレだよ・・・油断して昼寝していたらさっきの奴らに喰われたんだろう」

「何それ間抜け、ですね」

「ゾンビ娘と1対多プレイ・・・良い」

「ナギ、この変態に鉄拳制裁を死ぬ程度によろしく」

アルは、何処まで行っても変態の様だ。最も奥の施設は見事なモノで、当時は最先端であったのだろう。しかし実験体と書かれているプレートが下がった檻の中には人骨が多数有る。狂気的実験とは良く言ったモノだ。一体何の研究を・・・

【――年―月―日、人工的に■■無理であ■■・・・しかし我々が有■に事■・・・・・】

「・・・ホムンクルスでも、作ろうとしていたのかな」

そう、信じたかった。被験体が居る時点で、ソレは簡単に違うとは言えるが、まさか、人間がそこまで狂えるとも思えない。人間が人間からバケモノを造る事等、研究してどうなるのか・・・。腹の術式が、疼いた気がした。

≪おねえ・・ちゃん・・・≫

「（あぁ・・・大丈夫だよ、柘榴。僕は平気さ、僕は・・・ね）」

施設の最も奥の部屋に、ソレは置かれていた。古い紙に【結界】と書かれているだけの紙、しかしソレに触ろうとすると手が弾かれてしまう。そこで、牡丹が紅き翼に同行したのだ。

【解除】

恋呪の筆でそう書くと、その古い紙に重ねる。するとどうだろう。先ほどまで剥がれ無かったモノが簡単に剥がれてしまったではないか。

「白の古書は、恋呪の筆も無しにこんな事が出来るのか・・・全く、どれ程の力を持っているんだい・・・」

牡丹は、呆れたようにため息を吐くだけであった。

１６話・拠点攻略？のお話（後書き）

―被験体０１８番、血液投与開始―
その狭い部屋には、獣の様な悲鳴が木霊する。
実験体と成った少女は、優しい彼女の事を思い出す。
彼女の血が、自分の血と入れ替わって行く。嗚呼、幸せ。これで私と彼女は一体と成れるのだ。嬉しい、嬉しいよ■■！！私は今、貴女と１つに成っている！！嗚呼幸せ！！
―被験体、心音低下・・・失敗か
失敗？何を言っているの、私は今彼女と１つに成る事が出来たの！！邪魔しないで！！
―■■様が心を開いているこいつなら適合すると思ったのだが・・・もう良い、さっさと血を抜いて檻の中に戻しておけ。■■様はこんな奴でも友達と思っているからな・・・はっはっは。―
あ！？何をするの！！ソレは私のモノ！！貴方達の様な下品で人間でも無い下等生物が触って良いモノじゃないのよ！！？■■様の血は！！
―・・・ふん、まだ生きているか。中々に丈夫だな被験体０１８番、コレは期待できそうだ。次の実験は１週間後だ、せいぜい■■様と友達ごっこでも楽しむんだな。ー
あぁ・・・意識が遠くなる・・・、早く、早く彼女の下へと帰りたい、彼女の髪を撫でて、彼女に膝枕をしてあげて、それから、それから・・・早く、早く彼女を自由にしてあげよう。彼女は観賞用の小鳥ではない・・・待っていてくださいね、【牡丹様】

18話・謎の鎧のお話（前書き）

駄文錬成！！

読む際にはご注意ください。

18話・謎の鎧のお話

――彼女は腹の鬼を認めている――

施設からの帰り道、紅い翼＋牡丹が拠点へと帰還途中におかしなモノを見つけた。ソレの魔力は非常に大きく、深くその身に巻き付けたローブで顔も見えない。黒色のローブはボロボロで血の匂いを充満させている。体格、身長からして恐らく男性、年齢は18から23あたりだろう。身長は高い方で、ナギ以上ラカン以下と言った所だ。

牡丹はラカンの肩に乗りながらその人物の行動を観察した、最初は紅い翼も身構えたが何もしてこないと解ると先を急ぐように歩き始める。しかし牡丹には見えている、その男が後ろからゆっくり付いて来ていると言う事が。

「（・・・まさかね・・・此処まで来ても姿を現すか・・・）」

「？どうした、牡丹」

「何でも無い、気にするな」

「気持ち悪くなったら言えよ？」

「お言葉感謝する」

ヒョッコヒョッコとラカンが歩くたびに少しではあるが揺れるのだ。酔いやすい体質であったら完全にアウトであろう。人間に乗って乗り物酔い。そんな面白い事には成りたくない、先ほどから心配するようにチラチラと見て来るゼクトの視線が非常にチクチクした。

後ろからローブの男が付いて来る、ラカンの髪の毛を引っ張っては彼の歩みを止めると、後ろの男も止まる。これは何回繰り返しても同じ事であった。

「さっきから何しやがる！」

「・・・暇なんだよ」

「暇で俺の髪の毛を引っ張るな！」

「失礼、今度から抜く事にする」

「悪化してんじゃねぇか！！」

こんな馬鹿なやり取りをしている途中にも、その男は近づいて来る。何が目的で、何を求めているのか。何故追って来るのか、心当たりが多すぎて検討が付かない。もしかしたら教会の連中か、それとも吸血鬼狩りの連中か。

どちらにしても、最悪だ。しかも紅い翼のメンバーはその事に気が付いていない、戦うにしても奇襲されるか、後衛が前に成る形から戦闘に入る事に成る。

「（柘榴と墨の獣だけで相手にする事も出来ないし・・・気が付いている者も居ない・・・）」

相手の手には何時の間にか、銀色のナイフが握られていた。

男が地を蹴り、牡丹へと近づく、気が付いていないと思っているのか。ソレは間違いだ。私は知っている、知っているが抵抗の手段を持たない。そうこちらからは攻撃出来ないのだ。

【鋼鉄の処女】

無情にも、紙に書かれたモノが具現する。彼女の腕に抱かれた者は、大量の血を吐き出しながらもだえ苦しむ。その鋼鉄たる腕に抱かれて、生きていられるモノはまず少ないだろう。

「うお!?なっ何してやがる牡丹!!」

「その男の手を見てから言ってよ、それどう見ても魔道具だろう?」

「む・・・う、確かに危険な術式の様じゃな・・・」

「触れただけでステータス異常に成りそうですね」

「君は何時の時代の人間だい・・・?」

「嫌ですねぇ牡丹さん、私は私ですよ」

血まみれの男を少し見ていると、ソレは恐ろしい事に再生を開始した。鋼鉄の処女、アイアンメイデンから溢れだした血が彼の中へと戻って行く。その光景はまさに異形にして異常、既に死んだ筈の人間がまるで平気な顔をしてそこに這い出て来た。

牡丹の片目が、赤に染まる。濁ったその瞳の色、腹から聞こえる柘榴の声。間違えない、転生者だ。

「牡丹・・・!お前片目が!!」

「大丈夫だよ、この男を倒せば元に戻るから」

転生者に反応して赤に染まる眼、生まれた時からそうなのだ、自分の命の危険を教えてくれる。エヴァはコレを数回見ていて、彼女はこの現象を【感知の魔眼】等と呼んでいるが、どうも臭い名前であ

った。生まれつきなので治す事の出来ない自分でも恥ずかしい眼である。完全に不思議現象であるが、【父】の辿った道をなぞればコレが何なのか知る事が出来るだろうか。

「・・・何時から気が付いていた」

「最初から、とベタなセリフでその答えを返しておくよ」

黒の古書を開き、自分の周囲に文字の書かれた紙をばら撒く。完全交戦状態だ、紅き翼のメンバーは何が起きているか解らずに眼を白黒させていた。男はナイフを何かの力で剣へと変更する、その刃はあまりにも尖っており、何かの術式もしっかり機能しているようだ。滴る毒の液体、それに触れれば即ち死を意味するだろう。

「君をこの世界に送ったのは・・・いや、聞くまでも無いね。僕を狙ったのならば、君の依頼主は一人だ」

「・・・ほう?」

「合崎、だろう?君は白の古書に召喚された転生者、目的のモノは僕の心臓と黒の古書で間違えないかい?」

「良く御存じで話が早い、早速渡していただこうか」

男がその剣を振り上げ、彼女の細い身体へ向かいその剣を振り下ろす、それと同時にハッとしたように紅き翼のメンバーも動き出した、彼女の書いたモノが形を得る、ソレは彼女の身代わりになり墨へと戻って行った。

「どう言う事だ!?牡丹!」

「合崎・・・僕から白の古書を奪った張本人、とでも言っておこうか」

墨の獣達と紅き翼のメンバーが一人の男に苦戦している。その光景は非常に面白いモノだろう、見世物にしたら一体どれ程稼げる事か、しかしソレは是非第三者で観察したかった。自分も巻き込まれていると考えると頭が痛くなる、柘榴にこんなモノを食わせたらお腹を壊すだろうし・・・。

そんな事を考えてその手で新たな墨の獣を生み出そうとすると、自分の後ろに何か重いモノが着地した音が聞こえた。

黒の鎧に黒のマント、重厚な鎧でその顔は見る事が出来ない程のモノ。片手に大きな剣を構え殺気を男に向けて放出している。

「君・・・は・・・ッ！」

豪ッ

と、その鎧は転生者に向かい突撃する、その戦い方に戦法等は存在せず、だた腕の強さだけで先ほどまで押されていた紅き翼以上の動きを見せている。

「黒の古書に無い・・・3人目・・・」

1人目は牡丹、2人目は合崎、そして問題の3人目である。そう言っても黒の古書は真理を示すモノ。既に牡丹と合崎の情報は書き込まれている・・・しかし、この鎧の事だけは何も書き足されないのだ。調べても白紙である。まるで【別の世界線】から来ているようだ。

女性的なフォルムを持った鎧は頑丈で、毒の一滴も通さない。重い

剣が男を切り、再生を繰り返す。

「てめぇ!?誰だ!!?お前の事なんてアイツにも聞かなかったぞ!!?」

「・・・」

黙したまま、その手の赤黒く染まりつつある剣を何度も何度も男の頭に振りおろす。再生を繰り返していた男の顔が、急に形を変えてきた。まるで自分の形を忘れてしまったかの様に、ソレは崩れて来ている。

「転生者を殺す方法を・・・知っている・・・帝国に現れた鎧と同一人物・・・本当に君は何なんだい!」

その鎧は、振り上げた剣を男の頭に突き刺し、牡丹の方向へと振り向いた。その瞬間にラカンとナギが彼女の前に出る。恐らく敵かもしれないと警戒したのだろう。本能的に後衛である牡丹を守ったのだ。

「・・・お前、黒の書を持っているのか・・・」

静かな女性の声、彼女はまだ再生を繰り返す男に、腰に付けた装備品の中から取り出した銀の筒の中に入った液体を一滴垂らす。するとどうだろう、再生途中であった男は肉体が少しずつ液体に成り、断末魔も叫べずに地面へと染み込んで行った。

「だ、だったら何じゃと言う・・・?」

ゼクトの震える問い、鎧の女はそれを鼻で笑った。

「それが有って、先ほど程度の敵に苦戦する等・・・論外だな。ソレ程度で主様の道をなぞれると思っているのか？【牡丹】」

「――え！？」

ラカンの鋭い突きが彼女を捉えようと唸りを上げた、しかし彼女は既にそこにはおらず、牡丹の肩にその鎧に包まれた手を乗せた。

「私を失望させてくれるな、ソレは白の書にも勝らず劣らずの【異端の書物】だと言う事を忘れるな」

鎧の女は、そう告げるとまるで幻覚か白昼夢の様に消え失せた、後に残された紅き翼と牡丹だけがその場所に残される。ふと牡丹が自分の手に違和感を感じ、視線を落とすとそこには黒に良く映える白の栞が古書に挟まれていた。心なしか、黒の書のその闇が、深くなっている気がしたのであった。

18話・謎の鎧のお話（後書き）

「遅いのぉ・・・牡丹達」
「ふん・・・暇を潰せるものはトランプしかないぞ」
「トランプじゃと!?ソレ一枚で戦艦が斬れたり呪術の様にして扱えるアレか!」
「・・・その情報、何処から知った?」
「?牡丹が妾に読み聞かせてくれたのじゃ!!」
「（牡丹・・・お前と言う奴は・・・!）」
因みに、そのトランプ使いは吸血鬼と戦い負けている。

18話・書の眠りのお話（前書き）

駄文です。良いモノが思いつかない・・・。

18話・書の眠りのお話

――黒の古書、378ページ、15節目――

異世界の騎士、天命を忘れ己の為に死体の石垣を築き上げる。数多の死体は彼の盾と成り、多くの民は彼を恐れた。死が、死が近づいて来る、大いなる闇の衣を纏い、鈍く光る剣を携えソレは紅い河を作りながら死を振り下ろす。無慈悲たる存在、天災そのモノ、彼は多くの死を吸い続けた。その身に、呪われた自らの剣を刺されるその日までは・・・。

――――――――――

黒の古書を前にして、彼女は唸り声を上げていた。いくら調べてもコレはただの真理しか見せない。鎧の女がこの書物に挟んだ白の栞は一体何なのか。光に透かしても普通の栞である。

紅い翼のメンバーは予定通りに次々と敵の拠点を潰してくれているし、今滞在している紅き翼の拠点の中にはエヴァも居るので守りは万全であろう。牡丹が奥の部屋に閉じこもってから、既に2日が経過しようとしていた。

「挟まれていたページは【古き王】の一節・・・僕がこの本を読み始めてから何度も読み直したページ・・・でも、何故このページに栞を挟んだのか・・・」

温かい紅茶を口に含み考える、あの鎧の女、何か知っているのだろう、懐かしい様な匂いもした。だが、その身からは多くの血の匂いが同時に嗅ぎ取れた、まるで血のプールにでも入った様な濃厚な血

の匂いであった事を覚えている。
黒の古書を、指で突く。

「封印が解けて読める様になった時から何時も読んでいたけど・・・何が有ると言うのか・・・」

彼女はそう言うと片手に持っていた栞を投げる、その時である。白の栞が接触した文節に紅い何かが浮き上がって来た。まるで血の様に紅いソレは牡丹が栞で擦れば擦るほどに大きくなり、広がって行く。

「隠し文章・・・？でも、これじゃあまるで血じゃないか」

乱雑に書かれた様に浮かび上がったその文字、まるで溢れる血で書かれたようなその文字の形と色に牡丹は驚きを隠せない。試しに他のページも擦ってみたが、浮かび上がったページは此処だけであった。
古代文字で書かれたソレは、そう言った類の本を既に記憶している牡丹の前では簡単である筈だった、しかし様々な国の古代文字で書かれている為に3時間以上も書物と顔を合わせた。

「・・・【白の書は、黒の書の贋作に過ぎない】、どう言う事だい？能力的には白の古書の方が優れている筈」

次の文列に彼女の細く白いその指が這う。
刹那、少々の痛みが彼女の指に走る。指の先を切ってしまった様だった、その血は黒の書に付着し、赤が滲む。その瞬間である、血で書かれた様なその文がグニャリと歪みそのページの文が次々と変わって行く。
文字が溶け、紅に変わり、まるで何かの術式を描くように配列が変

わる。

【コレは、私が私の子孫へと残す希望の断片である、ようこそ、初めまして我が仔よ。魔力も奇跡も、神力も持たぬ君にコレを残そう。どうしても踏破できない壁や障害が現れた時、コレを使いなさい】

優しい文字、血のようだがそれは優しい光りを発している。

【原点たる黒の書、君が正しく使える事を祈る】

黒の古書のページが白から黒に染まる、今まで白かったページが全て。黒一色に成ったそのページに今度は白い文字が走る、今まで書かれていた文字とは異なり、確かに真理を告げてはいるが、その真理を告げるページは最初の方だけに成っていた。

「まさか・・・これって・・・！」

膨大な力の塊。それこそ書の形をしているが、絶望すら感じられる程の強大な力を有する剣と似ている。冷たい汗が頬を伝う。コレは、自分が、僕程度のモノが、生き物程度が所有して良いモノではない。彼女は恐る恐るその本へと手を伸ばす。

指に触れた冷たい書の感触、重くも無く軽くも無い。漆黒を思わせるその表紙とそのページ、浮かび上がった白の文字が妙に目立つ、牡丹はソレに白の栞を挟むと静かにソレを閉じた。

――これは、コレは危険すぎる――

「牡丹！！大丈夫か！！？」

先ほどの強大な力を感じてか、エヴァが恐ろしいほどの速さで部屋の扉を破壊して入って来た、彼女の後ろには何時来たのかアリカ姫

の姿までである。

「あ、あぁ大丈夫だよ」

「先ほどの力は一体・・・？」

「牡丹！本当に大丈夫なのだろうな！！？お前は眼を放すとすぐに無茶をする！！」

牡丹の身体を確かめるように触るエヴァ、傍から見れば変態的ではあるが彼女の優しさの表れなので我慢して頂きたい。先ほどまでの緊張が解けたのか、足が震え始めた。あの力の持ち主は一体誰なのか、あれほどの力を持つモノが本当に存在するのか、牡丹はいまだにその頬に冷や汗を流していた。

「あぁ、やっぱり貴女が最初に開放したのね」

眼の前に現れたのは大きな白の帽子を冠り、口元しか見る事の出来ない女性。何処かの聖者の様な厳格なドレスを身につけている。肌の見る事の出来ないその大きなドレスで、彼女は一体どこから現れたのか。最初に警戒したのはやはりと言うべきかエヴァである。

「私は名も無い書の管理者。もう元だけれどね」

クスクスと笑う女性は静かの牡丹の側に歩み寄る、女性の手は静かに牡丹の頭に乗せられる。

「――え・・・？」

懐かしい感触。随分と昔に1度だけ感じた事のあるその優しく温か

い手で、その女性は彼女の頭を撫でている。

「良く、辿り着きました。牡丹、書は貴女を歓迎します。お腹の鬼もね」

「っ！？」

意味が解らなかった。何故、彼女は自分を知っているのか、何故何故何故、疑問は尽きる事が無い。戦意が無い事に安心したのかエヴァはまだ少しの魔力を手に溜めているモノの、殺気を緩めた。アリカ姫は何が起きているのか状況が把握できずに首を傾げている。状況はまさに混沌と化していた。

「書は本当の機能の半分を解放しました。これからは貴女の役に立つでしょう」

牡丹の頭から手を放したその女性。その姿は少しずつ薄れて来ている。まるで消えて行くようだ。

「まっ待って！！君はいったい何者だい！！？」

「私ですか？私は魂の劣化ゴーレム、貴女の父である存在に作られた書庫の管理者だったモノ、そして貴女は今書庫を手に入れ、黒を解き放った」

意味が有りそうな言葉をもらす彼女、その足は既に消え、肩の部分まで消えて来ていた。その姿は儚いモノが有り、彼女の優しい頬笑みが牡丹の脳裏に焼きつく、まるで父が最後に向けてくれた笑みの様だ。

「――あの子を――止めて下さい――牡丹」

刹那、彼女の存在は世界から消え去っていた。最後の言葉の意味は、一体何なのであろうか・・・・。

――こうして、黒は解き放たれた――

18話・書の眠りのお話（後書き）

敷詰められたその死体の山の上で、その長い白の髪の毛を持つ彼女は笑っていた。その手には黒の剣、赤黒いマントが戦場の風に揺れて、国旗からは紅が滴る。そこは地獄と呼ぶにふさわしい場所であった。

19話・使ってみるお話（前書き）

微妙ですがそれなりに暗いです・・・？

19話・使ってみるお話

――【未だにソレは半分眠っているが、果たしてその威力は・・・】――

好奇心旺盛な者なら誰もが思うだろう。コレは一体どの程度の攻撃能力を持っているのだろうと。牡丹もその好奇心に勝てる筈がなかった。彼女はソレになれる為に一日中その本を開き、同時に恋呪の筆を使うと言う行動に出た。これにより精神的にはかなり鍛えられる筈だ。少し伸びて来た髪の毛を少し気にしながら今日も彼女は護衛としてタカミチ少年とエヴァを連れて森の中に入っている。

「う、薄暗い所ですね」

「怖いのか？」

馬鹿にしたようにエヴァが笑うとタカミチは強がってか「怖くありません」と牡丹の近くで拳を握った。最近会得した気の使い方を自習しているのだろう。

≪タカ・・・ミチ・・・美味しそう・・・≫

「こ、こら、駄目だよ柘榴。お腹が減ったのかい？」

≪違うよ・・・でも・・・美味しそう・・・お肉が・・・柔らかそう・・・だから≫

恐ろしい事を言う鬼である。全くこの子は何を言い出すのか、牡丹は腹の術式を撫でながら深く息を吸った。そして更に進むと開けた

場所に出る。そこ大きな湖が有り、魔獣等も居る場所だ。彼女は静かに黒の古書を開き、それに書いてある事を試そうと片手を湖に向けた。
すると、彼女には無い筈の魔力が彼女の片手に集まって行く、その量は微々たるモノから次第に大きく成って行き、最終的には彼女の身長を超えるほどの炎球が完成していた。

「呪文、唱えていないよな？」

「う、うん。僕の記憶が正しければね・・・」

「す、凄い魔力を感じます・・・！」

彼女がその手を下げると熱は周囲に散って行き、最後にはそこに炎球など無かったかの様に元の湖に戻った。片腕を上げただけでもコレだ、しっかりと此処に書いてある呪文を唱えたら、一体何が起きるのか。それをためす気には成れなかった、一度の使用でかなり疲れるのだ。恋呪の筆の様に対価が無いモノとは違うらしい、がっつり削られている。

「大丈夫ですか？」

「あぁ・・・少し疲れた程度だよ」

「当たり前だろう、柘榴を半分具現しているんだから」

≪お姉ちゃ・・・ん、無理は・・・しないでね≫

半分具現化されている柘榴は半透明とも言える状態で、周囲の人間に話しかける事が出来る。しかしこれでも牡丹の元気はしっかりと

吸収しているので鍛錬とは言え長時間は危険と言う事に変わりがない。
黒の書を閉じて、鞄の中にしまう。これ以上力を使ったら明日は一日中布団の上で過ごす事に成る。最後の戦いと思われる物も近いと言うのにあまりむちゃは出来なかった。

「お、こんな所に居たか。飯だぜ」

そこに顔を現したのはナギであった。ムカつくほど爽やかなスマイルを浮かべて牡丹を肩車する。それを黙って見過ごさないのがエヴァであるが、エヴァの声を彼は完全に無視して拠点へと戻って行く。彼の感覚からすれば牡丹は妹分なのであろう。

「今日は珍しい魚が釣れたんだぜ？」

「へぇ、ソレは興味深いね。前に君達が釣って来たのは絶滅した筈の魚竜だったし」

あの時は調理に困った物である。まぁ、最終的にはアリカ姫の提案でナギとラカンが食べる事に成っていた。お互い早食いと言いながら勝負していたが、大丈夫なのだろうか、主に胃が。

「何かな、人間見てぇな顔してて喋るんだぜ？」

「人面魚じゃないか、流石にそんなモノ食べれないよ」

「ラカンは丸焼きにして食ってたけれどな」

「彼への評価を考え直した方が良さそうだね」

しかし、何故そんな非現実である筈の光景がこうも簡単に想像できるのであろうか、物凄く不思議だ。恐らくこの不思議は黒の古書でも解らないだろう。
森から拠点へと帰ろうとしていると、急に雲行きが怪しくなった。そして、人息も居れずに大粒の雨が降り始めてしまった。これでは帰る前にずぶぬれになってしまう。牡丹は今日、薄着で着ていたので雨に濡れると物凄くまずい事になってしまう。何せ白のワンピース姿だったのだから。

「ちょうど良い所に洞穴が有るな！よって行くか」

「早くしろ！牡丹を濡らすなよ！！」

エヴァの鋭い声がナギに飛ぶ、ナギは任せろと言わんばかりにその洞窟に滑り込んだ。子供っぽいと思ってしまったが、今は彼に感謝しなければなるまい。
それにしても、此処の天候は以外と変わりやすいようだ。天気予報などと言うモノは無く、確かに天候を変える魔法は有るがそれは大魔法の域に達しているらしい。前にゼクトが見せてくれたが、凄まじい以外の言葉が出て来なかった。

「でもよ、何してたんだ？あそこはお前にとっては危険な場所だろ？」

「ん？ちょっとね、今後僕が役に立てるかどうか実験とでも言っておこうかな」

「程々にしておけよ？姫さんにまた怒られるぞ」

「テオとアリカの説教は長いからねぇ・・・」

そして最後には泣かれるのだ、本当にどうすれば良いのか解らなくなる。
天候は変わらず雨、先ほど以上に勢いを増して降り続けている。洞窟の中を少し調べてみた結果、奥の方に肉食の魔獣と人間や亜人等の大量の白骨死体が有ったが、運良くその魔獣も天寿を全うして死んでいるようだ。

「うわぁ・・・雨、止みませんね・・・」

「少し寒くなって来たね」

「牡丹、私の腕の中に入って来ても良いんだぞ？」

「キティの腕の中も落ち着きそうだけれど、体温が低いじゃないか・・・」

「俺の腕の中でも良いんだぜ？」

「貞操の危険を感じるので遠慮させていただきます、アリカが言ってた、赤髪は危ないって！！」

「あの姫さん何言ってるんだ！！？」

牡丹は彼の声を無視して持って来ていた本に眼を落した。その本のタイトルは【世界の偉人と名君、暴君シリーズ】と言うモノで、歴史の中に登場した有名な国王から英雄と言ったモノを紹介しているマイナーな書物だ。普通世界から仕入れたモノだが、彼女の持つ筆さえあればこの資料はまさに武器とも言える物に成る。

「そういやお前ら良い人とか居ないのかよ」

ナギのとんでもない一言で、牡丹とエヴァはその行動をぴたりと止めた。牡丹は本の文章を読んでいたその目を止め、エヴァは牡丹をチラチラと見て顔を赤くする。

「そそそっそんな物、誇り高く悪の魔法使いである私に居る筈がないだろうが！！」

「へぇ、じゃあ牡丹は？お前は居そうじゃないか！」

「えぇ！？い、いるんですか？！牡丹さん！！」

「え・・・その・・・良い人って・・アレだよね・・・？男性と女性の仲って言う奴だよね・・・？」

牡丹は本に普通の栞を差し込み、ナギの方をじっと見つめた。その目は少し震えている。

「あ、あぁ、そうだ」

その言葉を聞くと、彼女は少し暗い顔をした。思い返してほしい、彼女がどのような場所で育ったのか・・・。彼女の近くではどれ程の人間が死んでいるのか。

追放世界では彼女の近くに居た人間は次々と死んでいる、彼女の養母や養父、その他の者達も彼女の眼の前で死んでいった事もある。そのおかげで彼女は普通よりも冷たい性格に育ったのだが・・・。

「う・・・ん、居ないよ。僕が好いているのは顔も知らない父だけだからね」

「・・・すまなかったな」

「おや、君が謝るなんて・・・あ、晴れたよ。外」

そう言いながら洞窟の外に出た彼女、その顔は少し寂しそうであった。

――――――――――――――――

――――――――

――

【黒の古書、とあるページ】

ソレは己の心臓を喰らう事で騎士を従えるモノと成るであろう。しかしそうなると後戻りは出来ず、魂は囚われる。死ぬ事も出来ず、生と言う苦しみを永遠に味わう事に成るであろう。人の身が惜しいならその禁忌を犯す事は止めた方が良いであろう。全てに平等である死の抱擁を、受ける事が出来ないのだから・・・。

――歯車が、軋む音が聞こえた――

19話・使ってみるお話（後書き）

大量の血が流れるその墓の前で祈りを捧げる鎧の騎士、不気味な程に暗い森の中でソレは紅く光を放っていた。まるで数多の命を使い創り出す事が出来る賢者の石の様だった。贄である首を杭に刺し、鎧の女性は愛おしそうにその墓を撫でた。

「主様・・・遂にアレが目覚めました。これで歴史は・・・」

そう言う、鎧で見えない彼女の顔は笑っていた。

20話・鬼孕みとしての宿命（前書き）

はい、ドシリアスです。お気を付けて

20話・鬼孕みとしての宿命

――【書は語る、彼女の残酷な運命を】――

「さて、最後の戦いの前だ。そろそろ僕達も儀式を開始しよう」

≪・・・お姉ちゃん・・・≫

「牡丹、コレが宿命だよ。僕達の・・・ね」

具現化された柘榴、彼女の前には白の着物を着た牡丹の姿。ソレは悲しき鬼孕みの宿命。
そう、これこそが鬼孕みの最も危険である儀式だ。ソレは、どちらかがどちらかを殺し、その魂と血液を引き継ぐと言う禁忌。牡丹が小さい頃から言い聞かされてきた術式なのだ。
この術式では普通に人間が死ぬだろう。そう考えた牡丹は柘榴に1本のナイフを持たせる。これで死肉を斬り裂く事が出来るであろう。

≪や・・・だ・・・、私・・・お姉ちゃんと・・・一緒・・・≫

「・・・僕も、そうしたかったよ。でも、このままでは二人とも死ぬ、予言通りに・・」

鬼孕みは、腹の子が成長するにつれて寿命と精神を削られていく。
そうして最後にはお互い死に絶えるのだ。柘榴は牡丹の力なしでは生きて行けないし、牡丹は彼女に命を啜られて死んでしまう。
既に部屋の中には黒の古書から探しだした強力な結界が張ってあり、この部屋の中に入る事は出来ないようになっていた。

「僕の心臓を君が食べれば、君はこの世界に永遠の肉体を得るんだ。此処で切り札を失う訳にはいかないんだよ。柘榴・・・」

≪嫌だよ・・・私は・・・お姉ちゃんの・・妹だもん・・・≫

「鬼が人間を食べるなんて、普通じゃないか。そんなに悩んでどうするんだい・・・」

≪・・・お姉ちゃんが私を食べれば良い・・・≫

「人間の身体である僕が、君の膨大すぎる情報に耐えられると思うのかい？」

牡丹はその白い着物の前を肌蹴させた。彼女の腹部には赤くなった術式が浮かんでいて限界と言う事を告げている、この術式が耐えきれなくなると牡丹は死に、柘榴が飢える。術式からは血が滲み、滴っていた。

≪別の方法が・・・≫

「調べたさ、キティと暮らしたこの数百年・・・でも、無かったんだよ。黒の古書にも、他の文献にも・・・・ッ！！」

どちらかが死に、どちらかが生き残り片方の魂を継ぐ。そうしなければ、彼女達は生きている事が出来ないのだ。

≪・・・一緒・・・一緒に刺そう・・・？お姉ちゃん・・・≫

「・・・何を言っているんだい、そんな事をしたら・・・君が・・・」

≪私は・・・後悔しないよ・・・お姉ちゃんに刺されるなら・・・殺されるなら・・・≫

何処までも暗い会話、幼すぎる彼女達が負うには重すぎる宿命。共に育って来た片方を殺さねばならぬと言う世界が彼女達に落とした残酷な生の条件だ。
彼女達はお互いに、鋭いナイフを向け合った。

「柘榴、僕は死んでも君の事を忘れない」

≪お姉ちゃん・・・私・・死んでも・・・お姉ちゃんと・・・一緒・・・≫

お互いが、その白く細い身体にナイフを振り上げる。
部屋の外からは開けろと強く戸を叩く複数の音、お互いに上半身を晒した状態で、涙の滲むそのグシャグシャの顔で、まるで愛し合う姉妹が抱擁を交わすように彼女達はお互いの身を抱きしめた。
飛び散るお互いの血は彼女達の足元の術式を濡らす。深々とお互いに刺さったナイフ、その部分は生きる為に最も必要な器官である心臓。人間と鬼が、お互いを抱きしめて泣いている。

――痛い、痛いよ――
――痛いね、痛いよ――
――寒い・・・さむい――
――何で・・・ぼくたちが・・・――

――――こんな、辛い運命を背負わなければいけないの？――――――

円状に書かれた術式の中心で、血に濡れる双子の姉妹。息も絶え絶

えにお互いの顔を撫でる。鬼が彼女の頬を伝わる涙を舐め、人が彼女の髪の毛を優しく撫でた。

――退け！――

結界の解ける音が聞こえたが、術式が発動した。お互いの身体から魂が剥がされるその苦痛に表情を歪め、絶叫を上げながらも手を強く握りあう。

――さようなら――
――さようなら？――
――何時までも一緒だよ――
――幸せにね――
――忘れるんだ――
――そうすれば幸せに生きられる――
――それでも私達は一緒だよ――
――さようなら――
――またね――

――さようなら――

部屋の中が急に濃い赤色に包まれる。外では風が吹き荒れザァザァと恐ろしいほどに雨が降っているようだった。幼い二人の身体はゆっくりと倒れ、その術式に横たわる。

扉を破壊したのは、黒の鎧を着た女性であった。流れ込むようにして術式の中心に居る彼女達に近づこうとする。しかし術式の妨害により近づく事が出来ない。

絶望したように顔を青くする吸血鬼に紅い翼。２人の姫は口元を押さえる。

「間に合わなかったか・・・ッ！！」

黒の女騎士がそう告げた。倒れ込んだ姉妹の身体、鬼が少しずつ消えて行き、牡丹の身体に吸い込まれる。

――人が、鬼を吸収している――

牡丹の髪は長く伸び始め、白い肌は更に白さを増す。開かれた彼女の瞳は赤く染っていた。

彼女は正気ではない様であった。獣の様な叫び声をあげると自分の両腕を爪を立てて引っ掻く。紅い血が地面に落ちる事も気にせず、彼女はそれを繰り返した。

「やめろ！！牡丹！！！！」

エヴァの悲痛な声も届かず、彼女はその長すぎる黒髪を振り乱しまるで吸血鬼のように鋭くなった牙をむき出しにして自らの身体を引っ掻きまわす。血が流れた所から回復していくその異常な光景。彼女の血が黒の書を少しの赤に染めあげた。

「くそっ私がもう少し早く来れていればッ！！」

バンッ

と、空気の層を突き破った様な音が聞こえる。それと同時に彼女の身体が反りかえり、白い肌を晒したまま倒れ込んだ。普段は変態的であるアルと詠春、ラカンもその様子に急ぎ彼女の側へと駆け寄る。

「牡丹！！牡丹！！！」

「鬼のお嬢ちゃんは・・・ッ！」

柘榴の気配が彼女の魂と融合している。ゼクトとアルはその異様を

極める事に眼を見開いた。

「・・・人が・・・勝ったのか・・・？」

「おい！！アンタ！！！どう言う事だよ！！？知ってるんだろう！！！！？」

「あ、ぁ、知っている。彼女の異能・・・鬼孕みはその身に刻まれた術式が赤く染まった時、残酷な宿命に踊らされる・・・そして、生き残った方が死んだ方の魂を引き継ぎ・・・ソレは鬼孕みの本当の力を使いこなす者に成ると・・・聞いた・・・」

「つ、つまり牡丹が柘榴を吸収したのか！！？」

「子供なのに・・・ッ何と言う・・・ッッ」

「・・・」

パチッと牡丹が眼を開ける、紅い瞳の彼女は自分の胸に残った傷を見ると、愛おしそうにそれを撫でた。長く伸び、乱れた髪のままポロポロと涙を落とす。

「最後に・・・手加減をしたね・・・柘榴・・・」

白すぎる肌に残った残酷な傷跡、赤に染まった瞳は潤み光をともしてはいなかった。

彼女は、もう人と呼べる存在ではなくなっていた。鬼を喰らったモノとして、姉妹を殺したモノとして、彼女は罪を負う事に成るであろうしかし、彼女は嬉しそうだ。自分に残ったその傷跡が、それこそが彼女と柘榴が姉妹として共に居た時の記憶であり証拠なのだか

ら。

「そうして・・・僕は私に成る・・・ッ」

彼女の泣く声と共に、彼女を中心としていた魔法陣は弾けて砕けたのであった。

――――――

――

翌日、彼女達は見晴らしの良い場所に柘榴の墓を作る事にした。見晴らしの良い魔獣も人気も無い場所、荒らされる心配のないその土地に大きな剣を突き刺し、柘榴と名を刻む。アルのちょっとした魔法で周囲には結界を張り、花を生やす。皆が柘榴の墓に祈りを捧げる中、その一行には柘榴の姉である牡丹の姿はなかった。

――――――――――――――――

――――――

――

黒の布を身体に巻き付け、彼女は洞窟のような場所を歩いている。その足の下には大きな空洞、空洞の上を歩いているのだ。眼を閉じ、履いていたモ靴を脱ぎ、素足に成って、伸ばさ乱れた髪はそのままに。

そう、彼女は黒衣の火防女と同じ格好で、同じ場所に居るのだ。これが第二の儀式。3日間、この暗く出口の無い迷宮で過ごす事。

「・・・柘榴」

音が良く反響するその洞窟の中、彼女は静かな声を上げた。

「君は・・・本当にコレで良かったのかい・・・？」

眼を閉じたまま、彼女は暗い天井を見るように顔を上げたのであった・・・。

20話・鬼孕みとしての宿命（後書き）

暗い洞窟に入って、もうどの位経ったであろうか。空腹も感じるし異様に寒い。足元からは恐ろしい魔獣の声がする。恐怖でおかしくなりそうだ。柘榴、柘榴。無意識に口から出る彼女の名前、もう彼女は話さない。

だが、彼女はまだ此処に居るのだ。魂が融合するとは、そう言う事である。黒の布を揺らして、彼女は洞窟の中で静かに待ち続ける。

復讐の時を

――――――――――――――――――――

追記

黒衣の火防女が解らない人は、グーグル先生の画像検索で多分出てきます。お手数ですが、今の牡丹の服装は彼女の服装をご想像下さい。ありがとうございました。

主人公紹介その2（前書き）

「柘榴君の事は残念だったねぇ☆」
「・・・焼死体と斬死体、どっちが良い？」

主人公紹介その2

名前・一目橋　牡丹
性別・女
種族・鬼孕み（真）／黒衣の火防女（召喚師の上位）
容姿・伸びすぎた黒髪はそのまま、紅い瞳だが光がない。儀式の時に刺さったナイフの痕が胸元に有る。もちろん着ているモノで見る事は出来ない。髪の毛は彼女が自分で梳かさないので乱れたままに成っている。儀式が終了してから彼女はあまり目を開こうとしない。本は心の眼で読んでいると本人は語る。
服装・黒い布を身体に巻いている、そして裸足（黒衣の火防女の正装）、その他の時は普段着か着物である。
地位・賞金首であり帝国側の騎士。
一人称・私、たまに僕

筋力Ｃ　魔力Ｓ　耐久Ｃ　幸運Ｂ　敏捷Ｂ　宝具ＥＸ＋

うん、完全にキャスターレベル・・・。

耐魔力Ｄ
普通の人間と変わらない。彼女に傷を負わせる事が出来る。
黄金律Ｂ
死体から剥ぎ取ると言った外道とも言われそうな行動を取る。
召喚術Ｓ
姉妹の魂と融合した事により、柘榴が持っていた魔力を得た。
吸魔ＳＳ
世界から普通より多くの魔力を補給できる。
心の眼Ａ
眼を瞑ったまま本が読める。誰が得をするのか・・・。

人間性Ｃ
人付き合いが苦手です。
――宝具――
■の魔■ＥＸ
今はまだ解らない。
黒の古書？？
宝具としてのランクが表示できない。
偽りの書庫Ａ
様々な写本が納められている。
楔の神殿（偽）
未だ不完全ではあるが、機能はするだろう。多分。

主人公紹介その2（後書き）

「「素足で周囲を確認しながら進む・・・良い！」」
「お前ら、もう牡丹に近づくなよ」
「牡丹・・・もう大丈夫なのか・・・？」
「うん、立ち止まっていても先には進めないからね」
「・・・牡丹さんの足って、綺麗ですね。色も白いですし・・・」
「・・・タカミチ、その歳からそんな・・・」
「牡丹、もう少し身体に巻く布の量を多くしろ、危険じゃ」
「うん、私もそう思った」

21話・偽の国王（前書き）

帝国の事を忘れてた、なんてことだ！

21話・偽の国王

――彼女は今日もその目を瞑る――

長すぎる黒髪、固く閉ざされたその瞳、彼女は今現在、死んでいた国王が治めていると言われている帝国へとその身を忍ばせていた。黒の鎧を着た女性はあの後すぐにその姿を消した。牡丹は聖者の様に祈りを捧げ、その手にはナギのモノよりも長い黒の杖を持っていた。素足で有る為に歩くたびに彼女の足には土が付くが、そんな事を彼女は気にしていない。

「何だ、お前らは」

「申し訳ありませんが、我々に祈りを捧げさせていただけませんでしょうか・・・」

「・・・旅の巡礼者か、良いだろう。だが警戒はさせていただく」

「おぉ、ありがとうございます」

乱れたままの黒髪で表情は良く見えないが、うっすらと彼女が浮かべた優しい笑みに兵士は顔を少し赤くして頬を掻きながら「う、うむ」と返事を返す。深くローブを着こんだ金髪の女性がプルプルと震えているが、気にしてはいけないのであろう。

「ほら、此処だ」

「素晴らしい場所ですね」

「そうか？」

「えぇ、コレだけ広く、警戒の薄い場所はないからね」

彼女の口調が変わる、優しい笑みは悪戯を考え付いた子供の様な無邪気な物に変わっていた。兵士が眼を丸くした瞬間に後ろから筋肉が襲いかかる。鎧を着ているその首筋に刃の様な手刀が振り下ろされ、簡単に意識を狩り取られた。その場に居た自称聖者達はロープを脱ぎ棄て、各々の得物を手に取る。

「簡単に侵入出来たな、帝国も簡単に信用するんだな」

「牡丹、足を貸せ。私が綺麗にしてやろう」

「え・・？帰ったからで良くないかい？」

「・・・お前は何故靴を履かないんだ？」

「黒衣の火防女はコレが正装だからとしか言いようがないよ」

ペタペタと眼を閉じながら歩く彼女、その手に持った杖で周囲を確認しているらしい。それならば何時も本を読む時に使っている心の眼を使えば良いのではないだろうかと誰もが思うが、彼女はそれを否定している。理由は良く解らない。恐らく彼女の気まぐれであろう。柘榴の性格も混じっているようで妙に子供の様なお茶目（笑）な行動が増えた。

そのお茶目の中にはたまに人の命を奪いかねない物もあるが、そこは気にしないでおこう・・・。

「それにしても変だよな、死んだ筈の王様が治める国なんて」

ラカンが牡丹を自分の肩に乗せてそう言う。肩車だ。牡丹も最初はビクッとしたが彼の肩の上で大人しくなった、足をぷらぷらさせて遊んでいる。

「だから来たんだ。牡丹の話しだと帝国が襲撃された時に殆んどの高官は殺されていたと聞いた」

「つまり、上層部は全部偽物・・・か」

「恐ろしいですね。我々の居る場所は敵の腹の中、と言う訳ですか」

詠春の言葉に誰もが気を引き締める。そうだ、此処は既に油断できない腹の中、気を引き締める必要は十分すぎるほどに有るのだから。その中、牡丹だけが落ち付いていた。黒の杖を抱きしめて彼女はラカンにその身を任せている。彼女なりに楽なのであろう。因みにこの光景を羨ましく思ったのかタカミチは現在格闘術を真剣に学んでいる。将来は大きな男に成ると牡丹に告げているらしい。子供の嫉妬とは可愛い物である。

「クッラカンめ・・・羨ましい事を・・・ッ」

「キティ、君は何を言っているんだい・・・」

「どうですかラカン、牡丹の太股は柔らかいですか？」

「妹分の牡丹をそんな風には見てねぇよ。お前じゃねぇんだから」

完全に変態と言う雰囲気を出しているアルにあのラカンでさえ軽く引いている。ラカンは確かにオープンスケベであるが、一度決めた

事は貫き通す男で、牡丹を可愛妹分だと認識している為、そう言った行為には走らないのだ。実に頼もしい存在である。（エヴァからすれば牡丹との時間を平気で奪う存在）

「油断しないでね、此処は城の一番端、国王の部屋までは此処から正反対の階段を使わないと行けないから」

「面倒な作りだな・・・ソレ」

「私に言わないでよ、此処を作った人にお願い」

入り組んだ迷路の様なその城の中を紅き翼は進む、途中で出会った不幸な兵士には音も無く眠って頂いた。まぁ、その間何もせずにラカンの肩に乗っているだけの牡丹からすればどうでも良い光景だ。城の中を進むにつれて見た事も無い部屋が有る事に気が付いた、以前はただの物置き部屋だった筈だがその扉は豪華に装飾されて居て、中から術式が掛けられている。

「・・・成程ね」

牡丹はその身に宿った魔力を使い扉の仕掛けを弄る。その間黒の杖の先には青白い炎が灯っていたが、あれは一体何なのか。触れても熱くなさそうであった。

「さて、私は此処で少しする事が有る。君達は私が渡した地図の通りに国王の部屋へ行き、その偽物の国王を懲らしめて来てね。帰りに此処に立ち寄ってもらえるとうれしいな？」

「別に良いですが・・護衛が必要でしょう？」

「大丈夫だよ、一般兵たちはこの部屋の存在にも気が付いていないさ」

彼女はそう言うと難無くその扉を開けてしまった。その中は光に満ちており様子を覗う事が出来ない。牡丹は戸惑う事無くその中へと入って行った。

―――――――

―――――

――

その中は何もない様な白い空間であった。その中に黒の彼女が入ると完全に異物であろう。しかし彼女は平気な顔でその部屋の中へと足を踏み入れる。眼は瞑ったままだが恐らく心の眼を使っているのであろう。

「・・・やぁ牡丹、こんな所にようこそ」

「やっぱりね、君だったか。合崎」

彼女の前で宙に浮きながら書物を手にしているのは白い青年であった。牡丹は彼の名前を合崎と呼ぶ、お互い知っているようだ。彼の手の中にはまさしく白の古書、その古書は眩しいほどに力を放ちこの白の空間で何かを作っているかの様であった。

「随分と髪型を変えたね」

「君の白の書ではそんな事も解らなかったのかい？」

「俺の持つ白の古書は君の黒の書とは違うんでね」

彼が指を鳴らすと周囲にミイラの様な兵士が現れた、その手には剣と楯を持っている。

「わざわざ来てくれたんだ、盛大に歓迎してあげるよ。お礼は心臓で結構だよ」

「私の心臓はそう安くはないんでね、お断りさせていただくよ」

牡丹がその手を振ると何処からともなく数枚の紙が落ちた、その紙には既に文字が書かれている。

【騎士】【騎士】【騎士】【騎士】【騎士】

鎧を着た兵士たちが、彼女を守るように戦列を組む。知能が少しではあるが与えられているのでその騎士達は連携攻撃で次々とミイラを灰へと還して行く。

「へぇ、奇妙な術を使うね君は。おっと失礼、今も昔もか、鬼の子は元気かな?」

「君にそう簡単に情報を教える訳がないだろう?」

「はは、確かに、ね!」

彼の手から鋭い氷の槍が飛んできた。その槍は彼女の片手を貫くが、彼女は全く反応を示さない。氷の槍を抜くとその傷跡は完全に回復してしまった。

「痛いじゃないか」

「・・・人を捨てたか」

「ふぅん、君はまだ人なんだね。ずっと昔に家畜レベルにまで落ちたかと思っていたのに」

「失礼だね、君は。殺したい程に」

「ハッ白の古書を私から奪った君が何を言うのかな?元・教育係の合崎さん?」

そう、彼は牡丹の教育係であったのだ。最初は清々しいほどに初心で牡丹と眼も合わせる事が出来なかった青年であったが、白の古書を見た瞬間に眼の色を変え牡丹を殴り倒し異世界へと逃走したのである。
そして、今では黒の古書も狙っているのだ。

「また懐かしい話を。あの頃は俺も若かったよ」

「そうだね、今じゃお互い化物だ」

「俺はまだヒトだ。お前とは違う、そんな気色悪いモノと一緒にするな・・・」

「知らないようだね、教えてあげよう。白の古書と契約を終えたモノは寿命を奪われ、不死の化物に成るんだよ?」

「白の古書で自分を人間に戻す事なんて簡単だったさ。寿命すらも自由自在だ、素晴らしいね」

お互い、嫌な笑みを浮かべながらの会話だ、空間を殺気が満たしている。ミイラはすべて倒され、墨の騎士もただの墨へと還って行っ

た。二人だけの白い空間、書を持った二人だけが此処に残されている。

「さて、俺は此処で御暇させていただくよ。俺の作った国王も倒されちゃったしね」

「死体操作に肉体の改造か。君が好きそうな気持ち悪いやり方だ。悪趣味な死体愛好家め」

「いずれ、君の死体も俺のコレクションに入れてあげるよ。死ぬ時には綺麗に死んでね。もちろん俺が綺麗に殺してあげても良いんだよ？」

「私は絶対の君の魂を地獄の最下層まで落としてあげるよ。獄卒との楽しい追いかけっこが待ち遠しいかい？」

白の世界が、少しずつ薄れて行く。牡丹は彼を眼を開いて見る事はなかった。それが不快だったのか合崎は眉間に皺をよせて彼女を見下したような言葉を残して消える。それを聞いても牡丹は表情を崩さなかった。まるで相手にしていないように彼女は涼しい顔でその部屋から出る。

「罵声なんて、もうずっと昔に慣れているよ」

ドアを開けたそこには丁度良く紅い翼が迎えに来ていた。その後ろには見覚えのある兵士達。誤解は解けたようだ。襲撃犯扱いが遂に終わりを迎え、いよいよ最後の戦いへと彼等は、彼女等は進み始める。

「覚悟すると良いよ合崎、私が今日、何故黒の古書を使わなかった

のかを知るが良い・・・」

その中で一人、牡丹だけが狂気に満ちた紅い瞳をうっすらと開けたのであった。

21話・偽の国王（後書き）

「アンバサー」
「・・・牡丹、それ何の呪文だ？」
「祈りの言葉的なモノだよ、詳しくは知らない」
「お前、ほんと自由だよな」
「ナギよりは自由じゃないよ、君前アリカのお風呂覗こうとしていたじゃないか」
「なっ何故それを！？」
「ふふ、私の眼に死角はないのさ！」
「何時も閉じているのにか？」
「（ショボーン・・・）」

22話・書VS書（前書き）

お察しの通り、デモンズソウルのネタが好きです

22話・書VS書

――不死者は祈る――

彼女は密度を更に高め肌の露出を抑えた黒の布を巻き、黒の杖を持ち最後の敵の拠点の方向を向いていた、その目はやはり閉じている。彼女の側にはエヴァが控えており、彼女にサインを貰おうとしているアリアドネ―の女騎士達をその鋭い眼光で睨んでいた。

流石最後の拠点と言うだけあってか、空を半分埋め尽くすほどの悪魔が宙を飛び、黒く染まっている。それ以外には何もなく、ただ静かな空気が流れていた。

――我らが旅路に祝福を――

牡丹の静かな声がその場に響く。

「・・・で、貴女は何を狙っているんだい、鎧の騎士さん？」

全身を鎧で固めた彼女の姿もその場に有った。黒のマントが風に靡き、濃厚な血の香りを充満させる。まるで地獄のそこから呼び出された悪魔のようだ。

「私は昨日、私の主とやっと交信出来たんだ。私への御命令は、お前をサポートしろ、との事」

「正体不明の人が・・・ね、信用できないな」

「そうですか、ならば自己紹介を」

彼女は顔部分を覆っていたその分厚い鎧を脱ぎ取る。整った女性の顔が姿を現した。短く切り揃えられた黒髪に金色の獣の様な眼、尖

った耳は完全に人外の物である。

「私は【元】首抜け、デュラハンが騎士の一人。主様に拾われ絶対の忠誠を誓った死の妖精騎士団第3番、デュラ」

「騎士団・・・？何処の騎士団に所属していたのです？」

「詠春殿、ソレはお話しできない。私は既にその国の騎士を辞めた身ですが・・・」

「・・・まさか、君の所属していた騎士団ってアレじゃないよね・・・？」

「牡丹・・・いえ、牡丹様。それもお話しできません」

「・・・さて、自己紹介も終わったようだし、行くか？ナギ！」

ラカンの大きな声が静かな味方の拠点の中に響き渡る。

「おう・・・行くぜ！！」

ナギの号令と共に最後の戦いの火蓋が切って落とされる。魔法使い達が次々と敵の中へとつっ込んで行き、魔法や剣で周囲を血に染めて行った。

その中、空中を歩いている一人の少女、そう、牡丹だ。彼女は素足のまま空中を媒介も使わずに歩いている。そして、彼女の足の下には巨大な魔法陣が展開されていた。彼女が何かを唱えると戦場に眩いばかりの光が走る。その光に触れた悪魔がまるで夏場のアイスの様に溶けて行った。味方には一切被害がない。

「お、恐ろしいな。牡丹お嬢ちゃん・・・」

「儀式だったか・・・？あの後から急に魔法使えるようになったしな・・・」

≪ばッ馬鹿な！？あんなのが居るなんて聞いてねぇぞ！！？≫

それは戦いとは呼べない物だ、言うなれば一方的な惨殺、一対多数で何故此処まで出来るのかと言わんばかりに彼女は味方であるアリアドネ―などの騎士を無視して強力な魔術を放って行く。空はまるで夕暮れの様に紅く染まり悪魔達が羽をもがれて落ちて行く。

――古き王都を守りし堅牢なる騎士よ、私の声に答えなさい――

魔法陣から、巨大な鋼の騎士が降臨する、ソレは大きな盾を構え、片手も同じく巨大な槍を構えていた。ソレの名前は【塔の騎士】、人間ではなく、その身は既に朽ちている。そう、その鎧も昔は王に忠誠を誓っていたのだ。今では悪魔（デーモン）と成っているが、牡丹の声により一時的に召喚された。

――眠れぬ不死のモノよ、我が目前の有象無象に・・・死を――

鎧が吠える、一薙、二薙、敵が眼に見えて減って行った。盾で潰し、槍で突き、払い、踏み、その姿は味方から見ても恐ろしい物である。

「牡丹！！掴まれ！！俺がお前を送り届けてやる！！」

ナギがその手で牡丹を掴み、彼女と仲間を引き連れて敵の本拠地の中心へと進んで行く。その途中にソレは居た。全身を白に包んだ白の青年、人形の様な青年が二人並ぶ。書を持った居青年が牡丹の姿

を見ると嬉しそうに笑みを浮かべた。嬉しそうにその口元を醜く歪めて書を開く。
同じく牡丹もその手に持った杖を構えて、静かに地面に足を付けた。

「やぁ紅い翼、それに鎧の君も、良く来たね。僕らも随分数を減らされてしまった、ここらで決着をつけようじゃないか」

「・・・お前は、私が殺さねばならぬ。私には多くの血が必要なのだよ・・・主様の下へと帰る為に・・・！！」

デュラがそう言うと腰の剣を構えた。

「牡丹、俺達は邪魔の入らない場所で戦おうか」

「そうだね、そちらの方が私にとっても良い」

合崎がその白の書をなぞると、周囲の光景が一変した。そこはまるで何処かの屋敷の様であり、和風の武家屋敷である。お互いその武家屋敷の庭に咲く蒼い桜の木の下で対立していた。

「懐かしいだろう？君の居た屋敷を再現してあげたよ」

「忌々しいね、此処はもう見たくなかったのに」

「そう言ってあげるなよ、彼女も待っていたのだから」

青年が、いや、男が指を鳴らすと後ろの障子が静かに開きそこから一人の少女が現れる。その体には痛々しい傷が数多くある。身体に刻まれた番号は０１８番、そう、牡丹が最も親しかった彼女がそこには居た。

被験体０１８番、合崎が白の古書を盗み逃げ出した時に殺された、彼女の姿が。

「ッこの外道め・・・死体を自分の中に保管していたのか・・・っ！！」

「はは、美しいだろう？あの光の無い瞳、君を必死に守ろうとして居たその身体。そして俺が刻んだナイフの傷跡」

「・・・」

自慢するように彼女の服を捲る男、少女の傷だらけの肌が曝け出される。表情を変えないその少女、既に死んでいるのであるから当然か。この空間に居るが故に動いているのであろう、彼に操られて・・・。可哀そうに。

牡丹が、ゆっくりとその目を開く。血の様に紅く光の無い瞳が一人の男を捉える。男はその目を見ると震えるその体を自分の腕で抱きしめた。

「そう、俺の愛したその瞳。君は美しい！！俺は待っていたんだ！！君が完全体と成るその時は！！だから俺は君の儀式をこの書によって速めた！！」

「おかしいと思えば・・・やはり君か・・・更に許せないな。私と・・・僕と柘榴を離れ離れにして・・・ッ君だけは・・・っお前だけはぶち殺してあげるよッ！！」

黒の杖を彼女は床に垂直に立たせる、するとその杖は倒れる事無くそのまま立ち続けた。彼女が黒の古書のページを広げると白の古書が反応するように淡い光りを発する。

――俺に従いし幾千の命よ、その命を散らし我が下へと集え――

彼の声に反応するように重厚な西洋の鎧を着た者たちが彼の前に集う、白の古書の中でも最も簡単で、初歩的な召喚術式であった。コレは牡丹を完全に挑発している、鬼孕みは召喚術に長けている、それに自ら勝負を挑んだのだ、自信過剰にも程が有る。神にでも成ったつもりであろうか。

牡丹は、静かに術式を唱え始めた。

――契約され引き裂かれ3人に成った騎士王よ――

――母に毒を盛られた暴君よ――

――その魂、再び此処に写し出そう――

――従いたまえ、世界を繋ぎとめる者に――

巨大な魔術式がその世界に展開される。現れた4人の女騎士。

――青いドレスの様な甲冑に身を包んだモノ――

――黒い重厚な鎧を身に纏ったモノ――

――白く薄い鎧を身に付けたモノ――

――紅いドレスを身に付けたモノ――

「Ｆａｔｅの世界線からの召喚・・・だと!?お前にそんな事は出来なかった筈!!」

「君が速めた儀式は成功してね、柘榴と僕は力を得たんだよ。知らないのかい?あの儀式は生き残った者の力を飛躍的に高めるんだ」

騎士達が戦いを繰り広げる。しかし流石は騎士王と言うべきか、その手に持った聖剣で次々と敵を薙ぎ倒す。紅い暴君も湾曲した珍しく大きな剣を使い、舞うように敵を両断していった。

「【白の書よ！！今こそ契約に従いその真価を目覚めさせたまえ！！】」

「《黒の古書よ、長き因縁に終止符を打つべくその力を使え》」

白の古書は男の身長ほども有る剣へと姿を変えた。

一方、黒の書は紅く無気味な光を発していた。まるで男と白の古書を嘲笑うように。

――書と書の戦いは、今此処に幕を開けたのだ――

22話・書VS書（後書き）

杯は満たされた。多くの血と死体を積み込んだそのカロンの船は出港する。まさに今、彼等彼女等の命を狩るように。

23話・大戦決着（前書き）

すーぱーグダグダタイム！

23話・大戦決着

――準備は整った。復讐を始めよう――

男の持つ白の古書は槍と成り、牡丹の細いその身を狙う。流石は白の書だ、形を変えることも御手のモノと言う訳か。牡丹はその光景を鋭い紅眼で睨みつけていた。口元には残酷な笑みを浮かべている、まるで狂気にその身を委ねているかのように。彼の放つ飛ぶ斬撃が牡丹に迫り来る、その斬撃を召喚されていた一人の黒い騎士王が掻き消した。

「セイバーオルタ・・・邪魔をするなッ!!」

「愚民如きが私の契約者に手を上げるとは、面白い、しかし実に不快だ」

黒の鎧を着た王、セイバーオルタ。彼女が持った黒の聖剣が風を切り裂き男の身を狙うが、その槍は白の古書だ、そう簡単に反撃を許さなかった。

突然の突風がオルタの身体を吹き飛ばし、障子を破壊する。その様子を光の無い目で見ている被験体０１８番、白の騎士王が彼女を見ると顔を歪めた。

「このような少女まで・・・許せません。此処で斬らせていただきます!!」

豪ッ!

と、彼女を中心に魔力が渦巻く、男は今、４対１の状態で、かの英雄達を相手にして平気な顔で生きているのだ。恐ろしい限りである。

牡丹は手に持った黒を宙に浮かべた。その黒は紅い光りを放ち世界を変えて行く。最高神にしか許されない筈の【世界の上書き】である。再び周囲の様子が一変し、古びた神殿の様な場所に変わる。

「ッ固有結界!?」

「おぉ、力がみなぎって来るぞ!奏者よ!!」

紅いドレスの暴君がその大きな剣を振り回し元気に成る。その他の騎士王達も動きが良くなっている。此処は牡丹の持つ固有結界の中だ、彼女が、黒衣の火防女として得た固有結界。いや、固有世界と言うべきであろうか。此処の名前は【楔の神殿】様々な世界の楔とも言える場所である。

「・・ぼた・・・さ・・・」

――肉体を失ったソウル達よ――

――その輝きを彼女らに貸し与えたまえ――

――世界を、繋ぐ者たちへ――

紡がれたその言葉に反応したかのように神殿の様々な所から光輝く球体が騎士達の中へと入って行く、入るにつれて彼女達の動きが良くなった。白は冷や汗を流す、少しずつ、確実に追い詰めていた。しかし、白が一方的な防戦に成る事等あり得なかった。彼がその槍を剣へと変えて魔力を流すと眩い光りが発せられる。

「コレは・・・エクスカリバー!?」

青い騎士王が驚きを隠せないように声をあげた。

それが白の力、神代の宝具の再現も簡単にこなしてしまった。牡丹

はそれを見ると唱える呪文を変える、再び黒が紅く光り始めた。その光は赤黒く、まるで血の様な色だ。
次の瞬間、騎士達を葬る一筋の光が走った。その光は禍々しく黒に染まっている。決して神聖なモノとは言えないであろう。その光と同時に、牡丹も術式を完成させる。

――伝承のモノよ――
――王に仕えたモノよ――
――私の声を聞いたのならば――
――その長い眠りから眼を覚ませ――

彼女が直立していた黒の杖に触れると彼女の手からは紅い血が流れソレは床を主に染めた。その血に反応した魔法陣が何かを召喚し始める。その召喚は４人以上に大きいモノで、人ではない物を召喚しようとしているのは明確であった。

「神でも召喚する気か!?馬鹿め!!こちらの方が先にお前の心臓を貫ける!!」

鋭い長剣が彼女の心臓部分を狙った、真っ直ぐ彼女にそれは近づき、その黒い布ごと斬り裂こうとしたその時である。眼に光のない０１８番が彼を掴み、恐ろしい速さで男の顔面を殴ったのだ。その衝撃で彼女の腕は破損し、骨などが見えてしまっている。筋肉も完全に千切れていた。

「ッ貴様!!人形の分際でぇ!!!」

「ぼ・・タン・・さまは・・・ッ鑑賞用の・・・小鳥じゃ・・・ない・・・ッ」

彼が指を鳴らすと、彼女の身体は少しずつ崩壊を開始した。彼が原型を留めさせていたのだから魔力の供給が無くなれば彼女は崩れてしまう。
その様子を牡丹は眼を見開きながら見ていた。ただ、見ているだけしかできなかった。

「・・・牡丹・・・様」

懐かしい笑みと同時に彼女は消える。彼女の腕から滴っていたその血が魔法陣の発動を速め、ソレはこの世界に具現しようとしていた。男はその人型に剣を構え突撃する。完全に形を得る前に殺そうと考えたのだ。彼の剣がもう少しでその人型に届くと言う所で、その剣は書の形へと戻ってしまった。

「なっ・・・に・・・・!?」

彼の眼に映ったのは飾りの全くないメイド服と、死者の様に青白い肌である。白い手袋をした彼女は牡丹へと振り向き、一礼した。

「私を呼び出すとは・・・驚きですよ召喚者」

「・・・・」

「私の名はメアリー、ただのメイドでございます」

綺麗にお辞儀をする彼女、戦場には似合わないその姿。しかし彼女からは恐ろしいほどに力が溢れていた。まるでいくつもの魂が複合されて作られているかのようだ。

「何だ、それがお前の希望か!?」

男の手には巨大な炎塊が浮いていた。その炎塊を2人の方へと投げて来る、凄まじいその熱量は小さな太陽と言っても良いだろう、薄暗い神殿の中を赤に染めてソレは近づいて来る。
――しかし、ソレはすぐに掻き消された。
メイドはそこから一歩も動いては居ない。ただ男の方向を凍りつきそうな瞳で睨んでいるだけだ。牡丹も唖然としていた。何せ距離が離れている筈の彼の腕がバラバラに切れて落ちたのだから。

「ぐっがぁぁぁあああっ！！？！！？」

「そんな書物程度で、こちらの黒は穢れませんよ？」

彼女が手を胸の前に出すと、ヒュンッと空気を斬る音がした。少しの光を反射するそれはとても細く、恐ろしく速い。糸であった。何かの加工が施されているのであろうが、それを操る彼女の技術も恐ろしいモノだ。

「何故だ！！何故再生できない！！？」

「おや、そこまで愚かでしたか・・・魂ごと削ってしまえば、再生等出来ないのですよ？」

大量の血が神殿の石造りの床を濡らす、男は泣き叫びながら白の書に触れようとしたがそれを細い糸が阻む。ギリリッと締め上げる音が聞こえ、男の絶叫が高い天井に良く響く。

「白の書等、所詮贋作に過ぎません」

無情にも、彼女は白の書を細切れにしてしまう。男の絶望じみた顔

が青く染まる、そして牡丹の方を見ると信じられないような事を言いだした。

「たったすけて」

「助けてくれ牡丹!!」

「助けろ!!牡丹!!」

牡丹はその様子を静かに見ているだけであった。彼女は開いていたその紅い瞳を瞑る。ソレはもう彼と戦う意思がない事を現している。戦うのではない。もうコイツにはうんざりだ。大事な者を2人も失い、そして自分は助けろと言う。ふざけろ、お前は2人も、いや、きっとそれ以上を殺めたんだろう?だったら償うべきだ。

そう言うように牡丹は黒の書をしまい、黒の杖をその手に持った。

「・・・好きにしなさい」

「えぇ、そのつもりです」

後ろから聞こえる断末魔、楽しそうなメイドの笑い声、何かを貪り喰う音。千切れて跳ぶ音や血が付着する音。牡丹が魔力の供給を切ると、その世界は簡単にも閉ざされた。

――――――――――――――――

――――――――

――

外に出ると、絶望的な状況であった。ラカンは両腕がなく、その他の者も息は絶え絶えだ。

「ふぅん、コレが造物主（ライフメーカー）ねぇ・・・」

牡丹がそれを嘲るように笑った。

【・・・小娘、何がおかしい？】

「おかしいさ、面白過ぎるにも程が有るよ！君一人の絶望程度で世界を滅ぼそうとしているのだろう？コレを笑わずに何と言うのか！！」

「・・・ッ牡丹！」

ナギの苦しそうな声が聞こえる。それを無視して彼等の前に立ち彼女は黒の杖を構えた。造物主の放った魔法が彼女の身体に迫るが、彼女は動こうとも何かを唱えようともしない。その強力な魔力の波動は彼女の身体に触れる事なく消えてしまった。その事に皆眼を丸くしている。

【貴様、何をした？】

「白は消え、黒は己の真価と主人を知ったのさ。解らないかい？」

――白の書物が消えること自体が、この本を覚醒に至らせる条件だったのさ――

「君達は疲れているだろう？後は僕が何とかしてあげるよ」

そう言うと彼女は黒の杖を地面に打ち付けた。するとどうだろう、その周辺の地面が黒に染まり魔法陣が現れたではないか。杖の先には青白く光る魂の炎、彼女は聞いたことも無い様な呪文を口から発

する。
世界を終わらせる儀式が、少しずつ収縮していく。そして結界のスキマからとんでもないモノがその顔を覗かせた。牡丹が召喚した【塔の騎士】だ。その手に持った血濡れの槍を造物主へと投げつける。厚い魔法障壁を突き破り恐ろしい威力を残して造物主に向かう。

「いくら最初の魔法使いとは言え、神を犯す槍にその身を貫かれれば痛いじゃすまないだろう？」

彼女は儀式の中断魔法と属性追加魔法を同時に発動したのだ、その為か少し疲れた顔をしている。
造物主の身体をその巨大な槍が貫通した。悶え苦しむ造物主、その姿は少しずつ消えて行く。それと同時に牡丹も意識を失いかける。
今日は力を使い過ぎた。いくら柘榴の魂と融合したとは言え、身体は以前の病弱のままである。
薄れゆくその意識の中、誰かが去る音と消える音が聞こえた。

23話・大戦決着（後書き）

私は闇へと再びこの身を隠そう。その日は遠からず訪れる。
黒の鎧の騎士は、静かにその場を後にした。誰にも見られないように・・・。

２４話・多くの魂へ救済の光を（前書き）

牡丹ちゃんが、ついに！

２４話・多くの魂へ救済の光を

――英雄とは、大量殺人者への称号である――

造物主は倒れ、世界には希望の光が戻り戦争は終結した筈であった。しかしその中で彼等紅き翼の活躍を良しとしない者達も居る。そして彼等には丁度良い事に翼の希望を折るのには十分すぎる手札が有った。彼等はすぐに行動を開始したのであった。

最後の戦いから数日後、魔法世界のニュースにはとんでもないモノが流れていた。

【英雄の一人、黒衣の火防女を危険人物とし牢へと連行するとのこと、そしてアリカ姫の死刑】

この二つのニュースは紅き翼を震え上がらせるのには十分すぎた。確かにアリカは国を落としたとされている、しかしソレは彼女の引き起こした事ではない、それに牡丹が牢へ幽閉される理由も完全におかしかった。

「おい！コレはどう言う事だ！！」

金髪の女性、エヴァンジェリンが魔法世界の役所に怒鳴りこんでいた。彼女は世界を救った英雄の一人としてその名は一般に公開されなかったが賞金首ではなくなったのだ。

「ですから、貴女の賞金は取り消しですが、牡丹さんの賞金は消えていません」

「おかしいじゃないか！牡丹のおかげで最後の戦いのこちらへの被害は軽微で済んだと言うのに！！」

「私に言われましても・・・上層部が決定した事なのでそのかで詳しくは・・・」

「クソッ！！」

強く机を叩くエヴァ。

その頃再建された王国でもそのニュースは流れていた。牡丹の姿はそこには無い、彼女は力を使い過ぎたので病院に入っているのだ。

テオドラはその令状を見るとそれを持って来た者にすぐに抗議した。しかしこちらも解らないと言う。直ぐに従者に支度させ牡丹の病室へと向かうが、既にその場に彼女の姿はなく空のベッドだけが残されていた。

――何処かの地下牢――

湿気の強いその空間に鎖で繋がれた一人の少女が居た、その目を瞑り長すぎる黒髪を乱して、その身につけているモノは黒衣ではなく病院の白い簡単な物であった。足を抱えて座っている彼女、時折その足をプラプラと動かしてまるで退屈を潰して言うかのようだ。

その牢にもう一人の女性が放り込まれてきた、拘束服の様な者に身を包んでもなおその王族としての雰囲気を失わないアリカであった。

彼女は何も言わずにその牢の中を見渡すと、その場にいた彼女、牡丹に眼を見開いた。

「お主、何故此処に居るのだ？お前は幽閉だろった筈だろう？此処は・・・」

「そうさ、此処は死刑囚が入る筈の牢だよ。そこに私が居ると言う事は・・・解るね？」

本を読まずにそこに座っているだけの牡丹は意外と珍しい、彼女は退屈そうだった。それこそ退屈に殺されてしまうと言わんばかりに退屈オーラを放出している。

「表向きでは確かに幽閉さ。でも裏側では君と一緒に世界を滅ぼそうとした魔女として死刑だよ」

「・・・何故じゃ！お前は英雄の筈だろう！！？」

「英雄なんてそんなものさ、人を超えたモノを倒した力、それを普通の人間が恐れない筈がないじゃないか」

ケラケラと笑うと再び彼女は足を動かし始めた。とてつもなく退屈そうな彼女、彼女の持っていた杖も本も無いのでとても退屈なのは間違えないだろう。

それから数日、静かに死刑の時を待つだけの二人、この牢ではまともな食事は出されなかった。二人に出された物は腐ったモノか残飯程度である。それも量は恐ろしく少なかった。アリカはもちろんソレに手は付けないし、牡丹は食への興味が薄いので出されても反応しなかった。

「しかし馬鹿だねぇ、その上層部と言うやつも」

「・・・」

「私をソレ程度で殺せる筈がないんだよ？傑作だね」

「・・・でも、痛いのであろう？」

「痛覚は普通の人間と同じさ、一定以上の痛覚を感じると痛覚神経

への伝達がカットされるとかだったら良かったのだけれど」

牡丹は牢に付いた鉄格子をその白すぎる手で撫でていた、少し錆びているがそれなりに頑丈である。それは彼女が握ると、ギシィッと鈍い音を響かせる。アリカがその方向を見てみると彼女の手の中に有った鉄格子は変形していた。そして彼女はその変形した鉄格子を牢からむしり取る。

「よし、そろそろ出ようか。こんな所に居ても息が詰まる」

「だ、大丈夫なのか？」

「黒の古書が無くても召喚術や魔法は使えるよ。大分威力は下がるけれどね」

黒の書を持っていれば完全チートに成れるのだが、アレがなければただの魔法使いである。まぁ、柘榴の力も受け継いでいるのでそう簡単にはやられないと思うが・・・柘榴の持っていた力を使うと異様に身体が疲れるのは仕方のない事であろう。

「だッ脱獄ブゥア！？」

顔が変形するほどの力で殴られた兵士が壁にめり込むその光景は恐ろしくも異様にシュールだ。牡丹はその鉄格子を媒介代わりに魔法を唱え始める。その魔法で創り出された物は５つの光球である。ソレは牡丹の周囲を飛び回りまるで２人を守るように動いている。牡丹は眼を閉じたままで歩き始めた。途中で守っていた兵士にその光の玉は光の矢を放ち難無くノックアウトしていった。途中の兵士達の休憩所で取り上げられていた牡丹の荷物を回収し、逃げるように走って行く。

「中々に入り組んでいるねっ」

「だ、大丈夫か?!」

「そう言われッてもッ体力的な問題ッ」

肩で息をしながら彼女はアリカと共に走り続ける、しかし体力の無い牡丹からすればただの拷問に近い。しばらく走ると室内に巨大な穴が空いていた。その穴は下が見えないほどに深く、濃い血の匂いがした。

「ここは・・・」

「はっ・・はっ・・昔の、死刑場みたい・・だね」

心なしか青い牡丹がソレに答えた、こびり付いた爪の痕が生々しく残っている。恐らく下には何かが有るのであろう。死体もそのままかもしれない。もしかすると魔獣が今も生きているのかも・・・。そんな嫌な想像が徐々に大きくなる。その時、後ろで大きな音が聞こえた。

巨大な体に何本もの釘などが刺され、顔には鋼鉄の仮面を固定されている巨漢が居た。その手には血がこびり付いた巨大な金槌。

「死刑人の登場かい・・・っ」

「ど、どうする!?」

アリカを庇うように牡丹が前に出る。牡丹の手には黒の杖、青い炎が揺らめいた。彼女はその杖に魔力を送り簡単な魔力の刃を造り出

した。巨漢は彼女達にその巨大な金槌を振りかぶり思いっきり叩き落としてきた。それを刃で受けるが流石に無理が有ったのか弾き飛ばされてしまう。
そんな巨漢と戦っていると部屋の外が騒がしくなった。聞きなれた声が数人分聞こえて来る。これは良いと牡丹は考え扉が空く瞬間にアリカを鬼の力を使いその方向に投げ飛ばした。
扉が開き、現れたのはナギだった、彼の持つその反射神経で何とかアリカを横抱き状態でキャッチする事が出来た。

「「なっ何をする（のじゃ）！！」」

「出来るだけ遠くに逃げて、私にも限界が有るんだ」

「何を言っているんだ！！お前も来るんだよ！！」

「ソレは無理かもしれない、こいつ等は私を逃がす気がないみたいだしね」

いつの間にか処刑人が増えている。しかもその手に持っている武器は様々だ。これ程の量を相手にするのは今の彼女では無理だと考えたナギはすぐにラカン達を呼ぼうとしたが、部屋の中から結界が張られ追い出されてしまった。

「おい！？牡丹！！」

「ははっキティとテオによろしくね、すぐには帰れなさそうだよ」

刹那、彼女の周囲には黒い靄が集まり始める。まるで彼女が柘榴を召喚しようとしているかのような光景だった。しかし柘榴はもういない、一体何をしようとしているのか。

そう考えると、彼女に異変が起きた。閉じた目を開き杖を浮かせ彼女は何かを唱えてその手から血を流す。

【古の魔獣】

彼女の中にその黒い靄は吸い込まれていく。漆黒をも思わせるその長い黒髪が風に靡き、周囲の死刑人がその光景に動きを止める。牡丹の背中からはえた3対の翼、長い髪の毛は地面につくほど伸びていた。紅いその目で死刑人を見下すように笑う、彼女は、彼女ではなくなっているかのように残酷な笑みを浮かべていた。

≪【書には、誰も逆らえぬのです。そう、運命さえも】≫

ナギは彼女のその姿を見た瞬間に恐ろしさを感じた。背筋が凍るような感触だ、殺意が身体を刺す。一瞬、彼女の髪の色が白銀に重なったが、アレは何であったのか。彼は仲間と共に疾風の如くその街から逃げ出す。その街では民が全員その美しい光りに眼を奪われていた。

「なっ何が起こるのじゃ？」

「見るな！姫さん！！」

ソレは唐突であった。牢屋の有った場所に巨大な羽が出現し、その羽根に多くの白いモノが向かっていく。その白いモノは人間達から出ていた。心臓部分からその大きな羽へと飛び立って行く。まるで・・・

「魂・・・」

そう、次々と人間達の魂がその羽根に吸い込まれていく。ソレはまるで神話に語られる審判の日の様であった。その光を極力見ないように紅き翼は進み、その光景を忘れる事にしたのだ。
彼等は英雄と言っても人間である。一人の大切な人を救う為ならば、犠牲は付き物だったのだ。

――誰も居なくなった街――
そこは、上位の魔法使い達の決定により地図から抹消されている。
その光を遠くで見たモノは言うであろう。黒衣の怒りを買ったのだ、と。当然の結末だ、と。

その死んだ街の中で、一人の黒衣の少女が眼を瞑り歩いていた。その手には黒の杖。

――魂を現世に繋ぎとめる者へ、救済の光を――

黒く伸び地面についた髪をそのままに、壊れた神像へと祈りを捧げる少女だけがその場所で動いていた。

２４話・多くの魂へ救済の光を（後書き）

白い綿帽子を冠った一人の女性は静かにお茶を飲んでいた。その前には透明な水晶が置かれている。濃い蒼と白を基本とした着物を着て、彼女は静かに黒の少女を見ている。
その目は、慈悲と慈愛、そして狂気に満ちていた。

25話・捕まる（前書き）

シリアス（笑）です。駄文

25話・捕まる

――命知らずのモノ――

都市と共に彼女が姿を消してから数年がたった。紅き翼は解散し既に伝説の存在と成っている。魔法世界では彼等を英雄として崇める者まで居る、変な宗教団体とかが出て来そうで恐ろしい限りだった。しかし帝国の英雄である黒衣の火防女だけが現在も発見できずに懸命の捜索が続けられている。その指揮の先頭に立つのは第3皇女テオドラ、自分の騎士を探すのは自分の役目だと言い張り一個大隊を使って捜索を続けている。

――その頃、人が居なくなった街には既に魔獣等が住みつき危険な場所と成っていた、数年であるがもう建物にコケ等が生えて神秘的ともいえる光景に成っている。

そこにはとある噂が有った、黒の布を全身に巻き付けた長い杖の少女。その少女と共に壊れた神の像に祈りをささげれば幸運が訪れると言う。あるモノは不治の病を治してもらった、や、見えなかった筈の眼が見えるようになった。等の報告も多かった。しかし、彼女を自分の物にしようとするモノは多く、トレジャーハンターがその街には良く入り込んでいた。

そして、檻の中でその少女は眼を覚ます。小さな檻ではあるが対人用で魔法封じ等の術式が施されていた。

「お目覚めかな？奇跡の巫女殿」

「最悪の眼覚めだね」

「眼を開かねえのか？」

「それは私の気分次第かな」

「チッ傷モノかよ。・・・だが、コイツは高く売れるぜ」

男の獣の様な眼が彼女の身体を舐めまわすように見る。白い肌に黒い髪の毛、整った顔に痩せたその体。貴族にも魔法賞にも高く売れるだろう。

「かの英雄様が、この程度かよ」

男の相棒と思える男が残念そうに牡丹を見た。牡丹は檻の中で膝を抱えている。

「もうちっと肉付きが良い方が高く売れねぇか？」

「馬鹿、そっちの方がぜって―高く売れるんだよ」

彼女は全く抵抗しない。それどころか今の状況を少し楽しんでいるかのようだ。乱れた髪を少し弄りながら心の眼を使って週の様子を見る。街からは既に離れてしまったようだ。

――それから少しすると、人の声が聞こえる場所に来た。檻には布と認識妨害魔法が掛けられていて中からも外からも様子をうかがう事が出来ない。ジャリンと重いモノの音、恐らく金貨だろう。コレで正式に奴隷と言う訳か、と彼女はその細い体を抱きしめた。

檻からだされ最初に首輪を付けられた。爆発物の匂いがする、恐らく無理に外すとボカンッだろう。まあ、痛いだけなので外せるのだが此処で外してしまっても面白くない。

少し、歪んで来ている彼女は残酷な笑みを浮かべる。彼女がどうやら何かの大会に出されるようだった、その為に武装は全て返却されたし、コードネームが奇跡の巫女である事も聞かされた。

「アンタが新入りね、眼が見えないようだけれど、頑張んな！」

亜人の女性がバンバンと背中を叩いて来た。恐らく同じ奴隷選手なのだろう。牡丹はいかにも聖者の様に挨拶すると壁の近くに立っていた、先ほどの奴隷が呼ばれ、少ししてから自分が呼ばれる。全く良い趣味だと思いながら舞台の上に彼女はその姿を現した。元々黒衣の火防女は帝国のトップシークレットであり、彼女はその姿を良く隠していたので周囲の人間は彼女が英雄だと気が付くモノは居ない。悲しい事だ、そう思うと彼女はその感情とは真逆に笑っている。

会場は想像通り騒がしかった、少し前の試合の熱狂が残っているらしい。その中に立つのは黒衣の火防女ともう一人の選手、その選手がどう見ても見覚えが有った、筋肉に大きすぎるその体、主に筋肉が眼に付いた。

そう、紅き翼の英雄であるラカンだった。彼は観客にその腕を上げると大きく振る、アピールは完璧であった、そして対戦相手を見ると彼はビシッと石の様に固まってしまった。

「あ・・・？牡丹か・・？」

「やぁ、流石に君は解ったか」

「挑戦者だと思っていたが・・・その首輪は・・・」

「奴隷として売られて見たのさ、どうだい？」

「どうだいじゃねぇよ！俺達がどんだけ心配したと思ってる！！」

「いや、居心地がよくてぇ・・・」

彼女にとっては人攫いの行為も街までの通行手段にしてしまったらしい。首輪を弄りながら彼女は不敵な笑みを浮かべた。まるで挑発するかのような笑みだ。妖艶でもある。

「で、どうするんだい？やるかい？？」

「馬鹿野郎、さっさと帝国に連れて帰るぞ」

「おや、ソレは良い案だよ、此処はアルコール臭くて嫌だしね」

ケラケラと笑う彼女、ラカンは審判に手を振りこの試合を無効にするように訴える。そしてラカンを含んだ審判たちの話し合いの結果、ラカンはイライラした顔で戻ってきた。

「畜生！あいつ等俺の話しを聞こうともしねぇ！！」

「ま、私は奴隷な訳だししょうがないよ」

奴隷とか魔法世界でも消耗品なのである。何かの病気になればさっさとポイされるし、主人の命令には逆らえない。それが決まりだからだ。いくら英雄の言葉でもそこまでは変えられなかったようだ。

「しゃあない、暴れるか」

「私の首がポーンてなるけどね、別に良いよ」

「・・・そのタイプの首輪かよ・・・・・」

「アハッでも私には黒の古書が有るのさ」

彼女が首輪に手を掛ける。するとその首輪は大きな爆音と共に彼女の姿を包み込む。観客席がざわめくがその中で牡丹は平然と立っていた。黒の古書による攻撃無効と言うチート術式を使ったのだ。彼女の肌には傷一つなかった。観客席がざわめく、奴隷が脱走したと主催者側がすぐさま兵士を下へと降ろした。
兵士達の束縛魔法を彼女は平気な顔で跳ね返す。これが黒の書の力の一部だ。

「も、もしかしてあいつは・・・黒衣の火防女じゃないか!?」

観客がざわめきを増す。
あの英雄が此処に?等と言う言葉が飛び、自らの魔法に身を縛られた魔法使い達が眼を見開く、あまりにも黒衣の彼女が神々しく見えたのだ。その黒は太陽光を浴びても霞む事なく、当たり前のようにそこに立っている。

「ラカン、久々に君の肩に乗りたいな。そのまま私を連れて行ってくれよ」

「・・・（ニヤリ）おう、任せとけ」

黒の書物を持ったチート魔法使いと存在自体がチートな筋肉が共にその競技場から姿を消した。ラカン曰く眼に見えないスピードで走っただけらしい。お前は本当に人間かと聞きたくなったが、恐らく既に人間ではないだろうと考える牡丹であった。

25話・捕まる（後書き）

「平気で音速をこえるモノを人間とは呼ばない」
「お前の眼の前に居るじゃないか」
「・・・＝、君は人間じゃない」
「じゃあ、俺は何だ？」
「・・・筋肉？」
「！？」

28話・任務です（前書き）

これは・・・駄目だ・・・

28話・任務です

――任務は唐突に――

帝国に帰りテオドラの説教を3時間、兵士達の愚痴を2時間聞かされた。その8日後、何を思ったのか外の世界の学園から牡丹当てに依頼が来ていた、学園は英雄が一人いれば正しい魔法使いを育成できると考えたらしい、それにしても極秘扱いである牡丹の情報を何処で知ったのであろうか。

もちろんテオドラはソレに反対、烈火の如く良かった彼女はその依頼状を破り捨てようとしたが、その文字には見覚えが有った。かつて紅き翼で修行していた魔法が使えない少年、タカミチである。

「テオ、コレは彼からの依頼の様だよ？」

「し、しかしお前を一人にすると無茶を」

「大丈夫だよ、私はそう簡単に死なないだろう？」

「・・・奴隷として格闘技場居たのはどう言う事だ？」

「ナッナンノコトカナー？」

「・・・しかし、お前は良い意味でも悪い意味でも己を貫き通す・・・仕方ないが、許可しよう。それに、あの学園にはエヴァの奴も居た筈じゃしな」

テオドラはため息をつきながら彼女の意見を通す事にした。彼女も少しずつ大人へと成長しているのであろう。父の死後からとても逞

しくなっている。

「帝国のゲートを使いが良い、妾達皇族が普通世界へ行く為に作られた物じゃからそれなりに安全じゃろう」

「うん、そうするよ。失敗して身体が半分しかなくなるとかは嫌だからね」

実際にゲートの失敗はたまにある。まだ完全に人間を転送できる技術は存在していないのであろう。黒の古書には恐らく記してあるだろうが、あれは人間の進歩の5手先を行く事も簡単なので進歩を逆に無くしてしまう可能性が有る。

城の中に有った石造りのゲートを通るとそこは緑に囲まれた遺跡の中であった。恐らく外の世界であろう、この緑の多さと周囲に生えている木々や草、その他の特徴から考えると此処はどうやら日本の様であった。

此処で、彼女の現在の恰好を考えてみよう。黒衣の火防女、裸足であり黒い布を全身に巻き付けている。・・・・はっきり言って完全にコスプレ中の人間だ。

「・・・位置的には樹海だけれど・・・こんな建物が有ったのか・・・」

緑に覆われたその古びた遺跡、少しの機械じみた場所もあるが、今の牡丹にはそれが何なのか解らなかった。とりあえず持って来た鞄の中から他の服に着替える事にする。この格好で歩くほど肝は座っていない。

彼女が取り出した物は以前来ていたボーイッシュ風の服であった。露出も少ないし、その上に着物の羽織を着てしまえば完全に普通の人?だ。と、彼女は考えている。眼を瞑りながら彼女は森の外へと

何なく進んで行った。

「・・・で、君は何で樹海の中から出て来たんだい？」

「いや、私は・・その・・・眼が見えなくて」

「誰かに連れて来られたのかい？」

現在、ここら辺を巡回している警察に捕まってしまった。保護者など居ないので誰の名前を出せばいいのか判らない。どうすれば良いのか解らず彼女がキョドキョドしていると書の中に聞き覚えのない低い声が聞こえて来た。眼鏡を掛けたその男性は牡丹の保護者であると説明すると心配したぞと抱きしめて来た。

「もう御子さんの眼を放さないでくださいね」

「本当にありがとうございました」

そう言うとその男性と車に乗り込む。

「牡丹さん、何やっているんですか・・・」

「あぁ、タカミチか。短期で成長したねぇ」

男性らしさが増した彼を見ていると何年あの誰も居なくなった都市に居たのであろうと考えてしまう。確かにあそこは過ごしやすかったし、食糧の心配などもしなくて良かった。魔法の進歩とは便利な物である。使えるように有ってそう思った。

「お久しぶりですね、牡丹さん。心配しましたよ」

「迷惑を掛けたね、悪かった」

牡丹は飲みモノをタカミチに買い与えられ、両手でそれを持っている。と、言うよりタカミチは車の免許を持っていたのかと少し不思議に成っていた。

「君、何時の間に免許を取ったのさ?」

「お恥ずかしい話、何時か大事な人を助手席に乗せる事が夢なんですよ」

「へぇ、その女性は幸せモノだろうねぇ」

「・・・」

「?何だい??その視線は」

「いえ、何でも有りませんよ・・・貴女が鈍いのは昔からですもんね」

煙草を咥えながら彼は少し寂しそうに窓の外を見た。牡丹は相変わらずその瞳を閉じていた、裸足なのはしょうがないのでそのままだ。タカミチが拭いてくれたのであるが、鼻息が荒かった気がする。牡丹は昔からの知り合いであるタカミチに気を許したのか静かに意識を遠のけたのであった。

―――――――――

―――

――

少し立った。心の眼で周囲の様子を見てみるとそこは既に街中であった。疲れていたのか仮眠のつもりが既に夜である。タカミチの車が駐車場と思われる場所に駐車される、タカミチの言う通りに彼女が進んで行くと簡単な部屋に入った。少ししか生活感がないが、この部屋の主は明らかであった。

「もう少し掃除しようよ、タカミチ」

「あ、あはは・・・」

埃が少し溜まっている。タカミチは布団を整えて彼女にこの布団で寝るようにと告げる。

「まあ、そう言わなくても良いじゃないか。丁度良い事に私の身体は小さい、君も布団で寝ればいい」

「・・・え?その・・・大丈夫ですか?僕も一応男な訳ですが・・・」

「君に私が襲えるかい?」

「・・・確かに」

「君は純情だからね」

牡丹はそう言うとお風呂を借りるよと言い、その部屋に付いているシャワー室へと向かった。都市に居る時は水浴びだったので温かい水は帝国ぶりだ、そんなに日は立っていない、しかし水浴びよりは確実に気持ち良いだろう。それにしてもタカミチは髪の毛を石鹸で

洗っているのだろうか、石鹸しかなかった。まあ、魔法で簡単に髪の毛は綺麗に出来るので気にしないが。
風呂を上がると少し本を読んだ、その後にタカミチが風呂からあがって来る事を確認すると先に横に成っていると言うと布団の中に潜り込む。

「ほ、本当に一緒に寝るんですか・・・」

「？私は気にしないよ、君よりもずっと年上だしね」

そう言えばそうである、今の状態では確かにタカミチを牡丹が見上げているが、年齢的には牡丹の方が化物並に上である。タカミチが顔を赤くしていると言うのに彼女はすぐさま眠りに付いた。

――翌日――
眼の下にクマを作ったタカミチと一緒に学園長室へと向かっている。扉を開けると面倒な程に広い空間に学園長が座っている、その長い頭には何が詰まっているのか、牡丹の興味はそこに釘つけに成った。タカミチ達の会話に加わり、一体何が目的で呼んだのか、基本何をすればいいのかを聞く事にした。
悪魔退治と国語の教師らしい。面倒だった。そしてその場所に乱入して来たのは見覚えのある金髪の幼女である。彼女は牡丹に抱きつくと興奮したように話を開始した。
――
結局、その依頼を受ける事にした。住む家はエヴァが自分の家に既に部屋が出来てると聞いたのでそこに行く事にした。タカミチの残念そうな顔は何だったのであろうか。

【「牡丹様！！」】

部屋の中に入るとそこには従者の二人が泣きそうな顔で抱きついて来た。甘楽とテルである。そして牡丹の部屋と言うのは物凄い人形の数であった、同時に恐ろしいほど本が有った。この人形、牡丹の身長並に大きいのだが、何故だろうか。恐らくエヴァが作ったり、テルが作ったりしたのであろうか。

「「【・・・人形に紛れ込まないで！】」」

「え？この為に有るんじゃないの？」

28話・任務です（後書き）

兎の人形を抱えた少女が歩く、彼女の手足の関節は球体関節だがその顔は普通の人間と変わらなかった。その少女は静かなカフェの中に入って行く。変わった者たちが集う、そのカフェへ。

27話・先生授業です（前書き）

何時の時代もこんなものです。

27話・先生授業です

――お人形の家――

牡丹が学園に来た次の日の早朝

「で、ナギに何て言う面倒な呪文を掛けられているんだい・・・」

「う・・・その・・・アイツと酒飲んだ後にケンカして・・・」

「キティも良い歳なんだから少し位落ち着きを持ってほしいよ」

黒の古書を使い彼女に掛った呪文を解除していく。簡単な作業だが物凄い滅茶苦茶な術式だったので手っ取り早く牡丹の血を媒介にして術式を正当化、その後解除を行った。しかし、面倒だった、いきなりリストカットしたので甘楽とテルに怒られたが、エヴァの魔力は回復したようだ。

「しかし、学園に悪魔が侵入ねぇ・・・あの校長仕事サボってるのかな？」

「どう言う事だ？」

「アレでも一応魔法使いだ、対魔の結界を張ったりすれば完全に悪魔はカットできる。それにそちらの方が意地魔力も何もかもが安上がりで済む筈だ」

何か、何か別の理由が有るのであろうか。例えるなら学園の中に悪魔か龍か、そう言った類の物を飼っていて餌が必要になるのか、裏では魔法使いを育成しているのか。考えられる可能性は異常に存在

した。
そんな牡丹の考えを知ってか知らずか、彼女達は牡丹に似合う服を探していた。エヴァが取り出したのは黒を基調としたゴスロリである、流石にソレは一般生活で着る事が出来ないとテルが却下。その次に取り出したのは甘楽であった、妙に露出が多い着物で、胸元ががっぽりと空いている。何処かの遊女の様な形である。もちろん2人に却下された。
その次にテルが提案した服は白を基調としたワンピースだ、確かにワンピースと聞けばその通りであるが正面にプリントで海の中と意味が解らない言葉が書かれている。外国人が買って行くTシャツの様であったので却下された。

「で、三人で考えた結果何故この服に成ったのかな？」

まるでどこぞのお姫様の様なゆったりした服に身を包んだ牡丹、髪の毛は梳かされぼさぼさではなくなっていた。確かに飾りが少し多いが、普通の服としても・・・まあ、ファッションだと思えば行けるレベルである。

「お邪魔しますよ・・・て、牡丹さん、貴女は何と言う服を」

「私のチョイスではないからね、先に言っておくよ・・・。で、どうしたんだい？」

「どうしたんだい・・・て、今日牡丹さんの授業が普通に有るじゃないですか、初めてでしょうから迎えに来たんですよ」

「ソレはすまなかったね、所で・・・」

タカミチの肩幅を見て牡丹は子供の様な笑みを零した。

「肩車は出来るかい？」

「もちろん！」

「・・・タカミチィ・・・」

エヴァの地を這う様な声が聞こえた気がするが、華麗に無視しよう。
最近彼女の自分に対する接し方が家族からランクアップして来ている気がするので。
ラカンほどではないが彼の肩幅も大きく、牡丹一人を肩車する程度には十分であった。元々エヴァと同じくらいか、もう少し大きい程度である牡丹、十分だ。

「おぉ、高いね」

眼を瞑りながらではあるが、しっかりと周囲は見えているようだ。

「では、行きましょうか」

「牡丹様、お弁当を」

【スタンガンも此処に】

「うん、お弁当だけで十分だよ、その気持ちだけ貰っておくよ廿楽」

【・・・御気をつけて】

その言葉を聞きながら彼女はタカミチの肩に乗って学校まで向かう。
女子が多いと思っていたらソレもその筈だ。此処は女子学校らしい。

しかもエレベーター式の。何処の私立だと牡丹は考えながらタカミチの髪の毛をがっしりと掴んでいた、何故か嬉しそうなタカミチ、その顔は少しにやけている。

彼女の担当するクラスは中学クラスの３－C組だ。まず驚いた事は教室の中の荒れ具合である。中学生で此処まで荒れるかと言うほどに荒れていた。確かにこれ位の歳の女の子ならこれ位が普通なのかもしれないが、他人の笑い声は獣の唸り声と同じとも言う不快この上なかった。

「じゃ、じゃあみんな。新しい先生の紹介を」「何それマジ受けるんですけどーｗｗ」

「い、いや、だから」「昨日のアレ見た―？マジやばくねェｗｗ」

「・・・」「あ？タカミチ公が何か言ってたぁ？」

「知らねーｗｗ」

はっきり言って、これほどまでとは思っていなかった。学校には通った事がないが、まさかコレがその学校と言うモノなのであろうか、面倒な程に五月蠅く、化粧の匂いまでする。牡丹はため息を落とすと、落ちお込んでいるタカミチの肩に手を置いた。

「ぼ、牡丹さん・・・」

「君も教鞭をとるにはもう少し威厳が有った方が良いらしいね」

牡丹はそう言うとさっさと教壇に向かい歩いて行ってしまった。

「黙れ」

「ッ！」

教室に嫌な静けさが流れる。牡丹の聞き取りやすい静かな声だけがこの教室を支配していた。

「チャイムは、もう鳴ったよね？」

「は、はい・・・」

「それなのに、君達は何をやっているのかな」

まるで身体を押しつぶされるような威圧感に彼女達は全員牡丹を震えながら見つめている。机に乗っかっていたモノ、手に持っていたモノをそのままに彼女達は静かに話しを聞いていた。

「私は君達の国語の授業を受け持つ事に成った。異論が有るモノは学園長まで、そしてもし私の授業の時、今の状態が続いていたら・・・」

――君達の単位（イノチ）を貰う――

彼女は普通に単位と言ったのであるが、彼女らにとっては命を聞こえていた。まるで絶対に争ってはいけない物を見つけてしまったように彼女達は牡丹の言う事を良く聞いた、牡丹が言えばすぐさまその行動を実行するまるで兵隊の様な集団に早変わりだ。

「これは・・・流石牡丹さんと言っても良いんですか・・・？」

「脅しもたまには有効手段さ」

薄くその赤い目を開きながらクスクス笑う彼女、先ほどの行為は脅しだったらしい。しかし彼女の登場だけでよくもまあ変わったモノだ。化粧の匂いも雑談も聞こえないクラスに成った。既に不気味なレベルだ。

そして、彼女がそのクラスを請け負って3日が過ぎた頃、クラスの生徒の髪の色は全員黒、制服も標準、小テストでは上位に食い込むほどのクラスに成っていた。

「「【どうしてそうなった?】」」

「私の教え方に変な所はないと思ったのだけれど・・・」

27話・先生授業です（後書き）

「先生、お早うございます」
「牡丹様、お早うございます」
「今日はどのような授業か楽しみです」
「よろしい、では皆、授業を始めようか」
その光景は、他の先生方が見ても異様だった。

28話・お披露目（前書き）

つかれたー

28話・お披露目

――偽善者の集い――

魔帆良学園では最近噂に成っている事が有る、それは満月の真夜中に黒い布を巻き付けた様な服の女性が長い杖を持ち歩いていると言うモノだ、聞くだけではそれほど噂に成る事でも無いが、彼女が出現したその夜の月は血の如く紅く染まると言う、その月は見ているモノを狂わせ、精神を犯されると言う噂だ。
眼を閉じている牡丹にもその話は届いていた、彼女は以外と生徒から慕われているのだ。彼女を心配した生徒達が夜道は大丈夫か、一人で帰っているのではないか、何かあったら大声で叫んで下さいと言われている。

「（そうか、誰かに見られていたか）」

正式な魔法先生との顔合わせた今日の夜だが、何故か悪魔退治の依頼が学校側から来るのだ。それなりの給料なので参加しているが、それ以外であったら無視を決め込もうと考えている。

「牡丹さん・・・」

「あぁ、まさか予想外だよ。何せ2時過ぎだったからね、あの時間に生徒が居るなんて・・・」

「此処の生徒は変わり種が多いので、気を付けて下さいよ・・・」

月が紅く染まる現象は深く言えば彼女と関係ないのだが、噂の一人歩きと言った所だ。まあ、そう深く考えなくても良いだろう、人体

に被害のある物でも無いし、影響が有るモノをこのように人の多い場所で使うのは面倒だ。

「今日の夜・・・か」

黒衣の火防女に此処の魔法先生はどう言った反応をするだろうか、街を滅ぼしながらも英雄と言われた罪人、闇の福音と共に暮らし、死体を漁る悪鬼とも言われたこの身が。それを考えると面白くなってきた。所詮は人間、自分で評価する事が出来ないモノの集まりである。

正義と言う旗の下に集いし悪、黒の書にはその様に書かれている者たちも居るのだ。

「（所詮は大量殺人者、か）」

固く閉ざされたその瞳で、静かなその口元で、残酷な笑みを浮かべる彼女であった。

――――――――――――

――――

――

時刻は深夜１２時を過ぎた頃、世界樹広場には既に人払いの札が貼られている。結界も十分の様だった、先生方の中には若いのも居れば歴戦の覇者の様な物も居る。果たしてどちらが強いのか。タカミチがソワソワしながら牡丹の到着を待っていた、昔から面倒臭いモノには出席しなかったので当然か。ナギ達が出た式にも欠席と返した彼女である。

「・・・遅いのぉ・・・」

「来ないのでは・・・？」

「しかし・・・アレでも英雄のひとりと聞きますし・・・」

「姿は知らんが、悪魔の大群を一瞬で灰に変えたとも聞いている」

「・・・えぇい！遅いではないか！！」

「（牡丹さん・・・何をやっているのですか！）」

不満の声が周囲に漏れ始め、彼女の悪口も飛び交う始末。タカミチは己の拳を強く握りしめながらその状況に耐えていた。心の中では黒い感情がふつふつと湧きあがっている。お前達に彼女の何が解るのか、半身を失う痛みが解るのか、と。

周囲のざわめきが増した頃、世界樹の上ではそれを楽しげに見る１人の少女と１匹の妖怪、妖怪はその目を不気味に光らせ手には銀色の糸が垂れていた。

「やあ、待たせたね」

ふわりと浮遊しながら現れる彼女、その閉ざされた瞳は周囲の魔法使いを馬鹿にしているようでもあった。彼女の近くに降りたモノはメイド服に身を包んだ蜘蛛の大妖怪、甘楽。その瞳からは殺気が漏れている。

「遅い！集合時間を何時だと思っているのか！！」

「あれ？おかしいね。僕は１２時ピッタリに来たんだよ？」

「何を馬鹿な事を！・・・ッ！？」

教師達が時計を見ると、確かに12時ピッタリである。

「何をした・・・ッ」

「正直に自分の過ちを認められないのかい？コレだから魔法使いは」

「ッ」「おい！やめろ！！」

男が杖をその手に持ち魔法を唱えようとした、それを隣の教師が阻む。一瞬その場に緊張が走った、皆己の得物に手を掛け、鋭い視線を飛ばしている。

「学園長！なぜこのようなモノを学園に呼んだのです！！人間の決まりごとも知らない様な化物を！！」

「・・・」

学園長は、静かに口を閉ざしているだけだ。タカミチの視線が鋭くなる、まるで獣だ。同じく牡丹の隣では甘楽が糸を揺らしていた、何時でも先頭に入れるようにだろう。

「ヒトを化物と呼ぶなんて、それじゃあ聞くけど、君は人間なのかい？」

「何を言って」

「魔法を使えて、世界樹の力を感知出来て、その他にも空を飛べたり人を呪ったりできる。そんな物が人間だと言い張れるのかな？」

「貴様っ調子に乗るなよ！！」

男の手から無詠唱で魔法の矢が放たれるそれなりに威力のある物が牡丹の頭めがけて飛んで行った。しかし彼女に攻撃が当る前にその魔法の矢は方向を反転、男の手をめがけて飛んでいく。刹那、その瞬間、男の指が地面の上に数本転がった、呻き声をあげる男を見下す牡丹。

「自業自得、人を呪わば穴二つ。私は君に何もやっていない。君が君の魔法で指を失っただけ、それは君の選択した事で、私には関係の無い事だ」

「・・・今ので彼女の力は解ったじゃろう、これ程の方がこの学園の防衛に当ってくれるのじゃ。これ以降、彼女に危害を加えるのであれば儂もお主たちの処分について考えなくてはのう」

「・・・くっ、忌々しい化物め・・・！！」

「おい」

タカミチの拳が、指を失った教師の顔面を捉える、その力は非常に強く男の口から数本の白いモノが飛びだして行った。

「それ以上、牡丹さんの悪口を言うな・・・！」

血が少し付いたその手を握りながら、彼は肩で息をしている。我慢の限界であったのだろう。周囲の教師も静かに成っていた。普段温厚で温和なタカミチが人の前で殺気を露わにし、仲間の一人を殴ったのだ、こう成らなければおかしいであろう。

「がッ学園長！！今のは暴力では！？」

「・・・ワシが思うに、今の原因は君に有ったと思うのじゃがの？どうじゃ皆」

頷く、ただそれだけ。

悔しそうな顔で男は去って行く、肩を貸してくれる者も居なかった。

「気分を悪くされたかな？牡丹殿」

「気にはしないさ、もう馴れた」

【牡丹様、帰りましょう。私、このままでは】

この後の文字が乱れている。それほどまでに我慢しているのであろう。周囲に漂う殺気が今の彼女の状態を表している。

「私は此処で失礼するよ。死人は出したくないしね。それとタカミチ、ありがとう」

タカミチに優しく笑みを浮かべると、彼女は甘楽の腕に掴まりそのまま姿を消したのであった。

28話・お披露目（後書き）

やあ■■■、今日は何茶にする？もちろん紅茶の類しかないのだけれどね。

・・・解った、同じの。

解ったよ、すぐにできるからね。

静かな店の中、2人だけの会話。

29話・訪問（前書き）

つかれた・・・

29話・訪問

――街中の出会い――

牡丹は1人で魔帆良の中にある商店街に来ていた。3人のセンスは破滅的で普通の服を選んでくれないのだ。普通の服（パーカー付き）を見つけると値段を確認して安いモノを加護の中に入れて行く、ズボンはスカート以外のズボンタイプを買った。そして少し余ったお金で羽織を修理に出す。

用事が終わり、帰りの道に向こうとしたその時である。長い金色の髪の毛でゆったりとした服を身に付けた女性が眼の前に現れたのだ、その女性は牡丹を見るとニヤリと笑みを浮かべる。

牡丹の頭の中に入っている黒の書の一節が思い出された。

【金色の髪を持つ大賢者、世界すら渡る能力を保有する】

「やあ、牡丹ちゃんだよね？」

「貴女は・・・」

「本名は明かせないのでね、マーリンとでも呼んでくれよ」

そう言うと彼女はその美しい金髪を乱暴に掻きながらケタケタと笑った。その様は確かに現実離れしている。彼女はその手に持った長い杖で床を叩きながらニコニコ笑っている。

「まぁ、その辺のカフェに入ろうか。そちらの方が体力消費が少ないだろう？」

「は、はぁ・・・」

彼女の言った通りにその辺に有ったカフェの中に入る、落ち付いた雰囲気のカフェで値段もお手頃であった。普通ならまだ授業の時間なので店内はガラガラに空いている。お互いコーヒーを頼んで向かい合い座る。

「・・・何故貴女が私の事を？」

「ん？まだ聞いていないのか。それも良いだろう。まぁ、宣伝の様なものさ」

彼女は何処からか名刺を取り出す、その名刺には名前すら書かれていないが魔力を少し通すと文字が浮かび上がってきた。どうやら電話番号のようだ。

「この紙は電話代わりにもなるから、無くさないでね」

「紙が電話代わり？」

「ぼく達は嘘はつかないよ」

彼女はそう言うとニッコリと優しい笑みを浮かべた。黒の書には残酷な性格で敵には容赦なく死を与えるモノと書かれていたのだが・・・これは彼女に対する評価を改めた方がよさそうだ。しかもカフェのお金も彼女持ちだし。

「そして、ぼくは君に情報を提供する為に来たんだ」

「情報？」

熱いコーヒーを少し口に含み、彼女の話に耳を向ける。先ほどの優しい表情から彼女の顔は変わり、真剣そのモノの表情に成っていた。

「青い瞳の白には気を付けた方が良い」

「・・・妙に遠回しな言い方だね」

「それがぼくさ」

彼女から洩れだす魔力は微量のモノ、しかし彼女の力は黒の書も持った牡丹よりも上であろう。彼女の身体はまるで魔力で構成されている様な物だと感じさせてしまう。下手をすれば妖精か神レベルの魔力を保有しているようだ。

「君の姉妹の事は残念だったね・・・」

「!そんなことまで」

「知っているよ、家の組織は君を監視しているとも言えるから」

「監視?」

「君が間違った道へ進んだ時、君を消す為にね」

「・・・物騒だね」

「そんなものさ、この世界を滅ぼされると以外と困るんだ」

どうやら牡丹が考えているより深刻な問題のようだ。彼女の顔がそう語っている、それにしても彼女レベルの人間が動くとはどういう

事だろうか、其れほどに大きな問題だとするのなら最悪だ、神話の出来事が、黒の書に書かれた出来事が本当に再現されるのかもしれない。

「ぼくは、それだけを伝えに来た、コレだけだ、後は君で考えてくれ」

「随分冷たいね」

「違うよ、ぼく達も忙しくてね、最近になって仕事が増してさ」

これから少し戦争に参加して来るんだと言う彼女、恐らく裏の世界関係の戦争なのであろう、普通の戦争に彼女程のモノが出る筈も無い、まあ、黒の書に書かれていた教団と言うのは普通でも裏でも関係なく参戦するらしいが・・・。

彼女は代金を払うと、そのカフェから消えるようにして出て行ってしまった。しかも白昼堂々と転移魔法を使ったと言うのに周囲の人間には全く気付かれていない。恐ろしいほどの力と技術だ。

「（・・・白の髪に青の眼・・・その記述・・・何処かで・・・・）」

考え始めた彼女、飛んでも無く大きなモノに自分が組み込まれていると気が付いたようだ、彼女が思う以上にその力は大きく、裏の世界が動いている、渡された紙を見ると静かにそう思った。黒の書によると原作開始まではもう少し時間が有る、それまでに何かあるとは書かれていない。

もしもの時の為に、情報を出来るだけ揃えておこう、此処の学園には大きすぎる図書館島と呼ばれる場所が有るようだし。

「（魔界関係の書物・・・ソレから人類の歴史も調べておこうか）」

裏の世界は表の世界を昔から操作して来た、その為歴史の中にはそれなりの暗号が隠されていたりするのだ。ダヴィンチ等が暗号を残した事もソレに関係している。

数多に存在する世界の中を転移する能力を持つ彼女が知らせに来るほどの事態は普通ではないだろう。恐らく世界が動くレベルのお話しだ、もしかしたら歴史をなぞっているだけで父にも逢えるかもしれない。

「（死者は語れず、聖者は黙したまま。黒の歴史は何を語っているのかね・・・）」

多くの死を、多くの生を、繁栄と衰退を求めるその世界。彼が生きた世界も歴史も、これと同じであったのであろうか、あまりにも理不尽で、守りたいモノばかりが増えては消えて行く。

「全く、面倒だね。生きると言う事は・・・」

そう、面倒でありしかし何よりも楽しく、面白い、それが生きると言う事だ。彼女は少し残ったコーヒーを見た、少しだけ開けたその紅い瞳が黒い液体に映っている。

黒の歴史に名を残す3人の賢者の内の一人、大賢者マーリン。彼女の告げる運命とは・・・。

29話・訪問（後書き）

赤黒いマントを生臭い風に靡かせて彼女は戦場を当たり前のように歩く、その黒い剣は多くの血を浴びて不気味な光を反射していた。重厚なその鎧を身に付けた白く長い髪を持つ少女は狂気色の赤色に染まった月を見て笑みを浮かべる。もう少しで、もう少しで完成すると。

30話・ちょっと出かける彼女（前書き）

今回はシリアス展開は無いよ！

30話・ちょっと出かける彼女

――和食なら――

最近牡丹が家に居る事が少ない、何故かと聞いても返ってくる答えは「キティは気にしないで良いからね」だ、私だって無駄に長生きしている訳じゃないし、愚か者でも無い。彼女が何か隠している事はすぐに解った。教師としてのシフトは少なく、週に1，2回授業と書類の為に出勤する程度だ。それだけの筈、そう、私が直々にあの妖怪爺に交渉したのだから。

「じゃあ、行って来るよ」

「あ、あぁ」

牡丹は今日も何処かへ出かけて行く、その手には簡単な物しか持たれておらず、何処かに遊びに行くと言う装備でも無い。彼女が持って行くモノは筆と墨、後黒の杖程度だ。彼女は盲目と言う事に成っているらしく、杖を持っていても誰も何も言ってこないのだ。

「最近、牡丹様は良くお出かけになりますね・・・私としては嬉しい半面、悲しいです・・・」

「・・・私もだ、テル」

【もしかして・・・】

甘楽が顔を青くしながら手に持ったメモ帳に文字を書いて行く、彼女は喋る事が出来ないので牡丹にこれで会話するようにと渡されて

いるのだ。

【男が出来た・・・とか？】

「「ッ！？」」

衝撃が走る。確かに牡丹は百合の人宣言はしていないし、長い間生きて来て良い人が居ないとも限らない。もしかすれば、そう言った人間が出来ていてもおかしくはないのだ。

そう考えたエヴァ達は一斉に顔を青くした、自分達が大切にしてきた、言わば一人娘が見ず知らずの男と居る所を想像してほしい、最悪だった。

「・・・久々に血を見る事に成るのか」

「御供します」

【同じく】

三人は服の内に隠し武器を仕込むと急いで牡丹の後を追って行ったのであった。

日光が普通の人には気持ち良い時間帯、言うなれば御昼だ。その時間帯は人外系である彼女達には厳しく歩くだけなのに非常に体力を削られる。

「クソ、何処に行ったんだ牡丹は！」

探しても影すらない。その辺りの人間に彼女の事を聞いても見ていないと言われてしまう。この学園の中でも盲目でしかも長い黒の杖を持っていればすぐに解ると思ったのであるが、そんな事も無かっ

たようだ。甘楽もテルも近くのベンチでぐったりとしている。
魔帆良学園にもナンパを行う男性は居るのだ、彼女達は美女軍団で、彼らがナンパを行わない筈がなかった。

「えぇい！うっとおしい人間が！！」

「すっかり時間も過ぎてしまいましたね・・・」

【疲れた】

一向に姿の見えない牡丹、それをナンパのせいにして彼女達は疲れた身体を木陰で休ませていた。いくらナギの魔法が解けたエヴァでも厳しいのだ、テルは球体関節を隠す為にメイド服ではなく普通の服にパンツ型のズボンなので慣れていないようだ。甘楽は・・・外見年齢に適した服だが、その首にはペット用の首輪が有る。

「おや？エヴァじゃないか、こんな昼間から珍しいね」

「タカミチか・・・お前いい加減に私を呼び捨てにするのは止めろ」

「はは、そう簡単には直せないよ。それよりどうしたのさ」

「牡丹を探しているんだ、見ていないか？」

「牡丹さんを？今日は学校に顔を出す日じゃないからなぁ・・・」

「と、なると・・・」

「可能性はありますね」

「可能性って？」

興味を持ったタカミチが会話に参加する。エヴァ達は彼女の行きそうな場所を考えているので、メモ帳に甘楽が書いて説明した。もしかしたら、牡丹様に良い人が出来たのかもしれないから始末しに行く途中だと言う。

「・・・え？牡丹さんに・・・男・・・？？」

タカミチの頭の中では何も着ていないその幼い牡丹の身体を蹂躙する巨漢が浮かんでいた。どう言う想像力をしているのであろうか、少し気になることろだが、今はあえて突っ込まないでおこう。

「そんな・・・嫌がる牡丹さんを無理やり・・・」

【この人はどう言う妄想をしているのでしょうか・・・】

「気にするな、タカミチは昔からムッツリだったからな」

機能停止したタカミチを放置して三人は再び行動を開始した、図書館島にも学校に有る簡単な図書室にも行ってみたのだが姿がまったく見えない。おかげでエヴァは怒りの表情から心配の色が濃くなっていた。もし本当にタカミチの言っていた通りに成っていたらどうしよう、と。冷静に考えれば牡丹がそこら辺の男に負ける筈がないのだが・・・。

「おい、今日もあの子の店に食い行こうぜ！」

「あ、新しい子が、可愛いもんなぁ」

「全くだよ、最近そのおかげで出費が増えたぜ・・・」

「眼が見えないのに良く働く子だよね」

道を歩いて行く学生からそんな声が聞こえて来た。眼が見えない、そこに反応した3人は彼らの後に続く、何時の間にかその手は得物に伸びていたが、気にしてはいけない。

進んで行くとそこは最近出来た和食店だった、その中に足を運ぶと以外と繁盛しているようだ。店員は全員割烹着姿で、少し時代錯誤に陥りそうになる。

そう言っても、バイトなどの娘が髪色を染めているのでまぁそれなりだが。

「あれ、キティじゃないか」

割烹着姿の牡丹が姿を現すその手にがメニューが持たれていた。

「牡丹!探したぞ!!?こんな所で何をやってるんだ!」

「え・・・バイトだけれど」

「・・・は?」

「先立つ物は余ってても困らないでしょ?」

確かに彼女の言う通りだ、生きて行く上では先立つ物が嫌でも必要になるし、多い方が良いのであるが・・・

「ソレに私は和食なら大体作れるからね、御給金もそれなりに良いんだよ」

「何故教えてくれなかった・・・」

「教えれば駄目だって言われるからね」

「「グッ」」

確かにその通りである、牡丹を大切に思っている彼女達は牡丹を働かせるなら人形を操って荒稼ぎすれば良いじゃないとか言いそうだ。

「牡丹ちゃーん、いつものー！」

「あ、はーい！キティたちも注文決まったら近くの店員さんに伝えてね」

そう言うと、彼女は厨房の方へと引っ込んでしまった。何故彼女はそこまで家庭的なのであろうか。そう考えるエヴァはとりあえず牡丹が持って来たメニューを見る事にしたのであった。

30話・ちょっと出かける彼女（後書き）

和食なら何でもそろってる、ソレがその店の自慢。
盲目ながらも懸命に尽くしてくれる少女がアナタの支配欲を満たしてくれます！

「・・・牡丹、あのバイト今すぐ辞めろ」

エヴァはその店のチラシを見ながらそう言った。

31話・古き屋敷（前書き）

さあ、少しずつリンクを始めよう。

31話・古き屋敷

――古き手紙――

古い武家屋敷、その中に黒の少女は立っていた。此処まで来るのに恐ろしいほど時間を失ってしまった。どうしてこんな場所に有るのであろうと思わせるほどの場所、古びているが立派なその建物に残されている生活していたモノの優しい雰囲気が伝わって来る。同時に痛い程の辛さが時代を超えて彼女の肌を刺す。

「黒の歴史に書かれた最愛な場所・・・此処がかい・・？もう少し凄い所をイメージしたのだけれど」

古びた武家屋敷だが、荒らされた形跡もなければ何か天災の被害に有ったと言う形跡も無い。恐ろしいまでに綺麗な状態で残っていた。家名は既に薄れているモノの、それは何のか読める程度だ。

【稗田家】

重々しいその字が書かれている。何年前から此処にあるのか、何故こんなにも人間の住む土地から離れた所に有るのかは謎だ。しかしそれは確かにそこに存在していた。

「・・・新しい足跡、誰か先客が居るようだね」

彼女はそう言うとその手に持った黒の古書を強く持ち直した。もしかしたらそう言った類の物を盗む裏関係の者かも知れない。トレジャーハンターと言えば聞こえはいいが、違う言い方だとただの遺跡荒らしか墓荒らしだ。

威厳ある門を通り過ぎると武家屋敷の庭に咲いた真っ赤な彼岸花の群れが目に入る。人の手が入っていないとはいえ、これは凄まじい

モノだ。庭を赤一色に染め上げている。

「花言葉は美しいけれど、流石にこれは凄いね」

「きゃぁ！？」

突然聞こえた悲鳴、それは屋敷の中ではなく裏の方から聞こえて来ていた、牡丹が不思議そうに近づくと、そこにはボーイッシィな女の子と金髪の女の子が居る。

「大丈夫かい？」

「あ！ス、すみません。勝手に入って・・・」

「大丈夫だよ、私も勝手に入っているだけだから・・・君達は何処かの学生？」

「はい、高校生です」

「うぅ・・蓮子・・・何でこんな所に石が有るのよ・・・」

「そ、それを私に言われても・・・」

「・・・私の名前は牡丹、君達は？」

「私が蓮子で、こっちがメリーです」

牡丹が彼女達にどうやって此処に来たのかと聞くと、メリーには面白い事に世界の境界が見えるのだと言う。それを辿ってきたら何時の間にか此処に来てしまっていたと言う訳だ。此処は境界が多く、

二人はそれを調べに来ていたようだ。

「君達が知っている此処の事、私も聞きたいのだけれど・・・」

「私達の話しを信じてくれるのですか・・・？」

「？何の事」

「境界ですよ！」

「あぁ、確かに興味深い話だけれど。君達が嘘をつく人間には見えないしね」

牡丹がそう言うと、彼女達は嬉しそうに此処について話し始めた。話によると此処の管理者は数年前に行方不明に成ったらしい、既に高齢で後継ぎの存在も不明であったが、管理者が亡くなってからも此処はまるで管理されているように綺麗なのだと言う。その他にも井戸に映る少女の姿や裏庭に立つ古びた桜の木の下で泣く少女と言うモノが目撃されているようだ。

「で、その井戸は何処に？」

「もう少し先だよ、こっち」

蓮子が彼女を呼ぶ、そちらには確かに裏庭が有り、その恥の方にひっそりとその井戸は存在していた。屋根つきの井戸でしかも封鎖されている。未だ水がわいているのであろうか。何にせよ、危険だったからこうして蓋をされたのであろう。

「まず一つ目の奇怪、少女の映る井戸・・・」

「凄いわ・・・この辺りだけ境界がない・・・」

周囲の木々の音が聞こえる、その音がやや不気味に響く頃、蓋のされている筈の井戸から水滴が滴るような音が聞こえて来た。まるで井戸の中の誰かがこちらに気が付いたように、だ。

「ひっ」

「れっ蓮子！やっぱり帰りましょうよ！！」

「駄目だよメリー！君のその境界の事をもっとよく知りたいんだ！！」

「・・・勇敢だね、君は・・・」

牡丹は井戸の蓋を持ちあげて見る、石造りではあるが彼女には鬼(ざくろ)の怪力が備わっているので難無く持ち上げる事が出来た。その中は暗く、眼を凝らしても下まで見る事は出来ない。蓮子が懐中電灯で下を照らして見るとそこには水ではなく茶色いモノが映っていた。土である。

「水は・・・もう枯れているね」

「じゃあ、さっきの水音は・・・ッ」

「つ、次へ行きましょう！？」

次、桜の木の下で泣く少女だ。同じく裏庭にその桜の木は有った。老いた木である者のまだその枝にはしっかりと葉をつけている。そ

の木に何と無くメリーが触ろうとしたその時である。彼女の手に小さな石が飛んできたのだ、周囲を見渡しても誰も居ない、居る筈がない。此処は人の住む町から随分離れているし、そう簡単に来ようと思う人間は普通居ない。

――ザァァァ――
――ザザァァァ――

まるで壊れたラジオのノイズの様なモノが聞こえ始める。その音に気が付いたのは牡丹だけの様であった、彼女が周囲を見渡すと、枯れている筈の井戸の前に１８歳くらいだろうか、濃い紫色の長い髪の毛の着物姿の美しい女性がそこに立っている。まるで井戸の底を覗きこむように。

――何故――
――何故――此処に――
――――様――――

とぎれとぎれに聞こえるその悲しげな声、彼女は少しするとまるで亡霊の如く消えてしまった。

「い、井戸の所に誰かいた!?」

「じょ、冗談言わないでよ蓮子!!」

「（・・・紫色の髪・・・確か、私が調べた所・・・歴代の稗田家当主は濃い紫色・・・分家も同じく紫の髪・・・そして男性が居なくても出産が出来る呪いが掛っている・・・処女で出産できると書いてあったけれど・・・）」

あまりに現実離れしている。その本の中では初代の夫が妻のあまりの可愛さに独占欲を抱き、その呪いを掛けたのだと言う話もある。

「家の中には入れないのかな?」

「鍵が掛っているみたいで・・・」

「どれ?」

彼女がその手を近づけると、そのカギは難無く開いてしまった、ガシャンと言う重々しい音が特徴的だ。

「・・・開いたね」

「開いたね・・・」

「開いてしまったね・・・」

三人とも顔を少し青くしている。まさか本当に開くとは思っていなかったのだ。その和風な扉を開けると内装が見る事が出来た。かなりの年代が経過している筈なのに中も綺麗中まで、少しだけ古びているとしか感じる事が出来ない。

三人は、勇気を振り絞りその中へと、足を踏み入れたのであった。

31話・古き屋敷（後書き）

現実離れとは、その者にとっての現実離れであり、その他の者にとっても現実離れと呼べるのかは、非常に難しい事である。

32話・古き武家屋敷（前書き）

ふぅ

32話・古き武家屋敷

――残された思い出――

古い屋敷の中は想像以上に綺麗であった。靴を脱ぎ持って来ていたスリッパで中に入る。メリーと連子、そして牡丹もスリッパを持って来ているとは何と言う奇遇であろうか。屋敷の中のモノは何一つ汚れていなかった、まるで本当に毎日管理者が管理に来ているかのようだ。飾られた水墨画も色あせていない。

「凄いわね・・・これは・・・家の中に全く境界がないわ・・・まるでこの家自体が境界よ・・・」

「こっ怖いこと言わないでよ」

だが、確かにこれは普通ではないだろう。周囲に有るモノは全て平安時代よりも昔のモノ・・・・しかしそれらは新品の様に傷がない。まるで時間が止まっているかのようだ。時間停止の魔術やその他の術式、呪いも調べてみたが、それらの反応は一切無かった。

「メリー、見て、この部屋!!凄い本の量だよ!!」

「本と言うより巻物が多いわね。でもかなり古いモノよ・・・今の時代では計り知れない価値でしょうね」

歴史の真実が語られた物も有るだろうし、今の時代では数億単位、歴史を変える力を持つだろう、その本の中に彼女達は居るのだ、信じられなくなる。下手をすれば魔帆良学園に有るどの本よりも貴重かもしれない。

「？これは・・・文筒？？」

綺麗な黒色の文筒、本来その名の通りに文を補完する為のモノだが、その文筒が簡単に数えても１０以上ある。当時紙はとても高価な物だった筈だ、しかし何故それがこれほど有るのか、答えは簡単だった。この家の主人がとてつもない権力者だったと言う事、だ。

「凄い豪華だね」

「この屏風の絵は・・・見た事のないモノね」

「箪笥とかは・・・勝手に開けたらまずいよね」

「「当たり前」」

そう言いながらも牡丹は文筒に手を掛けていた。人の手紙を見る事には抵抗が有るが、この家にいると何故か異常に落ち着くのだ。まるで自分の家の様に。

文筒を開けると溢れんばかりの文の群れが有った。それぞれが大切そうにしまわれており、紙が黄ばんでもいない。次々とその文を見て行く、熱烈なまでの恋文の数々だ。見ているだけで胸が焼けそうになる。

「す、凄い量だね。これ全部恋文かな？」

「全部見る・・・？」

「私はそうするけど、君達は？」

「気になるし、見るよね？メリー」

「えぇ、そうしましょうか」

他人の恋文を見ると言うのは変な気持になる。一体何代目の稗田が書いたのであろうか、その手紙の量には恐怖を感じるほどであった、別の手紙を探している途中で、気になる文を発見する。

【愛しい貴方は、何故逝ってしまったのか】

詩の様に書かれている一節であったが、その紙には水を少し垂らしたかのようなシミが有る。恐らくこれは失恋か、この手紙を書いた人物が死去した時に書かれた物であろう。

「失恋の詩か・・・切ないね」

「死んでしまったって事は・・・恋文を送る人が居なくなってしまったと言う事？」

「でもこの手紙よりも古い物も新しい物も有るから・・・」

「その手紙を出す前に、か、それ以外の理由が有ったのか」

どちらにせよ、不幸が有った事は明確であった。と言う事だろう。しかし不気味な点はその後にも多くの手紙が書かれていると言う事だ、相手の不幸など無かったようにその手紙は続いている。その手紙の中には同じく不幸をうたう詩も有ったが基本は恋文尽くしであった。

「こ、此処まで来ると怖いね」

「・・・蓮子もこれくらい欲しい？」

「いらないよ！怖いって言ったじゃない！！」

「（筆記が全部同じだ・・・でもおかしい、何故か解らないけれど、おかしい・・・）」

そう、どの恋文も全て同じ人間に、そしてそれを書いている人間も同じように感じるのだ。当時の人間の寿命は良い所で４０代、それより下が主であった筈、しかしこの恋文、６０年分以上書かれている。そしてこの筆記の方法から、書いたのは恐らく女性であろう。女性の寿命は、その時代それほど長かったであろうか。

「？あれ、コレだけ文字の形が違う・・・」

「ちょっとかして」

【貴女の文はとてもうれしく思う、しかし私は古き森に住む身分の低いモノ、貴女と結ばれる事など夢のまた夢でございましょう。貴女は美しく、獣の様な私には過ぎたる者。好意には、答える事が出来ません】

ソレは、拒絶の文である。しかしその後も彼女は手紙を書いている、その文が今まで見て来た中では最も古いモノだろう、それからも文は続き、別の手紙が見つかった。

【貴女の好意の深さは存分に理解させていただきました。もし、もし私と本当に一緒に成りたいのならば、明日の満月の夜、丘の上の桜の木の下でお待ちしております】

「どうらや、この恋文にやられたようだね」

普通の人間が書ける以上の量だ、異常でも普通でも一度逢おうと思うだろう。そして彼女と彼は出あったようだ、それから数年は手紙が書かれていない。

手紙を書く為の机だろうか、その部屋の隅には小さな机が有った。その机の上には簡単な本の様な者が置かれている。糸で纏められているようだった。

「・・・日記だね、これは」

この家に来た理由は黒の書に書かれていたからだが、何故こんな不思議なモノが多いのであろうか。

――月――日――

父は――しない――しょうがなく――死体は――

字は既に擦れて来ているが、恐ろしい文面であった。恐らく父が夫婦に成る事を認めなかったので仕方なく殺害したと言う事であろう。

「誰ぞ、そこにいるのか？」

「「「！！？」」」

彼女達の後ろから姿を現したのは黒いおかっぱ頭の少女であった。眼の部分まで髪の毛が伸びておりその目を見る事は出来ない。その少女が彼女達が手紙を読んでいたと知ると怒るのではなく、しっかりと片付けておくようにと言う。

片付けたあと、彼女達は気まずくなったのは早々にその家を後にす

る事にした。

「君は、此処の屋敷を管理しているモノかな？」

「あぁ、そうだよ。私が此処を管理している」

「・・・君は・・・人間かい？」

外に出て行った蓮子たちに聞こえないように彼女達は会話する。その言葉を聞いた瞬間に、その少女の口は三日月形に歪んだ、ギザギザと尖った歯がその口から覗く。

「ご名答、確かに私は人間ではない」

「では・・・君は・・・」

「お前は黒に示されてこの家を見に来た、違うか？」

「！何故それを」

「お前はこれでまた一つ、駒を揃えたと言う事だ」

意味が解らなかった、少女が不気味な笑みを浮かべる。

「私の名はウロの怪、覚えておくが良い」

そう言うと、彼女は姿を消していた。牡丹が不思議に思い正面の門を潜るとそこには変な風景が広がっている。来る時には無かった筈の空間だったのだ。その辺一帯が開けた場所に成っている。

「そんな・・・まさか！」

後ろを振り向くと、そこに武家屋敷など存在しなかった。まるで狐に騙されたかのようだ。近くではメリーと蓮子が石に背を預けて気絶している。

頭の中に、ケケケッと言う笑い声が響いたのであった。

32話・古き武家屋敷（後書き）

あっちへウロウロ、こっちへウロウロ。貴女は何処へ行ったのか。
家に染み付いた悲しみが、胸の中を支配した。

33話・一冊の本（前書き）

疲れがやヴぁいです・・・

33話・一冊の本

――ウロの怪について――

牡丹が調べたのはその周囲の民間に広がっている妖怪の事であった。
実際妖怪は殆んどが不明の失踪を遂げているのでその姿を見る事は出来ないが、それでもあの少女は異常すぎる、空間を捻じ曲げたりそこに有る筈物もを平気で隠したりするその能力はどう考えても大妖怪レベルである。
調べて行くうちに、あの辺りに昔から口伝えで今まで伝えられてきた事を調べる事が出来た。

【森の武家屋敷】

そう言った簡単な名前ではあったが、何処かの記者は会社が調べたのであろうその事は事細かく書かれており、牡丹が言ったあの家と完全に一致している。しかしその記者はその家まで辿り着く事が出来なかったようだ。
少し前まで管理人が居たと言われているが、それも相当昔から伝わっている事らしい。

「その屋敷の全貌は不明だが・・・境界を漂っていると思われる・・・か、確かにあの家には境界がないと言っていたな」

境界とは人間などにも有る境目の事である、大昔の話だとその境目を移動できる妖怪も居たようだが、陰陽師も勝てなかったようで詳しくは残っていない。

「民間に伝わっているあの少女の事は・・・」

平安時代後期、その妖怪は姿を現した。人の眠った頃に街の中を歩き回り、男の名前を呼びながらペタペタと歩くのだと言う。その時間帯に出歩いているとその妖怪に頭から食われてしまう。らしい、子供を脅す為に作られた様なお話しだが、それでも今の彼女には十分な文列であった。

「そのモノはアッチへウロウロ、こっちへウロウロと歩くことからウロウロ様、やウロの怪とも呼ばれている。・・・成程ね、大妖怪じゃないか・・・」

「困っているようだね」

「ッ!?マーリンさん!!?何処から入って来たんですか!!?」

「ちょっと、図書館では声を落とした方が良いよ」

「あ、すみません」

突然現れた大賢者マーリン、彼女は牡丹の呼んでいる本を見ると、

「あ―成程」と言うように頷いた。

「君、出会ったのかい?ウロの怪に」

「はい・・・」

「ソレはラッキーだね、彼女はあまり人の前に出ないから」

「知っているのですか?」

マーリンは少し難しそうな顔をすると少しね、と答えた。しかし彼女は神出鬼没だ、急に消えてはいきなりその姿を現す、まるでチェシャ猫だ。自由で気まま、と言う意味で。

「良いかい、牡丹。歴史はなぞるモノではなく、辿るモノなんだよ」

「？どう言う事ですか」

「そのままの意味さ、君の知りたい事はマイナーなようでマイナーではない、普通の人も知っているが、その本当の物語を知っているモノは少ないんだよ」

「謎めいていますね、それはヒントですか？」

「あぁ、極上なまでのヒントだよ。でもこのヒントを生かせるかどうかは君次第さ」

彼女は自分の長い金髪を指でクルクルと巻き遊ぶ、牡丹の読んでいた本は勝手に元々あった場所へと帰って行ってしまった。マーリンの魔法であろう、何故彼女は公共の場所で魔法を使っても人にばれないのか。謎である。

「君はもっと視野を広げて本を読むべきだよ。何せ君の知りたがっている事はそんなにマイナーな事ではない」

「？でも、妖怪とか武家屋敷とか、かなり普通離れしていると思いますが・・・」

「それらの根本を探してみな、きっと答えな見つかるよ」

そう言うと、彼女は近くの椅子に腰かけ自分の持って来た本を読み始めた、ゲームスタートと言う訳だ。彼女のヒントを元に本当に求めている本を探しあてれば正解、それ以外だった場合彼女は反応を返さないだろう。これは難易度が高いゲームであった。この気まぐれさ、本当に猫のようだ。

「（ヒントが有っても、この図書館島の本の数は簡単に数えても億単位、1つ1つ探すのは面倒臭い。彼女の言う通りだとすれば、そんなに奥の方にはない筈・・・）」

一般生徒もいる階の本棚を探して行く、中でも古いモノだけを見て行くが、古いモノと言えば不思議の国等のアリス系の物や、昔の文豪が発表した小説や論文ばかりであった。しかもその辺りは全て読破している。

更に見て行くと、童子向けの本が一冊紛れ込んでいるではないか、手に取って見るとソレは絵本のようだが絵本ではなく、古びた赤色の表紙の本であった。

【つまをおったむしゃ】

と、ひらがなで書かれたそのタイトル、漢字に直すと恐らく【妻を追った武者】であろう。

「見つけたね、それだよ。意外と近くにあっただろう?」

「でもこれ、子供向けの簡単な物語だよね・・・?」

「君も昔読んだだろう?其れほどに浸透した昔話も珍しいけれど、これ程記憶に残らない昔話も珍しい」

確かに、読んだ気がするが、内容は全く覚えていない。どう言う訳

だろうか。この世界に来る前の追放世界にも有った筈だが、内容は全く覚えていないのだ。不思議な事に出だしも思い出せない。

「この本には面白いようにヒントが書かれている。しかもこの本を書いた人物は一切不明、誰が書いたのか、何時の時代の物語なのかもさっぱり不明、でも、それでもこれには君の求めているヒントが有る」

そう言うと、彼女はその姿を煙のように消してしまった。残された牡丹はただその本をジッと見つめている。完全に子供向けであろうこの本、しかし中を開いて見ると完全に活字であった。普通の子供ならまずこれは読まないであろう本、それを読むとするならば何処の変態か、と言うレベルである。

「（童子用書物なのにページ数が３００を超えるって・・・どんな本だい・・・）」

そう考えながらも彼女はその本を借り、家へ持って帰る事にしたのであった。

―――――――――――

―――――――

―――

―

「珍しいな、童子向けの本をお前が読むとは」

「童子向けだと、私も思ってたんだけれどねぇ・・・」

牡丹がエヴァにそのページの一部分を見せる、そこには普通の文字

ではなく、古代文字で書かれている文メインが有るではないか。普通の人間にはただの模様に見えるようにカモフラージュさえれている。

「しかもこれ、暗号化されているんだよ・・・」

「ほう・・・ソレは興味深いな、調べてみる価値はありそうだ」

33話・一冊の本（後書き）

一冊の本が、歴史を変える事も有る。

３４話・奪取とも言える（前書き）

はい、徐々にリンクしています。

３４話・奪取とも言える

――稗田――

絵本を調べて解った事は、稗田阿礼が最初の稗田ではない事であった。更にその昔に稗田は居たのだ、しかも阿礼は既に呪いを受けており、一人で子供を出産したらしい。
では、その前の稗田とは誰なのか、エヴァや廿楽にも協力して貰い、日本の中でも最も古く、重要な古書が眠る書庫へと忍び込んでいた。

「まさか、眠りの霧で大胆に侵入するとは思わなかったよ」

「ううっうるさい！アレが一番楽だったんだ！！」

「廿楽やテルに任せた方が良かったかな？」

「わっ私の方が確実だ！！」

そんな会話をしながら彼女達は探しているモノを見つけている。実はこの日本と言う国、裏の世界とも関わりを持っているのだ。まあ、そう言っても政府高官の一人か二人が、だが。解決不可能な事件を億単位で裏の世界に依頼し、その犯人を気が付かれずに暗殺、等と言った事もしているらしい、恐ろしいことこの上ない話である。

「凄いね、魔導書まであるよ、コレの価値を知っているのかな？この国は」

「ふん、どうだろうな。まぁ、私が見ても売れば億単位だろうな」

【稗田・・・稗田・・・見つかりませね】

「しかし、物凄い書物の数ですね。しかも表の世界に公開されていない歴史まであります」

「まさに世界の裏に通じた場所だね、全く、これだから政府は・・・」

彼女達は更にその書庫の奥へと進んで行く、途中で興味深いモノは簡単に目を通して先に進んで行った。するとどうだろう、一際頑丈な扉が４人の前に姿を現した。
厳重に閉ざされたその扉、何故そこまで厳重に閉ざす必要が有ったのかと聞きたくなるほどである。

「キティ、何とか出来るかい？」

「吹き飛ばせば」「テル、ピッキングよろしく」

「お任せ下さい、牡丹様」

「な、何故！？」

「爆発音だとせっかく眠っている上の人達が起きちゃうでしょう？」

そう言ってる間にもテルは簡単に鍵を外して行く、機械で管理された所も簡単に、もしかすれば彼女にはそう言った細かい作業が似合うのではないか、もしかして趣味なのか、その辺りは全く解らないが・・・。
厳重な扉が重い音を立てて開いて行く、その先に有ったモノは広い空間と、その他には一冊の本であった。題名の無いその古書、しか

し牡丹にはその書物に見覚えが有る。

「稗田の屋敷に有った・・・日記・・・？」

そう、稗田の武家屋敷に有った日記である。しかし何故あれがこんな場所に保管されているのであろうか、これは確かに保管するに値するモノだが、この書物はまさか2冊あるのであろうか。いや、そんなことはあり得ない。彼女はそう考えるとその書物を手に取り調べはじめた。

【稗田阿明】

日記の後ろの部分に書かれた名前、ソレはどの書物にも登場してこなかった人物の名前だ。しかしそれ故にこれは貴重な物であろう。エヴァは眉をひそめながら「それが此処を使って守る程のモノか？」と不満気であった。

≪・・・誰じゃ、妾を目覚めさせるものは・・・≫

突然書から声が聞こえた、日記にはこの様な妖しい術式は使われていなかったはず、しかしソレは４人の前に姿を現した、まるで平安時代の女性の様な恰好で、髪の毛は地面に付いている。少し細すぎる気もするが美しい女性であった。

「き、君は・・・」

≪妾は文妖妃、思いの籠った書物に宿る妖怪じゃ、そう言うお主は・・・おぉう、成程のぅ≫

彼女はうんうんと頷くと、その日記の中の一ページを開いた。そこ

には少しの皺が有り、その形から涙が染み込んだ痕だと言う事はすぐに解った。そのページに書かれている事は自分が病に倒れた事、夫への謝罪の言葉だった、時代はかなり経過しているモノの生々しい。

≪此処に書かれている夫と言うのはお前か？≫

「残念ながら違うよ」

≪そうか・・・？同じ雰囲気じゃったが・・・≫

文妖妃はそう言うとまた唸り始める、この古書を彼女は守ってきたのであろう。彼女は恐らく、この書物に書かれている夫と言うモノを待っているのだ、妻の気持ちを伝える為に。

≪しかし、お主からはこの書に染みついているモノと同じ匂いがする・・・≫

「？どう言う事だい」

【牡丹様から同じ匂いが・・・？】

「その時点で、おかしいですね」

≪・・・じゃが、他人とも思えぬ。持って行け、お主ならこの者の夫に逢う事が出来るじゃろう≫

お主も奴も、奇妙な運命を背負っているようじゃからのう。そう言う彼女はその鋭い目を細めて牡丹を見た。まるで蛇が得物を睨んでいるようにも見える。

牡丹が懐に違和感を感じ、手を入れて見るとそこに有った恋呪の筆が少しの熱を帯びていた、珍しい事も有ったモノだと納得しようとしたが、それでは納得できない。

≪おう?ソレは恋呪の筆ではないか!・・・しかし、妾の知っているモノとは少し違うようじゃの≫

「君の知っているモノ?」

≪妾はその書物に憑依していた、そしてその日記を最後に使った人物も覚えておる≫

「!その人物を教えてくれかい!!?」

≪稗田阿礼じゃ、彼女は妾に良くしてくれた。しかしのう・・・死に際に狂ったように笑っておったわ。彼女は、阿礼は転生を繰り返していると言っていた、古びた花の髪飾りを付けて、夫から送られた筆を大事に使っていた事を覚えている≫

「・・・まさか、その筆が」

≪恋呪の筆じゃ。元々は防御の力を持っていない妻を心配して夫が作ったモノと聞いた・・・お主の物もソレに近いモノじゃな≫

そう言いきると彼女は眠そうに欠伸をする。

≪妾は再び眠りにつく、この書物はお前が持って行け、どうせ此処に有っても誰も見ぬし、他の者の眼にふれて良いモノではない≫

そう言うと、彼女は薄れて消えて行く。恐らくまた書の中に帰った

のであろう。牡丹はその書物を鞄に入れると、エヴァ達と一緒に指紋なども残さず帰る事にしたのであった。

そして、牡丹は有力な証言者を発見したのだ。阿礼の時代より前からその書物に憑依している文妖妃、彼女は後々様々な真実を教えてくれるだろう。まあ目覚めが何時になるのかは解らないが・・・。

３４話・奪取とも言える（後書き）

泣いているの？悲しんでいるの？大丈夫。妾が憑いている、お主の辛い過去も、少しは和らげられるように努力しよう、だから、そんなに泣かないで・・・。

35話・染み付いた記憶（前書き）

良い案が浮かばない・・・

35話・染み付いた記憶

――何故、貴方は行ってしまったのか――

夢を見ている、一人の女性のが登場人物だ。幼い頃はその髪を短く、おかっぱの様に切り揃えていたその少女は、年齢を重ねるとその濃い紫色の髪の毛を伸ばして行った。悲しげな表情をしたその女性は、筆を握っては瞳を潤ませる。女性でも解る程に美しい女性が、一人で泣いていた。

≪どうじゃ、見えとるか？牡丹≫

「あ、あぁ、でも、これは・・・」

≪稗田の記憶じゃ、確か阿礼の前の・・・名前を思い出せぬが、阿礼より前の稗田じゃ≫

文妖妃はそう言うと半透明な体でケタケタと笑っている。彼女の住んでいる屋敷には見覚えが有る、あのウロの怪と言うモノが居たあの武家屋敷だ。その書斎と思われる場所で、彼女は髪に付けていた髪飾りを外し、大事そうに木箱の中にしまう。古びた木箱だが、彼女はそれを大事そうに鍵付きの棚の中へとしまった。

【何処へ・・・行ってしまわれたのですか・・・■■様・・・】

雑音の混じった彼女の静かな声、その瞳には光等と言うモノがなかった。まるで主人に置いて行かれた忠犬、いや、もう獣と言っても良いのかもしれない。彼女の身体からは多くの血の匂いがした。彼女の手の届く場所には小さな刀、護身用であろうか、その刀は、鞘

に収まっていると言うのにその殺気を隠さずに発していた。

【稗田様!!また人を殺したのですか!!?もう隠しきれませんよ!!?】

【・・・あぁ、あの愚か者の事ですか。私には既に愛する夫が居ると言うのに】

【何人目でございますか!!それも今回の方も貴族の方!!】

【・・・貴女は、自分の大切な者と大勢の見ず知らずの者、どちらを取りますか?】

【そ・・・それは・・・】

彼女の書斎へと入って来たこの家に仕えるその女性は彼女のその言葉に言葉を詰まらせる。これは恐らくあの日記に染みついた記憶なのであろう。時代を超えて使われてきたあの日記の古い記憶。

≪どうじゃ、少しは役に立つじゃろう。じゃが・・・お主の知りたがっているウロの怪と、稗田が何処に行ったのかは解らぬがね・・・≫

彼女がそう言うと次第に過去の風景がかすれて消えて行く。眼が覚めるのか、そう考えていると今度は別の光景が映り始めた。その光景に文妖妃も眼を丸くする。何故こんな事に成ったのかと。自分が作った世界ではないと彼女はその鋭い目に警戒心を宿らせる。牡丹の近くには黒の古書が浮かんでいる、不気味に黒く禍々しい靄を発しながらこの夢の世界を支配しているかのように。

≪荒野の様じゃのぅ・・・≫

「・・・いや、ただの荒野では無いよ、濃い血の匂いがする。此処は私が思うに・・・戦場」

そんな事を言っていると、後ろから馬の嘶きが聞こえて来た。牡丹が後ろを振り向くとそこには黒馬にまたがった白銀の髪を持つ女性が重厚な鎧に身を包み、赤黒いマントを身に付けていた。顔は光の関係で見る事が出来なかったが、彼女の後ろには多くの黒い鎧を付けた騎士たちが馬に跨り続く。何処かで見た漆黒の国旗を風に靡かせ、目の前の物を関係なく蹂躙し、破壊していく。

【踏みつぶせ!叩き割れ!!我らが王に贄を捧げるのだ!!】

【勝利は我らに微笑もう!!いざ死地へ!!我らが故郷へ!!】

大きな剣で敵の首を狩ると、そこには紅い雨が降り注ぐ、大地を赤に染め上げ、彼女達は進軍していった。その中の白銀はソ恐ろしいほどに強く、理不尽なまでに死を振り撒いた。

黒の軍団が通り過ぎるその後には、屍の山が積み上げられる。その軍の中に一人、見覚えのある人物が居る。鎧の形も色も全く同じだ。首なし族のデュラ、先の大戦で協力してくれた者だった。

【・・・】

顔は見えないが、その白銀の髪を持った女性はその血の様に真っ赤な瞳で、憐れむようにその死体を見ていた。しかし何故か馬鹿にしているようにも見える。

黒い鎧を血の色に染めて、剣を片手にぶらんと構えて、ただその屍の山に冷たい視線を向ける。

【・・・可哀そうに】

そう言うと、不敵な笑みを浮かべボロボロの赤黒いマントを翻し、彼女は多くの騎士を引き連れて進軍していったのであった。

≪なっなんだったのじゃ!?今のは!!?≫

「・・・黒の書に染みついた・・・記憶とか・・・・?」

霧のように消えた黒の軍が居た場所を彼女達は見つめていた。

――――――――

――――

――

「・・・う?」

眼を開けると、朝の光が両目を焼いた。いや、焼いたとはただの例えだ。直ぐに眼を瞑る、何時も通りだ。心の眼で周囲を見れば痛くも無いし、普通に移動できる。

黒の古書と日記が鞄の中に有る事を確かめて下の階へと降りた、するとどうだろう。見た事の無い少女が客室に居るではないか、しかも妙に生気がない。

「キ、キティ?彼女は誰だい?」

「あぁ、アレは私の魔力と現代の科学を融合させたガイノイドと言う物の試作品らしい。眼鏡の娘が置いて行ったんだが・・・」

「・・・」

「まだ機能していないのかい？」

「あぁ、まだ試作段階らしいしな」

緑の髪の毛を持つその少女は家の隅でただ立っているだけであった、一応服は着ている物の、女性の恰好とは言いにくい、そこで甘楽とテルに彼女の事を任せ、牡丹は仕事に出かける事にする、朝食はテルが用意してくれたパンだった。甘楽は現在料理勉強中。

「おい牡丹！」

「？どうしたんだい、キティ」

「スタンガン忘れたぞ」

「普通な顔して持たせないでよ、此処から学園に行くには電車に乗らなくても行けるし」

「馬鹿、職員にセクハラをして来る奴が居るかもしれないだろうが！タカミチとか！！」

「・・・彼は小心モノだからなぁ・・・」

「あ、そうだったな。安心したぞ、だが一応杖は持って行け」

この会話は、一体何なのであろうか。雰囲気ぶち壊しである。

３５話・染み付いた記憶（後書き）

白銀の髪の女性、彼女を見ると何故か懐かしい気がした。

36話・息抜き（前書き）

何か、最近物凄く疲れます。

36話・息抜き

――休息――

エヴァは最近ゲームと言う物に熱中している、しかし・・・何と言うか・・・下手の横好きと言うのか、彼女はそんなにそのゲームと言うモノが得意ではない、しかも今回彼女が買って来たゲームはレベルを上げていくモノで、職業をしっかりと選ばなければ難易度がぐっと上がると言う上級者向けの物だった。

「あぁ、買ったのかい？それ」

【ネット上ではかなりの難易度だと噂に成っていましたが・・・】

「エヴァ様、途中で飽きて投げ出さないでくださいよ？」

「大丈夫だ！私もそこまで下手じゃない！！」

――3時間後

「・・・牡丹、助けてくれ・・・」

「・・・私は明日の授業のプリントを作成しているのだけれど」

「もう後は印刷だけだろう？」

「そう言う所は良く見ているよね・・・君」

牡丹はやれやれとテレビの前のソファーに座る、エヴァのステータ

スと現在のステージを見て少し驚いた。何と最初のステージで、しかもレベルが全く上がっていないのだ。彼女は3時間もゲームを続けていたのに、何故レベルが3なのだろうか、疑問が尽きる事がない。

「はぁ・・・レベルはあげておくから、君はもうお風呂に入ってきな」

「・・・解った」

そう言うと、エヴァはすくっと立ち上がり風呂の方へと向かう、彼女について行くメイド達にアイコンタクトを送ると、漢書たちは静かにうなずいた。エヴァは一人で風呂に向かわせると簡単にしか髪を洗わないのだ。眼を瞑ったままゲームをするのも変な感じだが、それでも家族の頼みだ、仕方ないだろう。

「えっと・・・操作は・・・あぁ、成程。コマンド式か」

ドラゴンアドベンチャーと言うシリーズ物のゲームで、これはその最新作らしい。牡丹もゲーム等は全くやった事はないが、こう言うモノはとりあえずレベルを上げるモノだと生徒に聞いた事があるので、その方法を試そうと思う。確か最初のお城の周辺に出て来る若干弱い敵を永遠に狩り続ける作業だ。

少ししてエヴァが風呂からあがって来た。既に何処にも出かけないようなラフな格好になっている。着ているモノは薄いモノで、布の生地が若干透けている気がするのだが・・・まあ、彼女の趣味なので黙っておこう。

「どうだ?進んだか??」

「いや、君が居ないのにイベントを進めちゃ駄目だろう？だからレベルを上げていたのさ」

「ほう、どれど・・・は？」

主人公キャラクターの下に表示されているレベルが異様であった。この短時間にどうやればこうなるのであろうかと言える程にキャラクターのレベルが上がっている。普通、このゲームの序盤はレベルが１５以上あれば簡単に中盤まで進められるのであるが、彼女の育てたレベルは何と

「６８！？牡丹！どうやったんだ！！？」

「え？たまに出て来る銀色の三角錐型のモンスターを余さず狩っていたんだけれど・・・」

「レアモンスターじゃないか！！」

主人公技も最初に比べて強くなっているが、その相棒と言う事に成っているキャラクターのレベルもそれ相応に上がっていた。しかし武器は最初の物である。

「もう良いかな？私もそろそろお風呂に入って来るよ」

「あ、あぁ、ありがとう」

牡丹はエヴァにコントローラーを渡すと、着替えを持った廿楽を連れて風呂へと向かって行った。

それにしても、何故こんなに大きく風呂を作ったのであろうか、レベル的には大浴場である。王族の入る様な豪華な装飾だった。もう

慣れてしまったが、エヴァの微妙なセンスが所々に光っており、少し残念とも言える。

【お背中お流しいたします】

「嬉しいけれど、その手から出ている糸は何かな？」

【】

「何か答えようよ、まあ、君の考えている事は手に取るように解るけれど」

全く、最近の甘楽は何故か縛りたがる事が多い、そのままの変な展開に巻き込まれないようにしっかりと怒っているのだが、彼女は元々女郎蜘蛛、リードしたいのであろう。まあ、甘楽は牡丹やエヴァの教育によって、虐められる事に快感を覚える事が出来るのだが・・・。

正直、その生癖がやったいだ。一般的にドMと呼ばれるキャラに育ってしまった・・・。

【相変わらず、綺麗な髪ですね】

「そう言ってくれるとありがたいよ、まぁ、手入れも何もしていないのだけれどね」

長すぎるその髪を甘楽は丁寧に洗っていく。

「しかし・・・あの夢の中で見た光景は何だったのかなぁ」

荒野の黒い騎士団。白銀の女性、そして魔法世界に居た筈の女鎧騎

士。

稗田の家に居た濃い紫色の髪を持つ女性、そしてその傍らに有った恐ろしいほどの殺気を放つ刀。消えたウロの怪に文妖妃、そして何故か国の最高防御設備に隠されていた稗田の日記。

「全く、運命は一体何を望んでいるのさ・・・マーリンもなぞるではなく、辿ると言っていたし・・・白の髪の毛の女性も解らないし・・・」

【・・・無理はしないでくださいね】

「大丈夫さ、今は、ね」

正気を保っていられるのは、父への思いかもしれない。最近になって、変な出会いや情報が一気に入ってきたのだ、混乱しない方がおかしいだろう。

白の髪の少女に気を付けろ、重々しいマーリンの真剣な声が頭の中を回る、彼女に渡されたヒントと、その他の情報を集めて稗田の家も、ウロの事も知った。しかし問題なのは白髪の少女である。

「（・・・白髪の少女の情報がもう少し有れば・・・）」

風呂の中でも彼女の考えと悩みは、尽きる事がなかったのであった。

36話・息抜き（後書き）

秘密のお茶会、今日は誰が来るのかな?帽子をかむったボーイッシュな少女は楽しそうに笑った。

37話・始まりの予感（前書き）

私、とことんついてない・・・

37話・始まりの予感

――溶ける――

数年など、早かった。監督していた学生が卒業し大学へ進む者、そのまま就職する者と多く居たが、その中でも不良には手を焼いた。まあ、最終的に産まれて来てごめんなさいと言わせるほどに教育して来た。盲目と言う彼女の設定上から、不良達からは盲目の死神と言われ恐れられている。

「・・・よし、提出用のプリントは全部だね。明日奈」

「本当・・・先生のプリントは多すぎですよ・・・」

「まあ提出物の点数もテストに入るから赤点はあまり無いだろう？」

高等部の様に提出物の点数を足しているので赤点者は少ない。ただし提出物の点数が大きいので提出しないとかなり低い点数に成ってしまう。出せば天国、出さねば地獄だ。因みに、エヴァは牡丹を守る為と言い明日奈と同じクラスに転校生として在籍している。夕暮れ時の紅い夕陽が職員室の中を照らしていた。

「そう言えば先生、最近先生体調が悪そうですけど、大丈夫ですか？」

「？あぁ、最近君のクラスは午前中の授業だからね、私は朝に弱くて」

歳かな、そう笑う彼女。見た目成長していない長い黒髪もそのまま

だ。固く閉ざされたその瞳で彼女は明日奈の顔をじっと見つめる。最近彼女もクラスに溶け込んで来ている、まあ、彼女のクラスは変わり種が多いので逆に馴染めない方が珍しいが・・・。何時もエヴァが疲れた顔で帰って来る理由だ。

ソレと、最近試作だったエヴァの魔力と近代科学を合成させたガイノイドが起動した。名前を茶々丸と言う。そして、帝国側にテルが出張している。理由は人数不足でテオドラが困っていたからだ。テルは優秀だし、戦える。因みに甘楽と一週間交代で帝国に出張しているのだ。

「明日はタカミチの授業が有るからね、教科書を忘れちゃだめだよ？」

「大丈夫です！先生、さよ―なら！！」

「気を付けて帰るんだよ―」

そう言うと彼女は自販機で買ったコーヒー牛乳を飲む。紙パックにストローを刺すタイプの物だ、昔からある物だが、味は確かだった。確かに職員室には温かいコーヒーも有るのであるが、彼女は恐ろしく気まぐれなのでこう言う行動をとるのだ。

「牡丹さん、お疲れ様です」

「やあタカミチ。そろそろ終わるけど、タカミチこの後何処行く？」

「そうですね、最近は他の仕事も有りませんし、久々に飲みに出も行きますか？」

「そうだねぇ、私もこの後夜のお仕事まで暇だしね」

夜のお仕事とはもちろん悪魔退治である。最近の大きい事件と言えば伯爵級の悪魔が学園内に侵入した時いたが、【何か】に喰われてそのまま消滅と聞いた。何に食われたのであろう、やはり、この学園には何かある。
タカミチも、その他の魔法関係者も知らない何か、それが絶対にこの学園には有る。

「・・・ねぇタカミチ」

「？何ですか」

「君、私を肩車するの好きだよね」

「あはは、数年前から続けていますからね」

そんなくだらない会話を交わしながら彼女はタカミチの髪の毛を掴んでいる。

「そう言えば最近、牡丹さんは良く出かけていましたよね」

「少しね、聖杯をめぐる戦争で一人の少女を虫の老人から助けたりしていたんだ」

「・・・それ、軽く世界を超えていませんか？」

「私はラカンよりも常識は有ると思うよ？」

「僕からすれば確実にチートですがね」

そう言いながら少々日が暮れ暗くなった道を彼と彼女は共に行く、学園のメイン街から少し離れた場所にそこは有る。安いのに美味しい店だ。まぁ、そう言っても牡丹はアルコール類はあまり飲まないのでそこで売っているちょっとした御摘みが目当てだったりする。

「そう言えば牡丹さん、聞きましたか？」

「？何をだい」

「何でも何処かの魔法学校から魔法先生が派遣されて来るらしいですよ？僕もあまり深くは聞いていませんが・・・」

学園長が嬉しそうだったと聞いた瞬間に牡丹の顔は曇った。此処の学園長は良い奴なのか嫌な奴なのか解らないのだ、少し前は何故か牡丹にお見合いを勧めて来ていた。

「それは・・・私にとっては面白い話ではないね」

御摘みを口の中に放り込みながら彼女は少しその整った顔を歪めた。この学校には正義の魔法使いを目指すモノがとても多い、それ故に歴史の裏側を語る者達にとっては辛い所なのだ。正義の物語は語る者達によって美化され、暗い部分は後世に伝わりにくい。

「この学園でも、あの大戦に参加したモノは少なく、裏を伝えようとはしない」

「・・・」

「私は・・・僕は伝えるつもりだよ？真実と言うモノをね、それが私だ」

黒の古書と同じく、彼女はこの世界の歴史をそれなりに書き残している。ソレは既に本当の歴史を語る書とも言えるが、それに牡丹は気が付いていない。

「牡丹さんは、昔から変わりませんね」

「あはは、私がそんなにコロコロ変わったら面倒だろう？」

長い黒の杖は彼女のすぐ横に立てられていた。この黒の杖は火防女の正装として与えられた物だ。楔の神殿に一式有ったモノで、鬼孕みの儀式の後洞窟に籠っていた時には既にあの杖は持っていた。

「さて、そろそろ仕事の時間だ。失礼するよ」

牡丹はそう言うと、料金をテーブルの上に置きその場を後にした。

紅い月が学園を不気味に照らす、その中悪魔の亡骸の上に立つ黒衣の火防女、その長い黒の杖の先には青白い炎が灯っていた。彼女はその閉じていた目を静かに開く、紅い紅い、まるで血の様な紅い瞳が姿を現した。

「世界を繋ぐ者達に、その命貸し与えたまえ」

刹那、彼女に襲いかかる3体の影、その影は魔力を溜めこんだ腕を振り上げて彼女に叩き落としたのであった。しかし、彼女は傷つく事無く、悪魔の拳は2つに分かれていた。

「汝の死を今此処に」

残酷な笑みで彼女は紅く染まった血の海で残酷に笑うのであった。

37話・始まりの予感（後書き）

まるで地獄、神代の神はその世界の未来をみてそう呟いた。

38話・依頼は・・・（前書き）

少し学園から離れるお話

38話・依頼は・・・

――その日に彼女はそこに居ない――

出張だ、そう、ただの出張。褐色の肌の少女、真名と言う生徒と共に日本の外の森へと来ていた。黒衣の火防女の正装で、その手には黒の杖が持たれている。確か今日、新しい魔法教師が来るのであったか、まあ、別にそんな事はどうでも良い、今回の依頼は大胆にふざけているのだから。

「でも、本当に龍なんて物が居ると思うかい？先生」

「私が思うに、罠かな」

龍なんて幻想種、普通人間の眼の前に姿を現すモノではない。しかもあの種族はプライドが高く数百年前に殺し合っていた記憶が有る。もしまだ生きているとするのなら、ソレはとても賢く強い種であろう。そう簡単に人間に危害を加えようとするだろうか。

「此処が目的の場所だね」

「・・・何もないですね」

「そうとも限らないよ」

牡丹が素早く片手で何かを掴んだ、ソレは弓の様であった。しかも、普通の弓ではなく魔法の弓だ。光系の魔法、魔法の矢を彼女は平気な顔で掴んだのだ。

「襲撃、民族でもなく。私達2人に恨みを持つ者だろうね」

「私もですか」

「君の私の様に多くを殺しているだろう?当り前さ」

人数的にもね、と牡丹は笑う。周囲には先ほどまでまるで違う気配が漂っていた。殺気に満ち溢れた森の中、2人ともこの森には初めて入る。恐らく、あちらの方が有利であろう。このままでは、だが。

「真名、伏せな」

「?」

真名が腰を低く落とすと、牡丹はその黒の杖を両手を使って頭の上で降り回し始めた。空気を切る音が聞こえて来る。ヒュオッと言う音ととこの、その杖には青白い炎が灯っていた。

「不利なら、有利に変えてしまえば良い」

刹那、突風が吹き荒れる。周囲の木々をなぎ倒し、あるいは切り刻みその風は吹き荒れて行った。そこに残った者達はローブを着こんだ正体不明の魔法使いに、牡丹と真名だけだ。

襲撃して来た集団は少しの戦力を先ほどの風で失っている。

――そして、牡丹はその紅い瞳を開いた――

「やあ皆さま。満身創痍と取れるが、大丈夫かい」

「・・・っなめた真似を!」

光の矢１０５本。先ほどとは大きく違い、今度は物量で潰しに来た、流石の真名もこれには少しの動揺を見せる。

「先生、大丈夫かい。これ」

「無問題、伏せてな。君は私より身長が大きいからね」

「この数だ、魔法障壁など役に立たない筈！」

「君は私が大戦時何と呼ばれていたのか忘れたのかい？」

彼女は黒の杖を静かに地面について、そのまま動こうともしなかった。その矢は彼女の身体目掛けて容赦なく迫り来る、しかし彼女は助けを求めたり、泣いたりなどはしなかった。ただ、目の前に迫っているその矢を見る。

それは一瞬の出来事だ、彼等の魔法は確かに人を簡単に殺せるレベルだった。しかし彼女は何もしていないのに、彼等の魔法の矢は掻き消えた、掻き消されたと言っても良いだろう。

「・・・馬鹿な・・・ッ！」

「マジックキャンセルだと!?上級悪魔でもそんな能力を持っている奴は居ないぞ!?」

「私にも、魔法は使えるんだよ」

彼女の周囲には何時の間には魔法陣が展開されていた。大規模なモノではないが、その細かさから常人には描けるモノではない事が明

らかだ。
吸魔、彼女はそう呟いた。先ほどの魔法の矢を、彼女は全て吸収したと言うのだ。有り得ない、有ってはならないレベルの出来事だ。

「そうか・・・お前は大戦の時【戦火の徒】と言われ恐れられた化物!!そう簡単には死なないか!!」

「そうさ、私は既に化物、君達の様な者が勝てる筈の無いモノだ」

黒から黒が溢れる、その黒い靄は周囲を暗く濁らせた、太陽の光も遮られ薄暗くなる。その中、彼女の紅い瞳が嫌に輝いていた。光の無い筈のその瞳がまるで獲物を確認するかのように動く、真名も今が反撃する時と言わんばかりに拳銃を取り出していた。

「私達にどんな恨みが有ったのかは知らないし、知る気も無い」

「だが、コレだけは言える」

「「私達に挑んだ事が、既に愚かなんだよ」」

氷で出来た無数の剣が、無数の鉛玉が、彼等の身体を貫いて行く。なす術もなく蹂躙される男達、この光景、記憶の何処かに引っ掛かった。そう、確かアレは荒野の・・・。

【可哀そうに】

そう、言いながら笑う白銀と自分が、嫌に似ていると感じた。自分の口元に浮かんだ残酷な笑み、そして倒れた死者を見る冷たい瞳、何故、此処で黒の書の中の記憶と自分が重なるのか。深く考えようとすると頭が痛くなった。

全てが終わった頃には、帰りの汽車の中であった。死体は全て焼却処分した。空港のある街まで帰るにはこの黒煙を吐きだす時代遅れとも言えそうな汽車に乗らねばならない。

「今回の仕事は、大変でしたね」

「全く、学園長もしっかりと確認してほしいね」

「全くです」

そんなくだらない会話、しかしあんな仕事の後だと何故か異様に落ち着いた。汽車の中の販売員からコーヒーを2つ買って真名に渡す、真名は最初遠慮したが、この地方は以外とさむい、お互い薄手だ、温かいモノの誘惑に負けたのは真名であった。

「そう言えば先生、先生は私と仕事と聞いても驚きませんでしたね」

「うん?その程度で驚いていたら私はもう死んでるよ。何せ音速で走る男の肩に乗った事が有るからね」

「・・・先生、貴女本当に人間ですか?」

「分類的には化物だと思うよ」

そう言いながら彼女はその閉じた瞳の顔で静かに笑った。お互い少々血生臭い、空港についても次の便は遅いのだから、その辺りの宿にでも止まってシャワーでも浴びようかと話しながら帰り道へと向かう。

38話・依頼は・・・（後書き）

こんにちは、今日も良いお天気ですね。
えぇ、こんにちは【稗田様】

39話・ホレ薬（前書き）

なにそれこわい。

最近ドリフターズ買った、ちょっ、平野先生ソレアウトです

39話・ホレ薬

――五月蠅い――

学園に帰って来ると異様に五月蠅かった。真名も同時に首を傾げる、はて、何故こんなにもお祭り騒ぎなのであろうか。そう考えていると一人の少年の姿が眼に入った、何処か見覚えのある赤髪に特徴的な杖。しかしどう言う事だろう、その少年を見ると酷く心が疼く。

「？先生、大丈夫かい」

「あ、あぁ、何でもない。心配は無用だよ」

眼を瞑っているとは言え、心の眼で見ただけなのにこの心の疼きは何だろう。感じた事の無い感情だ、鼓動が速く、頬もやや熱い。ドクドクと言う何時もより速いペースで心臓から血液が巡っていた。

「やはり体調が優れないのでは？」

「心配はいらないって、大丈夫・・・っ！？」

胸が締め付けられる。少年の姿が見えなくなると急激に寂しさが襲いかかって来た。

「御免！真名、学園長に報告よろしくね！！」

そう言い残すと足に魔力を充填し少年の後を追った、体力がないので魔力でドーピングしながらだ。赤髪の少年も彼女の姿に何だろうと思い立ち止まる。

「あ、あの、どうかしたんですか？」

「君・・・名前は？」

「僕は新しくこの学校に来ました、ネギ・スプリングフィールドと言います」

「そ、そうか。私のは」「牡丹様発見、直ちに強制帰還」

「うわっ！？ちょっ、茶々丸？！なにするのさ！？」

ワイヤーの様なモノで拘束され、エヴァの待つ家へと強制連行される。家の中には心配そうな顔のエヴァがオロオロしていた。面白い光景だが、今はそれよりもあの少年の事が気になって仕方がない。この激情に任せて、殺してしまおうか。そんな事も考えていた。

「お、おい茶々丸。牡丹はどうしたのだ！？」

「解りませんが、うっすらと魔力反応が有ります」

「おい！牡丹！！しっかりしろ！！」

エヴァが彼女の首元を掴みガクガクと振ると彼女はエヴァの方向を見て気の抜けた返事を返した。完全に異常事態だ、こんな事は長い付き合いの内に一度も無かった。・・・いや、コイツが初めて酒を飲んだ時にもこうなったが、ソレ以来だ。

「魔力スキャン終了、どうやらホレ薬の当てられていますね」

「ホレ薬だと!?だが牡丹には魔力を無効化できる黒の古書が」

「現在では失った魔力を回復する為に吸収を行っているようです」

「それでか・・・」

彼女の魔法抵抗は殆んど黒の古書から来ているので、彼女本体の魔法免疫力はゼロに等しい、それは柘榴と言う鬼と融合した後も変わらないようだ。幸せそうな顔でポァ～としている彼女、その彼女を見ていると彼女が今現在考えているであろう相手に妙に腹が立った。

「茶々丸、その魔力の出元は解るか?」

「既に対象の撮影に成功しております」

「・・・良し、行くぞ茶々丸」

「仰せの通りに」

エヴァは既にこの学園結界の管理から外れているのでその身に宿る大きな魔力を刃の様に鋭くして茶々丸と共に外へと向かう、牡丹はまだ魔力が抜けていないのかフワフワしていた。

「・・・ハッ」

フワフワしていたと思ったら今度は鼻で笑った。一体何がしたいのであろうか。

「僕が恋?ふざけるなよ劣等が」

完全にキャラが壊れている。

「私は独り身を貫くんだ、あんな餓鬼に餓鬼にガキにがき・・・に」

また、顔が赤くなった。ボンッと言う音と共に彼女はその場に倒れ込む、それを見ていたのは一週間交代で帝国から返って来ていたテルであった。彼女は牡丹の異常差を認識するとそのメイド服の下に仕込みナイフを仕込んだ。牡丹をソファーに寝かせ、優しい笑みを浮かべる。

「安心して下さい、マスター。貴女は誰にも奪わせません。私達だけの牡丹様ですから・・・」

そう言うと、彼女も静かにドアを開けて出て行ってしまった。

――――――――

「目標確認、マスター指示を」

「撃て」

「・・・しかし現在の時刻的にもこちらは不利かと」

何を血迷ったか、エヴァは公共の場で赤髪の少年に発砲しろと命令した、流石にソレはまずいと茶々丸は踏みとどまるが、それでもエヴァの気は収まらないらしい。

「えぇい！お前がやらないのならば私がぁ！！」

「お、おやめ下さいマスター！此処では周囲に人間が多すぎます！！」

「投げナイフなら発砲音もしませんし、私が」

「「何時からそこに居た（居たのですか）？テル（姉様）」」

飾りの少ないメイド服に身を包んだ女性、テルがその手にナイフを構えていた。お前はどこのアサシンだと言いたくなるが、ぐっと堪えよう。何せ彼女は今まで牡丹専属のメイドとして様々に自分を鍛えて来た。昔は無人島で食料を調達して来ていたし、下手をすれば彼女はこの中でも最もチートな存在なのかもしれない。

この後、タカミチが止めに入るまでこの言い争いは続いたと言う。

39話・ホレ薬（後書き）

聖戦は、彼女達の知らない場所で幕を上げる。

４０話・狂気の幕開け（前書き）

原作ネギま、東方に成っているけど、実際中身がほとんどオリジナル化して来てるって言う。ドシリアス。残酷な表現有りです。苦手な人はバックをお願いします。

４０話・狂気の幕開け

――【新陛下・・・か、笑わせる】――

魔法世界、黒い鎧の騎士がその手に血に染まったクレイモアを振り回し首を狩っていた。その街は既に壊滅状態、正規兵も既に死に絶えた。男、女、関係なく死に絶えたその城で死神は静かに笑っていた、鉄仮面の後ろからクツクツと笑う彼女の姿はどう見ても異常者だった。
生き残ってしまった者達が城の中庭に幽閉されている。

「ハハッハハハッ！！！何が世界線か！！こうしてしまえば何処も彼処も同じではないか！！」

「良くやりましたね、騎士十字賞モノですよ」

「身に余ります、武装メイド親衛隊大隊体長、メアリー殿」

城の中から姿を現したのは見覚えのある死人と同じ青白い肌を持った一人のメイドであった。彼女の手には血濡れたスコップが握られている。

「亜人の村から攫われていた女性少女、さらには幼女までよくもまぁやったものだ。地下の牢屋を見た？」

「いえ」

「うん、アレは見ない方が良い。私達が最も嫌う光景だ」

そう言うとメアリーはスコップを投げ捨てる、此処の城の元支配者が描かれた油絵に突き刺さった。

「は、かの御方が亡くなられて何年掛ったか」

「左様でございますな」

「やっとだ、此処にやっと我らは再生を迎える事が出来る」

「えぇ、既に贄の準備は整っております。後は黒の古書だけでございます」

「結構、大いに結構だ。もうすぐ我らが同胞達も集まって来るだろう」

「愉快ですな、誰も知らぬうちから、こそこそとしていた我々が、遂に表舞台に顔を出すと言う訳ですか」

黒の騎士が鉄仮面を取る、狂気の笑みを浮かべたデュラの顔があらわに成った。

「貴女、まだ持っているのでしょう？」

「えぇ、もちろんです」

彼女は大事そうに懐から黒の布を取り出す、漆黒とも言えるその布は綺麗に折り畳まれていた。メアリーはそれを見るとニッと意味ありげな笑みを浮かべた。

「本当に貴女の忠義、大したものです」

「感謝の極み」

ソレは彼女の手によって広げられた、漆黒の大きな布、ソレは【国旗】だ。漆黒色の国旗は光すら跳ね返す事の無いように特殊な技術が使われている。

「今の堕落した都には興味がない。我々の王はやはりあの方だけなのだ」

ズル、ズル、と何かを引きずる音、その先には黒く長い髪を持つ妖怪、ウロの姿が有った。ウロは近くの椅子に座ると引きずって来た少女の死体の腕を貪り喰う。骨を砕く嫌な音が聞こえた。

「おい貴様、何をしている」

「何って、腹ごしらえに決まってんだろぉ？俺だって妖怪だ、人も喰う」

「男を食えば良いだろ、私達はそう言った光景は好まぬ」

「はっそりゃ失礼した」

ギザギザとしている歯に血をこびり付かせながら彼女は死体を喰らう。その光景を懐かしそうに見るメアリーと、その光景があまり好きではないデュラ、殺す事と喰う事では全く違う。
ウロの口調が大分違うが、こちらが彼女の本当の喋り方だ。

「亜人共の死体は殆んど犯されていたじゃないか、酷い世界だな」

キヒヒッとウロは笑った。

「男はケモノだ、故に死なねばならぬ」

「その言葉は・・・」

「そう、我らが王の言葉」

「良いね良いね最高だ！表の舞台では何も知らない人形が踊っているが、俺は好きだぜそう言うのさ！皆殺しは文化だよなぁ！！」

「・・・ふん、野蛮な者め」

「仕方ねぇさ、俺は生きる為なら同族でも赤子でも喰ったからな」

デュラとウロが邪険な雰囲気を充満させているが、その様子を楽しそうに見るメアリーは二人を止める気はないようだ。中庭に集められた人間を見下し、魔法使い達が魔法を使えないように結界を張っている。

「しかし、死霊騎士団も王と命を共にしております、彼女達の【再生】には少し時間が掛るのでは・・・？」

「カッそんな事あるかよ」

ウロが死体から腕を引き千切った。

「特殊訓練を受け、武装メイド部隊の次に戦闘に長けていた奴らだぞ？心配は無用だろうが」

「そうですね、貴女は首なしの部隊出身ですからそこまでは知りませんか」

「は、はぁ・・・」

「機密訓練と言うモノが有りましてね。育成プランDと言うモノを受けている死者だけの部隊、それが死霊騎士団なのですよ」

今の国では廃止されているが、絶対的な強さを誇る対転生者用の部隊であった死霊騎士団。怨みの強い女性の死体が選ばれ、その中でも処女だけが正式に部隊に加えられる。剣等の特別な仕込みのある改造された武器を手に持ち、王の為に自らの命すらもゴミの様に扱う最強部隊、災厄とも言われ恐れられた存在。

「牡丹様には悪いが、我らはもう我慢の限界だ。あんなに平和的な世界、私達には似合わぬ」

「男は殺され、女は犯される？そんな世界は御免だね」

キヒッ

「死体だけに成っても良い、完全なる王の支配の元、王を神と崇めて生活するあの懐かしの都を」

「此処に再生させよう、この世界の原住民の事等、知った事ではない」

そう言うとメアリーは自らの継ぎ接ぎだらけの手を見る、主と呼び生涯この身体が動く限り尽くそうと思っていた者が消えてから古傷は一向に消えない身体に成っているのだ。これが祝福を失うと言う

事だろう。

「近い目標としては死霊騎士団の発見と再生、近隣の亜人達の救出、魔法世界からの探知妨害と完全なる世界からの妨害阻止」

「是非ともクサナギとイザナギの姉妹が欲しい所ですな」

「駄目だ、あいつ等はマザーシステムに記憶を書きかえられている、役には立たんさ」

「後はどうやって牡丹様から黒の古書を拝借するか、と言う所」

「その為のウロ、だろう」

「キヒヒヒッ任せろよ。俺の似姿は体温から体臭まで表現できる」

「「「全ては完全なる王の為に、我らが王都の復興の為に」」」

知らぬ所で、彼女達の狂気は幕を上げていた。

４０話・狂気の幕開け（後書き）

【稗田様】、何故何時もその綿帽子を冠っているのですか？
それは、内緒、だよ

41話・彼女の父（前書き）

原作タグを追加した方がいいですね。これはもうネギまでも東方でもないですし。

41話・彼女の父

――衝撃――

≪聞こえておるか!!牡丹!!何者かが魔法世界の地方の城を落としたらしいのじゃ!!妾達と同盟を組んでいない国であったのじゃが、その国の一部を乗っ取り建国を宣言した!!≫

「・・・え?」

≪疑いたくなるのも解る!!妾とて最初は信じられんかった!!じゃがの、あの狂気の旗を見れば信じざるおえなかったのじゃ!!≫

狂気に満ちた漆黒の国旗、暗く淀んだその地方の空が映し出された。外にまるで家畜の様に鎖繋がれた人間も映っている。どの様に考えても地獄絵図だ、繋がれている者達の男は既に殺され、その死体は無残にも喰い荒らされている。聞こえて来る呻き声は人間のモノだろうか。

≪奴らの要求は・・・その・・・≫

「なんだい、君らしくない」

≪・・・お前なのじゃ≫

「・・・え?」

≪黒衣の火防女を差し出せと言って来ておる。帝国には居ないと言っておるが、やはり民間からさっさと差し出せと言う声が出て来て

いる。暴動まで起きている始末じゃ・・・≫

世界を救った英雄と言えども、既に化物扱いか。
牡丹はそう考えた、既に自分は彼等の、民衆の中では過去の遺物なのであろう。まぁ、街一つ地図から消せばこうなるか。そう諦めるしかないのだろうか。

「その国の名前は・・・？」

≪・・・・≫

≪【狂国】らしい≫

狂った国、変わった名前であった。しかし何処か懐かしい気がする、映像の中で揺れる漆黒の国旗も何処かで見た事が有る。一体何者なのか。

「失礼する！！牡丹は居るか！！」

≪誰か来たようじゃの・・・一度、帝国に顔を出してくれ≫

「ああ、解ったよ」

そう言うと通信を切る、後ろを見るとそこには綺麗な金髪の女性が立っていた。その手には大きな杖が握られている。そう、大賢者マーリンだ。

「遂に旧家臣が動き出した、王は不在と言えども彼女達はその王の為に国取りを開始する筈だ」

「旧家臣・・・？一体何の・・・」

「えぇい！！面倒だ！！奴らは死都と言う所で狂王に仕えていた！！今ではその狂王は王権を子に譲り、姿を消している！！しかし奴らはどうやら狂王以外を王には認めないらしい！！」

何時になく真剣なマーリン、彼女の服装も楽な格好ではなく何処か物々しい装備を整えていた。まるで今から戦争でも始まるようだ。

「奴らはお前を狙っている！！これで面倒事が増えた！２代目狂王もお前を狙っているのだからな！！」

「ど、どう言う事だい？」

動揺を隠せないマーリン、それもその筈だ、いきなり物語が音を立てて進み始めたのだ。これは既に昔の事とは言えない。黒の書に書いてあったおとぎ話の登場人物が実際にこの世界に存在して来ている。一体何が有ったと言うのか。

「お前がどちらの狂王につこうと勝手だが、コレだけは言える」

「大切な物は抱きしめておけ、絶対に手放すな！！一瞬でも放してしまえば失うぞ！！永遠にな！！」

何が、何が始まるのか。死の匂いが濃くなっていく、今までは気に成らなかったが、マーリンからも濃い血の匂いが漂っていた。幻覚であろうか、彼女の手が一瞬血まみれに見える。

「ッ時間か、私は行く！３賢の一人としてこの世界の崩壊を防がねばならないのでな！！」

そう言うと彼女はまるで霧が霧散するように消えてしまった。残った牡丹は急いで黒の古書を捲り始める。今の状況の真実を知る為に。

――二代目狂王――

父の残した遺産を使い、世界を作ろうとしたが失敗。後に自分も父と同じ存在に、同じ境地へ至ろうとした。その結果心身ともに不安定な状態に陥り、現在では代理の者が国を治めている。

――狂国――

初代王を崇拝する旧家臣によって作られた新国家。旧家臣は二代目狂王により全員死都、および魔都から追放され、様々な世界に散っていた。しかしそれが再び集結しようとしている。

「情報が少なすぎる・・・！」

恐らく、どちらかはこの学園にも攻撃を仕掛けて来るだろう。黒の書が正しければ平気で人間の科学力の上を行っている様であるし。エヴァ達にはこの事を伝える事にする、それにテオドラの所にも顔を出さなければ。いよいよ原点から離れて来てしまった。書の中ではしばらくの間平穏が続いた気がするが、そんな事はないようだ。

――メアリー――

現在狂国のトップにして初代狂王の右腕、様々な死体の情報を引き継ぎ作られたアンデッドでもある。狂王の血が作製時混入し、恐ろしい程の戦闘能力を得ている。

――デュラ――

元、首抜け騎士団のナンバー3。実質彼女の年齢でナンバーに入る事が異例の出来事であった。剣術に長けており、鉛でも鋼でもお構いなく両断する程の力を持つ。

――ウロの怪――

人喰いの大妖怪。気が狂っているとも言われる、狂王を追い何時かは自らの者にしようと企む。人肉を好み、その力は鬼すらも凌駕している。

「この三人・・・ッふざけているのかい！！？」

書の写し出した真実の情報、ソレはどちらの2国とも、狂王と言う人物を巡っていると言う事だった。初代狂王とはどのような人物なのか、書の中を細かく探す。

――狂王――

己の為に多くを殺めた悪鬼、人類最大の敵とも言われ串刺しと言う死刑法を好む。1人を生き返らせる為に最も多くの生き物を殺害した故人。既に死去し、妻と共に人知れず静かに眠っている。

――狂王の妻――

数多の転生を繰り返し、夫と再開を果たした。しかし夫の最後の戦争後、共に姿を消し生体反応を断っている。その手は多くを殺めたが、愛に満ちていた。一途にも一人の者に永遠の愛を誓った故人。

「・・・既に亡くなっているじゃないか・・・それなのにこんな戦いを・・・？」

≪人はそう言う物じゃよ、牡丹≫

「文妖妃！？」

≪はっきりと解ったわ。お主の黒の書と言う物に憑依してな≫

文妖妃は半分透けている姿で黒の古書を指差した。

≪何故、お前から懐かしい気がしたのか、そして、奴らがお主を求める理由≫

「・・・解ったのかい？私にも解らなかった事なのに」

≪・・・言いにくい話じゃが・・・≫

≪――主は、狂王の胎から産まれ出た、純粋な狂王の血を最も濃く引く【狂王の子の一人】なのじゃよ・・・≫

時間が、止まった気がした。

４１話・彼女の父（後書き）

どうしたのですか？【稗田空木様】

・・・いや、少し変わった風がふいたなぁ・・・てね

42話・狂国（前書き）

ネギま要素、ゼロ

42話・狂国

――接触する――

帝国の飛空艇に乗って狂国に向かっていた。何と驚く事にあの国が交友的に歓迎の意を示したのだ。帝国は最初それを疑った物の、狂国は武装を解除する事で戦闘行為を行う事を否定、帝国との話し合いと成った、しかし帝国が入国を許可した者は牡丹だけであり、一人でも動かす事の出来る簡単な飛行艇で彼女を国へと向かわせている。

次第に空は黒くなり、周囲は嫌な静けさに包まれていた。

「ようこそ、歓迎するよ」

初めに出会った者はギザギザの鋭い歯を持つウロの怪だった。簡単なワンピース系の服であったが服の端に血が付着している。ニィッと笑う彼女の顔が少々不気味に見えた。

「君、随分雰囲気変わったねぇ」

「キヒヒッこっちが素さ」

そう言うと彼女はヒタヒタと石造りの廊下を歩いて行く。それについて行く牡丹、城の中は以外と綺麗にされている。数日前まで戦争が有った城だとは思えない。

「何で中庭に人間が繋がれているの・・・？」

「ソレはオレも詳しく知らないな、オレはあいつ等の国の国民では

ないからな」

ニヒッと言いながら懐から何かの燻製を取り出してそれを齧り始める、ブツリと肉が引き千切られる音がした。彼女は本来、王が座る筈の玉座の間に案内される。空の玉座の横に控える飾りの無いメイド服の女性と鎧に身を固めた少女が眼には行った。

「良く来ましたね、牡丹様」

「貴女は・・・メアリー・・・？私が召喚した・・・」

「そうです、あの後私は白の古書の残りの力でこの世界に残り、彼女と合流しました」

「・・・」

「貴女を呼んだのは簡単な話です。直球に言えば私達には貴女が必要だ、それもかなり」

突然、メアリーが本題に入った。確かに前置きが長いよりは良いだろう。

「もう知っているのでしょう？貴女の父がどう言った人物なのか、お茶会が貴女に教えている筈ですし」

「・・・あぁ、知っているよ」

「ソレは結構、それでは取引に入りましょうか」

玉座の間の横にひっそりと存在する来客用の部屋、そこに机を挟ん

で座る数人の姿が有った。紅茶を机に置き、メアリーは静かに取引の内容を話し始める。

「君は今、私達狂都と二代目狂王率いる死都に追われている。これは解っているね？」

「・・・」

「そこで、私達と手を組まないか？」

「私に利益は有るのかい？」

「もちろん、しかし良い利益とも言えない。君は父を、つまりは我らの王を追っている。私達はその王の復活を望んでいる。その復活には君の持つ黒の古書が必要と成る、そこでだ」

「私達が君の変わりに死都を引きつけよう、その代りに君には表の世界で探してほしいモノが有る」

確かに良い条件とは言えない、しかし黒の古書の情報によると死都とは対転生者の為に作られた国、その為にいくら牡丹でも一人で相手にするのは無理と考えた。死都との戦いは彼女達に任せて、自分は表の世界で探し物、そう考えると確かにこちらはあまり血を見ずにすむ。

「探してほしいモノっているのは・・・？」

「狂王の使っていた太刀、上位の神殺し」

メアリーが指を一本立ててそう言う。

「神殺し？」

「そう、神を殺せる呪いの刀。初代狂王が人間だった時に使っていた太刀だ」

多くを殺した狂王の使っていた愛刀、確かにそう言う物に成っていてもおかしくない。一体どれ程の血を吸ったのか、神すらも殺せるとはどう言う事だろう。神を殺せるのは神だけだった筈・・・。

「でもその刀はこの世界線に有るのかい？」

「有る、だから私達は此処に城をかまえたのだ、しかし私達ではその刀を見つける事が出来ない」

「？何故」

「・・・その刀は狂王の認める者、つまりは狂王の妻かその子供にしか扱えんのだ」

控えていたデュラが静かに説明する。

「狂王陛下にはお前以外にも数人、その血を分けた子が居るが、その中でもお前が最も濃くその血を受け継いでいるのだ」

「そう、故に牡丹様ならその刀を見つけられるし扱える」

情報をまとめた資料を彼女は差し出した。その中には刀の形やその他の情報もきちんと書かれている。正式な書類の様でまさかこんなにしっかりとした物が渡されるとは思わなかった。

「これからは帝国と停戦協定を結び、私達は兵力の回復とその他の準備に入る。牡丹様はその資料の刀が手に入ったら外の世界の世界樹が発光する季節の少し後にこの魔法世界を訪れて下さい」

「？発光中は駄目なのかい」

「魔法世界に世界樹の魔力が浸透して来るまで少しの期間が掛るからね、この取引、受けますか？」

「・・・乗った、面白そうだしお互いの利害がそれなりに一致している。断っても面倒だと思うしね」

「よーう、暇な話は終わったかー？」

真剣な話の最中に欠伸を大きくしながら入って来るウロの怪、彼女はこう言った真面目な話が嫌いなようだ。元々自分のペースで生きて来た妖怪なのでソレも仕方の無い事だろう。

「あぁ、受けてくれたよ」

「ソレはそれは・・・太っ腹だねぇ。オレもその刀を探したが見つからなかったのにさ」

「ソレはお前が邪心を持って探したからだ」

「神すらも殺せる刀なんて誰でも欲しくなるだろう？」

どうやら彼女は自分の欲望に素直なようだった。手に持っていた肉を引き千切ると置いてあったティーカップの中の紅茶を口の中に流

し込む。

「紅茶と肉は中々にあわねぇな」

「「「当たり前だ」」」

自由すぎるのも、考えモノかもしれない。そう思う3人であった。

42話・狂国（後書き）

今日も記録を続けよう、幻想郷縁起を引き継いだ者として。

43話・護衛のモノ（前書き）

一応、次からやっと正確に原作入り

43話・護衛のモノ

――で、何でコイツも来るのか――

「キヒヒッこの飛空艇って言うのも気持ちの良いモノじゃねぇな」

「・・・何で君も来るのさ」

血濡れのワンピース姿で不気味に笑っているのはウロの怪だ、彼女はあの狂国に留まっておらず牡丹と共に飛空艇に乗って帝国までついて来てしまったのだ。小さなカバンにしまってある物は何の肉であろうか。

「なっ何じゃ牡丹!!そいつは確か狂国の!」

「キヒッやあ姫さん。安心しなよ、とって食ったりは（多分）しねぇから」

そう言うと彼女は笑う。眼が髪の毛により隠れているのでその表情が良く解らないが、口元は楽しそうに笑っている。

「オレはコイツの護衛としてついて来たんだよ」

「・・・そうなのかい？」

「あぁ、まだこちらの兵力は少ないからな。お前の方にも何かが来るかもしれないし、オレが選ばれたと言う訳だ」

面倒だと言いながらも彼女は笑っている。

テオドラはそんなウロの怪を警戒しているのかあまり近づこうとしない。ソレはそうだろう、ウロからは恐ろしく濃い血の匂いがするのだから。

「君、ちゃんと身体を洗っているのかい？」

「失礼だな、オレだってこれでも女だ。・・・そう言っても何時も血生臭い所に居たから染みついちまったがな」

そう言うと彼女は面白そうに笑った。

「何じゃか狂気的な奴じゃの・・・」

「オレが狂気的だってぇ？」

ウロはテオドラの言葉に一層不気味に笑った。鋸のように尖った歯が見える。

「オレはまだまださ、城のあいつ等の方がよっぽど恐ろしい、オレなんかよりもアイツらは化物だ」

「・・・君にそこまで言わせるのかい・・？」

「亡き王の為にその身を危険にさらしてまで準備を整えて、オレには理解できない」

既に王は死んでいるのだ、それを掘り起こしてまでも彼女達は国の再建を求めている、そして彼女達と対立している死都、あまり細かい情報はないが、そちらもその王を求めている。

自分も同じだ、既に父は亡くなっていると知っても、今でも父を追

って物語をなぞっている。

「じゃが・・・その気持ちは妾にも解る・・・」

テオドラは大戦時中に自らの父を亡くしている、その為にその気持ちは解るのであろう。

「・・・まぁよろしく頼む」

キヒヒッと不気味な笑い方が耳に残った。
しかし、彼女も表の世界に来るとして彼女の食料は大丈夫であろうか、彼女は妖怪である、甘楽も同じく妖怪だが、彼女はどう見ても普通の肉では満足しなさそうだった。

「君の食事はどうすればいいんだい？」

「お前の居る学園には悪魔が居るんだろう？それなら無問題だ」

どうやら学園側の頭痛の種が増える程度で済みそうだ。
その後はテオドラに狂国との不可侵条約書を渡し、その他の話しをした後表の世界に戻る。帝国のゲートを過ぎるとやはりと言って良いのか樹海の中の不思議な建造物の中に有るゲートに出た。

「おー、此処に繋がるのか」

「？君は此処の事を何か知っているのかい」

「いや、何も知らないな」

笑う、何処か異和感が有るその笑い方だが彼女にも話したくない事

の1つや二つあるのであろう。長く生きていればそう言う事も有る筈だ。
樹海を進むと既に連絡していた迎えが来ていた。タカミチだ、彼には良くお世話になっている。最近では魔法世界にも良く出張しているようだが、それでも迎えの車を出してくれる事は有りがたい事だ。

「新しい人ですね、帝国の人ですか？」

「おい牡丹、この髭眼鏡は誰だ？」

「この人はタカミチ、そしてこっちはウロの怪だよ」

それにしてもウロの怪は安定の口の悪さである、何故そんなに口が悪いのか逆に聞きたくなってしまう。

「キヒヒッ不味そうだなお前」

「あはは、食べられたくありませんからね」

「・・・会話が成り立っているのか成り立っていないのか微妙な所だね」

タカミチの車の後ろに2人が乗り、タカミチはもちろんの事運転席だ。
ウロの怪は髪の毛を少し弄ると、眼が隠れている事を確認した。何故眼を隠すのかは解らないが、切り揃えられた前髪には意味が有るのか。

「そう言えば牡丹、お前今代の稗田にはもう会ったか？」

「今代の稗田？」

「あちゃー、まだ会ってないのか」

ウロの怪はそう言うと何処からか古い絵本を取り出した、前に牡丹が図書館島から借りていた絵本と同じ物だ。しかし古さが違う、アレが写本と言うのならこれが本物であろう。原作を彼女が何故持っているのか。

「これをお前にやるよ、後は自分で考える事だ、ヒントは人間の成長を止めてしまう時が有る」

「・・・君、今物凄いまともに見えたよ」

「オレはそういうモノさ、性格なんて自由自在だ」

黒の古書よりはまだ新しそうだが、それでも人気が伝わって来る。しかしその本は何故か懐かしさを感じさせる物だ。

「それにしても、お前お茶会のアイツに接触しているのか、アイツら最近好戦的だから気を付ける事だな」

「お茶会が好戦的？」

「そうさ、奴らを操っているのは奴らのトップ、３賢と呼ばれていた英雄共だ。そいつらが最近戦争の準備を整えていやがる、それに同じく教団までも戦闘態勢、その中心にお前、嫌になるだろう？」

「私が中心って、どう言う事さ・・・？」

「正確には違うが・・・もう少しすれば解るさ」

意味ありげな言葉を残し、彼女は眼を瞑る。まだ学園には到着しないと解ったので仮眠を取るつもりであろう。本当に自由だ。そんな彼女がくれた紅い背表紙の本を開きながら、彼女は心の眼を使い始めた。

４３話・護衛のモノ（後書き）

――キヒッ
何故貴女は此処を出て行くのですか。
――そいつはいくらお前でも教えられないな。
・・・
――ま、すぐに帰るさ。喜びを共にな。

４４話・球技なんて（前書き）

グダグダするのはしょうがないよね！

４４話・球技なんて

――球技なんてなかった――

【陛下に、続けぇぇええ！！】

大きな声と共に軍隊は進撃していく、先ほどまで不利であった戦場をモノともせず彼女達はその状況をひっくり返した。まさに死の軍だ、黒い国旗を血に染めてソレは動くモノを殺して行った。

【たっ助けてくれ！お願いだ！！】

【散々町や村の女どもを嬲ったのだ、もう満足だろう？】

白銀の女性がその血濡れの剣を突き刺した。

侵略軍と防衛軍、その国は侵略者を応援していた。結果が見えた戦いだったのかもしれない、しかし彼女は皆殺した。国に仕えていた者は女子供、その血縁者、皆、皆殺したのだ。蒼い月を見ながら彼女は自分の手を伸ばす、しかしその手では月を掴む事は出来ない。

【まだ・・・足りないと言うのか・・・】

そこで、その光景は黒に染まった。

――――――――――――――

「いい加減起きろ」

「・・・む、ウロかい」

目の前に前髪で眼を隠したおかっぱの少女が身体を揺すって来ていた。心の眼を開き外を見ると既に日は高く昇っている。今日は授業も無い筈だ。

そう思ったのだが、新田先生に頼まれた事を思い出した。

≪明日、私は午前中出張の為学園には居ません、そこで牡丹先生に見周りをお願いしたいのです≫

≪あぁ、大変ですね。解りました≫

「・・・そう言えばそうだったね」

ボサボサの髪の毛を手櫛で梳かし、さっさと彼女は着替えた。こう言う事はさっさと済ませてしまうに限る。牡丹はまだ夢の中のサボり吸血鬼を指で突いて遊んだ後に、テルの準備した御昼を食べて出かけて行った。最近バイトの方も忙しかったのでもう少し眠って居たかったのだが・・・。

黒い杖で地面を叩きながら彼女はゆっくりと進んで行く。

「・・・？屋上から多くの声がする」

おかしいな、この時間は確かキティが居るクラスの体躯の筈だが、それ以外の声もする。

階段を上がって行くと飛んでも無い事に巻き込まれてしまった気がした。

「あっ貴女は確か牡丹せんせー！？助けて下さーい！！」

赤髪の少年が、何処かのクラスの女子生徒に掴まっていたのだ。良

く見れば制服から高等部の生徒と言う事が解った。

「ぼ、牡丹様」

「「「牡丹様！？」」」

以前、国語の授業を受けさせていた子も居るようだ。昔と同じように怯えた子犬の様な眼でこちらを見て来る。確かに昔の彼女達には少々厳しい教区方針だったかもしれない。弱者は蹴り落とされる運命だと彼女達には教えていたのだ。

「その手を放してあげて」

「あ、貴女いきなりどうしたのよ？」

「良いから早く！！」

「ヒッ！？」

切羽詰まった彼女の声に赤髪の少年、ネギを掴んでいた少女は彼を解放した。

「も、申し訳ありません牡丹様、私は決してそう言ったやましい考えはなく・・・」

「知っているよ、君は昔過ちを犯しているモノね」

「っ！」

彼女は昔、まだ牡丹がそのクラスにあまり深く関わっていなかった

頃に万引きを犯したのだ。もちろん犯罪であるので学校側も動き彼女を取り調べた。その中に居た教師の一人が牡丹でもある。

一罪百罰

一回の罪でも罪は罪、彼女は牡丹にそれを言い聞かされ、泣くほどに後悔したのだ。それから何故か牡丹の事を様付で呼ぶようになった。

「しかし、君も君だよネギ先生」

「えぇ！？」

「あのね、君が生徒に遊ばれてどうするんだい。私に言わせるなら、支配してこそ、だよ」

「「「いや、ソレもおかしい」」」

常識が有る生徒には突っ込まれてしまった。しかし真名や茶々丸はうんうんと頷いている。

【これだから薬味は】

頭の中に同じような光景が重なる。一体何の記憶だ、こんな記憶はない！

頭が一瞬重くなっただけでその不思議な現象は収まった。

「キヒヒッなにをしているんだ牡丹。さっさとこの場を治めないか」

「あ、あぁ、そうだね」

コホン、と彼女は小さく咳払いをする。

「ネギ先生は職員室で書類の生理が残っているでしょう、それにこの時間は中等部の体育の時間です。高等部には私がたっぷりと提出用のプリントを差し上げますのでお引き取り下さい」

「・・・先生？その手持っているプリントって・・・？」

「え？これ？？一人用のプリントだけど？」

「しっ失礼しました―！！」

山の様に積まれたその書類をかたずける気には成れないだろう。その量は夏休みの宿題の量×3倍と考えてくれれば良い、その量を明日までに提出とは、無茶にも程が有るだろう。確かに彼女のプリントをやると点数は上がるが、それは最後の手段と学園の生徒には言われている。

「ほら、君達の授業に戻りなさい。それとウロ、君は早く学園指定の体操服を買ってね」

「何だ？あの爺のくれたぶるまと言うモノでは駄目なのか？」

「絶滅危惧種ですので駄目です」

４４話・球技なんて（後書き）

牡丹君用のブルマも有るのじゃよ？
あぁ・・・そう、じゃあ死ね
ふぉぉおお／／／
駄目だこいつ、もう手遅れだ・・・

４５話・魔法の本（前書き）

楽に頭が良くなるとか、そんなことはこの世界でもないです。

45話・魔法の本

――黒衣の火防女――

「学園ちょ・・・爺が依頼とは珍しいね」

「ちょっ何故言いなおしたのかの？」

「変な依頼ばかり私に押し付けるので」

最近の依頼は魔法世界の龍種の調査だったか。何故こんな事をさせるのか、それならば正義感に満ち溢れている誰かにやらせれば良いのではないだろうか。頭が痛くなるレベルである。
そもそも、元は賞金首の私に此処で呑気に国語の教師をやれと言う事自体間違っているのだ。テオからの願いでなければさっさと帰っていただろう。

「近々、ネギ君のテストを行うのじゃが、図書館島の奥に保管されている本を知っておるかのう？」

「あぁ、あの本か。私にとってはくだらない物だったよ」

「ふぉ！？そこまで既に行っていたのか！！？」

「私は暇人でもあるからね」

それに図書館島の書は調べつくしている。アレ程度の量、数年あれば読めるレベルだ。そこまで内容の濃い物も無かったし。
しかしあの心底どうでも良い魔導書が何だと言うのか、今さらアレ

程度の物を売ってこいとでも言うのだろうか。それならば良い知り合いを知っているので裏ルートで売ろうと考えていた。

「もしかしたら、ネギ君達がその本を取りに来るかも知れない」

「ソレはそうだろうね、あんな場所に有ればね」

確かに木を隠すなら森と言うが、あの空間に置いておけば全く無意味だろう。何かの遺跡の様な場所に置いてあるのだから。

「まぁ、依頼の内容なら大体読めたよ。その本を守ればいいんだね？」

「うむ、ネギ君にも良い経験に成るじゃろう」

「・・・」

正直、自分は何故かあの少年が好きに成れない。聞けば父を追う素晴らしい少年と聞くが、それすらもくだらないと感じてしまった。自分の冷めた一面に少しの呆れを感じながらも彼女はため息をついた。

「良いよ、でもそれなりに見返りは求めるからね」

「・・・むぅ、仕方ないじゃろう」

此処で学園長はミスを犯していた。どうやって守ってほしいのか行っていなかったのである。牡丹の中では人間などとるに足らない存在だ、例えるなら異形と人間の戦いに成ったのなら彼女は異形側に付くだろう。

「随分と楽しそうじゃないか」

キヒヒッと笑いながら影が変形する、彼女は何にでも化けれるのだ。
牡丹の影に化けていた彼女は人気の無い場所でその姿を現した、一応この学園の生徒として登録してある彼女であるが、人間の文化は面倒臭いと言う理由で既に不登校者である。

「確かに楽しいけれど、反面面倒でしょうがないよ」

何故自分があの少年の成長を手伝わなければならないのか。確か父はあの英雄の一人だとは聞いている。しかし関係ない、父がいくら偉大でもその子供が偉大とは限らないのだ。
受け継がれない才能と言う物も、ある。

【陛下にっ続けぇぇえええっ！！！！】

頭の中で最近よく見る夢が自動で再生される。メアリーの居た狂国の国旗の色は漆黒、夢に出て来る軍の軍旗も漆黒、その先頭に立つ白銀の髪の女性は陛下と呼ばれている。
もし、もしだ。もし本当にあの女性が自分の父、または母だった場合、自分にも民を纏める力があったかもしれない。
しかし、その才能が受け継がれなかった様に、親の才能が引き継がれる等と言う事は無に等しいだろう。
故に、あの少年を少年の父、ナギと同等に見ようとは思わない。

「何だ、今度は不快そうな顔だな」

「ふんっ行くよウロ」

「キヒッおうさ」

日が、暮れていく。空には紅い月が浮かんでいた。学園の怪談に有る通り、黒衣の死神が出現する生温かい夜だった。その手には長い黒の杖を持ち、固く閉ざされた眼、そして黒い布を体に巻き付けている。

遺跡の様に成っている部屋の中で足をぷらぷらと揺らして退屈そうに待っている。ウロは図書館島の中の今夜は停止されている筈の罠を動かしに行っている。

「・・・来たかい」

「！あれは学園の怪談登場する黒衣の死神！？」

「ほっ本物アルカ！！？」

「えぇ！？私達此処で魂食べられちゃうの！！？」

因みに前髪で顔を隠しているので彼女達からは解らないだろう。

「（ウロは失敗したか、まあ半分遊び程度だったから仕方ないか）」

そんな事を考えながら彼女は杖を構えた。

「君達の言う通り、ゲームにはボスが付きものさ」

そう言うと床の罠を始動させる。同時に下に落ちていく生徒達、確か下は湖なので大丈夫であろう。最下層とも言える場所であるが、実は更に下の階が存在する。

しかし、あの少年への挑戦は始まったばかりだ。何せハンデとして

本も一緒に投げ込んだのだから。

ふわりと彼女は空中に浮くと下へと降りて行った。まるでそうする事が当然のようにゆっくりと下降していく。その口元には残酷とも思える様な笑みが浮かんでいた。

下の空間では全員が生きている事に感動を覚えていた。そこに堂々と浮いて登場したのは以外と現在の状況を楽しんでいる牡丹である。彼女が杖を一振りすると近くの本棚が一瞬で粉々に成った。

「おや、外したか」

「ひっ」

生徒は顔を真っ青にして震え上がっている。その中でも最も震えているのが魔法先生であるネギとは・・・何とも情けない。まだ殺意も出していないと言うのに。

「君達、私とゲームをしようか・・・」

このままでも面白いのだが、もっと状況を面白くしよう。そう考えた牡丹は1つの提案を彼女達も持ちかける。

45話・魔法の本（後書き）

蓮子、今度は何について調べましょうか？
そうだねメリー、前は稗田家の事を調べたから、今度は狂王の事にしよう！
面白そうね、そうしましょう

46話・お話しましょ（前書き）

シリアス？なのかな？手抜きですが・・・

46話・お話しましょ

――やはり【血】であろうか――

「ゲームをしようか」

震える彼女達に、彼女は高揚の無い声で笑いながらそう言った。

「なぁに、ルールは簡単さ。君達は残り2日で此処から脱出すればいい」

「もし・・・脱出できなかった場合は・・・？」

その言葉に彼女はその残酷な笑みを更に深い物にした。

「此処に残ってしまった者は魂を貰う、もちろん仲間を見捨てて一人で逃げても構わない」

ソレはあまりにも残酷なルールだ、しかも一人で逃げても良いと彼女は行った。何故か、それは簡単だ。ただ、恐怖を煽る為、そうすれば友情になど容易くひびが入る。彼女はそう考えているのだ。

「・・・ッ」

「さあ、ゲームスタートだ。私は期限まで此処でゆっくりしていよう。ヒントは全員で1回のみだ。ヒントを誰にも教えずに逃げても良いよ？そちらの方が動きやすいだろうしね」

さぁ、君はどうするネギ君。この状況なら君も頭を使うだろう？私

からの八つ当たりに近い試練だよ。もちろん冗談ではない、君の判断で統率力を見るんだ、残った者の魂は喰らう。

「みっ皆さん！協力して出口を探しましょう！！」

「はっはい！！」

「「わかったアル！（でござる）」」

何だ、意外と纏まっているじゃないか。流石にそこまで愚かではないと言う事か。

「貴女は・・・何ものなんですか？」

「・・・君は馬鹿かい？」

「ばッ馬鹿とは酷いです！」

急に変な事を尋ねて来た綾瀬夕映に牡丹は髪の毛で隠れているその顔を少し歪めた。この子はこんな状況の中でも落ち着いているのか、意外と見所が有るじゃないか。

「私が何ものか、そんな事はどうでも良いじゃないか。仲間が真剣に探しているのに君は随分と落ち付いているね」

「これが私の性分なので」

「へぇ・・・君に興味がわいたよ、少し私と話でもどう？」

高い本棚の上からふわりと彼女の近くに降り立つ。そしてニヤリと

笑った、彼女は今の時代に珍しい策士かもしれない、そう考えると心が躍る。

「私でよろしければ、話し相手に成りましょう」

「それはありがたい、私もこの2日間暇だからね。でも探さなくて良いのかい？」

「私は体育系ではないのでこう言う場所ではあまりお役に立てないのです」

牡丹はパッと簡単な魔法でテーブルと紅茶のセットを出現させる。それに眼を丸くした夕映だが、黒衣の死神は学園の怪談に成るような存在なので深く考えない事にしたらしい。

「座りなよ、ちょっとしたお茶会を楽しもうじゃないか」

別に毒が入っている訳ではないしね。そう言う彼女は静かに笑った。何の茶葉を使っているのであろうか、程良い香りが鼻孔を刺激した。森の中の建物の近く、水辺で二人紅茶を啜る、お茶受けがないのがいささか不満ではあるが、それなりに楽しい。牡丹は杖をテーブルの横に立てかけ、夕映の向かいの席に座る。

「なぜ、貴女は私達にゲームを申し入れたのです？貴女なら簡単に私達を殺せた筈」

「君は一方的に殺された方が良かったのかい？まあそれも賢い判断だよ。好きでも無い物に純潔の結界を破られるのは乙女にとって自殺できる程の苦痛だから」

そう言うと彼女は夕映のカップにも紅茶を注ぐ。

「此処に居る間、私は約束通り君達に危害を加えるつもりはない。約束は守る為の物だ。ルールとはそう言う物だ」

ルールは破る為に有るのではなく、弱者を少しでも長生きさせる為の物である。そう考える者も中には居るのだ。

「時に貴女、何歳ですか？」

「これでも私も女なのだがね？」

「失礼だとは解っています、しかし私も知識欲が深くて、貴女の事を調べた事も有る。ですが、結局解らず終いです」

「はは、本当に面白いね君。恐れず、己の知識欲の為には大胆に、まるでオーディンの様だよ」

かの神は深い知識を得る為に自分にその身を捧げ首を吊り、更には知識の神に自らの片目を捧げた。それと同じで彼女は自分の知識の為に恐怖を捨てているのだ。

本当に素晴らしい、今の人間も彼女の様な者は居るのか。

「もしも、君以上に歳上で、此処の学園長すら私の半分も生きていないと言ったら信じるかな？」

「・・・信じます」

「ほう？それは何故、私が嘘をついていると言う可能性も有るのだよ？？」

真っ直ぐに、夕映の瞳が牡丹に向けられる。

「私の調べた結果、魔女狩りの時代にも貴女と思える人物が居るからです。私も最初は信じたくありませんでしたが、コレは信じざるしかないでしょう」

「本当に君は優秀だね、その頭を勉強に使えばもっと賢い選択肢も有っただろうに」

「私が此処に来た理由は確かに魔法の本でもありますが、もう半分は貴女なのです」

本当に、本当にこの少女は何処までも面白い。

「私が居る事まで読んでいたと？」

「貴女の出現条件がそろっている事を確認して、私はその日を選んだのですよ？」

「っははは！！本当に面白い！君もこちら側に来て良いレベルだよ！こちら側でも賢く生きられるだろうさ」

牡丹はそう言うと一冊の本を彼女の眼の前に出した。ソレは少し古いが昔話の様な物だ。

「君が読んだのはこの本だろう？吸血鬼と黒の娘、確かにこれに登場する片方は私だよ、でも私は吸血鬼じゃない」

「・・・それは意外でした、そこまで長寿となれば吸血鬼かと思い

ましたが・・・」

「所で君、1つ良いかい?」

牡丹は紅茶を飲みながら、夕映に1つの疑問を投げつけた。

「君はこちら側に詳しいが、君の祖父はもしかして私を知っていたのかな?」

「・・・」

夕映は、その口を静かに閉じたままであった。

46話・お話しましょ（後書き）

キヒッまさかこんな所にこの本が有るとはね！オレも驚きを隠せないよ。一体何故此処にこの本が？

誰も来ないよう暗闇の中、その妖怪はご機嫌でその本を手に取った。

47話・敵国も本気（前書き）

前作から呼んでいる人には？と思われる出来です。初めての人には少し辛いかも？

47話・敵国も本気

――【起動します】――

「・・・私の祖父は、昔から様々な昔話などを調べて来ました」

夕映が自らの祖父の事を話し始める。

「その中でも力を入れて調べていた物が貴女の事なのです」

「成程、君もそれを継いでいると言う訳だ」

彼女の祖父はどうやら魔女狩りの時代の彼女の事を深く調べていたらしい、当時の彼女は酷い呼ばれ様だった。二つ名は喰人鬼だっただろうか、餓死した子供の悪霊とまで言われた記憶が有る。

「君が私に逢うのは、実は必然なのかもしれないね。良いかい？私と逢ったと言う事は誰にも喋ってはいけないよ？」

「何故です？」

「私は色んな所から嫌われていてね、その名前を出すと何かの事件に巻き込まれるかもね、時に夕映君」

牡丹は杖に手を掛けると彼女の腕を掴んだ。

「伏せな！」

刹那、テーブルが真っ二つに割られる。そこに飛んできた物はどう

見ても人工物、しかも高度な加工が施されている。一体何処から、と考えた牡丹、その瞬間に彼女は少しの機械音を聞きわけた、ソレはこちらに物凄い勢いで向かって来る。

「夕映君、ゲームは中止だ！君との会話は惜しいが今は皆を連れてさっさと脱出しな！！もう見つけているだろうから！」

「なっ何が起きたんです！？」

流石のこれにはびっくりしたのか彼女の瞳には涙が溜まっていた。まさか、早すぎる。しかしこれは間違いないだろう。襲撃だ、悪魔のではなく、その他の何かの。

ズルン、と上の階からウロの怪が降りて来る、既に夕映は皆を探しに走っていた。その手には一緒に落とした魔導書が握られている。何処で拾ったのか、それとも既に持っていたのか。

「キヒッ随分早いじゃねぇか！だがあえてこう言おう！待ってましたと！！」

襲撃、ウロの怪が言うのであれば間違えようがなかった。

「・・・まさか、私の一撃が避けられるとは予想外でありました」

奥から顔を出したのは茶々丸の様な耳を持った人間とあまり変わらない姿の少女である。しかしその格好はどう考えても生徒ではない、軍服だ。黒い軍服を身に付けて彼女はその手に銃を構えた。

「貴女は、何者？」

「ソレはオレが説明してやるよ」

不気味に笑ったウロの怪が彼女を挑発するように喋り出した。

「死都、ガイノイド超長距離大火力戦闘部隊、体長のカグツチだ。狂王の最も最初に作られた可哀そうなお人形さ」

「・・・」

キュィイン、と言う機械音がする。テーブルに刺さっていた剣が回収された。ワイヤーであろうか、ソレにしては頑丈すぎる。あれ程大きな剣を巻き上げる程の力が普通のワイヤーに有るであろうか。

「お前が近距離とはね、死都の司令も腐ったモノだ」

「陛下を侮辱するのは、止めていただきたいであります」

「お前が言うかよ、元はお前も初代王に付いて行きたかったんだろうが」

「私にはその様な記憶はありません」

その返答にウロの怪は不機嫌そうに顔を歪めた。

「可哀そうに、頭の中を弄られてそこまで忘れたか」

「私はただ国に尽くす兵であります。余計な感情は、身を滅ぼすのでありますが故、削除して頂きました」

「うつけが・・・っ！お前に刻まれた狂王の刻印、今すぐ取り消せ！！貴様など既にアイツの兵でも何でもない！！」

ウロが怒鳴る、何かを侮辱されたかのように、大事なモノを貶されたかのように彼女は怒りを露わにした。突然の事で理解できていない牡丹、彼女は何故に怒っているのであろうと頭を捻るだけだ。

「お前達姉妹は初代王に、アイツに絶対の忠誠を誓ったのではなかったのか！？」

「・・・データにございません、作戦時間に支障が出る恐れが有りますので、無駄話はこの辺りで切り上げさせていただくであります」

「アイツが見たら、今のお前に嘆くだろうさ」

ウロから殺気が漂い始める、ソレも恐ろしく濃いモノだ。牡丹のソレに逢わせてその紅い瞳を開いた、カグツチの方も武装を銃と剣に持ち替え、迎撃態勢を整える。

「警告します、大人しく一目橋牡丹を渡せば、この場は収まります、もし、渡さないと言うのであれば、実力で排除いたします」

「はっ、それをオレラに言うかよ、お前の様なポンコツに成り果てたモノなんて、オレ一人でも余裕だ」

「・・・警告はしました」

ジャコンと言う装填音と共にウロに向かって銃弾の雨が降り注ぐ、その鉛の雨をよける事無く浴び続けるウロの怪、牡丹を庇っているのであろう。

「キヒッキヒヒヒヒヒヒッ！！」

ゾアッと、黒い煙のように彼女の体が消える、そして次の瞬間カグツチの後ろには片腕を剣に変えた彼女の姿が浮かんでいた、その剣がカグツチの片手を切り落とす。

「機体損傷軽微、再生および攻撃の続行」

パキンッと言う音と共に切断面からコードの様な物が伸びて来る。ソレは落ちた彼女の腕に繋がると何事も無かったかの様に切断面にぴったりとくっついた。

「面倒だな、ナノマシンでの高速再生か。その機能はまだあるんだな」

「そこは私の間合いです」

ジャコッと、彼女の手からナイフが飛びだした。そのナイフはウロの片腕を掠める。何と、その刀が掠った部分からウロの血が床に数滴垂れた。

「転生者殺しの術式か・・・っ面倒な遺産ばかり使いやがって・・・っ」

グチュンッと言う生々しい音と共に彼女の腕が再生する。

「原初の泉よ、祝福されしその水を今此処に、【ウンディーネソード】」

「っ！水ですか、コレは卑怯、一時撤退であります！」

そう言うと彼女は背中部分に格納されていたのであろうブースターを使い何処かへと消えて行った。

「ウロ！大丈夫かい！！？」

「あぁ、心配ありがと。だが狂国の奴らには連絡しておこう、奴らも本気だとな」

そう言う彼女の顔は、少し辛そうであった。

47話・敵国も本気（後書き）

なっ何でありますか・・・？この寂しいきもちは・・・
私に・・・感情など・・・無かった・・・筈であります・・・

【――――】

懐かしい声が、聞こえた気がした。

48話・幻視（前書き）

注意、優曇華は関係ありません。

48話・幻視

――幻覚が視界を支配する――

狂気の書、ソレはやがてその狂気で持ち主を犯すようになっていた。
それに牡丹が気付いたのは死都からの襲撃を受けた2日後だ。視界を過る見た事の無い風景に妖怪達、その先頭に立つのは金髪の女性、日傘をクルクルと回し、特徴的な帽子を冠った彼女はニッコリと笑っている。その横に控えるのは九本の狐の尾を持つ式と、二本の猫の尾を持つ少女だった。

「・・・っ！」

黒の古書が少し震えている。微振動と言うのであろうか、カタカタとその風景を懐かしむように揺れている。これは書から放たれているのだろう、魔力がそう言っている。
その幻影と牡丹がすれ違った、身体をすり抜ける金髪の女性。そして、深い紫色の髪を持つ少女が、牡丹の近くを過ぎようとした。その髪はおかっぱと言うよりは少し長めであろうか。

「こんにちは」

「・・・え？」

幻影が、こちらに喋りかけて来たのだ。その瞬間、彼女の周囲を囲っていた幻影の霧がサァッと晴れる。元に戻った何時もの風景、しかし彼女の心音は落ち付いていなかった。激しくなる心音、聞き覚えのある声、何処か懐かしい様な雰囲気。

「今・・・のは・・・」

「おい牡丹、お前に客が来ているぞ」

部屋を開けるのは金髪の幼女、エヴァンジェリン、まだ眠そうな彼女は瞳を擦りながら来客を知らせる恐らくテル辺りに起こして来てくださいとでも言われたのだろう。本当にそれでいいのか闇の福音。

「すぐ行くよ・・・て、その前に御客さんて誰さ」

自慢ではないが、生徒に好かれている自身はない。それにこの数年、友と呼べる物は少なかった筈だ。

「あちらはお前の事を知っていたようだが？」

「私の事を知っている・・・？」

はて、誰だろうか。激しい鼓動を何とか抑え、着替えて一階の客間に降りる。そこには特徴的な帽子を冠った少女とボーイッシュな格好の少女が居た。

「こんにちは、牡丹さん」

「おや、君達だったか。連絡を入れてくれたら私が行ったのに」

マエリベリー・ハーンとその相棒、宇佐美蓮子がソファーに腰を下ろしていた、彼女達にはしっかりとした客人として紅茶とお茶受けが出されている。牡丹の前にはテルが温かいココアを置いた、甘いモノを飲まなければ頭が回らない事を考えてだろう。

「君達ももう大学生か・・・時間が過ぎるのは早いねぇ」

「牡丹さんは何も変わっていませんね」

「異能なんてそんなものさ、その内君にも解るよメリー」

メリーとはマエリベリー・ハーンの愛称だ。

「私達大学に入ってからクラブを作ったんです！」

「クラブ？ソレはまた・・・良く教師がその人数で認めたね」

「メリーは頭が良いんで」

「まさか私が全て交渉するとは思わなかったわ・・・」

疲れたように言うメリー、牡丹は笑いながらテルに彼女達に何か甘いモノ、ケーキか何かを出すようにと指示を出した。先ほどから二階が静かだ、恐らくキティは二度寝であろう。

「秘封倶楽部ッて言うのですけど、私達の通っている学校の校長先生が気の良い人で資金を良く提供してくれるのですよ」

嬉しそうに話す蓮子、その陰でメリーはボソッと何かを呟いた。

「女子更衣室盗撮してたの公表するぞって言ったら簡単に承諾してくれました（ボソボソ）」

「うん、今すぐ刑務所にぶち込むべきだね、その校長」

ココアを飲む、丁度良い位の温度であった。流石はテルと言った所であろうか。

「私達が最近調べた事は狂王と言う日本神話にも出て来る武将の事でして・・・」

「!その話、詳しく聞かせてくれるかな?」

恋この言葉に彼女は異様に良い反応をした。

「い、良いですけど面白くないですよ?何せ狂王に関する記述は世界にも二冊三冊程度しかないのですから。因みに童話も含めて、です」

「やっぱり少なかったか、でも良くそれを調べたね」

「メリーが最近良く幻覚を見ると言うのですよ、見た事の無い人間が眼の前に現れたり、自分の記憶の筈なのに今まで経験した事の無いような場所であったり」

その中に、出て来たのだと言う。それは牡丹が見ているモノと同じようなモノだろうか、メリーには境界を見る程度の能力が有る、もしかしたら黒の記憶の境界を見ているのかもしれない。または並行世界に居る自分の記憶か。

「夢の中のメリーは狂王神話と言う本を手に持っていたそうです、だから調べたんですが・・・」

蓮子はそこで言葉を詰まらせた。

「何かあったのかい??」

「散々探して、山奥の神社まで行ったんですが既に巫女さんも宮司さんも居ない場所でして・・・確か・・・博・・神社だったかな?薄れて読めませんでした」

「そこの神社の中に入る事は出来なかったんですが、神社の境界内に面白い物が有りまして・・」

「そう!アレには私もびっくりしたなぁ!!だって神社の下に何か本が挟まっていると思ったら記述の写本だったんだもの!!」

「世界に三冊くらいしかないと言う本の写本?何でそんな所に・・・」

牡丹はそう言うと首を傾げた、確かに不自然である。山奥の、しかも宮司も巫女も居ない神社に何故そんな物が落ちているのか、風化した形跡もあまり無かったと言う。

「老いた姿、なおも気高くその漆黒の瞳には優しさと悲しみが宿っていた。あの一文は凄かったね」

「写本の言葉かい?」

「はい、その本を誰が書いたのかは全くの謎ですが・・・」

深く、蓮子の話しを聞く。次の日は彼女達にその神社に連れて行って貰う事に成った。何故か知らない内に自分もその倶楽部に所属している事に成っているらしい、学校も違うのにどうやったのかと聞くと、メリーが妖しく笑っていた。

48話・幻視（後書き）

あの子はアレを拾いに行くかな？どう思うチェシャ猫。
そんなことよりお前、また私のコーヒーに・・・ッ
糖分は摂った方がいいよ？
入れ過ぎだ！！

４９話・古い神社（前書き）

たま手抜き・・・

49話・古い神社

――死者は決して、黙しては居ない――

牡丹が秘封倶楽部と共に山の神社に向かっているその頃、魔法世界狂国では予定通りに兵力の強化が行われていた。戦闘に立って指示しているのはやはりメイド長のメアリーだ。

「・・・そうですか、やはりカバーしきれていませんでしたか」

≪あぁ、襲撃された。しかも襲撃して来たのはあの姉妹の姉の方だ≫

「む・・・もう少し防ぎたかったですね」

狂国としてももう少し防御面に自信はあった、しかし結界をそう簡単に攻略されると流石に頭に来るモノが有る。はやりオリジナルの世界結界には及ばないか、と考えるメアリー。

≪そっちはどうだい？何か進展はあったかな？？≫

「えぇ、十分にありましたよ。流石に掘り当てるのには苦労しましたが、教団にも依頼と言う形で手伝っていただきましたから」

≪教団が動いたのか？あの神光が？？≫

「彼女も陛下の元弟子ですから、それに彼女にとっては世界を滑る事等簡単ですからね、すぐにこちらに来てくれましたよ」

通信で話している彼女の後ろからは人間達の苦痛を訴える声が聞こ

えていた。ウロの怪はその声に疑問を覚えたのかソレは何なのかと尋ねる。

「兵力を強化しているのですよ」

≪人間どもを使ってか？≫

「えぇ、発掘は終わりましたから、後は再生だけですしね」

≪・・・死霊騎士団か？≫

「えぇ、武装メイド親衛隊も再集結出来ましたし、後は何処に身を隠したか解らないアサシン部隊ですかね」

――死霊騎士団とは――

初代狂王がもっとも最初に戦闘に投入した女性の死体で構成されたアンデッド軍である、皆腐っては居ないが、王とは絶対の存在と考える者達の集まりである。多くの武功をあげており、狂王をアンデッドマスターと呼ばせた理由でもある。

――武装メイド親衛隊とは――

各部隊から集められた優れた戦闘能力、思考を持つ者達の集まり。言わばエリート部隊、全ての武器を扱えるように教育されており、常人ではこなせない程の戦闘訓練を受けている。元々は狂王の居城を守っていた。

――アサシン部隊――

白いローブを着て、仕込みナイフでの暗殺を得意とする部隊。各地への諜報から暗殺、爆破等様々なミッションを成功させた隠密機動部隊。音も無く忍びよる事から狂王の白の影とも呼ばれていた。

情報を聞いてウロの怪は笑みを少し意味ありげなモノにした。

≪捕まえていた人間は男女入り乱れていた筈だ、そんな所に不機嫌な死霊騎士団を放り込んだらどうなるか、お前は解っていてやったのか？≫

「彼女達には血が必要です。最も飢えた状態ですからね、陛下の加護がない今、我らは生き物を殺して食わねば生きて行けないのですよ」

≪残酷だなぁ、お前らは≫

「罪人が何人死のうと私達には関係の無い事ですから」

通信機越しから聞こえて来る彼女の声も、冷めている。本当に興味がないと言うような声色だ。その声がウロの妖怪としての心を刺激した。

王と民では、これ程に考えている事が違うのか、と。

【人間・・・何故オレを・・・殺さない・・・？】

【・・・さて、何故かな、ソレはお前の頭で考える事だ】

ウロの頭の中で、懐かしい記憶が再生された。今の自分の顔を見たら牡丹は変な顔をするだろう。何せ狂気のきの字も無いよな普通の顔に成っているのだから。

≪しかし、死都にはまだアレが有る。警戒を怠るなよ？≫

「解っていますよ、何せ最終兵器以外に遺産はあるのですからね」

死都からは既に何人も脱走した、その中には途中で捉えられてしまった者も居るが各世界線に散らばり行方をくらましている者も多い、旧家臣は機会勢以外は脱出できた。

≪月の起動砲は本当に機能しないんだろうな？≫

「アレは陛下の認証が必要ですからね、今のカグツチにその力が残っているとも思えません」

≪それなら良いんだが・・・≫

死都には世界を一発で火の海にする事が出来る様な兵器がごろごろしているのだ。先代の趣味でもあった兵器開発、そして優秀な研究員の研究の結果だ。

二人の話しは続く、これからの方針を巡って。

――――――

――――

――

――山の中、古い神社。

そこには確かに古びた神社が存在していた、しかししっかりと原型を留めていた。鳥居の色は既に抜け落ち、黒ずんでいるが立派にそこに立っていた。

「凄いね、コレは・・・」

「えぇ・・・と確かに此処に・・・・！ほらっあった！！」

蓮子が神社の下に有るスペースに手を入れて漁っていると、そこからは一冊の本が姿を現した。しかし探している最中の彼女の姿はまるで小学生か中学生がR指定の本を探しているようにしか見えなかったのだが・・・その事は黙っておこう。

「・・・うん、確かに写本だね。でもどうしてこんな所に」

「でも、持ち主が居ないこの本を此処に置いておくのはどうかしら蓮子・・・」

「そうだね、牡丹さんが言うなら本物だし・・・よし」

蓮子はその本を牡丹に差し出す。

「これは牡丹さんが持っていたら良いんじゃないな？」

「私が？」

「牡丹さんは本が好きだし、そんなに酷くも扱わなそうだから」

そう言った事で、牡丹にまた新しい本が増えた、彼女はこれを鞄にしまうと二人にお礼を言うが、この本の解読に掛ける時間を考えると少し気が滅入るのであった。

４９話・古い神社（後書き）

拾ったようだね、後は時を待つだけさ・・・。

５０話・何か来た（前書き）

ええぇ、彼がドつぼでした。声からしてにじみ出る威厳が良いね！

50話・何か来た

――コイツは誰さ？――

「がっはっはっはっは！！ほう！これがこの世界の地図か！！」

どうしてこうなった、どうしてこうなった！

古い術式が描かれた本を手に取った瞬間にソレは姿を現した、紅い髪の大男は豪快に笑う。筋肉ダルマと良い仲に成るだろうその人物は女子寮の中だと言うのにご機嫌だ。

「ネギ君・・・？何故そんな古い術式を使ったのかな？」

「ふぇえ！！わかりませんよぉお！！」

「えぇい！泣いてんじゃないわよ！！泣きたいのはこっちの方よ！！」

「うわー、大きな人やねぇ」

「・・・牡丹さん、どうします？コレ・・・？」

木乃香の記憶は何とかなるだろう。既にタカミチが魔法関係者と言う事はネギ君がばらしてしまっていたようであまりビックリされてなかった。全く、本当にオコジョに成りたいようだね、この子は。

「ぉお？お前には見覚えが有るぞ」

赤髪の男が牡丹の顔にぐぐっと近づく。それに合わせてタカミチが

その間に彼女を庇うように入る。

「お前、狂王の知り合いか関係者か？」

「！狂王を知っているのかい？」

「ぬぅっはっはっ！！奴には苦労した！！余の軍勢も奴には通じなかったしな！」

バスンバスンと彼が牡丹の肩を叩く、痛い、腕力が半端じゃない。

「そう言う君は誰なんだい・・・？」

「余は征服王イスカンダルだ！よろしくな小娘！！」

豪快過ぎる、しかし術式を調べた結果、彼がどのようにして此処に召喚されたのかが解らなすぎる。もしかしたらネギもナギも彼の血を引いていたのか？まぁ、有り得ないと思うが。

「英雄かい・・・何処かで見たアニメの様な展開だね」

「アニメェ？何だそれは？？」

「知らなくても良いよ」

「何だと？余に遅れを取れと言うのか！？」

「遅れても戦闘に支障はないから大丈夫さ」

「そうか？」

扱いやすいのか、そうでないのか解らない男だ。しかし、彼の召喚が解けるまで何日、何年掛るか判らない。何せ面倒な程に大きな魔力で召喚されたのだ。

「君には、色々聞きたい事が出来たけれど、君は正規の召喚ではないようだ」

「そのようだな、霊体化出来ないので薄うすだが理解していた」

そう言うと彼は腕を組んだ。

「しかも、此処は女子寮だ。君を此処に住まわせるのは流石にまずい」

「・・・余は犯さぬ」

「そういう問題じゃないんだよ・・・」

交渉はタカミチに任せるとして、開いている部屋を思い出して見る。何処が空いている?職員用の寮は既に埋まっていた気がする。では何処が・・・何処・・・が・・・。

「寮の支配人って、開いてたよね?」

「「!?」」

牡丹の言葉にタカミチと明日奈が物凄い勢いで反応した。

「せっせんせいソレはまずいですって!!」

「牡丹さん！考え直した方が・・・！」

「ほう！支配人か！！余にぴったりだな！！」

彼は恐らく、支配という言葉にしか反応していない。

「でもねタカミチ、それに明日奈。彼にも働く場所が必要だ、勝手に召喚して後は勝手にしてください何て、失礼にも程が有るだろう？」

「「うっ・・・」」

そう言うと牡丹はさっさと彼を連れて支配人室に連れて行こうとした。扉に近づき手を掛けた所で彼女はくるりと振り返りタカミチの方を向く。

「そうそう、ネギ君も学園長の所に連れて行き説明したまえ、そうした方が早く終わるだろうから」

実際、あのネギ少年の尻拭いをするのは嫌だが、この召喚された者を放置するのも可哀そうだ。

「さぁ、こっちさ」

一階の待ち受け付近の場所にその部屋はある。意外と広く生徒の部屋と変わらないが、変わっている所が有るとするならば二段ベットではなくただのベッドに成っている程度だ。

「うむ！趣が有って中々に面白いではないか！」

「そうかい？それならば良いのだけれど・・・それと、君の服も考えなければね」

「いや、ソレには及ばん。私を召喚した前のマスターが買ってくれたモノを【宝具】として持っている！」

「・・・君、本当にその規格外さが私の知り合いに似ているよ」

どこぞの筋肉ダルマの笑い声が聞こえた気がした。

「解らない事は無いかい？」

「此処に来る前に殆んどの知識を頭に詰め込まれたわ、問題ない」

「？どうやってさ」

「何を解りきった事を！聖杯に決まっているだろうが」

「・・・へぇ、成程ね」

おかしい、この世界には聖杯も、聖杯の欠片も無かった筈だ。それなのに彼はその聖杯から知識を受けたと言う。どう言うとこか全く分からない、そこまで規格外でも無いだろう。ソレは流石に世界の理から外れている。

「・・・君、悪魔相手にも戦えるかい？」

「悪魔・・・？おぉ、あの化物か！あんなモノ余の敵ではないは！！がっはっはっは！！」

「それなら、良い仕事が有るよ」

牡丹は笑みを深くした。

「それと、話してくれないかい？君の知っている狂王の事を」

「おぉ！やはり興味を持ったか！！良いだろう！王の言葉は万民に向けて発せられなければならない！！」

彼は、本当に自由な性格の人物のようだが、狂気が滲みでていなかったのでそんなに苦労しないで済んだ。その事だけは良かったと言っておこう。

５０話・何か来た（後書き）

面倒な物が召喚された様だぞ
ふん、あの化け物どもに関わるのなら共に消してしまえ。

51話・征服王のお話（前書き）

彼が記憶する、狂王

51話・征服王のお話

――征服者の記憶――

「さぁ、早速聞かせてくれたまえ、狂王の話しを」

「うむ、良いだろう！」

彼はそう言うと豪快に笑った、その大きな声は部屋の中に反響して五月蠅いと言えるレベル。まあ、この寮は何故か防音壁で出来ているので迷惑には成らないだろう。

「アレは以前の聖杯戦争の時であったか。余は受肉の願いを持ってその戦に参加していた」

聖杯戦争、それは黒の古書にも記憶されていた。願いを叶える願望具を巡ってマスターと英霊が手を組み戦う、しかしその戦争の結果、最悪の被害を持って戦争を終わらせたらしい。

「奴は、イレギュラーと呼ばれる物だったか、二人目のセイバーとして一人の少女が召喚した」

「狂王を少女が？」

「あぁ、余もセイバーのクラスが2人も居る事に驚いたが、それ以上に奴の王としての考えに深い感銘を受けてな！余の家臣に成らぬかとも誘ったのだが、断られた！」

「君は何をしているんだい・・・」

牡丹はそう言うとため息を吐いた、その闘いの中では敵である筈の人物に自分の陣営に入れなど、良く言えるなとも思える。それだけ彼が規格外と言う事だろう。

「一人のセイバーとも話したが、奴は王と言うよりお嬢さん、小娘と言える程度だった」

「ソレは酷い話だね、私の知っている聖杯戦争ではセイバーとはアーサー王だった筈」

「アレは王とは何かを理解していなかったのだ。救ったが、導きはしなかった」

太い男の声が、少し小さくなった。

「・・・ふむ、狂王の話であったな。奴とは街中で出会った、一人の少女を連れて血まみれの姿で夜の街を行くアイツの姿は、どう考えても不審者か間者だろう。しかし、その目はまるで獣だった。余ですら腰が引けたわ」

ぐっと自分の拳を握りる、筋肉が動く音がした。

「異端分子として奴は討伐対象とされたがそれを次々と撃退されてな。余も一度挑んだが敵わなかった」

「・・・君がかい？征服王イスカンダルともあろう者が【敵わなかった】？」

「うむ、一撃も入れる事が出来なんだ」

悔しそうに、しかし楽しそうに彼は狂王の事を語る。討伐対象とされていた彼女を自分の陣営に何度も招いた事、その際にマスターが騒いだ事、金ぴかの鎧のサーヴァントと彼女の戦いの事。

「奴は、何時も悲しそうな瞳をしていた、だから余は聞いた、家臣の悩みは王の悩みでもあるのだからな！」

「いや、君の家臣ではないだろうに・・・」

「まあ、良いではないか。その様な細かい事」

「歴史上とても細かいとは思えないけれど・・・」

・・・此処で、とある事に気が付いた。

【狂王】は英霊なのか？黒の古書には最も多くの命を奪った故人と書いてあったが、人類の敵とも書かれていた、ソレを間違えても英雄とは言わないだろう。言うとしたら狂王はどちらかと言うと反英雄、殺人者、だ。

「そんな事余は知らん、奴はサクラとか言うマスターの願いにより召喚されていた筈だ。【聖杯の力を通さず】にな」

「！？そんな事が出来る筈がない！聖杯の力を借りずにどうやって」

「ソレは奴に聞いた、何故そんな馬鹿のような事が出来たのか、とな。そうしたら奴はこう言って来た【聖杯何て私には関係ない、あんなモノの力が不要な程にこの娘が強く願ったのだろう】ってな」

「り・・・理由に成っていないし、説明にも成って無い・・・」

「がっはっはっ！！それが奴だ！！」

今さらだが、自分の親の力に少しの脱力感を覚える。確かに狂王の物語には素手で岩山を砂にした、星を落とした、弓矢を全て跳ね返したなどと言う理解不能な文も登場して来る。その中でも最も理解しがたいモノが1つの大国を一人で砂にしたと言う所であろうか。

「ソレに奴だけだ、余の宝具を全て一薙で突破した輩は」

「君の宝具はそれなりに強力と書かれていたけれど？」

「奴の宝具は黒い刀一本であったが・・・奴め、恐ろしいほどに力が強い」

あの一撃は、化物級だ。そう言う彼は悔しそうにその拳を握りしめる。

「で、聖杯戦争はどうなったんだい？」

「・・・奴は誰も殺さなかった、しかし何を思ったか金ぴかは奴を付け狙っていたが、な。だが例外もあった、奴は自分のマスターの害になると考えた者は片っ端から消して行った、一般人も、英雄も魔導師も関係なくな」

「それなのに誰も殺さなかったの？」

「殺したと言うよりは、魂ごと消滅させていた」

――――――

【ほう、余の一撃を避けるか】

【はっ簡単な事だ】

漆黒の鎧に白銀の髪を持った女性が赤黒いマントを翻してそう笑った。その手には漆黒色の刀が有り重装備すぎる鎧は彼女の肌が顔以外見えないように隠している。

【私はこの戦いに興味がないんでね、さっさと終わらせてくれたまえよ?】

【・・・聖杯に興味がないと?】

【夢は、己の手で叶える方が面白いのだよ】

楽しげに笑う彼女の瞳の色は紅色、血の様な、しかし恐ろしく綺麗な紅だ。

――――――――――

「あの戦いの後は、余も知らぬ。セイバーが聖杯を破壊し、その後は余も魔力が尽きて英霊の座に還されてしまった」

「そう・・・かい」

「どうだ、何か役に立てそうか?」

「今のところ解らないけれど、君のくれた情報はかなり役に立つ筈さ、ありがとうね」

「なぁに、こちらとてこの部屋を貸して貰う身、それなりの礼儀があろう」

狂王は死に、死んでもなお戦い、殺し、侵し、と言うのは文献の中だけの話しかと思っていたが、そうでもないようだった。今日の情報は、今後何かに役立つだろう。そう考える牡丹は手に持っていたメモ帳を閉じると、静かに笑った。

51話・征服王のお話（後書き）

狂王、お前こそ我にふさわしい妃と成ろう。共に来い。
私には妻が居るのでね、お断りだよ金ぴか。

52話・吸血鬼と（前書き）

はい、原作三話です。

52話・吸血鬼と

――人に作られた試練程、甘い物は無い――

吸血鬼事件、その話題で学校の中は持ちきりであった。おもしろそうだと捜索し始める生徒まで居る始末、既に学園の中は暴走状態であった。牡丹のアルバイト先である料亭でもその話題は良く耳にした、しかし、この学園に吸血鬼は一人しか居ない訳で、そして正義の魔法使い達から文句が無いと言う事は奴らの考えと言う訳だ。

「面白くないね、何時もはまるで害虫でも見る様な眼で見て来るのに、こう言う時だけ手のひらを返してくるか」

正義と言う物は先に掲げた方が正義なのだ、それは歴史が物語っている。勝てば官軍とは良く言ったものだ、まったくもってその通り。勝利を手にした者達が敗者の理想を語り継ぐ筈がない。如何に賢い王の治めた国でも、如何に暴君が治めた国でも、滅べば悪だ。そう歴史には書かれるだろう。

考えは恐らく、正義の魔法使いとしての感情を育成する為だ。恐らくソレはエヴァも知らないだろう、協力の対価として最近妙に給料の払いが良かった。

「キヒッ、正義の魔法使いなぁ。面白くも無いモノを育成しているな」

「私に言わせれば、育成ではなく洗脳だね」

征服王のように自由に生きてくれれば私達異端が狙われる事も無かっただろうに。

「魔法使いが教会と協力して、何人の人間が死んだと思っているのかな」

「それが奴らさ。所詮人間、他人の不幸は蜜の味とも言うだろうに」

彼女はキヒヒッと笑う。鋭い牙が彼女の口の間から覗く。

確かに他人の不幸を見る事が人間は大好きだ、その為に昼間のドラマ等も刑事モノ等が多い。

「でも、正義の魔法使い達は知らないのさ」

「？何をだ」

「キティの封印は既に解けている、その為に彼女は今の状態で百パーセント発揮できる」

「と、言う事は」

「可哀そうだが、完全に勝ち目はないだろうね」

今、エヴァは学園長にネギと手合わせをするように依頼されている。吸血行為は出来るだけ悪の魔法使いらしくと言われたからだ。もちろん普通では断ったであろう、しかし誇り高き等と付けられて彼女も良い気持ちになっており、引きうけてしまったらしい。

「お帰りなさいませ、牡丹様」

「あれ？テル、キティたちは？」

家の帰るとウロの怪は食事（悪魔狩り）へすぐに出かけて行った。
家の中に残された一人の従者に彼女は疑問を投げかける。

「エヴァ様でしたら、今日も吸血行為に出ています」

「全く、加減を知らないな、キティは」

・・・あれ?まずくないか??今日は確か学校で居残りをしていた明日奈と木乃香の事を思い出した。あの二人は確かネギ君と同室であり、明日奈君は面倒な能力を持っているらしい。タカミチが教えてくれた。いくら強力な魔法壁が有るとしても、それを無効化されては無意味と言うモノだろう。

「うー・・・ん、また黒衣の死神として彼等の前に出るのかなぁ」

「しかし、貴女様のその正体は既に学園側に知られております。迂闊な行動は・・・」

「・・・良いのが居るじゃないか」

牡丹は、妖しく笑った。それもとびきり楽しそうに。

―――――――――

―――

―――

「これで終わりです!!風花・武装解除!!」

ネギの手より放たれた魔法でエヴァの血を媒介とした魔法の衣が剥がれ落ちる、油断も有ったのであろう、それなりに遊んでいたのだ

ろうが、それは遊び過ぎと言うモノだ、流石に顔を赤くしたエヴァは自分の身体を手で隠そうとする。

「くっ遊び過ぎたか！」

薄手のキャミソールに身体を包んだ彼女は、オロオロと少々慌てだす。ネギに追いつくように現れた明日奈の姿に焦っているのだ。彼女に魔法を2回ほど無効化されているエヴァは少し後ずさった。茶々丸が彼女を守るように現れたが魔法使いの天敵が居てはどうしようも出来ない。
その時、妙に野太い声がそこに走った。

「教師ともあろう者が、生徒に何をやっておるか！！」

現れたのは赤髪の大男、その服装はぴちぴちのTシャツと大きなジーパンである。筋肉質のその腕を組んで月をバックに仁王立ちする姿は変質者とも言えるだろう。しかし何処か威厳に満ち溢れていた。

「教鞭をとる者が生徒個人を追いかけ回すとは落ちたモノだな」

「あッ貴方はイスカンダルさん！！」

そう、征服王である。

「そこのお嬢さんの帰りが遅いと思い、もしかして吸血鬼にでも襲われたかと探していたが・・・この時間の外出はまずいのではないのか？」

「「うっ」」

「貴様は確か・・・新しく寮の管理をしている・・・」

「さぁ！寮へ帰るぞ！！何せこの時間は物騒だからな！！がッはッはッはッは！！」

「・・・何なんだアイツ」

両肩にネギと明日奈を背負い、彼は堂々と立ち去って行った。まるで突然現れた嵐の様であった。

「やぁ、終わったらしいね」

そこにひょこっとタイミングを合わせて出て来たのは牡丹である。彼女の恰好は何故かアルバイトの恰好であった。着物割烹着姿の彼女は懐からおにぎりを出すとそれをエヴァに渡し、茶々丸の頭にネジをセットして巻き始める。

「い、今の奴は牡丹の・・・？」

「私が頼んだんだよ、寮生が深夜徘徊してるってね」

「それで来るのか？アイツが」

「彼は良い意味でも悪い意味でも真っ直ぐだからね、魔法世界の筋肉ダルマに良く似ているよ」

「・・・あぁ、確かに」

そう言うと牡丹お手製のおにぎりを彼女は頬張った。

「しかし厄介だよ、ネギ君は昔の熱血教師のように生徒に執着して来る。君の事も正義の魔法使いにしようとするだろうね」

そう言うと何故か牡丹は楽しそうに笑う。

「なっ何故笑う？」

「いや、どっちが勝つか、ジジィと賭けて来た所さ」

もちろん、こちらが負けてもあちらが負けてもこちらに有利な賭けだけれどね。そう言うと牡丹はニヤリと笑う。今日の月も紅い血の様な丸い月であった。

52話・吸血鬼と（後書き）

侵略者にはわかるまい、私の苦悩が！！
古き王よ、お主に何が有ったかは聞かないでおこう、しかし過去に縛られるな
私が過去に？過去ならどれ程良かったか！！

――古い、征服王の記憶――

53話・お風呂騒動（前書き）

米騒動ではないです
因みに言っておくと、牡丹はまだ女の子、つまりは純潔です。

53話・お風呂騒動

――異性不純行為は先生と管理者が絶対に許しません（例外あり）
――

魔帆良女子寮大浴場、エヴァに連れられテルと共にやってきたのは黒衣の火防女こと牡丹だ、白い肌にタオルを巻き肌を出来るだけ晒さないようにして大浴場の中に入った。もちろん湯船にタオルを入れる事はせずに入る前にはしっかりととっている。この時間は生徒も居ないし、久々に家族として広い風呂に共に入ろうと言うエヴァの考えなのだが・・・。

「君、やっぱり成長していないね」

「お前に言われたくないぞ牡丹」

お互いの体を見て少々ため息を落とす。二人とも不死と言う珍しいモノだ、元々成長なんて望めないし、成長してゆっくり老いて行くのも苦痛、意外と不死と言うのは面倒だ。
眼を瞑っている牡丹の長い髪をテルが優しく梳かしている。

「？牡丹、その傷はどうしたのだ」

「？どれの事だい」

エヴァが牡丹の背中を撫でる、擽ったかったのか彼女は少し身体を捻らせた。撫でられた背中を確認すると確かに傷が有るようだ。心の眼で自分の背中を見ると言うのも変な気分だ。

「私・・・いや、僕の記憶には無いよ、こんな傷」

「私も今日初めて見たぞ・・・？」

「テルは何かわかるかい？」

「いえ、申し訳ありませんがお力には成れそうに・・・」

「む・・・どうしたと言うのだろうね」

追放世界に居た時の傷であろうか、それともそれ以外か。全く思い出せないし思い出したくない気もする。しかしこのもやもやした気分、どうすればいいのであろうか。

「（不死殺しの傷でもない限り再生はする筈なのだけれど・・・）」

その前に、背中を切りつけられた記憶なんて一切無い。

「まぁ良いさ、命に関わるような傷でもなさそうだしね」

「・・・」

不満げな顔のエヴァを置いて、彼女は体を洗う為に浴槽から出る、相変わらず無駄に広い浴場だ、どこぞの紅い暴君が大喜びしそうである。歩いている内に湯冷めしてしまわないだろうか。

「ささ、こちらへどうぞ牡丹様」

「ありがとう、テル」

――――――――――――――
――――――
――

一通り洗い終わった頃に、妙に騒がしくなった事に気が付いた。現在の牡丹は完全に気を抜いているので全く気が付いていなかったが、コレは大勢の人間の声である、恍惚としたテルを叩いて正常な状態に戻すと、物影から静かに浴槽の方を見る。エヴァは認識阻害の魔法を使っているのか誰にも気が付かれていない。その他に気になる事は・・・何と２－Ａのクラスの殆んどが居るではないか。

「（そう言えば今日は短縮授業だったか？私も殆んど平和ボケが回って来ているのかな？）」

「！牡丹様、御隠れ下さい！！」

「？どうしたの、テル」

浴槽の方を見て見るとそこにはネギ少年の姿が有る、一方こちらは現在何も来ていない、言わば全裸の状態、最悪であった。エヴァはちゃっかりその体にタオルを巻いている。

「（こっこれはまずいね）」

「（エヴァ様には悪いですが、此処は出ましょう。牡丹様の柔肌を大衆の前に晒す事は許されません）」

「きゃぁああ！？」

突如響く女性の悲鳴、そこには水着を剥がれたお女子生徒の姿が有

った、流石に教師としてコレはまずいと思ったのか牡丹は近くにあったフェイスタオルで何とか身体を隠し注意に出る。
その時である。

「みっ皆さん落ち付いて下さい！」

つるんっ

「・・・え？」

「・・・ん？」

浴槽から出て来たネギ（全裸）が石鹸に滑ると言った何ともコントじみた事をしてくれた、その結果牡丹の場所まで滑って来て・・・押し倒す形で、床に倒れ込む。
頭を強打した牡丹は眼を回し気を失っている。その後ろでは殺気だったテル（球体関節を隠す為に水着装備）はプルプルと震えていた。

「ん・・・？やわらか・・・っ！！？ぼっ牡丹先生！！？ごッごめんなさい／／／／！！」

「う～・・・ん・・・」

その光景に周囲の生徒達も行動を停止した、先ほどまでの騒動は何処へやら、今度はこちらへ駆け寄って来て大丈夫かなどと聞き始める。もちろん牡丹は答える事は出来ない。

「ねっネギ先生！！何時まで牡丹先生の胸に手を置いておくつもりですか！！」

「アッその、ごめんなさい！！」

アキラの指摘でやっとネギは彼女の胸から手を放す。

「小僧ぉぉお」

地を這うように低い唸り声、その声を聞いた瞬間にそこに居た全員の顔からサッと血の気が引いた。

金髪の、人形の様な少女が恐ろしい程の殺気を放っている。

「貴様、生きて帰れると思うなよ・・・？」

凍るように寒くなる、正確には牡丹の回り以外に氷が出来ていた。

茶々丸とテルはサッと牡丹を回収し大浴場から姿を消した。残された生徒達は恐怖に一歩も動けていない。

「牡丹の肌を見たどころか、もっ揉むなんて・・・ッ！！死ねぇ！！」

「うっうわぁぁあああ！？」

――――――――――

――――

――

「・・・ん？僕は・・・私はどうしたんだったかな？」

眼を覚ました頃にはどっぷりと日は暮れていた。既に窓の外には満ちていない月が浮かんでいる。

確か、エヴァに大浴槽に呼ばれて・・・それから・・・それから？

どうやら、記憶が一時的に消えているようだった。

――その頃、ネギとエヴァは――

「逃げるな！！私がさっくりと殺してやる！！」

「うわぁぁあん！助けて下さーい！！明日奈さーーーん！！」

服を着た状態でまだ追いかけていた。

53話・お風呂騒動（後書き）

命の花が咲き乱れる園で、貴女は何人の花（イノチ）を摘むのですか？

５４話・狂国の状況（前書き）

今回、牡丹達の出番はありません。

５４話・狂国の状況

――狂国――

「デュラ、死霊騎士団はどうなっていますか？」

「現在再生が終了したのは３００人弱と言ったところでしょうか」

「十分ですね、ではそろそろ」

国取りを、始めましょうか？

魔法世界が恐れていた事が始まった、狂国は小さな小国であったがまずは近隣の国に１０人と言う少数で攻め込み3日で国王家臣全て殺した。市民は再び囚われた。
これを重く見た同盟国は狂国を危険国と認識、帝国に討伐依頼を申し出るが、帝国は不可侵条約を結んでいるので動く事はしなかった。

「まだです、まだ小さすぎる。次はあの国です。滅ぼしなさい」

「し、しかしメイド長殿、既に武器が」

「武器がないのならスコップでも鉄パイプでも良いです。持たせて部隊は出撃です」

新人の亜人メイドの一人は彼女の行動に若干の恐怖を覚えていた、亜人の解放を主張して隣国を攻めていた彼女の考えは殆んどこの国の領土拡大に向けられている。
しかし、国を取っているとは言えその国は小さい国ばかりなので大

した大きさは変わらなかった。確かに以前よりは大きくなったかな？程度である。

「な、何故そこまで国を取るのですか！もう十分でしょう！！」

「・・・貴女は何を言っているのですか？これではまだ死都の進行を阻めない。我々の当面の役目は死都への牽制です」

それに、まだまだ人員も足りない。才能が有る亜人達にそれなりの教育を受けさせているが、それでもまだ足りない。教団からの支援も望めないだろう。

正直、ウロの報告通りに向こうが本気で来るならば持ったとしても５日位であろうか。本当にウロを護衛に付けておいて良かったと思う。

「め、メイド長様・・・ち、地下のアレは何なのですか！！？」

「地下の・・・？あぁ、アレですか、アレが貴女達を助けたのではないですか」

「あ、あんなモノがですか！？冗談を言わないでください！！」

「あんなモノとは・・・彼女達はまだ再生が終わっていないので地下で再生させているのです。もう少しで筋肉と皮が元に戻るでしょうから」

はっきり言おう、回収された死霊騎士団は既に人間の形を保っていなかった。既に骨に成っていたモノ、肉の塊に成っていたモノ等様々だった。ソレに命令を与え人間の形に戻しているのだ。回復中の彼女達は恐ろしいので人目に付かない地下で再生させているのだ。

「良いですか？彼女達が私達の主戦力なのです。あんなモノと呼ぶ事は今後禁じます」

「っ！」

口を押さえる亜人のメイド。それはそうだろう、潰れた人型等が内臓器官を動かして再生を繰り返しているその姿はまさに化物と言えるレベルだ。

「現在我々が保有している国はこの程度です、まだ敵国の中には貴女達と同じ亜人が多く強制労働に付かされているでしょう。悔しいでしょう？悲しいでしょう？ならば、ならば取り返しましょう。その手に死の鉄槌を構え、君達を蹂躙して来た相手を家畜のように見下ろしながら殺そうじゃないですか、我らの王もそうしたでしょうし」

狂王は人間など愛していなかった。人間の中で愛したのは本当に数人、その他は亜人であったり異能力者であったりである。普通の人間も、自分に関係の無い魔法使いも、狂王にはとるに足らない存在なのだ。

唯一、最も愛した者が狂王の妻である。

妻の為に人間を守り、人間を殺した。それが狂王だ。

「王の復活には方法がありますが、まだその時ではありません。ソレに、その術式を起動する為のモノが集まっておりませんし」

「メアリー殿久しいな」

「！えぇ、久しいですね。死霊騎士団の一人、将軍タイプのアンデ

ッドですか」

「はっはっは、まあ将軍と言えども数人、数十人普通に居たから、地位など無いようなモノだがな」

「御冗談を、死霊騎士団の将軍クラスは陛下直々に決めるじゃないですか」

名など無い、彼女は死体なのだ。故にアンデッド、死霊騎士団の中でも優れた死体。ただそれだけだ、将軍は近くにあったワインを手に取るとそれをグイッと煽る。

「それにしても、我々は何年眠っていた？半数以上が肉塊に成り果てているじゃないか」

「そうですね、十年、いえもっとでしょうか？」

「そうか、その程度でアレか・・・やはり加護を失うとは恐ろしい事だな」

「陛下の居ない世界なんで、面白味も無いですしね」

メアリーは机の上にあった紅茶を一飲みする。

「中庭で人間を飼っていたな？どう言う事だ、お前が人間を生かしておくなど珍しい」

「ただの捨て駒にでもしようと思ったのですが、鍛えれば兵士として使えそうですし、もう少しで自分が人間だったと言う事も忘れるでしょう」

「・・・洗脳か、私達もあまり使わなかった手じゃないか？」

「仕方ないです、兵力も力も足りないんですから」

「ふん、時が人を変えるとは言ったモノだな」

将軍はそう言うと更にワインを煽る、昔の彼女なら人間を毛嫌いしていたので皆殺しにした筈だ、しかし今ではそれよりも残酷な行動に出ている。これを皮肉と言わずに何と言うのであろうか。

「まぁいい、私達にも解らないような考えが有っての結果だろう？」

「・・・」

「黙したまま語らず、か。まあ良いさ、陛下が復活を遂げるならこちらに付こう」

重厚な鎧を鳴らしながら彼女は地下へと降りて行った、自分の兵の再生具合を見る為にだろう。メアリーは手袋をはめた自分の手を見つめる。

かつて、王と共に多くを滅ぼした手、血に塗れた手、そしてただ尽くす事しか知らなかった手。

今の私の行動を昔の私が見たら嘆くだろうか？そんな事はどうでも良いのだが。

願うのは陛下の復活と、【暴虐の限りを尽くす暴君】と成ってしまった死都の王を倒すことだけが、彼女の考えであった。

５４話・狂国の状況（後書き）

戦争は彼女達を変えて行く。それは鬼から外道へ、兵士から鬼へと
今を見たら、彼女は泣くだろうか。嘆くだろうか。
それとも家臣の忠義に、胸を張ってくれるだろうか？

５５話・決闘の夜（前書き）

本作に登場するサーヴァントは征服王を除いて女性です。あのサーヴァントも女性体が出て来ているのでそこはご注意ください。

なお、性格は真～を使用しております。

55話・決闘の夜

――計画された戦い――

この数日間、嫌にあのネギ少年が絡んできた。茶々丸に奇襲を掛けてきたりエヴァの家に押し入ってきたりなど、本当に恐怖を知らない少年である。

しかし、今夜それも終わるであろう、学園の一斉停電の暗闇を使ってネギと戦うと言うのだ。

暗闇ではこちらが有利と言う事も有るが、良く考えてほしい、エヴァはこれでも真祖の吸血鬼だ、太陽の光等は平気だがそれなりに気だるさを覚える。

「しかし、明日奈君がネギ君と仮契約を結んでいる事には驚いたね、年上好きとばかり思っていたのだけれど」

「大体間違ってない、あの坊やは例外だったんだろうな」

「守ってあげたい、と言う事か。でも彼等も運が悪かったね」

「そうだな、今夜の月は満月、しかも【蒼月】だ」

紅い月ではなく、美しい蒼い月。その月が出るのはこの世界でも珍しい、真っ赤な月よりも珍しいとされるが、皆まさかこの一斉停電に重なるとは思わなかっただろう。因みに秘封倶楽部の二人はカメラ装備で大学の屋上にスタンバイしているらしい。何でも狂王神話に繋がりがあるとか何とか・・・。

「あぁ、あの月の夜は私達異形の夜だ」

「その日に当ってしまうとは彼も面白い運を持っているね」
牡丹はテルが入れた紅茶を一口飲む。
「決行の夜まではもう少し時間が有る、それまでに君の手ゴマを確認しなくても良いのかい？」
「私がミスを犯すとでも？」
「そうだね、人形使いのスキルを持つ君に任せるよ、私は出た方が良いかい？」
「その場によって、だな。あの女は魔法を無効に出来る珍しいスキルを持っているしな」
「ソレは私には通用しないね、確かに私か茶々丸で事足りる。それならば私は出番まで暗闇にでも紛れているとしようか。少年が使った召喚魔法の本も試してみたいしね」
「・・・試すって、そんなことしたらまた厄介なのが増えるんじゃ・・・」
エヴァの呟きは、暮れていく夕焼けの中に溶けて消えて行った。
前に征服王を召喚した術式の書かれた本を牡丹は密かに回収していた、これで狂王を召喚しようと思ったのであるが、結果は失敗に終わり現在では魔法陣の研究に移っている。
「研究しても研究しても手ごたえもなにも無し、少し嫌になって来るよ」

「牡丹様、大丈夫です。牡丹様なら必ず」

「だと良いのだけれどねぇ」

そう言う彼女の前には召喚術式が出来上がっていた。黒衣の火防女と言う上級召喚師でもある彼女は術式にそう手間取る事も無く書きあげた、しかし、肝心の術式の内容が少し違うので狂王を召喚する事も出来ない。

ソレに、征服王も言っていた筈だ、聖杯戦争後、彼女は何処に行ったのか解らないと。

――――――

――

――

蒼い月が浮かんでいる、何時もならまだヒトの声が聞こえる筈の時間なのに、何故か酷く静かであった。夜だと言うのに月明かりは明るく周囲を鮮明に映し出している。

血を吸血した数人の生徒を操り彼女はその姿を闇の中に潜ませる。近づいて来る少年の気に笑みを浮かべながら彼女は従者を放った。様々な特技を持った半吸血鬼化している少女達が少年に襲いかかる。

「始まったようだね」

「あぁ、始まったぞ。そちらはどうだ」

「【失敗した】よ、やっぱりと言うべきかな。不完全な状態から始めたからしょうがないと言えばしょうがないのだけれどね」

召喚術式には失敗したと言う事だ、正確に言えば召喚には成功したのだが召喚されたモノが全く違ったと言う事。

「でも面白いモノが引っ掛かったよ。火防女としては満足かな？」

「・・・そうか、なら良いんだがな。気を落としなよ」

「キティこそ油断しないでよ？以外と聖杯を使わないで召喚するのは疲れるんだ」

正直、半分以上の魔力を持って行かれるとは思わなかった。まさかアレ単体の召喚で、とも思ったが、ステータスの全てを2ランク向上させたのだからこれ位当たり前だろう。正直今では後悔している。

「今、そっちに向かわせているから」

「・・・まて、お前がではなくそいつを向かわせて来るのか？」

「以外と使えるよ、隠密系だからね。見た目で怖がらないでよ？何せ肌の色が黒に近い・・・灰色？だから」

「ソレは本当に人間か？」

「一応英霊の筈だけれど・・・？」

「ふん、まあ良い。坊やが来た。念話は切るぞ」

「ガンバッテネー」

ブツンッと行って念話が切れる。眼の前には魔法武装を全て剥ぎ取

られたネギの姿、そこからは誘導されるように戦闘が始まり誘導されるように橋の上まで来てしまっていた。そこにはネギの用意した捕縛用魔法結界が有り、それはエヴァを拘束した、茶々丸が解除しようとするが、意外とアレンジが加えられており破壊する事が出来なくなっている。

「（クッまた油断した！）」

「（申し訳ありませんマスター、抜け出せません）」

そんな会話をしていると橋の向こう、最も暗い場所から何かが飛んで来る。傷つけられた結界の術式はその役目を失いエヴァ達の束縛が緩まった。

「だっ誰ですか！？」

「・・・」

黒に近い灰色とも言える肌に深い蒼の髪と白い仮面、痩せすぎているとも言えるがしっかりと鍛えられている身体が眼に付いた。薄い布で要所を隠している少女が闇の中に静かに立っている。

「コラーーー！！子供に何やってるのよ――――！！」

「っ！来たか神楽坂明日奈」

そこに丁度姿を現したのは魔力を無効化できる特殊能力持ちの明日奈であった流石にその登場に構えたエヴァ、その横を黒い影が通り過ぎる。

「なっコイツ何!?新しい学園の怪談!?」

「我が主の命だ、去れ。そうすれば命は助けてやる」

冷たい声色でそう言う彼女、その手には鋭い刃が月灯りに照らされている。

「アッアスナさん!!」

「逃げなさい!!ネギ!!」

「でぇぇえええい!!」

「「「「!?」」」」

そこに現れたのは計画に無い赤髪の大男、その大男は黒色の少女を見るとその細い体に狂刃を振り下ろす。当然の如くにそれをかわす少女、お互いはネギやエヴァ達を無視して対立する。

「久しいなアサシン、何故お前が此処に居る」

「・・・そう言う貴様は何故此処に」

邪険な雰囲気を放つ二人、その状況にため息をついた一人の少女が念話を使って話しかける。もちろん2人にしか聞こえないように。

「・・・何だそう言う事か、余とした事が飛んだ早とちりであったな」

「御命令のままに」

アサシンはそう言うと、エヴァ達を掴み煙幕を張った。暗殺者らしいやり方だ。その後、正々堂々と戦う事を条件にネギとエヴァは再戦、もちろんの如くエヴァが勝った事は言うまでも無い。

―――――――――

―――

――

オマケ、その後のアサシン。

「牡丹殿、朝でございますよ。ぼーたーんどーのー」

「・・・君、随分とフレンドリーだね」

黒色の肌の少女がエプロンをつけて牡丹を起こしている。どう見ても少女の裸エプロンとも言えるのだが・・・。きっと特殊な服を着ているのだろう、擬態用の色付きの、そう信じたい。影の様な肌のまま彼女は牡丹に紅茶を渡した。

「今日も良いお天気ですよー」

「本当、もう跡形がないよ・・・さっきまでのシリアスの」

55話・決闘の夜（後書き）

それとも夜伽をいたしましょうか？牡丹様
君も女だし私も女でしょうが
女性同士でも、快楽は得られますよ？
変態！変態！！
あぁ、主の言葉責め・・・／／／
誰か―！助けてくださ―い！

56話・悪魔的取引（前書き）

アサシンには、真アサシン（タイガーコロシアム）の性格を使用しております。

56話・悪魔的取引

――修学旅行が何とかって言うお話し――

「修学旅行に付いて行けって・・・ソレは依頼ですかクソ爺」

「ちょっワシの呼ばれ方がどんどん酷くなっていく・・・そうじゃ、今回は西の魔術師達からの妨害が有るかもしれんのでのう、牡丹君に是非依頼したい」

「それなりに高くつくよ？私を動かすと言う事は」

「解っておる、もちろん特別条件としてエヴァやその他の君の家族の同行を許可するつもりじゃ」

「えらく太っ腹じゃないか、何か隠していないかい？」

牡丹は学園長室にアサシンを連れた状態で訪れていた。アサシンの生前の名前は暗殺教団の多重人格者であったハサン・サッバーハ（女性）である。補足として此処に記しておこう。

「・・・」

「無言は正解の意味だよ、何が有るのかな？」

牡丹の問いかけに学園長は顔を蒼くする。何せ彼女の後ろには暗器に手を掛けるアサシンの姿が有るのだ。主を守る為なら命、手段を選ばないこのサーヴァントに睨まれればこうもなるだろう、しかも火防女の能力で様々なランクが底上げされている。

正直、普通の魔法使いなどが敵に回したくないモノナンバーワンかもしれない。魔法に対して暗殺は精霊などの力を借りないのだから。

「・・・むぅ、流石に解ってしまうか」

「内容と追加料金でこちらも動くとするよ、何せこちらも生活が掛っているのでね」

正直キティ達にはもう少し節約を心掛けてほしい、お小遣いと言う形で管理しているがそれでも光熱費などを引けば以外と普通の家庭並の収入に成ってしまう。そこに魔法具や人形の料金が入るのだから、・・・考えているだけで少々頭が痛くなってきた。

「何でも数年前に再封印された両面宿儺（リョウメンスクナ）と言う鬼神が復活傾向にあるそうなのじゃよ・・・ワシとてそれ程までに危険な場所に生徒を送りたくはないが・・・ネギ君に強く希望されてしまってのう・・・」

「少年絡みか・・・追加料金は一千万からだね」

「ふぉっ!?ソレはちょっとお高いのではないかの!!?」

「あの少年が絡むと余計に面倒なんだよ、戦争で紅き翼が英雄視されている半面、復讐を考え付く者も多いんだよ?」

「む・・・うぅ、確かにのぉ」

牡丹は閉じたその瞳をうっすらと開ける。紅い光りの無い瞳が半目状態ではあるが学園長を睨みつけた。

「ソレに、戦火の徒を動かすとなえばそれなりの金額は当たり前だろう?これでも一応、帝国側の生物兵器と呼ばれているんだ」

「う・・むぅ・・・解った、呑もう、その条件」

その言葉を聞いた瞬間に牡丹の笑みは更に深い物に成った。その笑みは邪悪とも言える物である。交渉は昔から商人相手に頻繁に行っていたので得意分野だ。まるで悪魔の様な取引も行ってきた、たまに自分の命を掛けた取引で相手の命や全財産を奪ったのは今では良い思い出だ。

「【呑んだ】ね、それなら良いよ。働いてあげようじゃないか」

「ほ・・・」

「ただし、条件が有る。もし修学旅行中、ネギ君が誰かと仮契約の体勢に入ったら私達は手助けしないから」

「な、何故じゃ?」

「仮契約で敵に対抗する力を得たと見る。一応、生徒達に危害が加わらないように守る、それが依頼内容だろう?」

「う、ぐぅ・・・」

「それで良いだろう?彼が君達の求めていた英雄に成りえる存在だとすれば自分の身は自分で守れる筈だ、契約は成立したよ」

牡丹は懐から魔法術式で書かれた契約書を取り出した。先ほどの契約が事細かに書かれている。エヴァの持っている悪魔のチケットと

同じような効果を持っているマジックアイテムだ。

「・・・良いじゃろう、ネギ君もそこまで節操無しでない事を祈るとするかの」

「主殿、行きましょう」

「うん、そうだね。これで契約の話しは終了だよ」

「うむ、御苦労じゃったのぅ」

「本当だよ、授業中に呼び出さなくても良いじゃないか。まあ自習用のプリントを用意しておいて良かったけれどさ」

丁度彼女が学園長室を出る時にチャイムが鳴った。プリントは委員長に職員室に持って来るように言ってあるので職員室に居れば言いだろう、しかし、アサシンを連れたままで大丈夫であろうか、確かに隠密性に優れており牡丹でも眼と心の眼を両方使わなければ解らないレベルではあるが・・・。警戒に越した事は無いだろう。

「霊体化出来るかい？」

「無理ですね、限界まで影を薄くして付いて行く事にします」

何処までも便利だった。このアサシン、何故か家事関係等も出来るので今では護衛とメイドを並行して行っている。そして何故か将棋にはまり、ウロの怪と良く対戦している所をエヴァが目撃している。

「（しかし・・・京都か・・・古都と言われるだけあって追放世界にも色々な話が残っていたけれど・・・）」

こちらの世界だとどうなのだ。本当にいるのであろうか、だが確かにウロの怪は妖怪だ、居るには居るのであろう。しかしウロ以外の妖怪を殆んど見ていない、甘楽を見つけたのはもう大昔の話に成りかけているし。

「（もしかしたら、隔離された空間に逃げ伸びた、とか？）」

そんな事を考えて無い無いと首を振る。

そんな事が出来るのは何処の大妖怪であろうか。空間ごと作ってしまうなんて創世神の様な事を妖怪が出来るとするのならば、それは賢者と呼ばれるのであろうか。

黒の古書にもそこ辺りの事は細かく書かれていなかった。

「（主殿、キョウトと言う所について私（ワタクシ）も調べてみたのですが、中々に面倒な連中が居るようですね）」

「（・・・あぁそうか、君分身出来たっけ？）」

「（細かく言うと違うのですが・・・）」

彼女の話しだと白髪の少年があちら側に、つまりは東洋魔術師連合会？だっただろうか、ソレに西洋の魔法使いが手を貸していると言うのだ。距離的にはかなり離れている筈だが、彼女はどうやって知ったのであろうか？

「（征服王に協力いただきまして）」

「（・・・まさか彼の宝具で？）」

「（いやー、あれ程速い乗り物には初めて乗りましたよ）」

・・・以外と仲が良いらしく、牡丹は少しの疲れを覚えた。黒の古書には聖杯戦争で彼に殺されたと書かれていたのであるが、どうやら狂王と言うイレギュラーのおかげで変わっているらしい。

もう少し、もう少し情報が必要になりそうだ。狂王と、稗田の関係も気になる所であるし。まだまだ、調べる事が山のようにある。

５６話・悪魔的取引（後書き）

空木、貴女何を考えているの？先代の着物を箪笥に戻したりして・・・

・・・帰って来るのですよ。この時間がとまった幻想の都に。

57話・京都への道（前書き）

はい、やっと4巻に入りました。

57話・京都への道

――修学旅行――

契約のおかげでアサシンやテル等も連れて行く事が出来るようになった。そして今、電車の到着を待っているのであるが、何故だろう、周囲の生徒がこちらを頻繁に気にしてくれる、確かに優しい子の集まりであったが何故此処まで気に掛けてくれるのであろうか。

「ぼ、牡丹せんせー、あまり線路側に居ると危ないですよ―」

「そんなに危ないかい？宮崎君」

「だって、先生眼が・・・」

あ、そうだった。普通に心の眼で見えているので忘れていたが、現在では眼を閉じたままであった。しかもアサシンの提案で瞳の部分に包帯を巻かれている。

確かに楽だが、何故巻いたアサシン。

ドンッ

「キャッ」

牡丹の手を引いていた宮崎が誰かにぶつかったようだ、身長の高いその男性は吊り上がったその目でのどかを睨み、時代遅れとも言えるほどの声を出している。

全く、この世界の不良もあちらの世界と変わらないのかとため息を落としながら牡丹はその男性の手を掴んだ。ギリギリと締め付けられ骨が軋む音が聞こえる。

「イデデデデッ！！？何しやがるこのクソアマァ！！」

「君こそ、家の学園の女子生徒に何をしてくれているのかな？」

落ち付いた静かな声が男を逆なでしたようだ、開いている手で男は牡丹を殴ろうと振りかぶる。

まぁ、それを許す様な者が居ないのがこの学園の生徒だが。

パスンッ

と、周囲に聞こえないような静かな音がした後に男性は頬から血を流す、突然の痛みに男は牡丹の手を振り払い悲鳴を上げながら何処かに走り去ってしまった。

「すまないね、真名君」

「大丈夫でしたか？」

「あぁ、あの程度だったからね、でも君、一般人に涼しい顔してその改造銃を向けるのは止めた方が・・・」

「私は先生の為にやった事なので後悔はしていませんが」

「・・・君に女性キラーの称号を上げよう」

「・・・ソレは喜んで良いのですか？」

そんな会話をしている、因みにエヴァはまだ朝早くなのでかなり不機嫌だ、半目状態で茶々丸に寄りかかりながらボーッとしていた。

髪の毛なども未だぼさぼさで、茶々丸が整えている。

「（少々先ほどの小僧には教育が必要な様子で・・・）」

「（アサシン、君はもう少し血の気を抑えようか）」

主思いの暗殺者であるが、物騒で仕方ない。

因みに征服王は今回の修学旅行には付いて来なかったものの、いつの間にか機械技術部の生徒と仲良くなっており、大戦略と言うゲームに熱中している。そして彼のゲームの感想を聞いて技術部の生徒は今までにない戦略ゲームを作っているようだ。彼の適応能力は本当に規格外だった。と言うよりも本当に英雄なのか？

「せんせーも肉まんいかがカ？」

「あ、じゃあ３つ貰うよ」

「３６０円ネ♪」

因みに、自分の分、エヴァの分、そしてアサシンの分である。テルはそう言った器官が無いので食事は出来ないし、茶々丸も同様である。

一人足りないと思うだろう、そうウロの怪だ。彼女は狂国から一時的な帰還を命じられて愚痴を口に出しながらも樹海の遺跡から帰って行った。一応、こちらが危険な状態の場合すぐ来れるようにと転移符を持っているようだ。

それに、今はこちらにアサシンが居るのでそれなりの力が有ると判断したのであろう。

「しかし、京都、ねぇ」

「先生は初めてですか？京都」

「あぁ、刹那君。そうだねぇ、初めてだよ（前の世界では軟禁生活だったからね）」

因みに産まれた国である筈の日本の事を詳しく知らないのはしょうがない事だ。書の中での事や書かれている情報と本当に現地に行ってみた時の感想とでは大いに違いが生まれるだろう。空気とか、雰囲気とかも。

「・・・先生なら既に知っていると思いますが」

「あぁ、知っているよ。君も大変だねぇ。大丈夫、生徒は守るよ。そう言う契約だからね」

「契約・・・ですか？」

「うん、そうさ。さ、新幹線が来たよ」

そう言っても新幹線は初めてかもしれない、電車は初めてではなかったが新幹線のように鉄の塊が高速移動するのはどうも信じられなかった。そう言っても見たのは初めてではない、追放世界に居た時、身の世話をしてくれる女性の中にそう言った方のマニアが居たので写真をそれなりに見せてくれたのだ。何でも機械にロマンを感じるらしい。

はっきり言おう、乗った感想を。

「き、気持ち悪い・・・」

「ぼ、牡丹様がそれほどまでに酔いやすい人だったなんて・・・」

「お前、確かラカンやイスカンダルの肩に乗って移動していただろうが！」

「この機械的な感じが何とも・・・うぇ・・・」

「牡丹様、酔い止めを」

「薬草を！」

人類の英知、恐るべし。牡丹にはまるで世界が回るように感じていた。因みに生徒達とは少し離れた車両に乗っている。学園長の考えらしいが、何を考えているのか・・・。

瞬間的に何かが席の横を通り過ぎた様な気がした。燕のようだが生きている者に有る筈の気が無かった。恐らく、式神と呼ばれるモノだろう。

「（もう妨害が入ったのか・・・今はそれどころじゃないけれど・・・）」

「（主殿、私が）」

「（いや、大丈夫だよ。あの子はそれほどまでに愚かではない）」

そう、刹那君は賢い子だ。守りたい人を守る為にわざと自分から遠ざかり守っている。まあ、それが良しと出るかそれ以外かは放っておいて。

「あぁ・・・薬漬けになりそう・・・僕・・・」

「元々お身体が丈夫ではないのですから無理はなさらないでくださ

い・・・」

「・・・うん、そうする」

因みに、京都に到着するまで彼女は眠っている事にしたらしく、テルの膝の上で静かな寝息を立てていた。それを羨ましそうに見ていたアサシンを誰も知らない。

57話・京都への道（後書き）

茶々丸、酔い止めは乗る前に呑ませるモノですよ？
そ、そうなのですか？姉様

58話・観光とは呼べない（前書き）

京都編！

58話・観光とは呼べない

――京都観光――

京都、確かに初めて来たがコレは確かに癒しの空間と言われるだけあるだろう、のんびりとした雰囲気が漂っている。古都と書かれているパンフレットが出ているように何処か懐かしさを訴えて来るような街並みであった。まあそんな事は言っていられないのであるが。まさかの飲酒により殆んどの生徒がダウン、新田先生にはばれなかったようだが（ソレも問題では？）速攻でホテル行きに成ってしまった。

「全く、ゆっくりしている暇も無いね」

「私はそれでも良いがな、何が楽しくて日の下を気だるい気持ちで歩かねばならんのだ」

「キティはこう言う所好きじゃなかったっけ？」

「私は牡丹が居ない間にも来たことが有るし、京都には良い思い出も悪い思い出も無いからな」

「ま、今回はそれなりに面白くなると思うよ。何せ鬼神が復活段階に入っているらしいからね」

そう、鬼神と言えども大した敵には成らないだろう。そんな昔の産物の様な、早く言えば普通の人間が恐れた化物など魔法使い達からすれば鬼神兵などのレベルと同じだ。

「私は朝早くから起きていたので眠い・・・少し眠るが、牡丹はどうする？」

「私は・・・そうだね、露天風呂が有ると聞いたのでそっちへ向かってみようかな」

「そうか・・・解った、気を付けろよ」

「大丈夫だって、アサシンもテルも居るからさ」

「お前はすぐに無茶を通すからな、良く見張っておけよ」

「「はい」」

「ちょ、信用ないなぁ」

しかしソレは当たり前かもしれない。何せ彼女は本当に眼を放すと死ぬようなことをしでかしているのだから。
彼女は浴衣姿でタオル等を持ち露天へと向かう、旅館の中はアルコールが抜けて来た生徒達が普通に立ち話をしていた。生徒の中には酒豪の様な生徒も居て、酒を楽しんでいた物も居る。真名とか千鶴とか。

「（・・・？人の気配、確か今は教師の入浴時間の筈・・・）」

空には何時も通りの白い月が浮かんでいた。その月灯りが彼女の白すぎるとも言える雪の様な肌を照らし出す。背中には斬られた様な古傷が有るが、それも彼女の魅力を更に高めていた。
テルは球体関節が丸見え状態だ、ハカセが彼女に人工スキンを張ってあげようかと持ちかけていたが、現在悩んでいる最中らしい。

そしてアサシンだが、彼女は常に薄着なので正直脱いでも脱がないでも変わらないようだ。ただしお風呂場に暗器を持ちこむのはどうかと思う。仮面を外している彼女の瞳の色は黒の混じった赤だった。

「おや？刹那君じゃないか、この時間にお風呂かい？」

「あ、先生。どうも・・・」

「今夜も月が綺麗だねぇ」

「？失礼なのですが、先生は盲目の筈では・・・」

「ソレはノーヒントで行こう、君にもすぐに解る事だけれどさ」

「？？」

彼女の体をテルが洗っている、髪の毛はアサシンが、その光景は完全に異様だった。泡立った泡で何故か牡丹が羊毛に包まれてるように見えて刹那は一瞬和んでいしまっていた。

「それにしても気が付いているかい？」

「何にです？」

「私達を視姦している変態に、さ」

その言葉を皮きりにアサシンが分身し、岩を切りつける。クナイの様な暗器であるがそれはズッパリと切断されてしまった。隠れていたのは赤髪の少年とそのペット？であるオコジョだ。

「風花、武装解除！！」

「っ！西洋魔術か」

アサシンの手に持っている得物が弾き飛ばされたが、彼女は止まらない。何せ彼女はアサシンだ、武器を使った攻撃だけではなく体術等も習得している。

「ぐっ！？」

「主殿、捻り潰しますか？」

「いや、そこまではしなくても良いともうよ？でもね、オコジョの持っているその小さなカメラは破壊しておいて」

「仰せの通りに」

「所で刹那君」

牡丹は身体と頭の泡を全て洗い流し、頭を洗っていたアサシンの分身を消させた。先ほどまで戦場の様に成っていた湯船につかりながら一息つく。

「君も得物を持って露天に入って来ていたんだね」

「あ・・・／／／」

まあ、護衛の悲しい性か、と無理やり理解して身体を伸ばす。

「「きゃぁぁあああ！？」」

「！お嬢様！！」

「あぁ、刹那君、大丈夫だよ」

「先生！？何故止めるのですか！！？」

「私が何も仕掛けないと思っているのかい？」

忘れて貰っては困る、変態撃退用等の為にとあるモノを更衣室に置いて来てるのだ、向こうが式神を使って来る事は新幹線の中の燕で理解できた、それ故に簡単に手は打ているのだ。

「更衣室には私の式神も居るからさ」

忘れては居ないだろうか、【恋呪の筆】の事を。
書いておいたのはこのホテルの女性従業員（箒が武器）をインスタントで作って来たのだ。もちろん恋呪の筆で書かれた兵とも言える彼女達が簡単に負ける筈も無い。
すぐに女性の悲鳴は猿の苦しむ声に変わった。

「ぼ、牡丹先生、貴女も魔法先生だったんですか！？」

と、赤髪の少年、ネギが彼女に疑問を投げつける。

「そうだよ、まあ一般の魔法先生だけれどね」

嘘、本当の事が知られて頼られても困る。一般のと付けておけば親書の事は相談して来ないだろう。

「（刹那君、もう少し近くで木乃香君を守った方が良い）」

「（で、ですが・・・）」

「（君の心境も察するけれど、今彼女は最も危険な状態だよ？それに君達は友達だろうに）」

「（・・・はい）」

静かに頷いた彼女を見て、牡丹は母の様な優しい笑みを浮かべるのであった。

58話・観光とは呼べない（後書き）

貴様、牡丹の裸を見たそうだな・・・？
ひっエヴァンジェリンさん!?
また、私と追いかけっこをしたいのか・・・
たったすけてくださぁい!!明日菜さーん!!

５９話・姫様が攫われる（前書き）

お疲れです、わたしも疲れた・・・。

59話・姫様が攫われる

――お姫様救出劇（三文芝居または茶番）――

夜位落ち付いて眠れると思ったのだが、そう言う訳にも行かなかった。何せあちら側も本気で追って来ているようだ。刹那が何かの術符を張りつけていたが、それはどうしたのかと聞きたくなる。何せ形相を変えた刹那が部屋に入ってきたからだ。彼女の話によると、どうやら木乃香は攫われてしまったらしい。

「はぁ？」

「せ、先生、しっかりして下さい」

「え・・・でも君、呪符を貼っていたよね？ソレはどうしたの・・・」

「どうやら間違えてネギ先生が剥がしてしまった様で・・・」

「ネギ君は・・・」

「何時の間にはやられていました。気絶しています」

「ふざけるな」

本音がポロリと牡丹の口から飛び出した。寝ぼけているので盲目設定を完全に忘れて半目を開けている。ぼさぼさに成った髪のまま彼女は黒の古書を掴んで刹那に案内するように告げた。

「アサシンはホテルが襲撃されないように見張りを頼むよ、テルはもしもの時の為のキティのストッパーで」

「「無茶はしませんか？」」

「二人とも息ピッタリに聞いて来ないでよ、あぁ、茶々丸はこの二人のストッパーをお願い」

「「わ、私達の・・・？」」

「了解しました、全弾撃ち込んでも止めて見せます」

「「「！？」」」

「あ、お願いするよ」

「「「！！？」」」

少々肌蹴た着物のまま、彼女は何処からか黒の杖を取り出してソレに座る。もちろん下着が見えないように女性座りだ。しかし、上は付けていないのだが大丈夫であろうか？
それにしても杖の速度に付いて来れる刹那も恐ろしいと思う。

「居ました！アイツです！！」

「・・・サル？」

大きなサルが、彼女達の眼の前には立っていた。その手には木乃香がお姫様の様に横抱きにされている。女は何処からか札を出すとそれを頬り投げ煙幕を発生させた。

これを思いっきり吸い込んだのは牡丹だ、完全に油断していた。しかしこれでようやく眼が覚め、同時に少々不機嫌に成った。彼女は確かに種族的には人間に近い異能であり化物である鬼孕みだ。だが彼女の生活スタイルは普通の人間と大差ない。夜は眠いし、朝もだるいのだ。因みに牡丹の寝起きは起こす者にもよる。

「先生！電車の中です！！」

「解ってる！刹那！！」

「何です？」

「あの電車ごと燃やして良いかい？」「駄目に決まってます！！」

「チッ」

「（ふ、不機嫌すぎる・・・！）」

牡丹が指を少し振ると電車のドアがこじ開けられる。そして追いかけっこを再開させようとしたその時である。

「お札さんお札さん、ウチを逃がしておくれやす」

突然の水により、二人とも車両の中で水を飲む。もちろん着ている物も何もかもがびちゃびちゃだ。ただし、黒の古書は何事も起こっていないように新品同様の輝きを放っている。これは本当に本なのであろうか？

「車内で溺れ死なんようになぁ・・・ほな」

そう言うとサルの女性は更に奥の車両に向かってこうとする。

「（・・・浮上せり邪悪成るモノよ、契約は此処に、我が障害を取り除け【落し子の触手】）」

ジュルンッと牡丹の周囲の水が歪みそこからぬめぬめとして居そうな触手が数本姿を現す、触手は閉じているドアに向かって体当たりする様に攻撃を仕掛ける。するとどうだろうか、攻撃を受けた部分が見事に溶けて隣の車両まで水が流れ込んで行った。
その後、役目を終えた触手は姿を消す。

「くっしつこい人はきらわれますえ？」

「クッ待て馬鹿サル！！お嬢様を返せ！！」

すぐに体勢を立て直した女性は恐ろしい速さで逃げ始める。本当に此処には化物クラスの身体能力を持っているようだ、黒の杖の速さに付いてくるとか嫌になる。
遂に追い詰めたと思ったら今度は札を使って炎を吐きださせた。

「アチッ流石にこれはまずいね・・・あ、でも浴衣が乾いて良いや」

「先生、真面目に戦いましょうよ・・・」

「でもさ、何だか緊張感が無いんだよね」

もっとこう、何千万人もの人間が全員グール化して都市を襲ったとか、そう言ったレベルの事でなくては。人の死と言うモノを嫌な程見て来た彼女は少し寂しそうな顔に成った。

「コレだけの魔力ならすぐに炎は治まるさ」

そう言うと牡丹は指を鳴らした、するとどうだろう、先ほどまで轟々と燃えていた火の壁が何事の無かったかのように消え去ったではないか。

「くっ式神！！」

「刹那君任せたよ、出来るね？」

「っはい！！」

そう言って牡丹が呪文を唱えようとしたその時である。

「させませんえー」

何処か気の抜けた声が耳に届いた、慌てて手に持った杖で迫る白刃を防ぐ。動きや体の使い方、その他の事も刹那の動きに重ねると・・・どうやら神鳴流らしい。こんなモノが神鳴流ねぇ、と少し考えてしまう。

「私に人間程度の力で勝とうとは考えない事だね」

腕に魔力を回し、彼女を弾きかえす。それと同時に西洋魔術、エヴァの真似で魔法の矢を１０００本同時に展開する。流石にソレには相手も焦ったのか、木乃香を盾の様に構えた。

しかし、彼女の魔法の矢は止まらない。謎の少女が必死にソレヲ止めようと受け流すが、量が違いすぎる。

「所詮、フェイクさ」

「――なっ！？」

いつの間にか彼女はサル女の後ろに回っていた。

「魔法の矢に紛れて・・・！？」

「私の動体視力は以外と良いんだよ」

天蓋【天地逆転】

黒の古書に書かれていた技が彼女の顎部分に入った。倒れた際に強く頭をぶつけたらしく眼を回している。牡丹が木乃香を回収すると同時に後ろの式神が消え失せていた。神鳴流の少女は魔法の矢にやられていたようだ。

そして、帰ろうとしたとその時である、視界に白い髪を持った少年が入る、彼は二人の手を引きずるとこちらを睨み、しかし無表情で消えて行った。

ソレを見た牡丹は、ただただ笑みを深くするだけであった。

59話・姫様が攫われる（後書き）

あの二人は仲直りしたようだが、妙に百合百合しいのは気のせいかな？

６０話・掛けられたお呪い（前書き）

少し章のタイトルが軽いかな・・・？

60話・掛けられたお呪い

――面白い事――

エヴァが面白い事に気が付いたらしく、部屋の中で待っていろと言われた。昨日はあまり寝ていなかったので今日は少し休んでいようかと思ったのだが、まあ、キティの事だからそれなりに面白い事なのであろう。肌蹴た浴衣をそのままに眠い眼を無理やり開いて大きな欠伸を噛み殺す。

少し待っているとそこに運ばれてきたのは宮崎のどかであった、エヴァに加えて真名まで居る。

「どうしたんだい？のどか君なんか連れて来て・・・」

「面白い事が解ってな、コイツの魔眼のおかげだ、後で杏仁豆腐を奢る約束をしてしまったが・・・それなりに価値はあった」

「へぇ、君がそこまで言うなんて、どう言う事だい。聞かせてごらんよ」

真名とエヴァが布団の上にのどかを置き、畳の上に座る。

「コイツには、惚れ薬関係の強力な魔術が掛けられているんだ」

「・・・？のどか君は一般の生徒だろう、何故そんなモノが」

「だから面白いんだ」

真名の魔眼はそう言ったモノも見分ける事が出来るらしい。確かに

前に一緒に任務に行った時、そう言った感じの事を言っていた気がする。

「でも、それだけでは私の興味は」

「対象を聞けば面白い」

「対象？惚れ薬の効果は異性を引き付ける事だろう？」

「調べて見たが、どうやら違うらしい。その他の魔術にカモフラージュされていて解らなかったが、コイツは確実に相手に好意を示すようになる暗示・・・いや、既に呪いに近いモノだな」

確か、惚れ薬系統の物は全て法律上で禁止されていた筈だ。記憶している中の事件でも魔法世界で惚れ薬を使った男が一国を崩壊に導いたと言う話も有るほどに。

「・・・ほう、少し興味が出た」

紅い瞳を開けて彼女は頷いた。気絶したのどかの額に手を当てて彼女に掛った呪術の術式を見ていく、確かに何重にも厳重に掛けられている。成程、これ程濃く掛けられているのに気が付けなかった理由は恐らくあのクラスに有るのであろう。木乃香等の濃い魔力保持者が居れば確かに解りずらい。

「これは・・・それなりの術者が掛けたようだね」

「それが気に成ってな、コイツに以来と言う形で調べて貰ったんだ」

「杏仁豆腐で釣られるとは思わなかったけれどね、あの闇の福音が

人を甘味で釣る・・・面白いから話に乗ったのさ」

「真名、君も良い性格しているよね」

「それが私の性格だからね」

何処か掴めない性格の持ち主である真名。

「そして、コイツが好意を向けるようにされていた相手が、何とあの坊やだ」

「・・・ネギ少年？」

「そうだ、面白いだろう？」

待て、何故だ。確かに彼女は学業に関しては優秀な方だろう。理解も早いし呑みこみも良い、しかし、しかしだ、彼女の運動能力は平均、平均以下だ。それなのに何故彼女なのだ。

・・・能力か、確か魔法使いには仮契約によって得られるマジックアイテム（マジックアイテム）が存在していた気がする。少し前にキティが欲しがっていたし。もしかしたら彼女の持つ、または彼女が持つ可能性がある魔導具は貴重なモノ名もかもしれない。

「しかし、コレは残酷な・・・一人のその後の人生を弄り回すなんて・・・彼女も一般の、普通の人間だったろう・・・」

「牡丹なら解除できるだろう・・・？」

「うー・・・ん、どうだろうね、コレは確かに面倒な術式だよ。３日間程度使って彼女の体に記憶させたんだろうね、刷り込んだと言

った方が良いかもしれない」

膨大な術式を無理やり詰め込まれている感じだ。解りやすく説明するならば・・・水で満タンの袋の中に更に水を追加したような感じか、またはもう膨らまない程膨れた風船に更に空気を入れた感じだ。はっきり言って下手に刺激すると・・・。

「私が失敗したらこの部屋が肉塊まみれに成る程度かな」

「「十分に問題だ!!」」

破裂するだろう、下手には刺激できない。まるで人型の爆弾のようだ、しかも何かに体内の術式が反応して魔力が更に膨張しているように思える。

・・・考えて見れば簡単に見当は付いた、学園都市には魔力と溜めこんでいる世界樹が有るのだ、こうなるのも当たり前だろう。

「まあ、やってみるけれど・・・半日ほど使うから君達は観光してきな」

そう言うと牡丹は財布から数万円キティに渡す、それと同時に生八橋のお土産も頼んでおいた、秘封倶楽部には有益な情報を貰ってばかりである。このままと言う訳にもいくまい。

「そう言えばテルとアサシンは？」

「テルは買い物兼地形の確認、人間の観察に行ったよ。アサシンは周囲を警戒して山の中で敵の反応を待ってる」

「お前、今護衛が居ないんじゃないか？」

「大丈夫さ、私の護衛はしっかり者が多いからね」

そう言うと牡丹は彼女達を部屋の外へと追い出した。のどかに眠りの魔法を掛けてからこれ以上変に刺激しないように黒の古書の魔力を少しずつ使って行く。

部屋の中に幾重にも魔術式が展開された。胸に有るナイフの傷が疼く、赤の光に満ち溢れた部屋の中に人型が二人。あの儀式を思い出すが、今はそれどころではない。

「・・・これは精霊を通さない魔法？まさか・・・でもこれは確かに・・・」

西洋魔法と東洋魔法が組み合わさったような複雑難解な術式を指でかき回し解いていく。面倒だ。

「この魔力・・・まさか・・・」

さて、困ったぞ。まさか知っている人物の魔力だとは思わなかった。これは既に裁判モノではなくオコジョモノでも無く、即刻死刑モノではないだろうか。

ガラスが割れた様な音と共にのどかに掛けられた術式が全て弾け飛んだ。

「・・・さて、どうするかね。まさか、逃げられるとは思っても居ないだろうし・・・これは楽しみだよ、悪い意味で、ね」

牡丹の小さな呟きは、誰の耳にも入る事無く消えて行った。

60話・掛けられたお呪い（後書き）

わかる、わかるぞ。近くに来ている。私の死が、私の存在そのものが。

61話・旅館の聖戦（前書き）

悩むなぁ・・・此処

61話・旅館の聖戦

――夜遅くに出歩く悪い子は・・・――

はい、のどかの魔法治療は完全に完了したが、面白い事に彼女の頭の中には魔法と言うモノが解ってしまったようだ、しかし彼女には好都合かもしれない。何せ魔法耐性が上がっていたのだ、理由は恐らく真理を記す黒の古書に影響されたのであろう。もちろん今までの事もしっかりと説明した。

「な、なるほどー・・・そんな事が・・・」

「でも、普通の人間にはこの事を話さないでおくれよ?ソレは私達にとっても罪に成るんだ」

まあ、君に掛っていた魔法の方が罪が重かったけれどね。
そう考えた牡丹だが、それは口に出さずに呑みこんだ。

「さ、1日以上眠っていたんだ。皆には体調不良と伝えておくから」

「は、はい、ありがとうございました」

中々に素直な子で安心した、もしまた不良生徒だったら鉄拳制裁的な教え方をしなければならないから面倒なのだ。牡丹は閉じた目を擦ると少し身体を伸ばす、彼女の魔力が安定するまで寝ず食わずの作業であったのだ、まあ喰わずとも私的には生きて行けるのだが、不眠はまずかった、目の前が少し歪んでいる気がする。

――バンッ!!――

「!?結界・・・襲撃かな・・・いや、でもこれは・・・」

魔術結界のようだが、コレは子供のおふざけの様な術式だった。高等魔術とは言いにくいし、これは魔法と言うより単位系の・・・契約魔法陣だろうか?

「・・・成程ねぇ、これで契約通りにネギ君は救済対象外に成ったと言う訳だ」

しかし、コレも確か違法のレベルだ。仮契約にもそれなりの条件が有って範囲、相手との同意、その他もろもろが必要になる、意外と面倒なのだ。昔は血での契約や相手との体液交換、つまりは性交などで契約を結んだために、しっかりとした決まりが作られたと言う訳だ。

「でも、確かネギ君はこの類の魔法は・・・」

契約魔法に詳しいモノと言えば確かオコジョ妖精等の妖精系だ、昔はワーキャット等の妖怪の類を使役してソレに契約魔法を覚えさせると言う役割の魔女も居た程にソレは主流の事であった。しかし、オコジョ妖精とは・・・

「あの妖精は守銭奴が多い変態だと聞いた事が有るけれど・・・」

因みに情報元は驚く事にマーリンだ。お茶会の大賢者マーリンも一応は魔法使いなのでこちらのそう言った情報に詳しく教えてくれた。おかげで退屈も無くなったし面白く生きる方法も教えて貰った。彼女は何年生きているのであろうか。

「大勢の人間と仮契約する事は大戦後に確か禁止された筈・・・これ放っておいたら僕もヤバいのかな・・・？」

一応帝国に席を置く身としては危険な気がする、ネギ君がひとりで堕落するなら別に構わないし、止めもしない。しかし他人の運命を変えることは流石にまずいのでないだろうか。しかも彼女達はまだ先が有る子等ばかりである。

「アサシン」

「御前に」

「仕事を頼めるかい？」

「この身が有る限り」

「良し、では仕事だ。たった今此処の旅館が魔力によって結界の中に入った事は既に勘づいているね？」

「えぇ、先ほどまでとはまったく異なる空気でございます」

牡丹は近くのメモ帳を1ページ破くと、そこに何やら地図を書き始めた。ソレには旅館を囲むように書かれた魔法陣とソレの破壊方法が描かれている。

「四方に有るこの術式を破壊してくれないかな」

「断る理由がございません、では行ってまいります」

そう言うと彼女は素早く影に溶けて消えて行った。流石はアサシン

の英霊と言うべきであろうか。この辺りの地形の話は既にテルから聞いているようですぐに行動に移せるのであろう。まあ、オコジョ妖精は以外と賢い事で有名だ、何かの仕掛けも有るかもしれないが・・・。

「さて、私も妨害に行くとするかな」

彼女は少し肌蹴ていた浴衣を元に戻すと部屋を出る。そこでは既に乱戦とも言える状況に成っていた。確かに此処は職員に与えられた部屋が有るが、ネギ君の部屋は生徒と同じ階だ。何処かで情報の間違いが有ったのであろう。

「君達、何をしているのかな？」

「「「・・・あ」」」

「枕で殴り合いとは面白い、私が目を閉じているとは言え、逃げられるとは思わない事だよ」

「なぁっ！？壁に立ってる！！？」

「さっ流石牡丹先生でござるなぁ！！」

「（いやいや！！それで片付けて良い問題かよコレは！！？）」

長谷川千雨は自分と同じクラスメイトに少々頭をかかえた、どうやら彼女はクラスの中でも常識人らしい。

「ア、アイヤー、アレが鉄壁スカート、いや絶対領域と言うモノアルか・・・」

「見、見えそうで見えない・・・て、私はなんてはしたない事を！！」

牡丹は壁に垂直に立ちながらニッコリと不気味な笑みを浮かべていた。

「さあ、部屋に戻るのと一日正座、どちらか好きな方を選ぶと良いよ」

「「「「に・・・逃げろ――――！！」」」」

「アハハッ私が勝ったら正座ね！」

――――――――――――――――――――

暗くモニターが多い部屋に彼女と一匹は居た。ソレは映る光景にすこし楽しそうに録画しながらその様子を見ている。片方は普通の人間の生徒だ、もう一人は人間ではなくオコジョである。

そして、彼らの首元には鈍く光るナイフが。

「朝倉さん、その動画、消していただけますよね？」

朝倉の頭の後ろではジャコンッと銃弾を装填したような音が聞こえた。

「あ、あはは」

「お、俺っちはただのオコジョ・・・」

「「消して、頂けますね？」」

「「ハイッ！」」

メイド姉妹がいなかった理由は、此処に攻め込んでいたからであった。因みにこの日の仮契約成立者の数はゼロ人、ソレは黒の古書とも少し違う出来事であった。

61話・旅館の聖戦（後書き）

因みに私のナイフには強力なお薬が塗ってあります。
薬は、摂取量を間違えると毒なのですよ

62話・鳥居の下での遊戯（前書き）

今回は・・・展開を急ごうかいそがまいか悩んだ欠かです。

62話・鳥居の下での遊戯

――奇襲ほど彼女に無意味な攻撃は無い――

教員としてもそうだが、生徒の行きそうな場所で何か起きてはいけないと警戒をするものである。アサシンは多くの生徒の行きそうな映画撮影などに使われるシネマ村へ、エヴァは生徒なので真名、刹那班で木乃香の班と共に行動している。

「この先に関西魔術協会が有るそうです」

「また大胆に解りやすい所に・・・」

「襲撃しますか？今なら手薄の筈ですし」

「何時から君はその物騒なナイフを持っていたのかな？その前にソレはナイフと呼んで良いモノなのかな？どう見ても刃渡り３０センチ以上あるけれど・・・」

先ほど、この中で2人分の魔力が消えた。消えたと言うよりは恐らく気絶しているのであろう。両方とも魔力がぼやけて良く解らなかったが、家の生徒と言う可能性も有る。

「さあ、行くよ。準備良いかい？テル」

「私の武装は常に充実しております」

何処かに戦争にでも行くかの様な装備を見せてくれたテル、何処にしまっていたのか、まさか彼女の体の何処かには異次元空間でも発

生しているのであろうか。・・・実際に有り得そうなのでこの思考は此処でいったん切っておこう。

「結界が張られているね」

「破壊しますか？」

「いいや、私にとっては好都合さ」

牡丹は何もない空間から黒の杖を具現させる。魔術で空気中に解かしていたのだ。本当に魔法使いと言うのはチート並に酷い事が出来るモノだ、便利とも言うが。

紅く光の無い眼を開くと彼女は不気味に笑って進んで行った。

「誰か来たようや」

「アイツらはアンタに任せます、親書は手に入れましたしなぁ・・・ほな」

「へ、あんな奴らオレ一人で十分や（女は殴りたくないんやけど・・・）」

少年は足元で倒れている赤髪の少年と一人の少女を置いてその場から飛び出してきた。しかし、流石に彼も相手が悪かった、何せ相手は・・・。

「ようやく出て来たね、待っていたよ」

「・・・解ってたんか」

「当たり前だろう、それ程の殺気を振りまいていればすぐにばれる」
牡丹が杖を地面に固定する、固定と言っても何も使わずにただ地面に置いただけだがそれは簡単に固定されてしまった。
「さっきの西洋魔術師は歯ごたえ無かったわ、ねぇちゃんは強いんか？」
「その身で確かめな、テル、前衛よろしくね」
「倒してしまっても、構わんのだろう？」
「・・・それ、キティから教えられたでしょう？」
「こう言った状況で言えと」
「ソレ間違えているから」
そんな会話をしながら戦闘を開始した、彼女が魔法を唱えている内にテルが前に出て彼女の呪文が唱え終わるまで護衛する。長すぎるナイフが少年の身に迫るが少年もソレは軽々と避けていた。
「近づいてしまえばこっちのモンや！！」
「残念だがそれは無理だよ」
【守護兵】【守護兵】【守護兵】
「なっ式神やと！？」
彼女を守るように現れたのは3体の重厚な鎧を着た兵士であった。

顔も何もないその兵士は静かに各々が持つ武器を構え少年を牡丹から遠ざける。

「【足元には死者の手を、主は汝を救う事叶わない】」

「なっなんやこれ!?」

地面から生えて来る白く生気の無い手は彼の足に絡みつき身動きを止めた、そして彼女が次に取り出したのは驚く事に何処かで見た事あるようなバットである、しかも超特大の。

「ぼ、牡丹様?それを一体どうなさるおつもりで?」

「・・・バットはボールを打つモノだよ?」

何を言っているんだい、と当たり前の様な顔で彼女はそのバットを少年に向けて構える。

「気で防御すればそれほどダメージも無いだろうし、じゃあね~」

瞬間、彼女は大きく振りかぶったそのバッドに【鬼】の力を込めて思いっきり横に振った。ソレは少年の腹部を強打し少年は口から少量の血を吐きだしどこぞのアニメの悪役の様に星に成って消えてしまった。

後に残ったテルは唖然と牡丹の方を見ており、牡丹は清々しいほどの笑顔で汗を拭うふりをする。

「さようならまた来世、てね」

「お、お見事です牡丹様」

この辺りは完全に柘榴の魂が関係しているだろう。子供っぽい所とかは彼女の影響だ。

「倒れていた人間がネギ君と明日奈君とはね、興味は半減だよ。でも、本山には少し文句を言いに行かなくちゃね」

「殴りこみでございますね、では私にお任せを」

「いや、多分戦闘には成らないよ。本山には私の知り合いがいる筈だしね」

「お知り合い、でございますか？」

結界を指を鳴らしただけで粉砕、いや、吸収する彼女。黒の杖に座り本山へと向かう事に成った。

一方、シネマ村ではアサシンが普通に溶け込んでいたらしく、普通に戦闘は終了したらしい。しかしやはりと言うべきか刹那に弓が直撃、木乃香の魔力が暴走気味に回復魔術を流し込んだらしい。あちらも本山に帰って来るようだ。面白い面子が揃いそうだと牡丹はテルにその紅の眼を向けながら笑っていた。

62話・鳥居の下での遊戯（後書き）

――黒馬の荒い息が聞こえた――

63話・父から産まれる（前書き）

難産うはー・・・

63話・父から産まれる

――その身を蝕む契約――

長すぎる階段も杖に乗って来てしまえば疲れる事も無かった、そしてテルは元々は人形なので体力と言う概念も無い。眼の前には襲撃だと思ったのか武器を持った巫女達がその鋭い刃をこちらに向けて来ている。どう考えても歓迎ムードではないだろう。テルが腕を伸ばし牡丹を守ろうとした。

「一目橋家の者だ。当主にそう伝えたまえ」

そう言うとすぐに巫女の中の一人が確認を取る、妻も居るのにこれ程まで女性を集めるとは、流石むっつりと言うべきだろうか。彼は昔から少女趣味が有ったようだし。

「も、申し訳ありませんでした。確認が取れましたので奥へどうぞ、お荷物は・・・」

「あぁ、お願いしようかな」

そう言うと牡丹は何処に持っていたのか簡単な鞄を巫女に渡した。そして奥に進んで行く、一面畳の屋敷と言うのも中々に懐かしく、独特の匂いが心地よい。まあ、軟禁状態の時約十年、その匂いを嗅ぎ続けたら懐かしくもなるか。

「いや、牡丹さん。申し訳ない」

「いや、気にしないよ。それにしても君は中々にやつれたね。奥さ

んとは仲が良いようで安心した」

「やっ止めて下さいよ恥ずかしい」

「ふふ、良いじゃないか。歳をとると若者をからかう事が面白くてたまらない」

「牡丹さん、ソレは止めた方が良いと思いますよ・・・？」

牡丹は詠春の言葉を無視して出されたお茶を静かに啜る。少し熱めだが緑茶はこの位が丁度良いのであろう。

「私の予想からすると、来客中かい？」

「えぇ、先ほどまで居たのですが・・・」

牡丹はさりげなく自分の横に置いてある黒の杖を見る。距離を測っておくのだ。

「因みに、髪の毛の色は？」

「確か・・・西洋の方の様で美しい金髪でしたよ」

頭の中で幻視の時に見た金髪の女性が映る、その女性は白銀の髪を持った女性の後ろを数人の女性達と共に付いて行った内の一人である。しかし、アレが狂王時代に生きていたモノだとすると、絶対に人間ではないだろう。

「？どうしました、牡丹さん」

「あ、あぁ、何でもないよ。けれどね詠春。残念なお知らせがあるけれど・・・まぁ、ソレはまた今度で良いか」

そう言いながら牡丹はニッコリと不気味な程に綺麗な笑みを詠春に向けた。

「見せたまえ」

「な、何をですか？」

「良いから、見せたまえ。その金髪の女性から預かっているだろう？一冊の本をさ」

「・・・」

「君も本当に隠し事が苦手と見える。ソレは僕にとっても必要なモノなんだ、早々に渡してほしいな」

「・・・これは、貴女をまた危険と引き合わせます」

「私の現状では今も非常に危険な状態さ。さぁ、後悔する前に私にソレを渡すんだ」

「・・・」

「良い子だ」

詠春が渋々と言った感じで取り出したのは一冊の本であった。表紙はまだ新しいようだが、コレは写本であろうか。書いた者の名も書いていないその本を牡丹は静かに開いて見る。

何も罠らしきものは書かれていなかった。その代りに妖怪や妖精の事が事細やかに説明されている。

「・・・【幻想卿縁起】？聞かない本だね、この世界の本じゃないのかな・・・？」

細かい、実際に見て書いたかのように細かく書かれている。妖怪の名前からその言動、注意する事等様々だ。その中に、有り得ないページを発見した。

【鬼武者】

――狂王とも呼ばれる人間の賢者、または仙人とも言われる。既に既婚者であり稗田の追い求めた夫。危険度は極めて低いが男性に対しては妙に厳しく接して来るので馬の合わない者はなるべく刺激しない方が良い。幻想卿の創造に手を貸した者であり、時間を狂わせ止めた張本人でもある。――

狂王なら、調べつくしたのだがまさか鬼武者と呼ばれる資料が有ったとは恐れ入る所だ。特徴には白銀の髪に紅い瞳と書かれている。間違いない。幻視に出て来る彼女だ。

「牡丹さん？」

「詠春、でかしたよ。これでまた私は父に近づいた」

「そうですか、ソレは良かった」

「「！」」

聞いた事の無い声の主はすぐ近くに座っていた。詠春が先ほどまで

金髪の女性が座っていたと言った位置に彼女は座り、何時の間にはお茶を飲んでいる。深い紫色の肩の中辺りまで伸ばした髪を持ち、頭には綿帽子を冠っている。

「こんにちは、こうやって直接話すのは初めてですね。牡丹」

何処か落ち付いた声色の女性は、牡丹とそう大して変わらない年頃である。1歳か2歳年上とでも言おうか、その程度であった。

「君は、何処の誰で、何者だい？」

「私は――――」

彼女は静かにその答えを返す、当然のようにその言葉は彼女の口から発せられた。

「狂王の子供の一人、稗田と狂王の間に産まれた薄れた純潔、とでも言いましょうか。私の名は、【稗田空木（ひえだのうつぎ）】と申します」

「稗田・・・空木・・・」

「えぇ、貴女とは・・・そうですね、腹違いの姉妹とでも言った所でしょうか」

腹違い、確かに顔の作りは二人とも異なっている。

「私は稗田家の呪い、つまり処女出産でこの世に生を受けました。つまりは稗田の分家ですが、分家は処女出産を保ち血が穢れる事から守ってきました。故に私は今代の稗田なのです」

「・・・じゃあ、私は誰から産まれ出たと言うんだい」

「貴女は私の父に当る、いえ、先祖とも言えるのですが、貴女はですね、【永遠の処女である狂王の胎を食い破って産まれ落ちた】のですよ」

牡丹は、彼女の言葉に時間が止まったかのように止まってしまった。

63話・父から産まれる（後書き）

彼女も父と同じ、彼女と彼女も、そして彼女も元をたどれば全ての母であり父である彼女に行きついてしまう。それでも、彼女達は求めるのだろうか。

６４話・父ノ温モリハ、何処へ（前書き）

さて、シリアス全開で頑張りますか

64話・父ノ温モリハ、何処へ

――父曰く、奪われたくなければ奪うしかない――

稗田、彼女の言葉を聞いた瞬間に牡丹の時間は止まった。自分が父の胎を食い破って出て来たというのだ。ソレは一体何の冗談か、そんな生まれ方をしたモノを普通の人間などと言える筈も無く、ただの化物と言うには狂気的すぎる。己の母の胎を食い破った神は確かに存在するが、父の胎から産まれるのは初めてだ。

「父の胎を・・・？どう言う事だい稗田」

「私の事は空木とお呼びください。私は私と言うよりは私達ですが」

「・・・？空木君、では聞こうか。【僕】が這い出て産まれたと言う事に付いて詳しく、ね」

詠春を無視して二人とも少し邪険な雰囲気を流す、お互いの殺気が部屋の中を満たそうとしていた。

「良いでしょう、その前にその殺気を抑えなさい」

「君がどちらの味方か判らないからね」

「私達は中立ですよ、ですが、幻想の都は狂国に協力しているようですが」

「稗田は争わず、侵さず、ただ歴史を書き綴ると言うのは本当のようだね」

牡丹が殺気を治めると、空木もその殺気を治めた。

「貴女は運命によって産まれた狂王の娘、産まされたと言っても過言ではないですが・・・父さんは貴女を争いに巻き込まない為に追放世界へと置いて行った。そして、貴女を守る為の白の書と黒の古書を置き、その世界から姿を消したのです」

「・・・それは・・・本当かい？」

「あの方は身内を愛しました。その他の者へと向ける以上の愛を注いていたのですよ」

消耗する身体、動かなくなる前に終焉の針を止めようと、小さなその体で、その手で剣を握り血を流し、臓物を振りまきながら敵兵の中へと単身で踊り狂う狂王。幻視が彼女に教えた光景だ。

「私には稗田の血が入っていますが、貴女は純な狂王の子、羨ましくも有り、可哀そうでも有る。そして、貴女もその運命に呑まれるのでしょう。この話を知っていますか？」

――狂王は誰にも殺されない、命渡すのは妻か子か――

「確か、古い神社に有った書にも書かれていた言葉だね」

「そう、狂王は身内にしか殺されないし、倒されない。ですが、今の世に彼は居ない。解りますか？」

「・・・まさか、稗田に？」

「いいえ【稗田】は関係ありません。そして関係を持とうとも思いません貴女にお話ししたい事は、此処なのですよ、此処を伝える為に私は此処に来た」

部屋を明るく灯している蝋燭の灯が揺れた、数本が風に吹き消され薄暗くなる。外には赤々とした月がも少しで昇ろうとしていた。空木の深紫色の瞳が鈍く闇の中に光る。

「狂王は、私達の父は【身内】に、つまり【家族だったモノ】に殺されたのです」

悔しそうに着物の袖を握る空木、牡丹は突然の事に少々呆然となっている。

「き、み・・・何でそんなに狂王の事を知っているんだい？まさか」

「私は少しの時間ではありましたが、彼と共に住んでいました。母と父、３人で」

ですが、と彼女は続ける。

「最後の決戦の後、王ではなくなった父は母と共に人間の賢者として人里と言う場所で暮らしていたのです。ですが・・・」

空木は、牡丹の眼の前に手をかざすと、何かの術式を使ってか幻視を再現した。

―――――――――

―――――

――

煌々と燃える龍族とアマゾネス族が幻想の都で使っていた遺跡が燃えている。怯える表情で助けを求める子供の手が切り落とされその苦痛に悲鳴を上げる。
その状況に怒り狂う一人の女性、白銀の髪を持つ鬼武者は片手に鈍く光る太刀を、片手に漆黒の闇の如き剣を持ち白の少女と対立していた。

【貴様、何をしたのか解っているのか?】

【解っていてやったのです、父上】

【・・・コレも血か、フ・・ハハハ・・・。所詮私は安らかには眠れぬか・・・】

風のように消えると彼女は自らの娘と思われる少女に剣を振った。
少女と少女は激しくぶつかり合い、周囲の物は燃え、切られ、崩壊の道を辿っている。
鬼武者は白の剣を背中に回した剣で受け止め肘を鳩尾に撃ち込んだ。
それでも白の娘はひるまない。

【命を、数多の命を持たない貴女を殺す事が、私を王へと近づける】

【ッ何・・・?】

彼女の腹には大きな穴が空いてしまっていた。後ろを振り向くとそこには共に戦場を駆けたかつての友であり家臣の顔、瞳には光が無く機械的な表情に成っていた。

【おの・・・れ・・・貴様・・・最早我が子ではない・・・】

【さようなら父上、命のストックを持たない貴女には復活も出来ないでしょう?安心して下さい、母上の近いうちに】

【ッは、ソレは無理と言うモノだ、【妻】は私と共に生き、共に死ぬ!お前の手に掛る事は無い!!】

【そうですか・・・手間が省けましたよ、では】

無情にも、その剣は彼女の胸を貫き、彼女は口から血を流す。呻かず叫ばず、静かにその白銀を撫でた。

【私は呪うぞ、お前を、お前の生を。お前は希望ではない、私の死だ。その運命から逃げ切れると思うなよ・・・?】

――キヒッカカカッハ、アハッアハハハハハハッ!!!――

狂ったような笑い声と共に、鬼武者は魂ごと何処かに消滅した。それを逆に唖然と見ているのは白の少女の方であった。死体も何も残らず消滅した【父だったモノ】を見て、彼女はどう思っただろうか。そして次の瞬間、白の彼女はその空間から弾き出され、幻想への扉は固く閉ざされた。

――――――

――――

――

「・・・」

「これが、狂王の最後です」

静まり返った部屋の中に響くのは悲しみか、それともその者への祈りか。

「私が伝えたかった事、お解りいただけましたか？私達の父は【私達の姉妹に殺された】のです」

「・・・これは、どう言う事だい、何故父さんが殺されなければならない・・・？理由が・・・理由が解らない！！」

「狂ってしまったのですよ、私達の姉妹であり、父の模造品であり希望であった筈のメモリーが」

「・・・誰だい、父を殺したそのモノの名は・・・？」

空木は何処から紐などが血に染まり変色した振るい太刀を取り出して彼女に差し出し、酷く真剣な表情でこう言った。

「神造神、希望のメモリーの保持者であり狂王の娘、兼現在死都の王その名は・・・」

――――イヴ――――

復讐の火種に、今薪がくべられた。激しく燃えるその大火への火種は、誰が止められるのであろう。闇の中に溶けるように消えて行った稗田は、少し笑っていた気がした。

６４話・父ノ温モリハ、何処へ（後書き）

深い蒼に染まった空を一羽の白い鳥が飛んでいく。何処へ、何処へ？尋ねる声は誰にも届かず。

65話・消滅（前書き）

ドシリアスです

65話・消滅

――復讐は血の雨と肉の山を築きあげる――

私達の父は、自らの子に殺されたのですよ。
その言葉が重く頭の中を回る、古い血が紐に付き固まって変色した古い太刀をその手に持ち、復讐と言う炎をたぎらせた。しかしこの太刀、一体何なのであろうか。何をしてもその刃が鞘から抜ける事は無く、鞘には呪符がこれでもかと鞘の本体が見えなくなるまで巻きついている。

「・・・隣が五月蠅いね」

「ネギ先生率いる生徒一行が到着した様で」

「親書も無く、と言うのはどうにも間抜けな話だね、まあ良いけれど」

今はただ、復讐の事しか考えられない。自らの父を殺した希望（イヴ）に刃を突き立てその中身を喰らおうとする自分が居る。冷静を気取っては居るの物の、中身は黒に染まった獣だ。

「・・・？騒ぎが消えた」

「・・・ッ！！牡丹様！！」

テルが彼女を強く押し牡丹は畳の上に倒れ込んだ、何かを思い見直して見るとそこには石にされたテルの姿、誰の仕業か解らないが、その行動が牡丹の怒りを更に高める。強くその太刀を握りしめ詠春

たちの下へと向かう。
そこには変わり果てた詠春の姿、意思にされた戦友は静かに立ち尽くすだけであった。

「・・・アサシン、居るか」

「此処に」

「私と共に来るか？それとも留まるか？」

「我が主とその御心のままに」

「では征こう、あの紅い月の下に、ね」

闇を駆ける2つの影、腰に太刀を指し黒の杖に乗る彼女、その眼は開かれ濃い殺気を周囲に充満させている。しばらくすると開けた場所に出た、そこには百鬼悪霊がひしめき合い2人の少女と共に戦いを繰り広げている。
しかし今の彼女にはそんなモノ障害にも成らなかった。腕を振るうと巨大な火柱が出現し鬼達を片っ端から焼いて行く、しかも召喚を解いている訳ではなく、本当に鬼を魂ごと焼いているのだ。

「あれは・・・牡丹先生！？」

「えぇ！？先生も魔法使いだったの！！？」

「（しかし雰囲気が違う、何時もとはまるで別人・・・一体牡丹先生は何故此処に・・・）」

牡丹は真っ直ぐ両面薙宿の封印されている巨石に近づいた、そこに

は倒れているネギの姿も有るが牡丹は全くそんな事気にしない様子で少年の下に降り立った。

「やぁ、君が私の友人と親友を石化してくれたのかな」

「・・・だとしたら？」

「僕は今とても気分が悪い、最悪だよ」

「成程ね」

少年が石の槍を彼女に向けて放つ、それと同時に牡丹は石に魔法の糸を絡めて粉砕した。少年はそこから接近戦の移行したらしく牡丹の懐に入って来るが牡丹の反応も良く少年の足が逆に曲がるほどの力で蹴り返す。鬼の力を使っているのだから、この程度の事は簡単であろう。

≪■■■■■！！！！≫

「ぐっ」

「復活したか、でもね少年。悪いが君の命は此処で――」

「！牡丹様！！」

迫り来る剣の嵐、牡丹を抱きしめる灰色の肌を持つ暗殺者。その肌からは赤が流れている。

「・・・あさ・・・しん・・・、どうし・・・て」

背中に多くの剣を受けてそこに倒れ込むアサシン。彼女は牡丹の方を向くと既に血に濡れた地面で静かにほほ笑んだ。

「私は・・・幸せでした、私の事は忘れ、どうか・・・生きて下さい」

ズシュッ

最後の一撃と言わんがばかりの一撃がアサシンの心臓部分を潰した。魔力に還って行くアサシン、牡丹に向けられたその手は力なく地面に倒れる。

牡丹は家族の一人を失った大きなショックに呆然としていた。光の無い眼を見開き、剣の飛んできた方向を見る。そこにはスクナの姿は既になく、邪悪なモノが空に浮かんでいた。

「仕留めそこなったか、まあそうでなくては面白くないな」

「君が・・・やったのかい・・・？」

「クハッ我(オレ)以外に誰が居る小娘・・・ほう？その手に持っている物は中々の宝具だな、お前にはもったいないモノだ、我に渡せ」

――ニクイカ？――

あぁ、憎いね

――殺シタイカ？――

出来ればね

――デハ、ソノ体シバラク貸セー

燃え落ちる、何処でその感触を身にしたのであろうか。腰に指した太刀が熱い。意識を持って行かれそうだ。これは一体何なのか、先ほどの声は一体誰もの物か、頭が回らない。激しい復讐心と怒りで頭が沸騰しそうだ。今は、目の前の男を殺したい、ただそれだけで

十分だ。
そこで、私の記憶は意識と共に奪われた。
――――
――

「ほう、人が変ったかの様な殺気だな。我を楽しませるに相応しいと言えよう」

≪「お前を楽しませる?」≫

「・・・?貴様・・・先ほどの小娘ではないな?誰だ」

太刀の鞘に付いた呪符に火が灯り、呪符だけを焼き焦がして行く。

≪「ワタシか?ワタシは私だよ」≫

牡丹ではない彼女は狂気の笑みを浮かべながらそう笑うのであった。

65話・消滅（後書き）

主殿、私は英雄の座に還るでしょう。しかし泣く事はありません、悲しむ事はありません。私は既に死んだいる身、何時かは別れが来る身でした。ソレが早まっただけの事。今まで、今まで本当にありがとうございました。このような不躾の影でしたが、私達は牡丹様のお役に立つ事が出来たでしょうか・・・？

６６話・怒りの先に有るモノ（前書き）

シリアスは続くよー

66話・怒りの先に有るモノ

――ワタシは私から切り離された残骸――

ワタシは夢の残骸、ワタシは戦いそのモノ。彼の者と共に戦い、様々なモノを潰し、侵し、殺し壊し、数え切れないほどの物を殺した。しかしワタシは切り離された。ワタシの主人格は闘争を嫌ったのだ、確かにアイツは死を求めて戦場を歩き回る死神の様な奴であったが、誰よりも人や妖怪を愛していた。

ワタシは、奴の変わりに深い眠りに付いた筈であった。奴の太刀の中で永劫とも言える眠りに。

しかし、眠りに付いてしまったのはワタシではない、奴であった。奴が何をした？ワタシの様に狂気に落ちたか？いや、アイツは狂気に染まってはいなかった筈だ、ならば何故、何故アイツは平穏に生きられぬ？

お前か、それともお前か。刃と成ったこの身に復讐の念を込めて今、奴の娘を操る。

いずれ、いずれ殺してやると言う深い業の炎を燃やしながら。

「お、お前は何者だ！」

≪「随分なご挨拶じゃないか金ぴか、ワタシはお前を知っているぞ」≫

何時もよりも鋭い狂気が彼女の体を無理やり動かしている。ソレは既に火防女とは言えない化物だった。長い黒の髪を風に靡かせ片手にその狂気の刃を持つ。まるで地獄の使者だ。

「その瞳、この狂気・・・まさか・・・お前か！セイバァァアアア

！！！」

≪「そうさ、ワタシは私と共に聖杯を破壊した！！そして今、再び聖杯を破壊する為に此処に居る！！」≫

「やらせると思っているのか！！雑種！！」

≪「どちらが雑種か、思い知るが良いよ半人半神！！」≫

身体は違えど、心は違えど、太刀に宿っているのは原初の狂気。狂王の片割れであり夢の残骸。それは狂気。かつて、狂王が闇魔の姫に仕えている頃に持っていた転生者を殺す為に、他人を殺す為に作られた狂気の人格そのモノだ。今では消えゆく心の中、本体から切り離され太刀に宿っている。

「ゲート・オブ・バビロン！！」

≪「ワタシはアイツではないから、一薙では落としきれないが・・・」≫

迫り来る白刃の嵐を彼女は涼しい顔で見ていた。口元には薄い笑みを浮かべ、牡丹の身体であるのに別人にも見えるその表情で、刀を横に一薙にする。

迫り来る無数の刃に向かい、一筋の斬撃が飛んで行った。ソレはまるで生きているかのよう い曲がり次々と王の宝具を砕いて行く。

「なっ我の宝具が！？」

≪「人間や妖怪が作った宝具程度で、ワタシを砕く事叶わない」≫

闇が、漆黒が牡丹に集まって行く。そして闇は牡丹の身体を包み、まるで鎧の様なモノを形成する。ソレは闇色に鈍く光を返す重厚な鎧、まるで狂王が着ていたかのようなモノだ。

「貴様ァ、我の計画をことごとく砕き、まだ邪魔をするかァア！！」

≪「悪いね、ワタシは君があまり好きではないんだよ、私はどう思っているか知らないけれどね」≫

闇色のマントが風に靡いた。

≪「頭(こうべ)を上げよ、敵は眼前に有り、我が真名に掛けてその力を解き放て。【八雲の太刀】」≫

ズッ

と、その太刀は焼けた呪符を全て取り払いその本当の刃を晒した。美しく輝くその刃、見ただけで背中に冷たいモノが走るさっきの塊とも言おうか。柄には稗田が回収し修復した事を意味するのであろう、血に濡れた稗田の家紋が見て取れる。狂王の太刀は此処に復活を遂げたのだ。

≪「流石にアイツの血が流れているコイツの体は動かしやすい」≫

そう言うと彼女は音も無くギルガメシュの後ろに現れた、その手に持った太刀が彼の背中に迫る、それを紙一重でかわして彼も負けじと反撃した、しかし彼女は既にそこには居なく、後ろに立っていた事が嘘のように先ほどと同じ位置に立っている。

≪「どうした、夢でも見ていたのか？」≫

笑う、クスクスと。その笑い声が彼の耳に突き刺さり、彼の絶対的なプライドに傷を付ける。彼が取り出したのは彼の持つ中では最高の宝具とも言える【エヌマ・エリシュ】、神話を語る石板の名を持った黒の剣だ。天地を切り分けたとも言われるその剣を解放しようと口を開く。

≪「させると思ったのかい？」≫

「なっ」

≪「わざわざ敵のレベルアップを許すのは人間の作った劇の中だけさ、ワタシは悪人だからね」≫

牡丹の片手から伸びる呪符にギルガメッシュの腕が絡め取られている。ソレは宝具とは言えないが、一体何処から持ち出したモノなのであろうか。牡丹がそんな物を持っていたかと聞くとソレはＮＯだ、彼女はそんな物持ってはいなかった。

≪「英霊の座でアサシンによろしく言っておきな」≫

「や、やめろぉおおお！！」

最後の声と同時にギルガメッシュの身体がまるで崩れ落ちるように崩壊を始める。まるで何度も切り刻まれた様に人の形を保っていない。受肉していたのであろう、彼の後ろの呪われた聖杯を見ながら牡丹に憑依した狂気は笑みを零した。

≪「聖杯、久しぶりだな。ワタシが負わせ傷は癒えたようだが、もう一度砕けろ」≫

太刀を両手で握りしめ、天高く振り上げる。肉の様に膨張するその気持ちの悪い聖杯に彼女は恐れもせずに笑いながらその剣を振り下ろした。

――――――――――

――――

――

≪やぁ、奴の娘≫

「・・・君は？」

≪ワタシか？ワタシはお前の父の・・・狂気だ、狂気の欠片≫

なにも無い白い空間に彼女は白い何かの上に腰をおろしている。お互いの間には白で作られたテーブルの様なモノが有り、自分の白の椅子の様な物に座っていた。

「此処は？」

≪お前の精神世界とも、現実と夢の狭間とも・・・まあ好きに呼べ≫

「何故僕は此処に？」

≪ワタシに少し肉体を貸しただろうが、今お前の肉体はお前の家族・・・か？金髪の少女に回収されたよ≫

面白そうに彼女はテーブルの上で足を組んだ。彼女はまるで牡丹の様な容姿であるが表情などが全く違い、全くの別人にも見えた。

≪ハハ・・・まるで自分の娘を見ている様だ。アイツとワタシは元々1つだしね≫

そう言うと彼女とその空間が少しずつ消えていく。彼女は其処の事を感じたのか静かに牡丹の手を握った。

≪さぁ、起きたまえ。君を金髪のお嬢さんが待っているよ≫

その言葉と共に、再び視界はブラックアウトした。

６６話・怒りの先に有るモノ（後書き）

紫、ごくろうさまでした。

いえいえ、稗田の頼み事は断れないわよ。

67話・密会とも言える（前書き）

久々の登場です。

67話・密会とも言える

――狂った彼女達の捜索術――

薄暗い店の中、帽子を冠った一人のボーイッシュな少女が紅茶を入れていた。店の中には様々な時代の物がゴロゴロと転がっており、拷問器具から何に使うのか解らない民族の儀式用の道具まで飾ってある。異様な空間であった。テーブルの上の小さめの少女人形がこれまた小さなテーブルと椅子に座り紅茶を啜っている。

「マーリンとユダはまた単独行動かい？」

「えぇ、まあ三賢として責任を感じているのでしょうね。かつての戦友を守れなかった事に」

「まあ、ソレは僕達も同じなのだけれどね」

「信仰の対象を失った私達はこれ程までに脆い物とはね、私も思わなかったわ」

人形と帽子の少女が話している。腹話術でも何でもなく、彼女は自分の意思を持って話しているのだ。

「で、どうだった？牡丹君の様子は」

「生きているわ、まあ、死んでしまっても困るしね。金髪の少女や緑髪の少女に怒られているようだわ」

「はは、ソレは面白いね」

ケーキを切り分けて彼女は小さな人形の少女、ヤマネのテーブルの上に置く。帽子を冠っている少女は帽子屋、またはマッドハッターと呼ばれているようだ。
まるで絵本のアリスに出て来るお茶会の様だった。

「イチゴのショートケーキ、どうぞ」

「良いのかしら？」

「良いよ、どうせ今日も暇さ、なにも無い日に乾杯」

「そう言えば、チェシャ猫は何処に行ったの？」

チェシャ猫と呼ばれる女性は顔の片方に火傷を持つ紅いポニーテイルノ女性だ。帽子屋とは仲が良いのか悪いのか良く解らない位置に居る。

「さぁ？彼女も狂王を探しているんじゃないのかい？」

「貴女は良いの？マッドハッター」

「僕にはお店が有る、そう簡単に外へは出れないよ」

「学生が何を言っているのよ」

「アハッ、何の話かな？」

因みに、マッドハッターは高校生だ。学校では大人しいキャラクターを作っているが皮を一枚剥いて見れば今の彼女になる。狂気と冗

談に満ちた変人だ。殺した者の髪の毛で帽子を作ったりもする。ただのカフェではない事はすぐに解るであろう。因みに、彼女達は自分の本名を仲間内にも明かさない事で裏の世界ではちょっと有名だ。

「マーリンは地獄の最下層で王様探し、ユダは天界の姉妹の所に訪ね人。世界も騒がしいね」

「でも、一番五月蠅いのは教団でしょう？」

「そうだね、彼女達は数にモノを言わせて各世界に滑って行っているからね。大した信仰心だよ」

座る者が居なくなった少し豪華に装飾された椅子が寂しそうだ。その横に置かれた子供が座るような椅子は今でも使われている様な痕跡が有る。

「6時15分、予定通りだね。お帰り、アリス」

カランカラン、と鐘の音と共に入口には大きな兎の人形を持った少女とも幼女とも言える娘が立っていた。彼女は座る者の居なくなった椅子の隣の椅子に座るとその金色の綺麗な髪を床に垂らしながらマッドハッターの方をじっと見ている。

「はいはい、紅茶をどうぞ、アリス」

「・・・ん」

「顔色が悪いね、どうかしたかい？」

「・・・裏世界の協力結社が2つ裏切った」

「あぁ、そう言えばそうだったね」

「でも確かそこにはグレーテルを送りましたよね？」

人喰いグレーテル、此処ではそう呼ばれる物も居る。愛するが故に人を食う、恐れるが故に人を食う。彼女はその行為とその狂気から人喰いと呼ばれる。アリスと同じ金髪の少女だ。今は此処に居ない。

「・・・片足を撃たれて入院中」

「あぁ、そう言えば君とグレーテルは仲が良かったね。お見舞いは行ったのかい？」

「・・・【親と】一緒に来てね、て」

「・・・ソレは無理だね、君には親居ないし、居たとしてももう１００年以上前の人間じゃないか」

アリスの腕がカチャリと音を立てる。そう、彼女もまた人形なのだ。ただし天才的な人形師によって作られた命を持つ人形、肌の柔らかさから内臓に至るまで完全に再現され、最早人造人間に近い出来だ。

「・・・さて、今日本に居るメンバーは3賢の彼女達を抜いてそろった事だ、真面目な話をしようか」

パン、パン、とマッドハッターが白い手袋をはめた手を叩く、その顔は笑っているが何処かふざけている感じの無い雰囲気であった。

「【神の兵団】については何処まで調べられた？ヤマネ」

「狂王が天界と地獄、そして冥界の衝突を予期して作り上げた最狂最悪の軍隊。その数わずか１００、と言う所まで」

「・・・神の兵団は、一人一人が特徴ある能力を所持している」

紅茶の湯気が揺れた。

「第二の死霊騎士団とも言える訳だ、それが敵に成るか味方に成るか、どう思う」

「私は・・・味方になると思います」

「・・・王様はもういない、彼女達は今中立だと思う」

その言葉に帽子屋は少し面倒臭そうに帽子を取り髪の毛をガシガシと女の子とは思えないほどに乱暴に掻いた。

「ソレはどうかな？あの稗田さえ動いているんだ。【一族全員】でね」

「・・・ソレはおかしい、稗田はどの世界でも中立」

「それほどに狂王の存在は彼女達にとって大きかったのだろうね、稗田にとって狂王は依存の対象、強力な媚薬にも似ているんだよ。彼の妻だってそうだっただろう？血に訴えるモノが有るんだろうね、運命の出会いとは罪なモノさ」

壁に飾られた３人の女性が映った写真。真ん中に白銀の髪を持つ３

人の中では最も大きい女性、その片腕に抱きついている深紫色の髪に花の髪飾りを付けている外見１０歳前後の少女、そしてもう片方には白銀の髪の女性に頭を撫でられている少し長めの深紫色の髪を持つ少女だった。
姉妹と言われてしまえば姉妹に見えるだろうが、コレは家族写真である。

「世界線的に次は何が有るんだっけ？牡丹君の所は」

「まだ戦いが続くようですよ」

「困るねぇ、狂国が勝っても、死都が勝っても、人類に待つのは暗い未来か」

「・・・早く魂を見つける」

「そうだね、狂国が変なモノを再生してしまう前にちゃんとした王様の魂を見つけるとしようか」

誰でも知っている、しかし誰も知らないそのお茶会の名は秘密のお茶会。彼女達は人類を守る為にその身を戦いの中に置いている様であった。

67話・密会とも言える（後書き）

恐れているの？怖がっているの？貴女は世界に裏切られたの？貴女は復習を考えるの？その堅く冷たい岩山に永遠に繋がれながら、終わるようなモノでもないでしょう？

68話・腹違いの姉妹（前書き）

軽い説明のようなお話です

68話・腹違いの姉妹

――姉妹――

帰りの列車の中、酔い止めを飲んでいる牡丹は行きの時よりもかなり顔色が良かった。しかしエヴァ達の席から離れた場所に2人で座っている。何故此処に居るのか解らない人物と顔を合わせながら。

「アサシンの事は残念でしたね」

「・・・何で知っているのかな？」

「見ていましたから、直接にではありませんが」

腹違いの姉妹である空木の姿がそこにはあった。姉妹と言っても空木は狂王の娘の子孫の子孫の・・・と続いて行く中の一人であるが。だが、稗田の単独出産の呪いのおかげで狂王と稗田の血を薄めずに済んだ。
何故彼女が同じ新幹線に乗っているのかは解らない。

「抜いたのですね、その太刀を」

「抜いてはいけないのかい？」

「貴女も見たでしょう？狂気の塊が中に居るのですよ。その太刀」

「あぁ、見たよ。でもそれがどうしたと言うのだい？」

空木の着ている着物は袖の部分が改造されており物が多くしまえる

ようになっていた。その中から古い一冊の古書を取り出す。血の痕までであるその本はかなりの年代物であろう。もしかすると黒の古書よりも古いかもしれない。

「太刀は持っていますか？」

「あぁ、此処に」

「抜いて見なさい、その刃にも刻まれている筈です」

「？でもこの太刀は抜けなかった（ズッ）よ・・・、抜けたし」

貸し切り車両でなければ騒がれていただろう。その太刀の刃は全く汚れてはおらず刃こぼれも無かった、究極の一振り、鍛冶屋の理想であり追い求める1つの形と言っても過言ではないその美しい刀身にソレは刻まれていた。

【今消えよ、愛おしい小さき命よ】

その文字は牡丹と空木の血に反応しているようで刻まれていると言うよりも浮かび上がっていると言った方が良いのかもしれない。その文字はグニャリと歪みまた形を変え別の文字に成る、と言う行動を繰り返している。

「これは・・・」

「呪詛ですよ、コレは稗田が回収したことから稗田の太刀とも言われていましたが、その真名は八雲の太刀と言います。多くの妖魔血を吸い、神すらも切り倒し、太刀から神刀へと昇華したモノです。狂気を封じるには丁度良かったのでしょう」

・・・此処で気がついた、何故狂国はこんなモノを求めるのか、確

かに狂王の復活に必要なモノと言っていた筈だ、しかしこれは狂王のモノではあるが狂気付き。

「これを使って狂国は狂王を、父さんを再生させるつもりの様ですが、ソレは間違いです。これには狂気しかない。これを使って再生すれば・・・」

「狂王ではない者が産まれる、と言う訳か」

狂気は産まれ落ちるその時を待っているのであろうか、受肉を果たして狂気が行う事と言えば・・・【殺戮】位しか思いつかない。または復讐か、彼女が一体何を考えているのかが解らない今、それを使って再生するのはとても危険な事だ。

「ウロの怪もメアリーも、その他の家臣たちも今では狂信者です。正気の者は誰も居ない。もちろん私等は論外」

「・・・？稗田が狂信、と言っているのかい」

「愛おしいモノを蘇らせる為に彼の者は救われぬと知りながら何をしましたか？何人殺しましたか？幾つの都市を、文明を滅ぼしましたか？それが答えです」

「つまり、犠牲は問わない。と」

「考えが邪な事は既に承知です。ですがね、貴女にも解る筈ですよ、貴女の中では復讐の炎がまだくすぶっている、ソレも激しい大火の火種だ」

チャキッと太刀が鳴った。

「それを私に向けても、刃は私の肌を貫く事も切る事も出来ないよ」

「・・・試してみるかい？」

「その太刀は誰が回収したと言った？」

太刀はそれ以上前に進まなかった、まるで強い力で抑えられているかのようだ。

「私を殺しても解決しない、黒幕が居るかも居ないかも解らない戦いだから」

「・・・少し、頭に血が上っていてね」

「しょうがないさ、私もそうだったように君もすぐに馴れるよ、同じ血が流れているんだからね」

お互い奇数な運命を背負っている者同士だ、自分の言葉にため息を吐き彼女は袖の中から稗田の家紋が刻まれた小さな刀を取り出した。女性でも振れるほどに小さく造られた物のようだ。

「九代目の稗田の持ちモノだよ。君の役に立つだろう」

「何故だい？」

「この短刀には守護の術式が詰まっていてね、持っているだけでお守りに成る」

「ソレは頼もしいね・・・」

「信じていないでしょう、姉からの贈り物とでも考えてよ」

「姉？君が・・・？」

牡丹は追放世界からこちらの世界に来て既に数百年は立っている、もしくはそれ以上か、それ故に彼女よりも年齢は上に成っている筈だ。それなのに姉とはどういう事なのであろうか。

「私の居る場所では時間が止まってしまっているし、私達の寿命は等しく３０歳だけれど、それを足せば君以上だよ」

「前から気に成っていたけれど、私達と言うのはどう言う事だい？」

空木はその一言にニッコリと笑う。

「私は歴代の稗田の魂をこの身の中に保有しているのですよ、まあ、早く言うと私は入れモノで、魂は父さんに逢う為に私に従っていると言う所かな」

じゃあ、渡したよ。

そう言うと彼女は闇を纏う、一体どうやって移動しているのであろうか。魔術ではなさそうだが高度すぎる技術に脱帽しざるおえない。流石と言う所か。

それにしても時間の止まった幻想の都とは何処かのか、彼女には疑問が付きなかった。

68話・腹違いの姉妹（後書き）

【愛おしい者よ、今この世界からお前達を解放しよう。死は平等に、生ける者をその腕の中に抱いてくれるだろう】

69話・種明かし、前（前書き）

少しはビックリして貰えると良いのですが・・・

69話・種明かし、前

――さて、種明しと行こうか――

宮崎のどかと言う一人の一般人に惚れ薬と同じ効果を持つ魔術を掛けた者は学園に居る。牡丹はそう考えた、そうとしか考えられなかった。自らを姉と言った空木に渡された脇差を持って学園の中を歩く、その顔は複雑であった。

「まさかね、彼がこの事に関与していたとは私としてもとても残念だよ」

「キヒッだがオレ達にとっては運が良い、だろう?」

狂国から帰って来たウロの怪は牡丹の隣で不気味に笑っていた。八雲の太刀は彼女にも解らないようにしまってある。どちらが正しいか解らない状態で彼女達に情報を与えるのはとても危険な事だからだ。

「学園に悪魔が出没する理由、その他の事も考えて・・・お前の考えは正しいだろうさ」

「だからそれを今から証明しに行くんだよ、証拠が必要だろう?」

学園の地下、巨大なパイプの先へと足を進めていく。所々に人払いの札や何かの魔法陣、その他にも関係者以外立ち入り禁止と書かれていたりと様々だ。その先に有るのは何か強力なモノであろうか、この学園がこれ程までに力を入れて守っている物と言えば何か魔術関係のお宝の気もするが、それがどう悪魔と繋がると言うのか。

位置的には図書館島よりも更に深く、暗い場所である。

「真実は上に有るようで下にも有る。太陽が絶対の真理とも限らない、てね」

「ソレは誰の言葉だ?」

「さぁね、私も忘れてしまったよ」

ズチャッと眼の前に現れたのは古龍のようだ、もう長い間生きているようでそれなりの知識も有るであろう、まあ、そうは言っても帝国に居た守護龍の足の爪先ほども生きていないだろうが。

「これはいよいよきな臭いな、絶対に何かあると見た」

「私が道を間違える筈がないだろう?こう言う事に限っては私の鼻は犬のように役目を果たしてくれるよ」

「ソレはありがたいね、で、コイツはどうするんだ?」

「その為の君だろう?」

「・・・あ〜、そう来るか」

ウロの怪の能力は相手の形を写し取る事が出来るのだ、それが可能なので龍等彼女の前ではただの固い肉袋に等しい。血が詰まっている革製の袋だ。

彼女は自分の片腕を変形させナイフのような形にした。そのナイフを持ちニヤリと笑いながらその龍に突っ込んで行く、相手は火を噴き彼女に応戦するが一人の人型、しかも龍に比べれば小さいモノな

ので中々当らない。

「私は先に行かせて貰うから、匂いを追ってきな」

「お前は意外と残酷だねぇ、良いだろう」

牡丹は戦闘を行っている物の間を上手く抜けると更に奥へと進む、そこには周囲の物と違い真新しい機械の門が厳重に守っていた、その壁には【有毒ガス、これより先危険】と、解りきった嘘が書かれている。

「はっこんな所まで来たんだ、そんな嘘は私の好奇心を刺激するだけ」

鬼の力を使い、扉をこじ開ける。いくら扉が固くても流石に鬼の力には叶わないだろう。嫌な音の後にその扉は無残にも変形しその先への道を露わにした。そこには有毒ガスも無く、綺麗にされた何処かの施設の様な空間が広がっている。

「・・・ッ！」

ザァッ

と、頭の中にノイズが走る、これには身に覚えが有る。幻視だ、何故こんな所で幻視が起きるのか解らないが、少し眼を瞑る。

――――――

――――

――

【あの・・・此処は・・・】

【君は、魔力を少ないが持っている。もしこの実験が成功すれば普通の生徒にも魔法の力を持たせる事が出来るぞ！】

【ッ！嫌！！放して！！】

【抵抗するな！！こっちへ来るんだ！！】

【誰か！！誰かぁ！！！】

――プツンッ――

「ッ・・・此処で記憶が切れている？何かあったと思うしかないね」

ゴツン、ゴツン、と先を進んで行く。そしてその最深部に辿り着いた。

そこは、巨大な魔法陣の真ん中に１つの棺が１つ置かれている、まるでガラスの様な透明の棺桶の中には白い髪の毛の少女がその瞳を閉じていた。魔法陣に固定されているのか、それともこの魔法陣で身体を維持しているのか解らないが、ソレは完全に違法だ。
死者甦生術（ネクロマンシー）は遠い昔に禁術とされている。

「・・・この子は・・・」

見覚えが有る、この子は・・・そうだ、この子は家のクラスの【相坂　さよ】ではないか。あの幻視に出て来る女性に似た白髪だし、紅い眼であったからチェックはしていたのだが、まさかこんな所に居るとは。

「・・・何をしておるのかのぅ？牡丹君」

「お前こそ、この学園最深部であるこんな所で何をしているのかな？学園長殿？」

後ろから現れたのは学園長である近衛近右衛門であった、長い髭を蓄え、いつもよりも鋭い視線を牡丹に向けている。

「良いかの、君は此処で何も見なかった、そう言う事にしてくれんか」

「私は君たちみたいに正義の魔法使いじゃない、そうだろう？正義の魔法使い諸君」

牡丹の声に反応するかのように周囲に隠れていた魔法使い達が姿を現した、その中には見た顔の者も、知らない顔の者も居る。タカミチは・・・居ない様であった。

「君達は此処で数十年前、魔力の無い者にも魔力を与える為の研究をしていた。そして一人の少女に眼を付け、その少女を此処で研究した、しかし、その術式は失敗、彼女は死に至った。そう言う訳だろう？」

「ッ！学園長！！この事が表に出れば」

「そして、今回の件もそうだ、少しの魔力が有った宮崎君に魅了の魔法を掛けてネギ君のパートナーにし、徐々に魔力に馴らしてから同じ研究を行う筈だった、そうだろう？」

「・・・牡丹君、君にも解る筈じゃ、正義の魔法使いは」

「解らないね、私は生まれながらに暗い世界を歩いて来た。知っているかい？勝てば正義なんだよ、どの時代でもね」

その紅い瞳がギラリと光る。その眼光に魔法使い達は冷や汗を隠せない。

「でも良かったよ、この学園の老害だけが犯人の様で、学園は潰さずに済みそうだ」

「！光の矢！！」

一人が魔法の矢を放つを周囲の魔法使い達もソレに吊られるように撃って来た、しかし彼女にはその魔法の矢は通用しない。何故なら彼女は全ての魔力を吸収してしまう黒の古書も持って来ているのだ。その書物をたったこれだけの人数で超えられる筈も無かった。

「――さあ、種明かしを続けようか？」

土煙から顔を出した牡丹は、更に妖しい笑みを浮かべるのであった。

69話・種明かし、前（後書き）

私には昔の記憶は無い。私は何故死んだのか、何故ここに縛られているのか。時々胸が痛くなるのは、気のせいだろうか。暗闇が、ただただ、怖かった。

70話・種明かし、後（前書き）

はい、こうなった・・・。

70話・種明かし、後

――自分でまいた種だろう？――

パンッパンッと、扇子が開かれてはまた閉じる、牡丹の手に有るのはいつも彼女が持っている黒の杖ではなく、漆黒色の扇子であった。着ている物もズルズルと音を立ててこちらの世界に渡って来た時の着物に成っている。一体何時の間に彼女はこんな事が出来るようになったのであろう。

「さてさてさて、眼前に青筋立てて立つは愚か者、何も出来ぬ木偶の棒」

パンッパンッと、扇が鳴る。

「鬼孕みの異能、ご覧に入れましょう」

パンッと、彼女の扇は閉じられた。周囲の魔法使いも警戒の色をうかがわせる、何せ彼女から放たれる殺気は彼等を射抜いてその場から動けなくしているのだ。

「牡丹君、何をするつもりじゃ・・・？」

「種明しさ、君達のやって来た事を全てこの明るみに出す為の、ね」

ずるりと、何かが地面を這いまわる。それを見た者は恐怖と吐き気に襲われ顔を真っ青に変貌させた。

【肉が、肉が何処からか這い出てズリズリと這いずり回っている】

「君達は何人を犠牲にした？何人の女性を、少女の純潔の血を此処に流したのかな？」

再び、彼女は漆黒の扇子を開いた。全てが黒に染まったその扇に反応するように肉は増えていく。

「ひっい・・・あ・・・！？」

「何故、何故歴史上には女性の幽霊が多いのか解るかい？」

――女性の方が、恨みが大きいのさ――

ゴポンッと肉が人間の形を得ていく、ゴキゴキとソレが痩せた少女に成って行く。ソレは一人、二人と増えていく。恨みを持つような恐ろしい瞳が彼等を貫いている。

何時の間にか清潔だったはずの床は血に滑り、赤く染まっていた。

「ほら見たまえ、可哀そうに。皆未来のある可哀そうな少女たちだ」

びちゃびちゃと、何かが滴るような音が部屋の中に響き、腐敗した匂いが鼻を付く。

「悪魔が此処に良く来る理由は、これで解るだろう？」

悪魔はこの不幸を嗅ぎつけて来ているのだ、ソレも此処には魔法で濃い魔力が封じられている。来ない方がおかしいと言う物であろう。

「彼女達の遺体は奥かい？さよちゃんはまだ使えるから此処に置いてあるのだろう？もう片方の台座は・・・あぁ、のどか君用か」

吐き気がする、良くも自分達の教え子にこんな事が出来たモノだ。

「見たかい、聞いたかい？【詠春】」

「「「「！？」」」」

「ふぉ！？婿殿！？？」

「・・・義父さん、貴方と言う人は・・・」

物影から姿を現したのは京都に居る筈の詠春である。実は大事な用が有ると言い彼も共にこちらに連れて来たのだ。失望したような顔で詠春はその手に持っている刀を強く握りしめる。

「貴方をもう義父とは思いません。いえ、思えません・・・貴方は立派な犯罪者だ」

「・・・婿殿・・・」

「動くな！！」

魔法使い達を囲むようにそこには武装した帝国の兵士達が居た。その指揮を執るのは何と甘楽だ。帝国に派遣したのであるが彼女は以外と優秀だったようで帝国の一員に成りつつあるのだ。

「やあ甘楽、私の劇には間に合ったようだね」

死体の少女達がケタケタと歩き始めた、その光景を見ても動揺しない帝国兵たちは昔、牡丹と共に戦場を駆けた兵士に違いない、流石テオドラ、物解り良く兵士を派遣してくれたと言う事か。

「さてさてさて、可哀そうだが君達はオコジョには成れない。ソレに、罪人全員が生きていられると思うなよ？搬送枠は一人しか無くてね、その他は彼女達の【復讐】を受けて貰う」

周囲の兵士達すらもその言葉に生唾を飲んだ。流石にソレは恐ろしすぎる。

「では帝国兵諸君はそこの老人を収容しろ、詠春には悪いが血筋としてこの学園を治めて貰う。西の長なんて事やっているから平和ボケするんだよ。ではその他の諸君は私達と遊ぼうか？」

少女達がグチュッと音を立てて近づいて来る。

「来るな・・・来るなぁああ！！」

「たっ助けてくれ・・・助けてグェ！？」

まるでパンパンに膨れた袋が爆発するかのように、ソレは飛び散ってしまった。中身が部屋の中の壁を穢し朱色に染める。その光景を赤い眼を開けて見る牡丹、その表情は残酷なまでに綺麗に笑っている。

「復讐の女神を諸君は知っているかな？」

悲鳴を上げる彼等に向けた彼女は笑いながら語りかける。

「世界には復讐の女神が居る、３人の老婆とも、少女とも言われる彼女達は復讐の為なら地の果てまでも追って行くそうだ」

扇子で彼女は口元を隠す、彼女の長い髪は日本人らしいストレートでその黒髪が血生臭い風に揺れた。

「私の好きな詩に面白い詩が有ってね」

【花が摘まれていく、摘まれてしまう。何故、あの花を安く、刈り取ってしまったのか後悔する事も知らずに】

「つまり、君達は将来素晴らし人材に成るかもしれない、君達と恋仲になるかもしれない、あるいは君達の息子の妻に成るかもしれない命を摘んだしまったと言う事、皮肉で面白いだろう？」

血に染まって行く、まるで血のプールである。どこぞの邪神神話に人間は血の入ったビニール袋であるとも言われるほどに脆い彼等は既に肉塊に成りかけていた、しかしじわじわと殺されているようで、まだ息のある者もある。牡丹の指示でさよの死体を回収した兵士達が上へと上がって行く。

「君達の死体は彼女達が綺麗にしてくれるだろうさ」

満足したら消えるようにこの世に降ろした筈だが、まだ一人も恨みを晴らし切っていない様で皆殺気が多い瞳でまだギリギリ生きている、死ねない者達の足を齧り喰っている。

「喰ろうて良いか、喰ろうて良いか、あははは」

ウロの怪と同じ事を言いながら、彼女は笑いながらその部屋から出て行ったのであった。

70話・種明かし、後（後書き）

学園長が変わると言う事は、帝国魔法使いの大規模記憶改竄のおかげで何とかなったそうだ、魔法とは本当にチートである。

71話・不思議な幻視（前書き）

不思議な事が起こるかも?説明回のような物。

71話・不思議な幻視

――見渡す限りの死体――

コレは夢であろうか、それとも何かの記憶の中に引きずり込まれてのか、私は今戦場に居る。
ソレが何処の戦場で、どう言った状況なのかは解らないが、周囲の光景は見た事が有った。此処は確か魔法世界に有った無名の丘、だと思う。
そこには殺気が立ち込めており、2つの軍がお互いを睨んでいる。
片方は白の鎧に身を包んだ軍隊だ、その足は速く次々と丘を越えて来る。
ソレを迎え撃つのは黒の軍、槍の様な物を構えて誰一人乱れると来なく白の軍勢に狙いを定めている。
そう、ソレは槍ではない、銃槍だ。指揮官の命令でその槍は火を噴き次々と屍を築いて言った。

【陛下に続け！何をしている新兵共！！】

【し、しかしあの数ですよ?！こちらの圧倒的な不利ではないですか！！】

【数では勝てん、当たり前だ。しかし我らは奴らと比べて質が違う、陛下に恥をかかせるな！！】

【ひぃっ】

上官は新兵に剣を向けて無理やり戦場へと送り出した、その新兵に続いて自分も剣と爆弾を持ち戦場へと駆けだしていく、そこには既

に死体が転がり、血で血を洗い流す様な地獄が広がっていた。

【陛下!!いけません!!ここから先は罠です!!】

【この先に奴らが居るのだ、王が兵を、民を導かずに何とする!!私に続きたい者だけ続けば良い!!】

赤黒いマントを風に揺らして濃い死の空気を振りまきながらその白銀は戦場を走っていた。彼女が乗るのは黒の鎧を着た黒馬、その大きな足が敵を踏みつけ不死ですら関係なく踏み砕いた。陛下と呼ばれた白銀の少女に矢の雨が降り注ぐ、それを彼女は近くに居た敵を掴みあげて盾のようにし防いだ。滴り落ちる血を口に含み死体を投げ捨てる。

【倒しても倒しても湧いて出てきますぞ!!】

【こいつ等、不死性を持っているのか!?陛下!!】

【こいつ等の頭を殺せば皆死ぬだろうな】

漆黒の軍馬は敵を蹴り殺しながら進んで行く、その身に剣を刺されても全く動揺の色を見せないその馬の瞳には既に光等無かった。

「この光景は・・・」

「コレは・・・恐らくお主の持って帰って来た太刀の記憶じゃろうな」

「!文妖妃、君は何故・・・」

「妾は稗田関係の古書に憑依していたのでの、恐らく何らかの繋がりで此処に来てしまったのじゃろう、考えるに狂王の稗田に対する強すぎる思いか・・・ソレは解らぬがな」

黒の兵団の戦火は圧倒的であった、武器等もさることながら彼女達は自らの絶命時に胸にしまった爆弾の栓を抜き自爆する、相手に殺される位なら周囲の敵を巻き込んでと言う事だろう。

【陛下！3番隊負傷者多数、孤立しております！！】

【5番隊に向かわせろ！】

【し、しかしもう武器が】

【それなら予備も含めて配布すれば良い！！】

【8番隊より伝令！！「拠点制圧ニ成功セリ」とのこと！】

【良くやった！生きて帰ってきたら表彰モノだ】

次々と指示を飛ばし、敵を殺して行く彼女の姿は確かに王である。しかし名君とは言い難い、どちらかと言うと暴君であろう。自分の為に周囲を犠牲にする暴君、まあ、故に狂王と呼ばれたのかもしれない。

【ッ】

【！陛下！！】

【気にするな、少しよそ見をしていただけだ】

彼女の胸部分に刺さったその矢を、平気な顔で抜く狂王。その傷口はすぐに再生して元に戻った。

「今のは・・・」

「高等再生術の様じゃの・・・しかし術式の反応がない、不死の呪いかもしれんし、それ以外かもしれん」

「謎が増える一方だね、自分の父だと言うのに本当に謎しか無い人だよ」

そんな会話をしていると周囲の光景がぱっと、まるでテレビのチャンネルと入れ替えたかの様に変わった。周囲に広がるのは森、そして自分達が立っているのは神社の境内である。

【魔人を復活させても、邪神の力を得たとしても、私にその刃は届かないだろうよ】

数人の人間に支えられた女性が一人、血まみれで立ち上がる。その中にはウロの姿もあった。鬼武者の手に持たれているのは牡丹も持っている八雲の太刀である。

【何故、お前は死なない・・・化物め!!】

【人間でいる事を止めたお前達に、化物と呼ばれるのは気分が悪い・・・!】

また、光景がプツリと変わった。

そこは何処かの風呂場のようだ、それなりに広いその風呂場で彼女

は水を浴びながら自分の顔を抑えている、その片腕は鏡を割っていた。

【・・・クソ】

そう小さく呟いた彼女、白すぎる肌には紅い血が混じっていた。彼女の腹には少しの傷跡が有る、再生能力を持っている筈の彼女に何故その傷が有るのかは・・・。

「・・・あれが、僕が食い破った傷と言う事かな?」

「そうかもしれぬのぅ」

頭から紅い滴を流す彼女、彼女は浴びているその水でまるで涙を隠すように項垂れていた。何故自分はこうも普通ではないのか、何故自らの子にすらその様な運命を背負わせてしまうのか、彼女の呟きは重く暗いモノが多かった。

――そして、彼女は顔を上げて【コチラ】を見る。眼が合った。合う筈の無い、コレは幻視に近いモノなのだ、稗田空木でもあるまいし幻視に影響を与える事等出来ない・・・筈だ、しかし彼女は鏡の中のこちらを見ている。

【・・・牡丹】

胸が締め付けられるような思いだった。その言葉と共に幻視は消え去り、何時もと同じ朝日が眼に入る。汗と涙にぬれた自分の顔が映る鏡を見て、牡丹は静かに自分を強く抱きしめた。

71話・不思議な幻視（後書き）

牡丹

そう、呼ばれた時、胸が酷く痛んだ。

72話・復讐とは（前書き）

シリアスとほのぼのを書き分ける練習として

72話・復讐とは

――騒動は唐突に――

元学園長は帝国での裁判により複数の禁術使用、洗脳、殺人罪によりどうやら終身刑が決定したようだ。しかも送られた場所は不死者が自らの為に殺人を続ける最果ての監獄、死んだ方がましかもしれない。木乃香には詠春が自ら記憶の改ざんを行い、祖父は既に故人である事に成った。

「そこで、終わってくれれば良かったんだけれどねぇ・・・」

「あぁ・・・そうだな」

「「まさか弟子入りと来るか・・・」」

そう、ネギ君が痛めつけられた事も忘れて此処に弟子入りに来たのだ。何を持ったのかこちらには全く理化出来ない、しかしエヴァもこちらに恐れをなしているその目を見て少し良い気分に成ってしまったようで茶々丸と戦って勝ったら弟子入りに成ってしまった。正義の味方（笑）が家の中に普通の顔でお友達を連れて入って来る所を考えると頭が痛くなる。

「良いかいキティ、私達は裏の世界に生きて来た人種だ、今さら表の世界でほのぼのとは暮らせないよ」

「・・・だが、少し位信じても良いんじゃないか？」

「君もボケたね、キティ。こんな事は言いたくないが、私達は正義

の味方達にとっては良い餌なんだよ？何でネギ君が君に挑んだか判らないのかい？」

「ぐ・・・確かにな、私達に昼は似合わない」

牡丹が最近生徒たちの前以外でその瞳を開いている理由、ソレは襲撃に備えての事だと知っているエヴァはなにも言わない。彼女は自分の知らない所で死んでしまうかもしれない命だ、エヴァはそれを認めたくなかった。自分達は、牡丹はこれからの限り無い無限の時間を共に居てくれる者だと信じたいのだ。

「確かに、世界には化物が英雄を育てたと言う話もあるかもしれない、しかしだ。私達はそれすらできない化物だ、少なくとも私も君も、必要な殺ししかしなかったが、殺した事に変わりは無い。ソレが大戦中でも、そうでなくてもだ」

「・・・」

「私はもう諦めている、この罪は許されないだろうね。君はどうだい？まだ希望を持っているかい？ソレも良いけれど、僕もソレはとても羨ましいけれど、私達の死に際なんてきっと醜いモノさ」

何時の時代でも、正義を振りかざした狂信の化物に化物は嬲り殺される、その死様を後世に残されて永遠に晒し物にされるのだ。化物である前に一人の少女としてもソレは避けて通りたい。

「キティ、でも絶望も良くない。私達自体が絶望なのだから」

闇に君臨し、自我を強く保つためには自分がとても強いと思いこまなければならないのだ、そうしなければ、あまりにも強い恐怖感と

孤独感により自我さえも殺してしまうだろう。

「キティ、今は僕が居る。でもね、私も何時殺されるか解らない身だ」

「・・・そんな事は無い」

「？」

「私が、牡丹を守ってやる。数百年前にも言った筈だ、私達は家族、だろう？」

「・・・そう・・・だね、でも私としては君に無理はしてほしくない。私の一族に関わってしまうと、私達の戦争に入ってしまうと君は・・・永遠に囚われてしまう・・・それでも良いのかい？」

「フン、そんな覚悟、お前を拾った時から出来ているよ。確かに私も平和ボケをしていたようだな」

終戦前と同じ覇気が戻ったエヴァの顔、その顔は確かに吸血鬼の真祖そして素晴らしい物であった。強い覚悟と高いプライド、そして溢れだすカリスマには懐かしさも覚える。

「・・・あ、でもこの威厳ある私の殺気を常に出している事は出来んぞ？」

「それは良いんじゃないかな？戦闘する時だけで、疲れるし」

一気に会話がぬるくなった気がした。

「そう言えばお前、復讐するらしいな・・・本当にそれでいいのか？お前の姉でもあるんだろう？」

「父を殺したのにソレを姉と見なければならないの？冗談はやめてよ」

牡丹の持っている温かい空気が消え失せる。

「私はアイツを殺さなければならない。これは運命の悪戯かもしれない、でも私はその運命に従うよ、この激情に任せてね」

「・・・そうか、後悔はするなよ？」

エヴァの顔は昔の自分を見る様な顔であった、彼女も昔に自らの父に復讐の刃を突き立てた身だ。自らの娘を使った真祖を作る実験は見事に成功し彼女は普通の人間から吸血鬼に成った。復讐の後に残る物が何なのか、知っているのだ。

「私は後悔しない、決して振り向かない。そう、育てられた」

自分の前に連れて来られては実験の失敗で消えていく同じ歳位の少女たち、人間の貧弱さを彼女に思い知らせるには十分であった。人間なんて、生き物なんて刺せば死ぬ、打ち所が悪くてもすぐに死んでしまうのだ。

「私は私の父のように人間を愛し、同時に憎んでいるんだよ」

「・・・父・・・か、お前の行動には必ず、その父が関係しているんだな」

「子が親に逢いたいと思うのは、変な事かい？」

「いや、その考えはまともだが・・・まともだが――」

――狂っている――

その言葉をエヴァは口にせず呑みこんだ、彼女は復讐に呑まれてしまっているのだ。既に彼女の頭の中には復讐の事しかないのかもしれない。確かに自分も眼の前で殺された母の事を思って殺した、しかしその後に何が残った。

――孤独と胸に穴のあいたような感触、そして目標を失った絶望感だ――

結果的に、復讐は自分の首を吊っているような物である。

エヴァは牡丹の強く真っ直ぐなその瞳を見て何も言えなかったが、彼女は止めようとしているのだ、ただの戦争なら良いだろうが、復讐となるとソレは一変する。

そいつを殺すのはお前でなければ駄目なのか？本当にお前は目的を失っても生きているか？

エヴァの考えは彼女に伝わる事は無かった。

「・・・さぁ、今日は何ご飯にしようかな？」

「最近魚を食べていないな」

「あぁ、確かにねぇ・・・今旬な魚を買いにでも行くかな？テル―出かけるよー」

「はい、かしこまりました牡丹様。エヴァ様はいかがなさいますか？」

「私はまだクリアしていないゲームがあってな」

「引き籠りかい君は、テル、キティも連れて行くよ。茶々丸、準備を手伝ってあげて」

「了解」

やはり、シリアスな展開には限界がある様であった。

72話・復讐とは（後書き）

嫌だー！行きたくないー！！
観念しなキティ、ほらさっさと行くよ。日が暮れちゃうじゃないか
・・・マスターの悔しそうな顔、コレはレアですね
たまに私の妹が変態に・・・・

73話・決闘までの会話（前書き）

ほのぼの要素微妙に配合！

73話・決闘までの会話

――弟子入り試験――

牡丹は今日、不機嫌であった。ソレが何故かと言うと、まあ簡単に言ってしまえば女の子の日と言う奴だ。解りにくいかもしれないのではっきり言うと、生理である。長寿種と成った牡丹だが、その身は胎に子を成せると言う訳だ。しかし牡丹は不機嫌そうに顔を蒼くして薬を飲んでいた。

元々彼女は体が弱く、体力も魔術で補強しなければ１０歳の女の子のままだ。

「牡丹様、あまり動かない方が・・・」

「・・・大丈夫、少し外の空気が吸いたいだけだから・・・」

「？窓を開ければ良いのでは・・・」

「キティは花粉症だよ」

主要人物である2人が体長を崩している。家事は茶々丸やテルに任せているから問題は無いが、それでもコレは以外とまずいのではないだろうか？最強種でもある二人が今やただの女の子だ、笑えて来る。

「しかし・・・今年は症状が重いですね」

「・・・まさか熱まで出るとはね・・・」

扉に手を駆けた瞬間に彼女はグデッと床に寝転がってしまった。

「あ、床が冷たくて気持ちいい・・・」

「風邪に成りますのでベッドに強制送還します」

「あぁ！私の癒しがぁ・・・」

正直、今のこの家には威厳も何もなかった。

「決闘は今日の夜だっけ・・・？」

「駄目ですよ」

「・・・まだ何も言っていないよ」

「貴女様の事ですから、行って見たいとでも言いますでしょう？」

うっと牡丹は唸った。どうやら正解のようだ。確かに茶々丸が手を抜かないか見に行きたい、ソレにもしも彼が弟子入りなんてした時には・・・最悪の場合自分とエヴァで言い争わなければならないのだ。

「あまり無理をしないでください、貴女様は死ににくいだけで、死なない訳ではないのですよ？」

「まるでナイチンゲールか何処かの聖女に世話をされているみたいだよ」

「心外、私は貴女様の忠実な手足です」

温かいレモンティーを机の上に置いた。机と言ってもベッドのすぐ横に有るスペースだ。風邪の時はレモン系の物、とテルの中では決まっているらしい。レモンの蜂蜜漬けも彼女は持って来ている。

「でもね・・・ネギ君はカンフーの修行を見て貰っているらしい。たしかに茶々丸も強いが・・・クシュッ！」

「失礼します・・・風邪も併発していますね、これは・・・」

「うぅ・・・こう言う日に限って・・・」

今なら幸運：Cと言うステータスが付いてしまいそうだ。

「茶々丸は強い子ですよ」

「こう言いきれるのかい・・・？」

「私がドラゴン程度ならソロで潰せるように教育しましたから」

「君は一体何なんだい」

まあ、想像できてしまいから怖いのだけれど。現在家に居る中で最も強いのは彼女ではないだろうか。財布の口も彼女ッが握っているし、休暇を言い渡しても

【私は、牡丹様のお側に居るだけで幸せでございます】

とか言って断られるし。

この数百年、彼女が仕事を休んだ事は殆んどなかった気がする。記憶に有る彼女の休暇は確かあの無人島に住んでいた時の食糧調達の

際に吹雪で雪山に迷って帰って来るのに2日掛った時だけであろうか・・・。その時は無傷で帰って来た。
・・・あれ?何だこのチートメイド。

「でもね、心配なんだよ。茶々丸はアレで何処か抜けているから・・・」

「そこに付いての心配は大丈夫です、私が居るので」

・・・ん?

「一対一、だよね?」

「指定した記憶はございませんが?」

何この悪党、怖い。確かに昔から彼女は賢く、商人相手でも値引きに値引きを効かせ金貨１０枚の書物を銅貨2枚にまで値引いた事があった、どうしよう、彼女が一番悪の魔法使いっぽい。

「あちらもその事には気が付いているでしょう、気が付いていないのならリンチ出来ます、気が付いていたとしてもリンチします」

「たまに僕は君が怖いよ」

「貴女様達をお守りする為ですので、メイドは強くなければいけません」

「ソレ何処の国の標準?」

「さぁ?何処でしょうか、私も記憶にございません」

実はテルの腹の中は真黒なのではないだろうか?恐ろしくなってきた。

「私と茶々丸、二人も居れば足りることでしょう、後はエヴァ様が余計な条件を足さなければですが」

「キティならやりかねないね・・・今の内に注意しておくかな・・・」

キティなら気分良くなって茶々丸に触れられればお前を合格にしてやるとか言いそうで怖い。現にこの決闘を受けたのもキティだし。牡丹は嫌な予感がしたので最初に釘を刺しておく事にした。取引に出す物は・・・キティのゲーム機で十分であろう、もし変な事を言ったらゲーム機を売る、少し古い脅しだがコレは現代でもまだまだ効果的だと思う。

「クシュッ!」

「温かいレモンティーをお入れしますね」

どうも最後が締まらない牡丹であった。

73話・決闘までの会話（後書き）

邪魔するぞぼたｎ・・・どうした!?顔色が悪いぞ!!?
キ、キティ、あまり揺らさないでくれるかな・・・?吐き戻してしまう・・・

７４話・楽しいお茶会（前書き）

ほのぼの補充

74話・楽しいお茶会

――お茶会の愉快な仲間たち――

牡丹達が丁度ネギ君一行と火花を散らして戦っている頃、外の世界と言われる場所に有るお茶会は今日も元気に開店していた、時刻は既に夕暮れを通り越しで真夜中とも言える時間だが、夜行性であるお客さん（裏関係）が多い為昼に開いても夜に開いても同じようなモノだ。

「・・・」

「どうしたの？マッドハッター、眼の下が黒いよ？？」

「グレーテル、僕は一応高校生なんだよ」

「うん、知ってる」

「そんな僕は、普通の人間と全く変わらない生活リズムを持っているだろう？」

彼女は自分の前に置かれたそのコーヒー（無糖）を一気に飲み干した。

「とても眠いんだよ・・・パト〇ッシュ」

「そのネタはまずいと思うよ」

帽子屋とも言われる彼女は、これでも普通の高校生ライフを送って

いる。幻想の都等とは少し時間の流れが違うので彼女はまだ高校生なのだ。因みに実は早苗と同い歳。
修学旅行にも行った事はあるし、学校ではそれなりに大人しいキャラクターを演じている。

「朝も夜も気を張った生活なんてもう嫌だー！」

「そう言っても私への嫌がらせはやるんだな・・・」

赤髪のポニーテイルで顔の半分に火傷を持つ女性がため息を吐いた。
彼女はチェシャ猫と呼ばれる、略すと猫だ。因みに彼女の呑んでいるコーヒーには角砂糖は１０個入っている。
「今日の砂糖は何十個？」と帽子屋はふざけて彼女のコーヒーに砂糖を入れるのだ、チェシャ猫は甘いモノが駄目なのだが、もったいないと言ってしっかりと呑みきる。

「しかし、そう言ってもお前の変わりにマーリンがカフェを遣り繰りしてくれるだろうが」

「彼女も最近忙しい様でね～・・・」

「そう言っていますが、私の集めた情報では帽子さんは一回も提出物を出した事がないですよね？」

「「問題児」」

「五月蠅いよ君達」

しかし、彼女は以外にも成績優秀者と学校では思われている。ただし授業でもノートは書いていないし、班行動でも周囲を無視して独

創的なオブジェ（同じクラスの生徒で）を作ったりしている。因みに保護者とされているのは最近お茶会に帰って来て仕事に忙しいマーリンである。
はっきり言って、学校側から何時家庭訪問＆3者懇談が来てもおかしくない者が彼女である。

「私でも高校は普通に通ったぞ・・・」

「その後事故で大けがして、大学中退だっけ？」

「ッ人のトラウマを弄るな！！」

「アハー、面白い面白い」

その前に、彼女は大学まで通った事があるのかと周囲のメンバーが考えている。

「・・・私も、学校行った事ある」

「「アレ？アリスが学校て色々不味くない？」」

「・・・ソレは失礼と言うモノ」

だが大体合っている、何せ彼女はいくら人間に近くても人形なのだ、球体関節なのだ、リアルローゼンメイデンの世界の産物に近いのだ。
ソレが、学校？

「・・・小学校は6年ちゃんと行った」

「因みに誰が行けって言ったのさ？」

「・・・前の帽子屋」

「マーリィイン！！君って人は！！」

体躯の時間等はどうしたのは果てしなく疑問だが、これ以上聞かない方がよさそうだ。何せこのお茶会の主要人物の一人が表の世界で普通に生活できていたと言う事が驚きなのだから。

「所で、学校とは面白いのですか？」

「そう言えばヤマネは行った事無いよね」

ヤマネはアリスよりも小さい人形なので流石に無理だ。ごまかしが出来ないだろう。

「面白いかそうでないかと言えば人それぞれだけれど、社会の縮図とは言われているね」

「私達の様な裏関係の者も居るのですか？」

「普通は居ないと思うよ？」

そう言う学校ならどうかは解らないが。

「あぁ、でも牡丹ちゃんが教師をやっているあの学校には居るね」

「帽子、あの学校がおかしいだけだから」

あ、確かにと言うと彼女は笑った。

「私も学校行ったことありませんよ？」

「「「・・・え？」」」

因みにその声を発したのはグレーテルだ。正直昔からアホの子だとは思っていたが、まさか義務教育である小学校にも行った事無いのであろうか？そう思った猫が聞いて見ると彼女ははっきりと頷いた。

「それって・・・大丈夫なの？」

「お勉強は私の昔住んでいた教会のシスターさんが教えてくれました！」

「教会で育っておいて、今では何でも構わず喰いつく悪鬼なんて、シスターも可哀そうに・・・」

そう言いながら帽子屋は焼いていたケーキをテーブルの上に置いた。今日も長い夜になりそうだ。帽子屋はそう思うと一人でため息を落とすのであった。

７４話・楽しいお茶会（後書き）

僕の睡眠時間・・・
学校で寝ているでしょう？
まあそうだけれどね？

75話・続行中（前書き）

まだほのぼのです

75話・続行中

――結果と依頼――

さて、既に日は昇った。結果だけ言うと向こうの対戦相手は明日奈君とネギ君であった。まあ確かにあの二人は仮契約を交わしているので当たり前とも言えるだろう。しかし相手が悪い、こちらは完全チートのメイド二人だ、結果はキティが高笑いできる程度と言えば解るであろうか？
そして現在、微妙に治りかけた風邪の身体をだるいが動かし朝飯代わりのお粥を腹の中に流し込んだ。流石に2日も倒れている訳にはいかない。

「おはようございます牡丹様、体長の方は・・・」

「大分良いよ、昨日と比べたらだけれどね」

昨日は面倒であった、何故なら生理も共に来ていたのだから。故に今少し血が足りていない。元々弱っている身体だし、病などに強くできていない。

「まだ熱がありますね、もう少しお休みに成られてください」

「そう言ってもだね、今日は私の持っている授業が」

「新田先生に連絡を入れておきます」

「し、しかし・・・」

「牡丹様も無理はするなと色々な人に言われているでしょう？」

「うっ」

確かにそうだ、合う人知人知り合い、全てが最近大丈夫か、怪我などしていないか、体長が優れないのではないのかと聞いて来る。大丈夫と返事を返しているが、何故そんなに聞いて来るのだ、私は死にそうな顔でもしているのか？！

「牡丹様は普段から一人で背負いますからね、他人に頼りなさい」

「命令系とはね・・・やっぱり君は聖女の類か・・・」

「私に処女童貞と言う概念があるかどうかは解りませんが私も産まれてこのから処女ですからね、聖女と言われてもおかしくないでしょう？牡丹様もエヴァ様もですよ」

「僕が聖女・・・ね」

マジカル聖女☆牡丹ちゃんと。
マジカル吸血鬼☆エヴァちゃん！

「私は嫌だ、絶対にそんな物に成りたくない！！」

「何をご想像なさったんです！？」

キティなら喜びそうだが牡丹的には自分がフリルとファンタジー満載のドレスを着て綺麗にポーズをとっている所を想像してしまった。正直言って自分には似合わないだろう。と、言うよりも似合って欲しくない。

「だって想像してごらんよ！そんな魔法少女（死語）的な感じの服が私に似合っていたら私は死ぬ！自害する！！」

「何でです！？普通に似合うじゃないですか！？外見年齢的にはぴったりですが！！？」

「止めて！私はそんな物に成りたくない！それだけは、それだけはいやぁああ！！」

パタン

「牡丹様ぁあああ！！安静にしていてください！悪化しますよ！！？今お薬を！」

先ほどの会話だけで既にがっくりと伏せてしまった。彼女は余裕じみていたが実はそうでもない、結構ギリギリだったのだ。既に事切れたかの様に顔を真っ青にして倒れている。

「・・・気持ち悪い・・・」

「牡丹様、無理はいけません。次に無理をしたら・・・」

「？」

「これを着ていただきます」

「う、うぁぁああ！？」

蒼を基調とした、フリフリフリル満載の少女系ドレス、恐らくキテ

ィの持ちモノだろう、彼女はこう言った服を好んで良く買うし、牡丹の分まで溜めこんでいる。

「わ、解った。体長関係では無理しない！」

「なら良いのですが・・・」

チラチラとそのドレスが眼に入った。見れば見るほど恐ろしい。

「魔法世界から取り寄せたお薬です、お飲み下さい」

「魔法世界産か・・・」

「苦いですが、残さずに」

チラッ

「のっ飲むよ！飲むからそれをしまって来てくれないか！？」

最高の脅し文句であったらしく、彼女は普段口にしない魔法世界産の薬を一気に口の中に流し込み水を瞬時に大量に含んで呑み込んだ、それを見たテルはやっとその恐怖の衣服（牡丹命名）をクローゼットにしまい込んだ。後で燃やしておこう。

「ぐ・・・何で魔法世界産はこうも苦いんだろうね？」

「良薬口に苦し、という言葉がございまして」

「いや、ソレ位は流石に知っているよ・・・確かに効果は凄いんだろうけどさ・・・」

物凄くまずい、この味は何とかならないのであろうか、それとも開発したモノがモノ凄くサディストなのであろうか。後者の方も捨てきれないから怖い。

「そう言えば今朝、詠春と言う男性から電話が来ていましたが」

「あぁ、そうなの？じゃあこっちに電話持って来てくれる？」

「かしこまりました」

少しすると下から彼女は電話を持って来た、しっかりと取り外せる奴だ。
番号を押して学園長室にかけると詠春の声が牡丹の耳にも聞こえてくる。

「なんだい・・・？今日は私、休ませて」

≪悪いですが、貴女の風邪が治り次第依頼をお願いしたいのですが・・・≫

詠春から依頼なんて珍しい、受けて見る価値はありそうだった。

75話・続行中（後書き）

ね、ねえテル
駄目です、また無茶を磨るでしょう?お話合いは明日で
・・・解ったよ・・・

76話・詠春からの依頼（前書き）

ほのぼのは弾圧されました

76話・詠春からの依頼

――不思議な依頼――

今回の依頼は異質な物であった、最近山の中に出る妖怪の退治と言う何とも時代錯誤の依頼だ。それならその辺の異能に頼めば良いのではないだろうか。しかしこの依頼は以外にも危険度が高いらしく、一人での行動は厳重に禁止された。共に連れて来たのはタカミチだ、学園に居たし、彼の居合拳はかなり使い勝手が良い。
まるでどこぞのゲームの方な選び方であったが、大丈夫だろうか。

「しかし、今さらこの時代に天狗とはね」

「何人もの生徒が見ているんでしょう?本当にいると思いますか?」

「どうだろうね、私天狗は見た事無いよ」

「それ以外は・・・」

「亀の甲よりは役に立つだろう?」

そんな雑談を交えながら奥へと進んで行く、此処は昔、一帯が黄泉へと続く山として恐れられていたらしい、現に今の老人たちは整備された山道にも入ろうとしないし、多くを語ろうとしない。

「蛇が出ても鬼が出てもおかしくない、気を引き締めな」

「はいっ」

さて、何が出るか。奥へ進むとそこは既にこの世の物とは思えぬほどに暗かった。時間的にはまだ御昼時、しかし周囲の暗さは真夜中とあまり変わりがない。確かにコレは異変と言えるであろう、しかし肝心の妖怪の姿が眼に付かない。ただ暗い、闇が広がっている。灯りが無いので黒の杖の先に灯る蒼い炎を光源に進む事にした。

「！これは・・・」

「沼・・・のようだね。底無しでなければ良いのだけれど」

これが黄泉への入り口と言われた所以だろうか？大きな沼だ、確かにこれに沈めば帰って来れぬ。

だが、コレだけとは思えない。これだけの事で詠春が自分を動かすか？ソレは有り得ない事だろう。この程度なら普通の魔法先生でも解決できるはずだ。

――ヒュン――

と、風を斬るような音が聞こえた。同時に自分の頬の部分に焼けるような鋭い痛みを感じる。頬から何かが溢れ出てソレは来ている物に紅い染みを作った。

「・・・え？」

「牡丹さん！伏せて下さい！！」

ソレは突然であった。周囲に殺気が充満し何かが牡丹の頬を掠めたのだ。これは牽制だろう。これ以上先に進むと次は喉を狙うと言う事だろうか。

≪立ち去れ、此処は我らが土地ぞ。立ち去れ人間と異形の者≫

「そう言う訳にはいかないなぁ、何せ私達は君達の退治を依頼されたんだから」

≪・・・何?命が惜しくないと言うのか?≫

「命は惜しいさ、でもね、お仕事は消化する物だよ」

周囲の殺気が更に鋭くなった。タカミチは伏せたままであるが牡丹は普通に立ち上がり杖を掲げた。

「姿を見せろとは言わない、君達は何者だい?」

≪・・・≫

周囲がザワザワとざわめきだした。ソレは牡丹にも解らない言語でその妖怪?が話しているのであろう。瞳を開き周囲の方すを警戒していると急に周囲が明るくなった。
眼の前には白いローブの様な物を着て顔が半分しか見えない女性が立っている。

「もしや・・・貴女は・・・」

「?君達、もしかして人間かい?」

「いえ、私達は人間ではありません」

周囲の木の上からもソレはこちらを狙っていたようだ。その手に有

るのはクロスボウガン。先ほど牡丹の顔を掠めたのは矢だろう。それにしても大した腕だ、以外と距離が離れていると言うのに。

「・・・タカミチ、君は学園に帰って報告を頼むよ」

「牡丹さんは・・・」

「僕はどうやら彼女達に付いていかなければならないらしい」

「察しが早く助かります」

確かに人間では有り得ない身体能力を持っている、天狗と間違われても納得がいくだろう。
タカミチが渋々報告に帰った後、更に森の奥にある彼女のアジトであろうか、洞穴に付いた。その中は以外と整備されており普通の家の中と大差がない。家具等は古いことから長い間此処に住んでいるのであろう。

「失礼かと思いますが、貴女の父の名をお聞かせ下さい・・・」

「すまないね、私は自分の父の名を知らないんだ。苗字もね」

「では・・・二つ名を」

「普通、二つ名を持つ親なんていないと思うけれどね。・・・狂王だよ」

「やはり！」

嬉しそうに眼を輝かせる彼女達、まるで長く待った主人の帰還を喜

ぶ犬のようである。

「では貴女はあの方の御子息か！」

「良かった、まだ生きている！」

「ちょっ君達は何なんだい！？」

牡丹が狂王の娘と解った瞬間に彼女達は牡丹を撫でたり触ったりして来た。ソレもモノ凄い良い笑顔で。

疑問に思うのも仕方の無い事だろう、彼女達に出会った記憶は無いし、そもそもこの日本に来たのは数年前程度でそんなに昔からいる訳でも無い。追放世界にも彼女達の様な者はいなかったはずだ。

「これは失礼を、私達も貴女様に出会えてつい嬉しくなってしまい・・・」

「その前に、君達は何モノさ、何で僕の父を知っている？」

「これは失礼を」

牡丹の言葉に周囲の白いローブの者達がいったん離れる。

「私達は白い影と呼ばれていた特殊部隊です」

白い影、白い影。その言葉に聞き覚えが合った。確か狂国のメアリーが探していた部隊の1つで恐ろしいほどの能力を備えている部隊。

「アサシン部隊・・・」

「いかにも」

治った筈の頭痛がまた始まった様な気がした。

76話・詠春からの依頼（後書き）

ご、ご子息様？

あ・・・うん、何でもないよ。続けて

77話・アサシンとの対談（前書き）

何と言うフラグ

77話・アサシンとの対談

――アサシン部隊――

狂王の白影、元死都の狂王直属部隊。最強の陸戦部隊、死霊騎士団とその名を並ばせる暗殺集団だ。彼女達には不死の呪いが掛けられており死ぬことも老いる事も出来ない。様々な種族、妖怪から作られた集団である。白いローブは狂王の髪の色をイメージされており、正式な衣装としても鎧としても使用されている。

「で、君達は此処に長い間隠れていた訳だ」

「はい、我々も随分数を減らされてしまいました。逃げ出した旧家臣たちも何人生きているか把握できていません」

「でも君達は良く逃げだせたね？メアリー達よりも遅く逃げたんだろう？」

「はい、そうです。私達が逃げ出そうと思った所には既に結界が張られゲートが使えない状況でした・・・」

「・・・ゲート？」

聞きなれない言葉である。死都とは何処かの異世界に存在する国ではないのであろうか。それとももっと遠い場所にあるのであろうか。

「説明いたしますと、狂王が作り上げた世界にはそのゲートを通らないと移動できないのですよ。出る時も同じく」

「これは転生者避けの為に作られたそうですが、私達にも効果がありましてね・・・」

「触れた瞬間に2人ほど、戦友を失いました」

その言葉に牡丹は首を傾げる。

「不死なのに、かい？」

「不死とは言え、魂ごと壊されてしまってはどうしようもないでしょう？そうですね・・・死都に今使えている機械兵団を束ねていたマザーシステム、カグツチ、クサナギがいい例でしょうか」

確かに、カグツチとは交戦経験がある。ウロの怪が彼女は元々長距離狙撃用のガイノイドだと言っていたが、狂王の時代の遺物であったのか。そう考えると確かに進み過ぎた技術である事が解る。

「ホワイトグリント∀も、何処かの世界に逃げ伸びていれば良いのですが・・・」

「誰だいそれは？」

「陛下がお作りに成られた兵器ですよ。人工知能とガイノイド、そして陛下の制御で１００％の機能を発揮できます。文明を砂に帰るほどの力もあったとか・・・」

狂王が幾つの文明を滅ぼしたか、その言葉が牡丹の中で再生された。確かに空木の言っていた通りのようだ。狂王は身内を救う為ならば全くと言うほど犠牲を気にしなかったようだ。

ソレが賢い判断だったのか、そうではなかったのかは置いておいて、

だが。

「我々は、此処でもう何百年の時を過ごしました。此処は昔、日の本と呼ばれており、もしかしたらこの世界の陛下に会えるかもしれないと思ったのですが・・・」

「どうしたの？その続きは？どうだったのさ」

「はい、この世界には陛下も、その奥方様も存在しませんでした。まるでそこだけが抜けているかの様に」

ソレはまるで世界に大きな穴が空いているかのような物であった。とアサシンは続けた。しかしアレだけは存在していたと別のアサシンが続ける。

「牡丹様は森の中に有った大きな廃屋を見ましたか？」

「？・・・あぁ、あの転移装置かい？」

「そうです、アレは、いえ、アレも陛下の遺品の内の１つなのです」

「・・・え？でもこの世界には狂王は・・・」

「そこがおかしいのです、まるで私達が陛下と駆けた世界のコピーのように様々なモノが存在しているのですよ。おかしいと思いませんか・・・？」

この世界は複数ある。狂王が生きて、愛し死んでいった世界を基準としても、ソレに似た世界は数百、数千と存在する筈だ。しかし狂王と言う物は特別で１つの世界にしか存在しない。

この世界にも存在しないだろうと思い、アサシン部隊はソレを調べに行った所、ソレは普通にあったと言うのだ。狂王の居ないこの世界に、狂王の遺産が。

「あの遺跡は私達が陛下と共にいた幻想の都に繋がっているようなのです。しかし私達には使えません」

「何故？」

「アレは既にかなり電力を失っています。幻想の都に行けても、帰って来れる可能性がないのです」

ソレを聞くと、牡丹は少し悩み始めた。行っても帰って来れない遺産、コレの意味を。

「・・・成程ね、そう来たか」

「牡丹様？」

「いや、何でもない。君達はこれからどうする？」

「我々は此処に居ます」

ソレは以外過ぎる考え、その言葉に牡丹の思考は少し鈍った。

「狂国には行かないのかい？」

「我々が忠誠を誓ったのは陛下です。間違えても陛下の加護や、その他の力に忠誠を誓っていた訳ではありません」

「・・・君は、メアリーをどう見る？」

その言葉にアサシンの一人は涼しい顔でこう答えた。

「彼女は今自分でも解っていないのでしょうね、自分が何に仕えているのか」

ソレが狂気なのか、恐怖なのか、加護の為なのか、それともう一度あの平和な暮らしを味わう為なのか。ソレは彼女にしか解らない事だ。だがメアリーが狂王を復活させようとしている事に変わりは無い。

「我々、今の状態の彼女達に姿と場所を知られる訳には参りません」

「ただ主人の影に控える。ソレがアサシンです」

「私達は戦の道具だ、でもメアリーのではない。我々が忠誠を誓った御方はただ一人」

「・・・君達は強いんだね」

絶対に曲がらぬ忠誠心、鋼の様なその心。誰一人として逃げ出そうともせずに、既にこの世に居ない主人の命令を待っているのであろう。復活にも加担せず、死都にも加担せず、ただただ、時を待つ彼女達。その忍耐力、その忠誠、恐ろしいモノだ。

「所で、この中にその遺跡を動かせる者は居るかな？」

「居りますが・・・何故」

「行って見ようじゃないか、幻想の都へさ」

姉と言う存在に会いに、狂王が鬼武者と呼ばれた地へ足を踏み入れて見よう。そこの時間は止まっていると聞いた。もしかしたら更に良い情報が得られるかもしれない。牡丹はそう思うと笑みを浮かべるのであった。

77話・アサシンとの対談（後書き）

その錆びついた扉は、開かれようとしている。

78話・森の中の（前書き）

さてさて、作者にも先が見えないお話。アサシン部隊の装備はアサシンクリードのエツェオやアルタイルの装備を参考にして下さると嬉しいです。

78話・森の中の

――遺跡の起動――

樹海の更に置く、人間が辿り着くには少々難しい場所にソレは存在していた。その事がまるで当たり前のように存在するその遺跡には既にコケなどが纏わりついており、ずっと昔からあると言う事が解る。しかしその中は清潔そのモノでゴミ1つ落ちていなかった。暗い遺跡内は妙に近代的で、どちらかと言うと古い様だが近代的とも言えるだろう。

「かなり古代様式でありますが、これなら動かせますよ。エネルギーは・・・」

「そっち、配線調べてー」

「ちょっ誰ですかこんな所に照明置いたの！」

アサシン達が頑張っています。ソレも複数人。
どうやらかなり古かったらしく、しかも誰も手入れをしていなかったのでかなり酷い状況だったらしい。それにしても彼女達は何故こんな事も出来るのであろうか。

「そっち、サボってないで早く動力動かして見て！」

「私だってネジや配線チェックで忙しいのですよぉ！」

「給水係―こっちに水とオイル持って来て―」

「この盤は・・・此処をこうして・・・」

はっきり言ってもの凄くシュールかつ恐ろしい光景である。死都最強と言われている死霊騎士団と肩を並べて強かった筈のアサシン部隊が全員で遺跡の修理をしているのだから。

「これで・・・良しと」

「う、動くかなぁ」

「馬鹿、陛下のお作りに成ったモノが壊れるなどとても考えられない」

「じゃ、じゃあ、押すぞ」

・・・何の音もせず。沈黙が周囲に流れる。

「動かないね」

「そ、そんな筈じゃ」

頭の上にクエスチョンマークを浮かべるアサシンが首を傾げる。その様子を後ろから見ていた別のアサシンが彼女を退けて椅子に座り、他のレバーなどを操作してみた、しかし、やはり動かず。

「こう・・・斜め４５度くらいのチョップで・・・」

「君は何時代の脳味噌を持っているんだい」

スパーンッと牡丹は手に持っている扇子で彼女の頭を叩いた。その

衝撃でアサシンは操作盤の上におでこを強くぶつける。鈍い音がした後に彼女が顔を起こすとそこは赤くなっていた。

「い、痛いじゃないですかぁ！！」

「もし君のチョップが留めになったらどうするつもりだったんだい！？」

「牡丹様の今の攻撃も危ないのでは・・・」

「ッ言うな」

チッチッチッ

と、何かが起動したような音がした。まるで一部の動力が動き出したかの様な音。正面のモニターにソレが映し出された。この遺跡を管理している人工知能と思われる女性の姿がノイズと共に現れる。

≪アサシン部隊の方々、この廃墟に何のご用でしょうか？≫

「この方を幻想卿にお送りしたいのだが・・・」

≪ソレは出来ません≫

予想外の返答にアサシン部隊は全員その目をしかめた。この遺跡は確かに古く、死都と比べると既にいくらか劣っているだろう。しかし恐らく半永久的に活動できる動力を持っている筈だ。何故それが動かないのか。

≪現在の残りエネルギーは既に０に近いのです。転送に失敗すれば私はその方を殺してしまう事に成ります。既に温存モードに移行し

ているので、その方を転送できるエネルギーが溜まるまでと私のエネルギー回復量を計算すると・・・恐らく後、３５８年ほど掛ると言う計算に成ります≫

「冗談じゃない！何で動かないんだ！？何処かの故障か！！？」

≪メインエネルギー装置が取り外されているためだと考えます≫

「メインエネルギー装置が取り外し・・・？一体誰が・・・」

≪恐らく、何処かの国の方だったと思いますが・・・長い間私も行動不能に陥っていたので何処の国かまでは検索できません。この国の長い歴史の中、私のメインエネルギーを知った何処かの国か、何処かの組織が研究の為に取り外したのではないでしょうか≫

要するに、一番大事な機器が誰かによって盗まれてしまったのでエネルギーの補充が非常に遅く、幻想世界に飛ばす事が出来ないと言う事らしい。

牡丹が考えるに、この遺跡のメインエネルギーを取り出したのは死都ではないだろう。作った所が死都ならばそちらにもある筈だし、アサシン部隊も古いや劣っていると言っていた。

そう考えると、この世界の秘密組織か、その他の軍隊と言う可能性がある。半永久的にエネルギーを作り出す機関等、何処の国でも喉から手が出るほどに欲しがるだろう。

「はぁ・・・応急処置でも此処まで、技術部は魔都と共に姿を消したと聞いた・・・」

「・・・？魔都と言うのは・・・」

牡丹が知っている魔都は死都に次ぐ二つ目の領地らしい。戦闘用に作られた都市で空中に浮いておりその周囲には強力な結界が張られている。そこまでは知っていたが・・・。

「姿を消した？」

「技術部の連中は賢くてね。新しい狂王がゲートを封じる前にその都市ごと逃げたのさ。巨大なゲートを使ってね」

因みに、死都と魔都は別々の動力源があり、単独行動が可能のようだ。死都が地に根を張った都市だと考えると、空中を自由に移動する浮遊都市と言うのが魔都である。

「技術部の連中なら作れるかもしれないが、それなら魔都から探さなければ・・・」

≪私に、良い考えがあります≫

ＡＩが静かに口を開く。

≪陛下はこの世界に御帰りに成られた時、私を使わずにとある場所ごと幻想の都まで入られました。もしかしたらそこから入れるかも・・・≫

「ソレは興味深い、その場所は？」

≪――守矢神社――≫

78話・森の中の（後書き）

魑魅魍魎の居る世界に旅立ち、信仰を復活させたその神社、外の世界にはその神と巫女が暮らしていた所だけが残っている。

79話・幻想入り（前書き）

ようやく東方が入って来るよ！

79話・幻想入り

――神の居ない神社――

市街地から少々離れた旧神社とされている守矢神社、現在では更に立派なモノが市街地の近くに建っている。アサシン部隊を置いて牡丹はその神社まで来ていた。通行手段は普通に電車とタクシー、その後の徒歩である。長い階段が終わるとそこに少々古びた神社が姿を現した。神社特有の厳かな雰囲気が漂っている。しかし、そこには神が居る気配と言うか、独特の力が漂ってはいなかった。

「（・・・暗い）」

神社の境内は恐ろしいほどに暗かった。まるで夕暮れ時を過ぎた薄暗い時間帯の様に。しかし現在の時間は昼の1時過ぎ、こんな空の色は異様でしか無かった。

「良く来たわね、鬼武者の娘」

「ッ」

宵闇から姿を現したのは金髪の女性、特徴的な帽子を冠り日も出ていないのに日傘をさしている。西洋を思い浮かばせるその服装に邪悪くとも言える力の渦。

――妖怪――

牡丹の頭の中をその言葉が駆け巡った。それも大妖怪であろう、その鋭い瞳が牡丹の腹を少しの間射抜いていたがすぐに牡丹と眼を合わせた。

「胎の中に鬼は居ない様ね」

「・・・何故そこの事を？」

「１０００年以上も生きていると賢くなるのよ、歳をとるのは嫌だけれどね」

そう言うと彼女は片手に持っていた扇を開くと口元を隠して笑う。

「私の名は八雲　紫、ただの大妖怪よ」

「ただの、ねぇ。私の名は一目橋　牡丹だ」

「一目橋？・・・そう、そう言う事」

意味ありげに彼女は頷くと、その瞳を牡丹に向けた。

「で、貴女は一人でこちらに渡ろうとしていたの？」

「何か問題でもあったかい？」

そう言うと面白そうな顔でとても愉快そうに彼女は眼を細めた。

「もう少し調べようとは思わなかったの？」

「調べようにも資料がないだろう？」

「お茶会に依頼すれば良いでしょうに・・・」

その手があったかと言う表情に成る牡丹、その前に本当に依頼なら何でもやってくれるのかと言う顔に成る。お茶会＝殺人集団と捉えていた牡丹にとっては物凄く意外な事だ。
周囲に靄が立ち込める。まるで幻想と現実をかき混ぜているように。

「あのねぇ、幻想卿には不純物が入らないように貴女の父親が強力な結界を張っているのよ？間違えたら空間と空間のなにも無い所で潰されるわ」

「そんなに強力な結界が？」

「転生者対策でね、本当に強く張られているの。私の様にスキマを渡らなければこちら側には来られないわ」

ごく稀に例外は居るけれどね、と困ったような顔をする紫。

「さて、雑談は此処までにして、本当にこちら側に来るつもりかしら？」

「まあね、確認したい事もある」

「・・・そう、別に止めようとは思わないわ。貴女の人生だもの、好きに生きればいい。彼の分までね」

「・・・君は、狂王と・・・私の父を知っているようだね」

紫が悲しそうに顔を伏せた事を彼女は見逃さなかった。その瞳は鋭く紫を射抜いている。紅いその瞳を開き、紫を見据えた。

「・・・そうね、旧友であり親友でもあったわ。お互い馬鹿な事を

して巫女に叱られた事もある。その程度よ」

「・・・その程度？」

「稗田には遠く及ばないと言う事・・・さぁ、この辺りにしておきましょう？渡るの、渡らないの？」

少し引っかかる所もあるが、今は渡らなければならないだろう。向こうに居る稗田に現在の状況やその他の情報も聞きたいし、あちら側は狂王が生きていた時間軸で時間が固定されている。もしかしたら更に多くの狂王の情報を知る事が出来るだろう。

いや、あちらでは鬼武者か。

「先に言っておくけれど、向こうでの安全は保証しかねるわ」

「大丈夫だよ、私もそれなりに強い」

「それだけではないのだけれど・・・まあ良いでしょう、行くわよ」

紫が神社の境内に指していた日傘をたたみ、地面を叩く。すると神社の境内に赤い文字と線が走り大きな術式が出現した。その術式は徐々に2人を呑み込んで行く、その空間の中には無数の瞳と口が存在した。

「ようこそ、幻想の都へ」

その言葉と共に、彼女の意識はブツリッと乱暴に切断されたのであった。

――――

木の葉から洩れて来る優しい光りに眼を刺激される。瞼を開くと眼の前には大きな滝が存在していた。結界の中に作られた都とは思えないほどの自然が眼に付く。

幻想の都、そう呼ばれた理由も解る。人間に全く穢されておらず、何処か懐かしい雰囲気と空気が漂うその世界。

そして自分を囲む何かの群れ。

「（急に現れたぞ、何モノだ）」

「（人間でも無い様だが、妖怪でも無い）」

「（我らの土地に入り込んでくるとは・・・何処の命知らずか）」

風に乗って聞こえてくる言葉は人語の様で安心した。その前に日本語が通じて安心した。しかし現在の絶望的な状況は打ち破れないであろう。

「あやや、どうもこんにちは。突然ですが、この妖怪の山に何のご用でしょう？」

天狗の面で顔を隠した一人の天狗が正面に飛びだして来る。その背中には鴉の様な黒い羽根。何処から現れたのか解らないのは彼女の持つ速度からであろう。

さて、生死を駆けた駆け引きと行こうか。

79話・幻想入り（後書き）

天狗の長が、生唾を飲んだ気がした。

80話・囲まれた（前書き）

はい、幻想卿に入っております

80話・囲まれた

――天狗の里――

囲まれた状況下、さてどうするか。数では圧倒的に不利であるし、相手が何であれ一応警告はして来ているようだし、出会い頭吹き飛ばすのはどうかと思う。

「もしもーし？大丈夫ですかー？」

「・・・あ、えっと、此処は何の山だって？」

「もしかして・・・外から来たのですか？ソレは珍しい！こんな状況でなかったら正式にインタビューを・・・と、思うのですが・・・大天狗様達の視線が痛いので自重します」

物影からお祭りや舞で良く見る真っ赤な天狗の面を付けた女性が黒い羽根の彼女の事を睨んでいた。

「私、射命丸　文と申します。貴女は？」

「私は牡丹だよ」

「では牡丹さん、貴女は外の住人で間違いないですか？」

その言葉に頷くと、周囲の隠れていた天狗の面を付けた女性たちが姿を現した。その数は思ったほど多くは無いが、それでも多勢に無勢だ。挑んだらこちらも何らかの被害が及ぶだろう。

「何も知らずに、気が付けば此処に居たと言う事で？」

「そうだよ、今の状況も理解できていないんだ」

「ソレは申し訳ありません、しかしこの妖怪の山は人間禁制なのですよ」

ソレに今は公開もされていませんしね、と付け足す。どうやらこの妖怪の山は限られた季節の御人間も入れるらしい。これではっきりした。彼女達は完全に人間ではない。まあ、羽がある人間など存在していないと思うが。

「どうする？」

「人間ではないようだし・・・」

「大結界を超えて来たのなら大丈夫では？」

「いや、結界も防げぬほどの強大な力と言う事も・・・」

周囲の天狗達がこそこそを喋り始めている。

それを無視してか烏天狗の面を外した射命丸が牡丹の方へと近づいて来た。彼女の眼には興味と好奇心が宿っている。ソレはもうきらきらと光るほどに。

「あやや、先輩方が申し訳ありませんね、昔からああなのですよ」

「いや、別に構わないが・・・」

「射命丸」

「はい？なんでしょう」

大天狗と呼ばれている赤い天狗の面を付けた女性が文に話しかけた。

「その方を天狗の里までお連れする事が決定した。お前ならすぐだろう、私達は先に報告しておく故」

「了解です」

「では・・・散」

まるで一陣の風が吹き抜けるかの様に多くの天狗が消えて行った。その中で残っている者は羽が無く剣を持っている恐らく哨戒天狗であろうか、が数人である。

「天狗の里？」

「人間には知られないような位置にあるので、眼隠しをお願いしても良いですか？」

「別に（心眼もあるし）良いけれど・・・」

少し不用心ではないのか？そう思ったがそうでもないらしい。何かの札を文が牡丹の背中に張ると牡丹は身体から力が抜ける感触を感じた。相手を無抵抗にして連れて行く。これなら確かに不用心ではないだろう。どちらかと言うとこちらを自らの巣へ追いこんだとも言える。

「少し早いですが、舌を噛まないでくださいね？そのお札は私の速度にも人間が耐えられるように作られていますんで風圧はご心配なく！」

―――――――――――

自分が一瞬だけ、風に成った気がした。鬼の動体視力を持っても見る事の出来ないスピードって、何だろうか。音速を単身で超えたとでも言うのか?それだったらまず彼女は何モノだ。

「何しているんですか牡丹さん、こっちですよ」

「あ、あぁ、今行くよ」

足がふらつく、ソレもそうだろう、あの速度であの不安定さだ、絶対にこうなる。元々乗り物系は駄目だがアレは今までに乗って来た全てを凌駕していた。

はっきりって、現在気持ち悪い。

厳かな雰囲気の屋敷の中を進んで行くと、昼だと言うのに月明かりに照らされた部屋に出た。その部屋の中に輝く月は蒼い月である。

何かの結界術であろうか。

「良く来たのぅ、外来人、いや鬼武者の子」

「貴女は・・・」

「妾は天魔、天狗の里を治める長じゃ」

自分の眼の前にはキティとあまり変わらない年齢の少女と言うのには少々幼い娘が居た。しかしその身に纏うのはその里の長であるが故の高い妖力だ。

「お主の事は紫から聞いておる、家の天狗がすまなかったの」

「気にしていないよ・・・所で君は私を何故此処に呼んだのかな?」

「むぅ、お主が本当に奴の娘か気に成ってのぅ。どうやら、間違ってはいなかったようじゃの。その太刀もお主を庇っておるわ」

カッカッカ、と愉快そうに笑った彼女。そして次に真面目な話に成るらしく笑顔を引っ込めた。

「主も見たであろうな？空木に幻視で見せられたであろう？遺跡の惨状を」

「？・・・あ、アレの事かい・・・？」

自らの父がこの世から姿を消した場所、そこは確かに遺跡であった。色々なモノが周囲に散らばっていたので何処の事を言っているか判らなかったが、少し考えるとその答えが出て来る。

「左様、妾達天狗種は現在其処の保護と管理をしている。どうじゃ、空木に会う前に行ってみぬか？」

「・・・」

「そんな顔をするでない。確かにお主と妾は今会ったばかりじゃが、妾は主の父と交友を持っておる、奴の子を妖怪に売るような真似は出来ぬよ」

「父の墓参りと言う訳かい？」

「いや、お前の父の墓は別の場所にあるのじゃ。しかし、その遺跡の現状を見て貰いたくてのぅ。子孫であるお主が行けば奴らもそれなりに励まされるじゃろうて」

「奴ら？」

「アマゾネスと龍人種じゃ」

どうやら、私は今度その遺跡とやらに向かわされるらしい。その前に少しの間、此処で休ませてはくれないだろうか？

８０話・囲まれた（後書き）

む？お主顔色が・・・！誰ぞ！！竹林の置き薬を持てィ！！

81話・父の名が呼ばれぬ理由（前書き）

シリアス要素あり

81話・父の名が呼ばれぬ理由

――戦士の里――

褐色の肌に鋭い瞳、そして住民が槍や剣を常備しているその光景は異様を極めるであろう。その通りである。この村では前の襲撃の様な事がない様にと武器を携帯しているらしい。幻想卿中ではなく、その村だけが武器を装備している。

「ほほぅ、主は天魔の奴が言っていたあの方の子息か。随分若いな」

「そう言う君達は何歳なんだい」

「千を過ぎてから数える事をやめた、牡丹殿、私はティアと言う。このアマゾネスの長だ。龍人の長である皇龍は少々地霊に用が有ってな、此処には居ない」

遺跡の中のまるで儀式の間の様な所で彼女は笑っていた。その様は妙に不気味とも言えるであろう、何せ血濡れの壁を背に彼女は微笑んでいるのだ。

「その血は・・・」

「君の父君のモノだ」

「・・・悪趣味だね」

「何とでも言うが良い、これが私達の信仰心の表れだ」

剣の傷に槍の傷、その他の様々な戦いの傷跡がその壁には刻まれていた。恐らくあの場に存在した遺跡の一部を全て集めたのであろう。

「この傷を見ているとあの惨劇を思い出すんだよ・・・」

ティアが無くなった片腕を抑える。その手は乱暴に切り落とされたかの様だ。痛々しく包帯が巻かれている。その腕は右腕で、恐らく元は聞き腕だったであろう腕だ。

「私達は一日に一度、この壁に黙祷を捧げる、永遠の女神がこの世に蘇る事を信じてね」

「永遠の女神・・・？」

「私達に永遠の呪いを掛けたのは君の父君だからね、私達の王となれた存在だ・・・まぁ、断られてしまったが」

無くなった腕を、まるで抱くように彼女は小さくなった。その姿はまるで主人を無くした犬にも思える。少し瞳の潤んだ髪の長い褐色の少女が寂しそうに膝を抱える。

「・・・主は父の名を知っているか？」

「狂王や鬼武者と言う名しか・・・」

「そうか、ソレは何故か解るか？」

確かに疑問であった事だ。父の知り合いやその他の物に会っても父の事を鬼武者と呼んだりして本当の名を呼ぼうとはしなかった。ソレが何故なのか、とても気になる。

「父の名が呼ばれるのは・・・君の父が最大の英雄であり最大の悪人であるからだ」

「悪人・・・？確かに多くの個人を殺したと書かれていたけれど」

「そして今、あの方の娘が世界に逆らっている、それも犯罪に成るのだ・・・」

それでは、父が報われない。そう言う感想を覚えた牡丹はギュッと手を強く握りしめた。

「お主の父の、真名は・・・」

「そこまでです、ティア」

濃い紫色の髪の少女がそこには立っていた。

「空木・・・！」

「その言葉は、私から聞かせるべきだと思います」

どうやら間に会ったようですね。そう言うと空木は牡丹の手を握る。

「さぁ、行きましょう？」

「ど、何処へ・・・？」

「父の、墓参りですよ」

―――――――――――――――

漆黒の森の中、その中に立つ古臭い鳥居。石造りであるがその石の色は真っ赤である。まるで血の赤であった。その中には結界でも張られているのであろうか、異様な程に静かな空気が流れている。

「此処は・・・」

「幻想卿に貢献した者だけが眠れる墓地ですよ、稗田も、その他の妖怪も眠っています」

【原点】と書かれた墓石がある。その墓石の前に供えられた花等はまだ新しかった。

「此処には本来、その人間や妖怪、神と関わりが合った者しか入れません。この幻想卿の結界を管理している博麗の墓も此処にあるのですよ」

「（博麗・・・？何処かで見た記憶が・・・ダメだ、数日前の風邪の影響か記憶があいまいで・・・）」

そんな事を考えながらもどんどんと奥へ進んで行く。

「ず、随分奥に行くんだねぇ・・・」

「父さんはこの幻想卿の作成に協力した人でもありますし、人間の賢者とも呼ばれていました。ソレに稗田の夫ですからかなり地位も高かったのですよ？」

そんな事を言っていると、緑色の髪の少女がこちらに話しかけて来た。

「空木さん、お墓参りですか？」

「えぇ、大ちゃんは今日も・・・？」

「はい、何時帰って来てくれても、良い様に・・・」

「あの・・・この方は？」

「彼女は大妖精、人間とまとも話せる大人びた妖精の一人。父さんのお墓や、その他の人のお墓も綺麗にしてくれるとてもいい子ですよ」

そう言うと空木が彼女の頭を撫でる。

「さぁ、もう少しです。行きますよ牡丹、日の暮れない内に」

「日が暮れると何か？」

「此処には妖怪が荒らせない結界がありますが、実際夜になると危険な妖怪が動き出しますから」

背中に視線を感じた気がした。

81話・父の名が呼ばれぬ理由（後書き）

懐かしい力を感じた、でもそこに居たのは彼じゃなくて、彼女じゃなくて。
私の張り裂けそうな心臓が、彼女の中を見たいと血を送り出す。
この衝動のままに、暴れてしまおうか・・・。

82話・墓参り（前書き）

シリアス要素あり

82話・墓参り

――荘厳――

墓地の最も奥深く、そこに1つの大きな墓が存在していた。普通の墓石よりも大きいだけだが何故かその墓石だけに名前が記されていない。漆黒の石で作られたソレは一見恐ろしい物にも見える。漂う独特な雰囲気をただの墓石が放っていた、ソレは異様な光景と十分に言えるであろう。

「死してもなおこの威厳、凄いね・・・」

「えぇ、此処が仮の墓だとしても凄いでしょう?」

「・・・仮?」

空木はそう言うと懐から大事そうに腕輪を取り出した。ソレは手作り感漂うモノではあるが、普通に売っていればかなり高い物であろう。

「父さんの本当の墓はこの下ですよ、この事は誰にも言わないでくださいね。知らされているのか限られているんだ」

空木がその腕輪をはめて墓石に触れるとその墓石はゴリゴリと音を立てて変形し始めた。地下へと続くその道が墓石がせり上がり出現する。

「あの妖精の子は知っているのかい?」

「多分独自で気付いたでしょうね、彼女は賢いから」

暗い地下への道を進んで行く。

牡丹が少々の疲れを覚えて壁に触れると妙に丸い物に手が当った。

不思議に思いソレを照らして見るとそこにあった物は人骨であった。

それぱかりではない、この地下通路は無数の白骨で作り上げられている。

「死者の街道、侵入者を防ぎ王を守る兵さ。墓荒らしは防ぎたいでしょう?」

「この量の白骨死体・・・何処から・・・」

「私達の父が体内に飼っていた物の成れの果て、としか私には言えませんよ」

何処からか松明を手に取るとその松明に高密度な力を持つ光求で火を付ける。

「今の火の玉は?」

「弾幕と呼ばれる物だよ、此処の住民は普通の人間や妖怪を除いてこれが打てるんだよ」

「・・・本当、君は喋り方がコロコロ変わるね」

「私の中に何人いると思ってるの?」

そう言うと彼女はケラケラ笑った。空木とはその身の中に様々な世界、様々な次元、そして自らを産んだ母の魂でさえも外の稗田と呼

ばれる全ての稗田をその身の中に宿しているのだ。その主人格が空木に過ぎない。今誰がしゃべっているのか、今喋っているのが何代目か等と、さっぱりわからないのだ。

「君の中に、鬼武者が愛した初代稗田は居ないのかい？」

「初代稗田は幻想卿、つまり此処で転生を繰り返していました。その肉体も閻魔さまが用意する物で。そして9代目の時に彼女は不老不死の法に手を出し、鬼武者の死亡時に共に姿を消しました・・・ですから私にも、私の中にもいないのですよ」

「・・・？待って、初代稗田が不死？」

「初代ではなく、稗田阿礼様から数えて9代目である稗田阿求様ですね。私達の御先祖様です・・・優しい方でした」

助けられなかった、彼女の負うモノが自分でも背負えたのではないのか？と言う感情が何度空木を攻めた事だろう。父と言えどモノ自分達の遠い先祖様、代わりに成る事等出来ない。

「・・・着きました、此処が私達の父の墓です」

「・・・！」

地中とは思えない光景がそこには広がっていた。そこにあったのは一見の武家屋敷だ、見覚えのある武家屋敷だが、今回の武家屋敷は現実味が合った。
その武家屋敷の庭に咲いた桜が枯れる事も無く、尽きる事無く桜をヒラリヒラリと落としている。

「ここ・・・は・・・・」

「初代様とその夫である方が住んだ武家屋敷です」

ウロの怪が作り上げた幻想ではない。こちらはどうやら空間がねじ曲がって出来た存在らしい。

「此処が、私達の先祖であり父である方、【朝霧　八雲】様の本当の墓です」

「朝霧・・・八雲・・・・？」

脳の中で知らない記憶の女性が笑う。三日月形にその口を歪ませて口の中からは真っ赤な舌が覗く。

誰だ、彼女は、私の頭の中で笑うのは・・・ッ！

≪その者は産まれぬ方が幸せだったのだ、私の絶望（アダム）よ≫

白銀の髪の女性が何かの容器の様な物に入ったソレを見つめていた。

私はその物の中からその白銀を見つめる。

「今の幻視は・・・君かい？」

「私は何もやっていませんが？そもそも私の能力は【先代をその身に留める程度】の能力ですので」

そんな会話をしていると言えの中から誰かが出てきた。空木よりも幼いが大人びた雰囲気の深い紫色の髪を持つ少女が箒を持って家の前を掃いている。その後から出て来たのは白銀の髪を持つ女性、その女性は綿帽子を冠り顔には【眼】と書かれた札を張っており顔が

うかがえない。

「あれはっ！」

「駄目です！牡丹！！」

「どうして！？そこに居るんだよ！！？」

「アレはこの空間の、あの屋敷の記憶です。触れれば消滅してしまいます・・・。ソレに、あのお二人が自らの子孫を無視する訳・・・ないです」

体現する幻視とでも言おうか、白銀の髪を持つ女性がその紫色の髪を持つ少女に後ろから抱きしめる。少女は顔を赤くしてその女性に何かを言うが、楽しそうにその女性は頭を撫でるだけであった。

「そうです・・・いたんですよ・・・この世界に・・・この幻想卿に・・・あの忌々しい娘が来るまでは・・・」

「・・・君に聞きたい事があるのだけれど」

「何です？」

「アダムって言うのは・・・」

その言葉を聞くと彼女は何故貴女がソレを知っているのかと言う顔に成る。

「最後の決戦前に運命を孕んで死んだ父さんの劣化コピーです。１２人作られた天界の違法コピー神の一人で、アダムは絶望のメモリ

ーでした。それも彼女は予定にない１３番目（ロストナンバー）です・・・ですが何故それを？」

「幻視でね」

そう言うと空木は何かを考え始めた。

「貴女の幻視は特徴がおかしすぎます。過去に干渉は出来ないようですがとても異質な物の様ですね・・・一度、永琳さんに見せた方が良いかも・・・まあ、次の目的地の後に行きましょうか」

「次の目的地・・・？」

その言葉に空木は少しつまらなそうに顔を伏せた。

「紅魔館、吸血鬼の館であり阿求様の恋敵であった方が居る場所です」

82話・墓参り（後書き）

因みに、父さんの純な血を継いだのは貴女が1人目ですよ？私達にはお母様も居ますので。
私が片親だと笑いたいのかい？
いえ？ただ教えて差し上げただけですが・・・

83話・紅の屋敷（前書き）

この文には多くのオリジナルキャラクターを含みます

83話・紅の屋敷

――旧友――

一面の赤、眼の痛くなるほどの赤、アレルギー反応が出て来そうなほどに赤いその空間とその屋敷、若干その赤さに眼を白黒させながら牡丹は一人のメイドに案内された大きな肖像画が飾られているその肖像画に描かれている女性の髪の色は不思議なモノで、蒼の髪だが髪先へ行くにつれて金髪に成っていた。

「（血の赤を隠す屋敷か、悪趣味と言えるね）」

「（それ、此処の先代当主には言わないでくださいね？）」

吸血鬼の館、恐るべき紅魔の悪魔、そう幻想卿縁起には書かれていた。内容によると此処の先代当主は一度死んだモノの特別な理由で生き返りそのままこの館に住んでいるようだ。元はその生き返った者の城を改築して今の形に成ったとか。ソレに、此処の当主は二度、鬼武者と刃を交えている。

「女王様、こちらです」

「えぇ、ありがとう咲夜」

姿を現したのは肖像画そのままの女性であった。背中に蝙蝠の様な羽と宝石の様な羽を持っている。長い髪に高貴な雰囲気を漂わせる彼女は此処の前当主と言われても納得がいく。

「ようこそ、この血の館に。朝霧の子」

「・・え?今朝霧って・・・」

「紅い月、皆で決めた事でしょう。父さんが復活するまでその名を出来るだけ呼ばないと。悲しみを深めるだけだからと」

「私には関係の無い事よ、紫や幽々子、映姫には悪いけれど私には朝霧の事を呼び捨てにするようなことは出来ないわ」

そう言うと向かいの長椅子に腰かける彼女、すかさず咲夜と呼ばれたメイドが彼女の分の紅茶を入れた。

「懐かしい匂いの紅茶ね、貴女が持って来たの?空木」

「父さんと母さんが好きだった紅茶です。貴女もあの二人繋がりの物が好きでしょう?」

「・・・良く解ったじゃない、久しぶりに愉快だわ」

そう言うと彼女はその紅茶を少しずつ飲む。

「それで、貴女の名前は何と言うのかしら?」

「う、空木・・・です」

瞳が合っただけで、何か強大な獣に睨まれたような気がした。彼女は殺気もなにも出していないのにその身からは溢れんばかりの、そう、支配者としての威厳が溢れている。

「そう、私は紅い月で結構よ。呼び捨てで構わないわ」

「紅い月・・・それが貴女の名前ですか？」

名前らしくない名前に牡丹は彼女に食い下がった。流石に今から何度も会うかもしれない者と偽名で呼び合いたくはないだろう。

「御免なさいね、私の名前は遠い昔に無くしてしまったの」

遠い昔に、ね。と彼女は自分の肖像画を見た。全く変わっていない彼女の容姿は流石は吸血鬼と言えるであろう。ソレも無意識の内に魅了の魔力も少しながら纏っているらしい。

「さて、貴女が此処に来た理由は言わずとも解ってるわ、朝霧の事ね」

「何で」「何で知っているか、でしょう？」「！？」

「私の娘の一人に運命を操る程度の能力を持っている子がいるのよ。人間やその他の雑魚妖怪の運命なら御手のモノよ？貴女は違うらしいけれどね」

「吸血鬼なのに、子供が？」

本来吸血鬼は処女童貞でなければなる事の出来ない不老不死の化物だ、異例かつ異常な事がなければその胎の中で子を育て生み出すと言う事は出来ないであろう。

「知っている？妖怪は人間達と違って体液交換以外でも妊娠出産が可能なの。私の場合自分を２つに裂いた感じかしらね？」

そんな事を聞きに来た訳じゃないでしょう？と彼女は微笑んだ。

「付いてきなさい、貴女に渡したい物がある」

そう言うと彼女は地下へと続く階段へと牡丹達を誘い出した。その地下に続く階段は普通の地下と違って湿気を感じない、何かの術式が働いているかのようだ。

「パチェ、いるかしら？」

赤の次は見渡す限りの本の山であった。何時春此処の本を全部読んでみたくなったが、今はそれどころではないのでこの戦いが終わって生きていたら父と此処に来よう、そう心に強く刻んだ。

「むきゅ～・・・私は・・・此処よ・・・」

「あらあら、本に埋まって幸せそうね」

「違うわよ！助けなさいよ！！」

「あら？失礼、貴女の事だから幸せだと思っていたわ」

「確かに幸せかもしれないけれど、私の周辺にある本はもう全部読んでしまったのよ！！」

「呆れた・・・本に潰された状態で読書なんて私でも考えないわ」

そう言うと紅い月は本に埋まった紫色の髪の毛の少女を救いあげた。長い紫の髪に半分しか開いていない瞳、その口からは「むきゅ～・・・」と何かの動物の様な鳴き声が聞こえた。

「前に言いつけておいたアレはどうなったかしら？」

「奥よ、ホムンクルスが気に行ってしまってね。彼女の前にあるわ」

「そう、じゃあ2人とも、行くわよ」

「ちょっと待って」

今彼女は何と言った？【ホムンクルス】？ソレは確か試験管の中の小人とも言われているアレだろうか？高い知識を持った高高度超知的生命体。

「あぁ、昔此処の魔女とその他の魔女が集まって作ったモノよ」

「そんなに簡単に言わないでよ！ホムンクルスは他人等と同じ方法では作れないと言われたモノだよ！？」

「だから、高価な物と貴女の父の知識で生まれたのよ。今じゃ水槽の中で元気に暮らしているわ」

「水槽！？」

「？何かおかしいかしら？？朝霧が彼女の体を強く作り直して、フラスコの中では可哀そうだって言って水槽に移したのよ？」

「（私の父は一体何なの！？）」

牡丹の疑問は誰にも聞かれる事がなかった。

83話・紅の屋敷（後書き）

ホムンクルスの作成にも一枚噛んでたなんて・・・
私達の父は規格外ですから
本当にね！

８４話・アイテム入手（前書き）

作業用にヤンデレソングを聞きながら書く物じゃありませんね（笑）

８４話・アイテム入手

――人造生命体――

大きな水槽が眼の前に存在している、例えるならまるで１つの部屋だろうか。何かの液体に満たされたその容器の中にその少女は存在していた。人間とは思えないほどに小さく、どちらかと言えば妖精だろう。彼女のその水槽の中に普通の部屋に存在するような家具が置かれている。

「ようこそ、人間さん。ソレを取りに来たのでしょう？紅い月」

「えぇ、悪いけれど彼女にソレを譲ろうと思うの」

「・・・そう、でもそちらの方が有効に使えるでしょうね」

そう言うとホムンクルスはそのフラスコを指差した。彼女の指差す先には紅い液体がなみなみと注がれ密封された紅い液体。周囲の空気に触れないようにその瓶の中は遮断されていた。

「これは？」

「狂王朝霧八雲の血よ」

「何故君がこんな物を・・・？」

「彼女は自分の血を媒介として良く使ったわ。この幻想卿に悪しき者が現れた時も血を使ってそれを封印している、もしもの時の為にって魔法使いであるパチェと博麗の巫女、その他数人に渡されてい

るのよ」

見つめているだけで背筋が凍りつきそうになる。その物体は恐ろしく計り知れなかった。

「穢れ無き神の血」

ホムンクルスが口を開く。

「かつて彼女は人間の祖と成るべく生まれた」

ホムンクルスの蒼い瞳が牡丹の紅い瞳を射抜いた。

「しかし彼女は生まれてすぐに呪いを掛けられ、人間の男として長すぎる寿命を生きる事に成る。その人生は波乱に満ち、多くの血と狂気、そして多くの屍を積み上げた」

狂王伝承、そう呟いた紅い月。この幻想卿にもあまり残っていない狂王の昔の記憶を閉じた物語だ。既に人間の間ではその伝承は薄れているが、彼女は覚えているようだ。

「彼女は自らを愛する世界に居て、しかし世界に愛されなかった矛盾を抱えて育ち、そしてその一生をこの幻想卿で終えた。彼の死期を看取ったのはとある良い闇の妖怪と賢い一人の妖精。彼の死に狂った者まで居た始末」

「・・・昔の話よ」

君なのか、と言う疑問の眼差しを向けると紅い月は顔をそらした。

恥ずかしい事だったらしい。

「そして、彼女は闇魔姫の使いとされ、とある世界に送られた。そこは牡丹、君が今教師をやっている世界と似通った世界だ。その世界にも英雄たち、戦争、姫と様々にいた。もちろん吸血鬼もね」

その言葉に、牡丹は息をのんだ。

「世界樹からなる世界、世界樹の種が育ち放たれては別の次元で別の世界を構築する。神の関わる事の無い創世、それで生まれた場所が今君がいる世界、つまり君と狂王が居た世界は親子っていう訳」

「な、何だか良く解らない話だね」

つまりは世界樹から育った世界に僕は暮らしていたと言う訳か。ソレも父が居た世界の子の世界。大地、つまりは惑星を生命体と見るガイア理論だろうか。アレに近いだろう。

「そして、今貴女が此処に居る、姉妹殺しと言う大罪を犯す為に」

「ッ」

確かに父の作り上げたイヴを殺すとなればソレは確かに姉妹殺しであろう。しかしアイツが何をした?誰を手に掛けた?自らの父を自らの手で、奴はその命を奪ったのだ。命を与えて貰った筈の温もりを、自ら手放した。

「殺して・・・悪いかい?」

「ッ牡丹・・・!」

空木の声が耳に入る。その声は辛そうであった。

「貴女はその血を復讐に使うのね、ソレも良いわ。貴女達家族が決めた事に私は口を出さない。でもこれだけは言わせて？」

「・・・」

「イヴも、最初はまともな子だったの・・・貴女と同じ、真っ直ぐな眼をしていたわ」

「会った事が・・・？」

「彼女はあまり死都の外へは出て来なかったけれど、此処には良く来ていたのよ。何時から彼女は道を間違えてしまったのか、私には解らないわ・・・」

彼女を狂わせたのは誰？頭の中で何かが笑う、笑う嗤う哂う。まるで人を馬鹿にするかのように。

「牡丹、大丈夫ですか？顔色が優れませんが」

「大丈夫・・・だよ」

【彼女は貴女と同じ目をしていた】

そこがやけに引っかかる。まさか、自分も何時か自分を失うのではないか。その考えが思考回路を駆け廻る。嫌な予感しかしないとはまさにこの事である。

大体、神を複製する等事態が異例だ。１３番目（アダム）はまとも行動していなかったようだが、ソレに対抗する為に生みだされたと言われるイヴはどうなるのだ。

何故、彼女は狂った。

≪アハッキヒャックヒヒヒヒヒヒヒ！！≫

耳障りな笑い声が響く、特徴的な笑い方で更に寒気までするとなれば一級品だ。

「その血は大切に使いない。その血一滴で奴隷が帝王に成れるほどの効果と祝福があるのよ」

「・・・主に何に使うのさ」

「それは貴女自身が決める事、ただし、一言だけ付けくわえるとするならソレは賢者の石以上のモノよ。等価交換なんか簡単に無視してくれるわ」

「・・・そんな物をどうしろと言うのさ」

「貴女も朝霧の娘でしょう?常識を捨てなさい、そうすれば今までに見れなかったモノが見えてくるわ」

まあ、山の巫女のようになってしまったらソレはどうしようもないのだけれどね、と言うと彼女は笑った。

ただ、彼女もワラッテイタ。

８４話・アイテム入手（後書き）

はて、私は誰だったか。
何年生きていたか。
誰かを愛していただろうか。
そんな事も、忘れてしまった・・・か。
あぁ、●●とは・・・誰だったか。
大切なモノだったような・・・
思い出せない、何も、なにも、ナニモ
ジブンノナマエデサエモ。

85話・迷いの（前書き）

妖精、妖怪、もし人間達との戦いが起きたら私は妖怪、妖精側に寝返ると思う。

85話・迷いの

――見渡せばそこに居る狂気――

はて、此処は何処だ。先程まではしっかりと空木と共に永遠亭と言う所に向かっていた筈だが。何も見えない、何処へ進めば良いのかもわからない竹林の中、確か迷いの竹林であったか？そんなような名前であった。しかし道を一本ずれてしまっただけで此処まで迷う物であろうか？

「一面は暗闇、空に浮かぶ月も見えず、ただたださ迷い死を待つ場所か、確かに幻想卿縁起に書いてあった通りだ」

だが、確か案内人が存在する筈だが。読んだ内容によると私の父、生前の朝霧に弟子入りしていた不老不死の少女が案内役をやっていると聞いたのだが、迷ってしまった者は対象外なのであろうか？

――苦――を――手に――
死を――の物と―り――

誰かの声が聞こえる。話しているらしいがどちらの方向であろうか。耳を澄ませて見れば正面ではなく、右側の竹の先から声がしている。

「師匠はアンタに何を教えたか知らない、でもね、アンタが求めているモノが禁術だと言うことくらい解るさ」

「・・・どうしても協力してくれませんか」

「私は師匠の教えを守っているだけさ、お前と違ってね」

「ですが、この考えが成功すればあの幻を現実に」「それは幻が受肉したに過ぎない。本物ではない変なモノが生まれるだけ」

白い髪を持った紅いズボンの少女が誰かと話している。話し相手は見る事が出来なかった。

「わざわざアンタが此処に来た理由はアイツの親友だからだろう？この閉鎖され時間も止まった場所に来たのはもう一度師匠を蘇らせたいからだ、そうだろう？」

「・・・」

「考えてもごらんよ、師匠は確かにあんな形だったけれど、ようやく眠る事が出来たんだ。ソレを無理やり起こすなんて、私には出来ない」

「・・・貴女は、朝霧が地獄か、天国かで良くやっていると思っているのですか？」

「・・・何？」

意味ありげな会話に、少々聞き入ってしまう。

「彼女の魂は天界にも、地獄にも、魔界にも、冥界にも、何処にも来ませんでした。この意味が解りますか？」

「・・・どう言う事だ」

「彼女は、何処かに魂ごと幽閉されている可能性が高い。あの事件

以来闇魔姫も表に出て来ていませんし、その他の闇魔達も彼女の事を探したようですが手掛かりなし。稗田の魂さえ見つからない始末」

パキパキパキッと、此処には不釣り合いな音がした。
白い髪の少女と話している人物の手の先には黒い空間が露出しており、その中は別の次元と繋がっているようだ。紫かとも思ったがどうも声が違う。

「イザナギ、イザナミ姉妹は彼女の消滅後、神殿に籠って出て来ない。冥界に至っては冥王の不在に付き情報すら教えて貰えなかった」

「つまりは、師匠は何処にも居ない、と言う事かい？」

「だから言っているでしょう？彼女の魂は何処かに囚われてしまっているかもしれないと」

「だとしたら！何故天界も地獄も動かない！？」

「正確には動けないのですよ、運命が倒された事によってその運命の魂を使いノルンと言う運命の女神を作り上げたようですが、死都への牽制も有りますし、神光がどのように動くかも・・・」

「・・・で、アンタは？」

「私は単独で行動しています。この鎌に掛けて」

一瞬であるが金髪の髪に黒いローブを着て、顔に骸骨の仮面を付けた女性が見えた。

「カロン、お前本当に狂国にも死都にも属せず復活させる気か」

カロン、死の川の渡し手。あの世とこの世を往復できる唯一の者だ。
しかし、そんな者まで動いていたのか。

「・・・そう、解ったわ。貴女の協力は欲しかったけれど。それでも貴女の考えは賢いモノだ、何かあったら連絡を待っているわ」

「あっおい！！」

その瞬間、彼女はその黒い空間に姿を消した。中には何があるか判らないが、彼女も単身で世界移動が出来る程の実力者なのであろう。

「クソッまだ阿雲の事を聞いてないのに！！」

「（・・・阿雲？）」

もう少し良く聞こえる所にと考えて足を踏み出したその時である、運悪く、そこには小さな乾いた小枝が落ちており靴に踏まれた事によって大きな音を出し折れてしまった。

「（しまっ――）」

「誰かそこに居るのか！？」

白の少女がこちらに近づいて来た。
見つかる時等は一瞬である。

「なっお前人間か！？こんな夜に何やってる！？」

「い、いや、永遠亭に行く筈だったんだけれど連れと逸れてね」

「あぁ・・・運悪かったな。今日はこの辺りで夜雀の屋台が出るんだ、それを耳にしてしまったらしい」

そう言うと彼女は牡丹の腕を掴んで林の中から引っ張り出した。そうすると牡丹の服に付いている埃などを落としてくれる。もしかすれば彼女が迷いの竹林の案内かもしれない。

「・・・！お前、もしかして空木の知り合いか？」

「あ・・・え？」

いきなり顔を上げてそう言った事を聞いて来る少女に牡丹は少々驚いた。

「あ、まだ名乗っていなかったな。私は藤原妹紅、アンタは？」

「私は、牡丹」

「そうか、牡丹か。所で、空木との関係は・・・？」

真面目な瞳が彼女を射抜く。

「は、腹違いの姉妹」

その言葉を聞いた瞬間に、彼女の驚きに満ちた顔を若干の嬉しそうな顔が見えた気がする。

85話・迷いの（後書き）

そうか・・・成程・・・
・・・（空気が重い！）

86話・幻視について（前書き）

ひょこひょことでる前主人公の親友たち

86話・幻視について

――永遠亭――

妹紅に案内されて辿り着いた先には大きな屋敷が存在していた。多くの兎達が忙しそうに働いていたり、遊んでいたりしている。全てが人間体と言う事は此処に居る兎は全員妖怪と言う事だろう。屋敷の中に案内されると、そこはまるで空間が歪んでいるように長い廊下が待っていた。

「牡丹、何処に居たのですか。心配しましたよ?」

「ちょっと道に迷ってね」

「優曇華院が探しに出てしまいましたよ・・・」

「行き違いに成ったのかな?それは悪い事をした」

応接室と思われる所には既に牡丹が座っていた。彼女は暇をつぶすように小さな水晶の様な物を手に中で転がす。

「もうそろそろ来るでしょう」

「?誰が」

「忘れましたか?お医者様ですよ」

そう言えば幻視がおかしいから見え貰うんだったか?完全に忘れていた。ソレは忘れもするさ。自分の父の血が入ったフラスコなんて

入手すれば。

「いらっしゃい、空木。今日は何かの薬かしら？」

「違います、今日はこっちのこの幻視に付いて診て貰いたいのです」

「へぇ、幻視ね。彼女が消滅してから限られたモノが見るようになった幻、興味深いわ」

そう言う長い銀の髪を持つ女性、赤と蒼に別れた不思議な服を着ている。その手にはカルテだろうか、何かの書かれた書類を持っていた。

彼女が注射器を取り出すと牡丹に向けて話して来る。

「貴女の事は既に空木から聞いているわ。さ、片腕を出して、少し血を採らせてね」

「あ・・・はい」

普通に片腕を出すと永琳の表情が若干変わる。

「・・・朝霧の血、貴女本当に彼女の娘なのね」

「何故解るのです？」

「空木もだけれど、彼女の血筋には血にとても強い力があるのよ。この子のは彼女程ではないけれどとても濃い力の循環を感じるわ・・・もう少し力を制御した方が良いかもね、彼女の様に」

そう言うと医者は牡丹の腕をエタノールを含んだモノで吹いてゴム

で腕を少し固定して血を抜いた。その行為は本当に一瞬であった。痛みすら感じないと言う事は彼女は物凄く手馴れているのだろう。

「私の名前は八意　永琳。永琳でも構わないわ」

「そして、私達の父が賢帝と呼ばれた時代を共に生きた月の住民、ですよね」

「・・・空木、人の秘密をそう簡単に話すモノではないわ」

「良いじゃないですか、別に困る事は無いんですし」

「・・・賢帝？」

初めて聞く言葉に牡丹は少々頭を捻る。

「父さんが人間モドキだった頃、そうね・・・何と言いましょうか？」

「まだ人間が存在していない時に存在していた民族よ」

「それなのに賢帝なの？」

「貴女の父はね、私達が教えた言葉や文字をすぐに理解して、集落を町に、町を国にしたのよ。徹底された国家でね。だから賢帝と呼ばれたの」

つまりは、父関係の人物と言う訳か。

「でも安心したわ、貴女が親の七光の様な人間じゃなくて」

偉大な父を持つと、その権力に溺れる者がいるのは歴史が語っている。ソレはこの場に居る者が全員知っていることであろう。そんな国家や国は徐々に腐敗していき、最後には悲惨な運命を遂げる。

「・・・成程ね、貴女の幻視の理由はやはり濃すぎる血ね」

「濃すぎる血？」

「空木は稗田の血が彼女の血を制御しているから何とかなっているけれど、貴女はそのストッパーとも言える血が無いのよ」

「もう少し簡単に言うと？」

「これでもかなり噛み崩しているのよ・・・？」

永琳はため息を落とすと、何故幻視と言う現象が起きているのかを簡単に説明した。それにはこの世界に残った狂王の強すぎる思いが影響しているらしい。
そして、牡丹の中の血を通してその記憶が流れていると言うのだ。

「空木が一度、貴女に幻視を通してコンタクトをとったでしょう？」

「あぁ、記憶にあるよ」

「私も」

「アレは、血を媒介にして貴女の頭の中に入ったと言う事。これ位しか解らないけれどね」

永琳はそう言うと手元のカルテに見た事も無い様な文字で書き記して行く。恐らく月の言語であろう。患者に読めないようにカルテを書く事は表の世界でも当たり前のことである。

「ソレと、注意事項があるわ」

「？」

「貴女は幻視を見やすい、何時か精神がその幻視に呑まれてしまうかもしれないのよ。私としては、今貴女が普通に生活できている事が不思議なくらいよ」

「そっそんなに重いのですか！？」

空木の焦った様な声が聞こえる。

「何が彼女をこの世界に留めているのか、それさえも解らないけれど。牡丹には無意識の内に解っている事だと思うわ、何を手放してはいけないのか。それを手放すとどうなるかも」

頭の中のモノがまた笑った。

「良い？良く聞いて、貴女、狂気と血に呑まれかかっているわよ」

医者の言葉は、時としてはとても残酷なモノだ。

86話・幻視について（後書き）

血濡れた扉の前で狂ったように笑う。貴女は・・・誰？

87話・姉妹の夜（前書き）

はい、姉妹同士の初夜で・・・あ、違いますね。初めての姉妹同士の夜です。あれ？

87話・姉妹の夜

――稗田家――

幻覚ではない人間の里に存在する稗田家に2人の姿があった、前当主の時よりも少し寂しくなった家の中にはまだ数人の半妖家政婦が家事に追われている。
少し長めの廊下を進んで行くと書斎の様な場所に辿り着いた。その部屋以外はあまり使われている形跡がない。掃除はされているが手を付けていないと言う所だ。

「散らかっていてすみませんね」

「何、別に気にしないさ」

「そう言って貰えると助かります」

畳の上に広がった様々な妖怪の資料やその他の書類等を持って片付ける空木、大量の巻物を奥の部屋に運んで行く。奥の部屋は彼女が寝室として使っているようだ。

「牡丹さんは私の前の部屋を使ってください。一応掃除はさせてありますから、それなりには使えると思います。お風呂は・・・」

そう言った説明を受けていく。その中で入ってはいけない部屋、前当主とその夫、つまりは両親が暮らしていた部屋も聞いた。まあ、流石にそこに入るのは遠慮しよう。気が引けるし。

「それにしても凄い資料の数だね」

「えぇ、初代様が転生を繰り返して記して来た膨大な書物と記憶です。まあ、中には何に使うか判らない物も有りましたが・・・」

牡丹が手に取ったのは【後遺症の残らない精神毒と死に至る薬草】と言うタイトルの物であった。確かに何に使うか解らない。と、言うよりもこんな物を使った事があったのであろうか？

「精神的、肉体的依存、初代様は自らの夫に依存していたのですよ」

「・・・ソレは・・・つまり」

「夫に近づく者、害をなす者は全て、と言う訳です」

ソレは恐ろしい話だ。殺し屋真っ青だろう。

「・・・ん？この設計図は」

「ソレはですね、えっと・・・」

細かく書き込まれた図を、空木はジッと見つめる。ソレは何だったか必死に思い出そうとしているようだ。

「恐らく、コレは何かの術式の案でしょう。設計図とは少し違うようですし」

「でもコレはどう見ても立体だし、物体だ」

「ゴーレム、と言う種族を知っていますか？」

ゴーレム、ソレは魔術師、魔法使いがまれに使用するモノだ。ラビと呼ばれる魔法使いがゴーレムを作ったと言われている。何でもゴーレムに文字を刻み動かす魔術らしい。因みに刻む言葉は【真理】、それを独特な言葉で刻む。そしてその真理と言う文字は正しい所を削れば【死】と言う文字に成り、土くれに還るらしい。

「これは恐らく命を持ったゴーレムの製造法だと思いますよ、お父さんは初代稗田様が亡くなった時から復讐と蘇生に付いて考えていましたから」

「ゴーレムで人間を蘇生？」

「可能ではありませんが、不可能でも無かったらしいですね。でも恐らく多くの禁忌に触れるので、保留と言う形に成ったのでは・・・」

「私、今さらながら自分の父が恐ろしくなってきたよ」

「奇遇ですね、私も最初はそうでした」

その設計図を丁寧にしまいこんで、彼女は一息ついた。

「さて、貴女がこの幻想卿まで来て求めていた情報をお教えしましょうか」

「そうだね、お願いするよ」

牡丹が一息つくと、彼女は何処からかお茶を入れて牡丹へと差し出した。

「まず、私達の父が貴女に遺したその黒の古書に付いて」

確かに、コレは不思議なモノだ。何のために作られたのかは、恐らく守る為だろうとは解っているのだが、何故これを追放世界に居る自分に遺したのか。

「ソレは恐らく、父が持っていた全知の書の贋作・・・いえ、魔術版と言った方が良いでしょうか」

「魔術版？」

「ソレには確かに真理が記されます。知りたい情報、その他もろもろ。しかしその書の本当の役目は貴女に魔術を教え、その場を切り抜けさせること。魔術式無効と言うとても珍しい能力を持っているのはその書物が傷つかないように、だと考えます。まぁ、あくまでも仮説ですが」

「情報がなかったのかい？」

「私としても、父の全てを知っている訳ではありません。父は偉大で、私には考えられないことを平気で行っていました」

幻想卿を追いだされた龍人族とアマゾネス族を同居させたり、遺跡を与えたり。農作業に勤しんでみたりと彼女の趣味は様々であったらしい。

血塗られた歴史から入って来ると、ソレは物凄く違和感があった。

文明を滅ぼしたり、とある人種を全滅させて見たりした狂王が額に汗して農作業とは・・・。

「恐らく、父も無意識の内に貴女に何かを託したのでしょう。私に

は稗田を継ぐこと、それを残しました。貴女は恐らく、もっと重大で、もっと危険な役割」

「はは・・・父の期待と言う訳かい・・・」

「そして、貴女の中にある狂気に付いてですが・・・恐らくソレは父の血を最も濃く引くが故の事でしょう。父にも狂気がありましたが、父はソレを自ら倒していましたし」

「・・・何でも有りだね」

「私に言わないでください、彼女はチートの塊であった故に王と呼ばれたのですから」

実際敵であったら攻略不可能であろう。
だが、それなら何故イヴに父は負けたのだ?

「最後の決戦、因縁とも言える運命との戦いで彼女は酷く消耗しておりましたから。貴女にも解るでしょう?貴女にだって命のストックが存在する、だから死ににくい」

「!」

牡丹は過去、１つの街を呑み込んでいる。その時に呑みこんだ人間や亜人の魂は彼女の体の中に飼われ、もしも身体等の部位欠損があった場合にはエネルギーとして消費され再生するのだ。

「父はソレを全て使いきっていました、そこにイヴの襲撃、ソレは辛いでしょう」

「・・・確かに」

「・・・今日はもう遅い、続きは明日にしましょうか。私も久々の遠出で疲れました」

「君はもう少し体力つけようよ・・・私でももう少しあるよ?」

「私は日夜デスクワークですからね、体力も衰えると言うモノです」

姉妹同士の夜は、奇妙にも早かった。

87話・姉妹の夜（後書き）

ところで、何で布団を並べて眠っているの？僕達良いじゃないですか、姉妹同士もう少し仲良くなっても・・・それもそうだね

88話・慈愛（前書き）

いよいよ黒の書の役割が明らかに！！

88話・慈愛

――王の慈愛――

夢を見ている。恐らくこれが血に呑みこまれていると言われる原因なのであろう。血と狂気が混じり合い、いずれ私の身体を自分の物とするように虎視眈々と狙って来ているのだ
恐らく、正気を失ったら最後であろう。

【父さん！何をしているのですか？】

【いや、この桜の木も随分と年老いた物だなと思ってな】

【その桜は・・・確か墓地にある蒼い花を付ける桜の親ですよね？】

【良く知っているな？阿求から聞いたのか？この木には私と、阿求と、私達の娘の思いが詰まっている】

【そんなに昔から？】

【私がまだ人間の様に生きていた時に植えた物だ、既に樹齢千数百年モノじゃないか？千も行っていないかもしれないがな】

曖昧な記憶に白銀の髪を持つ女性は頭を傾げた。見も凍りつきそうになる女性だった。その女性はニッコリと笑うと木を撫でる。

【冥界にある西行妖もこれの子らしいが、紫が何かした筈だな】

【最近お父さんは凄く悲しそうな顔をします・・・私は不安です】

そう言って頭を傾げるのは恐らく空木であろう。今よりも少し若い気がする、全く歳をとっていないが恐らく精神年齢的にはとても若いのであろう。
これがあの狂王か、伝承にも残る鬼武者か、牡丹はそう思った。何せ彼女が浮かべている笑顔はとても綺麗な物で、少し触れてしまえば消えてしまうほどに儚いのだ。

【私には、見えているんだ。近く訪れる終わりと、多くの犠牲の雨が】

【・・・？】

【不幸が降って来る。何が原因で狂ってしまうのか解らないが、降って来るんだ】

父さん・・・朝霧が大きな袖の中に手を入れてくんだ。そしてまだ昼間だと言うのに白く浮かぶ月に儚い笑みを浮かべる。何故そうなってしまったのか、どうしてその出来事が起きてしまうのか。どうにか対策は出来ないのか。

【空木】

【はい】

【お前には姉妹がいる、私の胎から産まれた子だ。・・・まだ幼く、力も覚醒していない。その身には鬼が住む・・・いや、双子と言うべきか？魂は２つ、現実の体は１つの娘だ】

【・・・】

【その娘の名を、牡丹と言う】

空木は少し、不思議そうな顔をしている。何故その話を今、するのか、ソレを訪ねたい様であった。

【弱い子だ、それなのに重い宿命を背負っている。もし、その子が生きてこの幻想卿に来れたのなら、出来る限り手伝ってあげてくれないか？】

【・・・父さん？】

【・・・父は、もうすぐ死ぬかもしれんなぁ】

酷く儚く、彼女は笑っていた。その白銀の長すぎる髪を風に揺らし、蒼と灰色の着物を着て彼女はただただ自分の死期を悟っていたのだ。

その後に出て来た記憶の中には、膨大な量の書物が登場した。

幻想卿縁起
奇怪書目録
魔術転換術式法
魂魄蘇生法
高濃度魔術砲におけるリスク
世界構築術

等等、その数は牡丹でも数えきれないほどであった。

【来るべき戦いの為に】
【子孫の為に】
【多くの人間の為に】
【多くの妖怪の為に】
【良き心を持つ神の為に】

【清き心を持つ悪魔の為に】
【世界の為に】
【より多くの世界の為に】
【自由の為に】
【真の解放の為に】

【――この禁を此処に記そう――】

彼女がそう言って書き終えたモノ。それこそが
【黒の書】
であった。

空木の解釈は間違っていない様で間違っていたのだ。この書こそが全てのカギであり全ての終焉と全ての終わりを防ぐための書物。そして、ソレを遺された牡丹の本当の役目、ソレの手伝いの為であったのだ。
世界の禁書、真理が惜しむ事無く詰め込まれた禁断の書物、これは、予言の書ですらないらしい。

【仕上に、私の血を一滴】

その書は、血を吸い取った。跡形も無く、吸収したのだ。

【・・・妻よ、許せ。私はまたお前に寂しい思いをさせるかもしれぬ・・・私は・・・【俺】は本当にどうしようもないモノだよ・・・】

零れ落ちた水滴が、その血を吸ったページに落ちる、その水痕は、しっかり残っていた。

「夢を、見ましたか？」

「・・・空木」

「記憶に干渉されて、泣いていますよ？」

牡丹の眼には涙が溜まっていた。ソレを乱暴に拭きとり彼女は黒の古書を手に取る。

「見る事が出来ましたか？私達の幻視を」

「・・・今の幻視は君が・・・でも君の能力は【その身に先祖の魂を留める程度の能力】だろう？」

「それは【稗田空木】個人の能力です。前にも言いましたよ？私の中には複数人居ると」

「・・・【記憶を見せる程度の能力】」

「ご名答」

つまりは、彼女が見た記憶とこの家や家にある物が見た記憶光景を全て頭の中に流し込まれたと言う訳か。これが彼女の協力の形なのであろう。

「私は、戦力には成れませんから」

「君・・・眼の下にクマが・・・まさか！」

「私は、少し眠りますね・・・？」

「私以上に体力がないのに無理をして・・・」

「ソレが・・・私の協力です・・・父と母を、よろしくお願いします」

「・・・解っているよ、私達の父と母、だろう?」

夢から覚めたその日の朝は、やけに気分が良かった気がする。

88話・慈愛（後書き）

使われていない筈の書斎で、黒猫の鳴き声が聞こえた気がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8160w/

彼女は人を喰らう

2011年12月13日10時40分発行